

塵のまよひなく、微塵の亂れもなく、傍目一側から見た容貌。明石姫女一の宮、今上の第一皇女。明石姫のお腹。ほの見奉りしも、匂宮が嘗て女一宮をちらとお見上げ申した時の事も、又おざり出でて、又一人即ち大君がにおり出で。かの障子、薫が覗いてゐる襖をいふ。うち解けたらぬ様、きちんとして取亂さぬ姿。かんざし、髪の様子。今少しあてに、中の君よりもう少し。あなたに屏風も……薫のいらつしやる方の襖には屏風も立て添へて置きました。いみじうもあるべき業、覗かれたら厄介なことよ。同じやうなる、中の君と同様な。髪さはらかなる……髪はばらりと見える位に、少し抜けたのであらう、先の方がこけて。色なり、髪を翡翠の色なりと譬へた句に據つたと思はれるが原句未詳。彼よりも、中の君よりも。立ちたりつる君、中の君。

なる、翡翠だちていとをかしげに、糸をよりかけたるやうなり。紫の紙に書きたる經を、片手に持ち給へる手つき、彼よりも細さ勝りて、瘡せ瘡せなるべし。立ちたりつる君も、障子口に居て、何事にかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いと愛敬づきたり。

總角

あまた年……多年宇治の姫君達が聞慣れて居られた河風も。御はての事……八宮の一週忌の御法事。大方の……大體のなすべき準備は。中納言殿、薫。こゝには、姫君達の手では。法服の事……僧達に布施にする法衣のことや。こまかなる……こま／＼した仕事を侍女達の申上げるまゝに。かゝるよその……薫や阿闍梨や、かうした外部からの御助力がなかつたら、どうするだらうと思はれた。自らも、薫自身も。脱ぎ捨て給ふ……姫君達が喪服を脱がれるについで、御見舞。名香の糸、佛に奉る爲に種々の香を紙に包み五色の糸で結ぶその糸。かくても經ぬる、古今、身をうしと思ふに消えぬものなればかくても經ぬるものにぞありける。

この巻は薫二十四歳の八月から冬までの事。宇治の姫君達は耳慣れた川風の番も今年に殊に寂しく思ひつゝ、父宮の一週忌の準備を急いだ。薫は相變らず親切なので、大姫は自らの代りに妹姫をと思ふが、さう自由に戀は變更されないと薫はいふ。大姫と物越に語りながら、薫は思ひ餘つて屏風の中に入った。姫は驚いて立つたが裾を抑へられた。様々に話をしたが姫は打解けない。その後薫は又匂宮と宇治を訪ひ、とかくして宮を妹姫の室に導き入れ、自分は、大姫の方へ行つて、例の如くかき口説いたが遂に無効だった。匂宮は帝や御母中宮が、世間の風評を憚り餘り外出をお許し下さらないので、宇治へも行けず、さうと知らぬ宇治では、偏に宮を無情と恨んだ。大姫は程なく病んで十一月に遂に不歸の人となつた。かうなると薫は、妹姫を匂宮の物としたことが、惜しくも妬ましくも感ぜられた。巻の名は薫の歌、「總角にながき契を結びこめ同じ心によりもあはなむ」及び「あげまきをたはぶれに取りなし」の句等に由る。

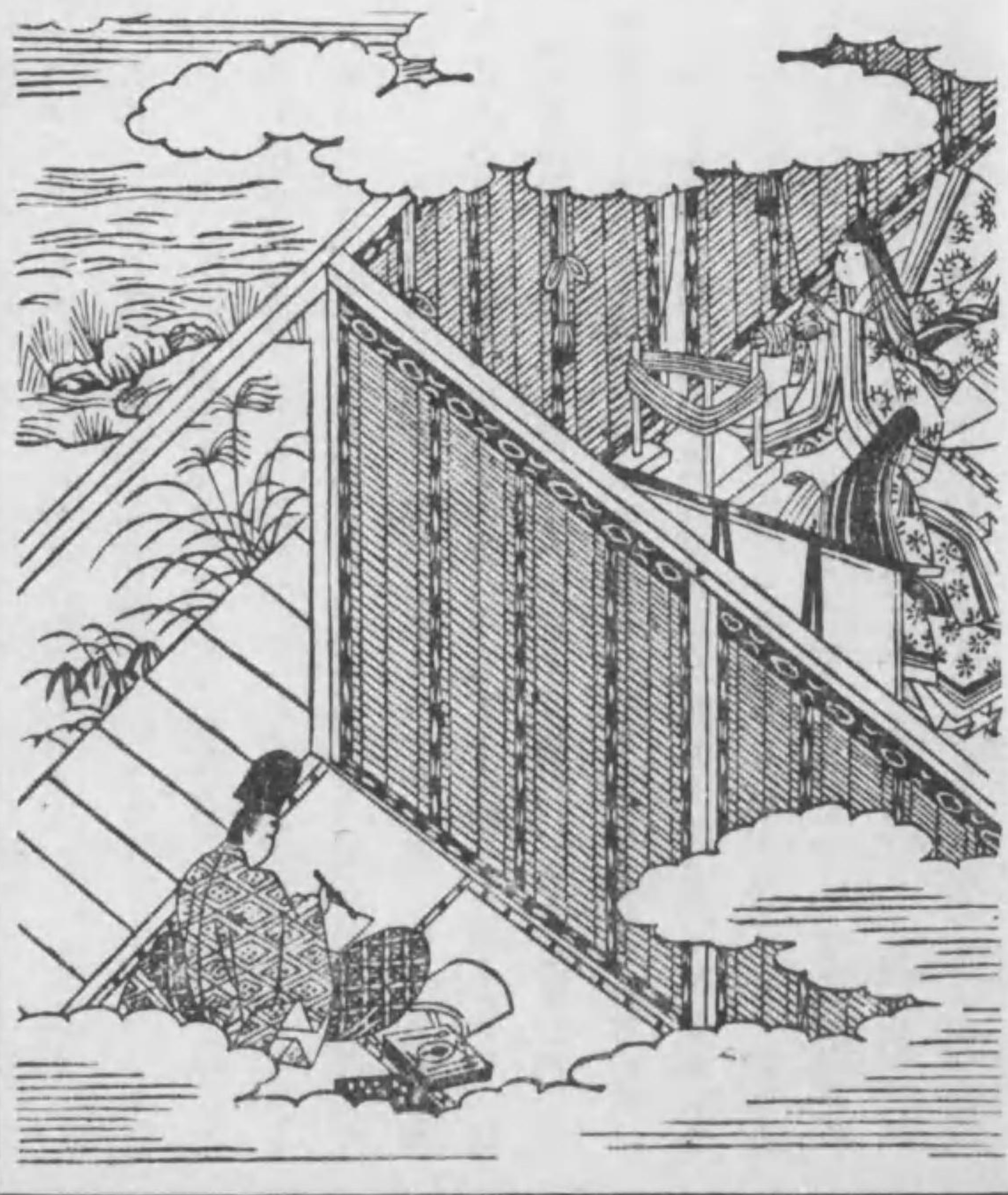
あまた年、耳なれ給ひにし河風も、この秋はいとはしたなく物悲しく、御はての事急がせ給ふ。大方のあるべかしき事どもは、中納言殿、阿闍梨とぞ仕うまつり給ひける。こゝには法服の事、經の飾、こまか



たより一方形の臺に柱を立て、糸を  
 巻く用具。  
 その事と心得て一名香の糸を作つて  
 るる處だと薫は推量して。  
 わが涙をば……七條後の亡せ給うた  
 時、伊勢の作より合はせて泣く  
 なる聲を糸にして我が涙をば玉に  
 ぬかなむ。  
 伊勢の御！伊勢守藤原藤原の女、宇  
 多帝の皇后藤原温子の宮人で、帝  
 の寵を得た人。御は敬稱。  
 をかしく聞ゆるも！時にとつて侍女  
 達の耳に興深く響くのも。  
 内の人は……姫君達は知つたかぶり  
 に何とか合槌を打つのも。  
 物とはなしに、古今、糸による物な  
 らなく、別れ路の心細くも思はゆ  
 るかな。第二句本文と異なる。  
 この世ながらの……生別をすら心細  
 い事のやうにいひなしたものを、  
 今は死別であるから一層の悲しさ  
 であるなどと思つて。  
 げに古言ぞ……ほんに同じ氣持を歌  
 つた古歌こそ我が心を慰めてくれ  
 るものだ。  
 御願文つくり追福の爲佛前で讀む  
 文を薫が作り。  
 書き出で給へる願文の中にお書き  
 表はしなされた。  
 あげまきに……名香の糸を總角結び

なる御あつかひを、人の聞ゆるに従ひて營み給ふも、いと物はかなく  
 あはれに、かゝるよその御後見なからましかばと見えたり。自らも  
 まうで給ひて、今はと脱ぎ捨て給ふほどの御とぶらひ、淺からず聞え  
 給ふ。阿闍梨もこゝに参れり。名香の糸ひき亂りて、かくても經ぬる  
 など、うち語らひ給ふほどなりけり。結び上げたるたゞりの、簾のつ  
 まより、几帳の綻はらわに透きて見えければ、その事と心得て、我が涙をば  
 玉に貫かなむとうち誦し給へる、伊勢の御もかうこそはありけめと  
 をかしく聞ゆるも、内の人は、聞き知り顔にさしいらへ給はむもつゝ  
 ましうて、物とはなしに」とか、貫之がこの世ながらの別をだに、心細  
 き筋にひき懸け、むをなど、げに古言ぞ人の心を陳ぶる便なりける  
 と、思ひ出で給ふ。御願文つくり、經佛、供養せらるべき心ばへなど、  
 書き出で給へる硯のついでに、客人、  
 「あげまきに長きちぎりを結びこめ  
 おなじ心によりもあはなむ」

例のと一何時もの色めいた事と。  
 ぬきもあへず……貫き留められぬ玉  
 の如く涙のみ脆くこぼれる悲歎の  
 爲に、どうせ久しくは繋ぎ留めら  
 れさうもない私の命で、貴女と末  
 長い約束など何で結ばせうぞと  
 の意。玉の緒は命のこと。  
 逢はずは何を古今、片絲をかなた  
 こなたによりかけて逢はずは何を  
 玉の緒にせむ。  
 自らの御上は……薫自身の大君に對  
 する懸はこんな風に大君が話をそ  
 らして相手にせず極りが悪いので  
 さつさといひ寄りもならず、匂宮  
 を中の君に媒したいといふ事だけ  
 を眞剣に大君にお話なさる。  
 さしも御心に……匂宮は眞實深く思  
 込まぬ事でもかうした好色の事に  
 は抜目ない御性質ゆゑ、中の君の  
 事も一旦いひ出した意地から今に  
 執着してゐるのかも知れぬと、様  
 様によく御様子を探つて見ました、  
 處が本當に執心なので中の君を許  
 しても氣遣ひは無ささうですのに  
 何故貴女はさう無暗に知らぬ顔を  
 なさるのでせうか。





世の有様など……男女間の事なども  
 全くお分りにならぬとも存ぜられ  
 ませんのに、いやに他人行儀に私  
 の言葉をお聞入れなさらぬので、  
 これ程奥底もなく思つてゐる私の  
 心と齟齬して。  
 思し分くらむ……御分別の筋を判然  
 とどうか承りたいものです。  
 違へ聞えじの……お言葉に背くまい  
 といふ心からこそ、か程まで世間  
 話の例にも引かれさうな程隔意な  
 く致して居ります。  
 浅きことも……貴女の御分別の浅い  
 所もあるやうな気が致します。  
 心あらむ人は……多感な人は物思の  
 限を仕盡しませうものを。  
 何事にも……私は何事にも劣つた中  
 でも殊に今お話しの縁談の事は、  
 父宮御在世中も更に全く、こんな  
 場合はかうせよなどと將來の豫定  
 方針に取りまぜて御遺言もなかつ  
 たので、矢張私がかうした獨身生  
 活で夫など持つ事を断念するやう  
 に父宮はきめて置いて下さつたやう  
 だと思ひ合はされますので、何と  
 も御返事の致しやうもなくて。  
 世ごもりたる……まだ生先が長くて  
 山の中に埋れさせるには氣の毒に  
 思はれる中の君の身の上を、かう  
 して人知れぬ朽木にはしてしまひ

と書きて見せ奉り給へば、例のとうるさけれど、  
 「ぬきもあへずもろき涙の玉の緒に  
 長きちぎりをいかゞ結ばむ」  
 とあれば、「逢はずは何を」と、怨めしげに詠め給ふ。  
 自らの御上は、かくそこはかとなくもて消ちて、恥かしげなるに、す  
 が……とも宣ひ寄らで、宮の御事をぞまめやかに聞え給ふ、さしも御  
 心に入るまじき事を、かやうの方に少しすゝみ給へる御本性にて、聞  
 えそめ給ひけむ負けじ魂にやと、と様かう様に、いとよくなむ御氣色  
 見奉る。まことに後めたうはあるまじげなるを、などかうあながちに  
 しも、もて離れ給ふらむ。世の有様など、思し分くまじくは見奉らぬ  
 を、うたて遠々しくのみもてなさせ給へば、かばかりうらなく頼み聞  
 ゆる心に違ひて、怨めしくなむ。ともかくも思し分くらむ様などを、  
 さわやかにいかで承はりにしがな」と、いとまめたちて聞え給へば、  
 「違へ聞えじの心にてこそは、かうまで怪しき世の例なる有様にて、

扱はしう……世話したく。「扱ふ」の形  
 容詞格。  
 けざやかに……うら若い女の身でて  
 きばきと老成ぶつて、何の我が事  
 を才覺らしく答へ得るものかと蕭  
 は尤に思つて。  
 例の舊人……老女辨。  
 後の世様の……後生安樂の道を問ひ  
 たいばかりで。  
 物心ぼそげ……八宮が段々心細くお  
 なりなされた御臨終近い頃、この  
 姫君達の事を私の心まかせに面御  
 見てくれるやうと仰しやり、お引  
 受もしたのに、宮の御意向とは違  
 つて姫君達のお心持がひどく厄介  
 な位意地をお張りになるのは一體  
 どうした事か、八宮様のお意向が  
 また違つてゐたのかしらと。  
 自ら聞き傳へ……貴女も私の事は自  
 然に變用な性質で。  
 心をしむる……執着する。  
 さるべきにてや……かうなる前世の宿  
 縁でもあつてか。  
 世の人も……世間の人も段々私と貴  
 女との間を奪する様子ですから、  
 どうせ夫を持ち妻を持つなら亡き  
 八宮の御意向にも背かず私も貴女  
 も世間並に打解けて夫婦の語ひを

隔なくもてなし侍れ。それを思し分かざりけるこそは、浅きこともま  
 じりたる心地すれ。げにかゝる住居などに、心あらむ人は思ひ残すこ  
 とはあるまじきを、何事にも後れそめにけるうちに、この宜ふめる筋  
 は、古へも、更にかけて、とあらばかゝらばなど、行末のあらまし言に取  
 りませて、宣ひ置くこともなかりしかば、猶かゝる様に、世づきた  
 る方を思ひ絶ゆべく思し掟てけるとなむ、思ひ合はせ侍れど、ともか  
 くも聞えむ方なくて、さるは少し世ごもりたる程にて、深山隠れにて  
 心苦しう見え給ふ人の御上を、いとかく朽木にはなし果てずもがな  
 と、人知れず扱はしう覺え侍れど、いかなるべき世にかあらむ」とう  
 ち歎きて、物思ひ亂れ給ひける程のけはひ、いとあはれげなり。けざ  
 やかに大人びても、いかでかはさかしがり給はむと道理にて、例の舊  
 人召し出でてぞ語らひ給ふ。「年頃はたゞ、後の世様の心ばへにて、進  
 み参りそめしを、物心ぼそげに思しなるめりし御末の頃ほひ、この御  
 事どもを、心に任せてもてなし聞ゆべくなむ宣ひ契りてしを、思し掟



したいものだと思ひ付きましたのは、よしそれが不相應な事として、さうした例が無い事でもありませんか。

宮の御事をも……匂宮を中の君の姫君にと私が申上るのに、貴女は大丈夫だらうと同意して下さる御様子がないのは、内心何かそれにしてもお考の筋がありません。

例のわるびたる……ありふれた考淺い侍女達ならば、こんな場合には聞き難い利いた風な事もまぜて、調子のいい事をいつたりするものだが。

あらまほしかるべき……結構な御縁だ。がなあとと思ふけれど。

いかにも……世の常……どんなにしても世間並に夫を持つ何の御様子でも御座いません。

かくて侍ふ……かうして御奉公してゐる侍女達も八宮御在世中すら、何といつて頼もしい當も御座いませんでした。頼む處なしの意。身を捨て難く……我が身を可愛く思ふ人達は皆、相應の縁を求めて退散し。

舊き筋——古くからの縁故ある人。おはしまし……世……八宮御在世中こそ御身分の格式があつて、餘り見

て奉り給ひし御有様どもには違ひて、御心ばへどもの、いとゞあやにくに物強げなるは、いかに思し掟つる方の異なるにやと、疑はしきことさへ添ひてなむ。自ら聞き傳へ給ふやうもあらむ。いとあやしき本性にて、世の中に心を染むる方なかりつるを、さるべきにてや、かうまでも聞え馴れにけむ。世の人もやう……いひなす様あるべかめるに、おなじうは昔の御事も違へ聞えず、我も人も、世の常に心解けて聞え通はばやと思ひ寄るは、つきなかるべき事にて、さやうなる例なくやはあるなど宣ひ續けて、宮の御事をもかう聞ゆるに、後めたうはあらじと、うち解け給ふ様ならぬは、内々にさりとも思ほし向けたる事の様あらむ。猶いかに……とうち詠めつゝ宣へば、例のわろびたる女房などは、かゝる事には、憎きさかしらもいひませて、言よがりなどもすめるを、いとさはあらず、心の中には、あらまほしかるべき御事どもをと思へど……もとより、かく人に違ひ給へる御癖どもに侍ればにや、いかにも……世の常に何やかやなど、思ひ寄り給へる御

苦しい夫など持たせては姫君達にお可愛さうなどと、昔氣質の几帳面さで躊躇もされたけれど。

いかにも……世に……如何やうとも時と場合次第に身の振方をお付けなさるのを。

あなたがち……強ひてお誘り申さう人は。

いとかくて……こんな心細い情態ですきて……食して。

道々別れては……それ……の流派に別れては修行をするのです。

若き御心ども……若い姫君達のお心を迷はせさうな事が。

擲むべくも……大姫君自身は意思をまげさうでもない。

いかで人めかしう……どうか人並に縁に付けて相當な生活をさせて上げたいと、お考へなされてゐるやうです。

御志の……貴方の御親切がもう永年になつて姫君達がお馴染み申された御様子も。

今は……今ではあれやこれやと立入つた事にも貴方に御相談なさいますので、中の君を貴方がそんな風にお望みもあるなら差上げたいものと、大君は思つていらつしやるやうで御座います。

宮の御文——匂宮からの懸想文。

氣色になむ侍らぬ。かくて侍ふこれかれも、年頃だに何の頼もしげある木のもの、隠るへも侍らざりき。身を捨て難く思ふ限は、程々につけてまか……でちり、昔の舊き筋なる人も、多く見奉り捨てたるあたりに、まして今は暫しも立ちとまり難げに倦び侍りつゝ、おはしまし、世にこそ、限ありて、片ほならむ御有様はいとほしくもなど、古代なる御うるはしさに思しも滞りつれ、今はかうまた頼なき御身どもにて、いかにも……世に靡き給へらむを、あなたがちに誘り聞えむ人は、却りて物の心をも知らず、いふかひなき事にてこそは侍らぬ。いかなる人か、いとかくて世をば過し果て給ふべき。松の葉をすきて勤むる山伏だに、生ける身の捨て難さによりてこそは、佛の御教をも、道々別れては行ひなすなれ……などやうの、善からぬ事を聞え知らせ、若き御心ども亂れ給ひぬべきこと多く侍るめれど、擲むべくも物し給はず。中の君をなむ、いかで人めかしうも扱ひなし奉らむと、思ひ聞え給ふべかめる。かく山深うたづね聞えさせ給ふめる御志の、年



まめしき……誠のお心からの事はあるまい。あはれなる御一言……お氣の毒な八宮の御遺言を承つたので、現世に生きてゐる間は姫君達にお附合したいといふ料簡ゆゑ、大君を娶るも中の君を娶るも同様な譯でせうが、さう中の君の塔にとまで又私の事を氣に懸けて下さるのには誠に嬉しい事ですが、好きといふ事はこれ程世を捨てた身にも矢張り離れられぬ譯のものですから、改めて中の君に思ひ換へる事は出来さうもありません。

世の常の……一體私の心持は世間普通の浮いた戀ではないのですよ。嬉しがるべき……周柱本によつて補ふ。

兄弟などの……私は兄弟などのさう親しいものも持たず。心に籠めてのみ一人で心の中に思ふだけで話相手もなく。疎かるまじう……親しいものとして貴女を便りに致します。

後の宮はた……明石中宮(表面は姉君)はいらつしやるにしてもこれ亦。聞え觸る……お耳に入れる。

三條の宮は……女三宮は親とは思へぬ位にお若く見えるので親しんでよきさうですが。

經て見奉りなれ給へるけはひも、疎からず思ひ聞えさせ給ひ、今はと様かう様に、こまかなる筋に聞え通ひ給ふめるに、かの御方をさやうに起けて聞えさせ給は、となむ思すべかめる。宮の御文など侍るめるは、更にまめしき御事ならじと侍るめる」と聞ゆれば、「あはれなる御一言を聞きおき奉りにしかば、露の世にかゝづらはむ限は、聞え通はむの心あれば、何方にも見え奉らむ、おなじ事なるべきを、さまではた思し寄るなる、いと嬉しき事なれど、心の牽く方なむ、かばかり思ひ捨つる世に、猶とまりぬべきものなりければ、改めてさは、え思ひ直すまじくなむ。世の常のなよびかなる筋にもあらずや。只かやうに物隔て、言残いたる様ならず、さし向ひて、とにかくに定なき世の物語を、隔もなく聞えて、つゝみ給ふ御心の隈残らずもてなし給はむなむ、嬉しがるべき。兄弟などのさやうに睦まじき程なるもなくて、いとさうしきくなむ。世の中の思ふ事の、あはれにもをかしようも愁はしうも、時につけたる有様を、心に籠めてのみ過ぐる身なれば、

限あれば……親といふ分限があり殊に出家の御身ゆゑ。心から……自分の心柄ゆゑに。等閑の……私は一寸した戯れ半分にでも色戀めいた事は誠に極り悪く氣が乗らず。

こちしき……無骨さ。心にしめたる……心に深く思込んだ大君の事はいひ出すこともむづかしくて。

見え奉らぬこそ……大君にお見せしないのが。頭しき……愚な。宮の御事をも……匂宮と中の君との問題も、何にしても悪くは計らふまいと思召して私に任せて御覽なさいませんか。

老人はた……辨にしても亦。あらまほしげなる……薫の理想通りの人品なのを、達て大君の塔君に願ひたいと思ふけれど、お二人とも此方が極り悪い位思慮深い御態度ゆゑ。

やすらひ……して。あざやかならず……はつきり口には出さず大君の無情を怨んでゐる薫の御様子。大方にては……概していへば世に稀な位情合のある薫の御氣だて故ひどく冷淡にも大君は扱ひにく。

流石にたづきなく覺ゆるに、疎かるまじう頼み聞ゆる。後の宮はた馴れ馴れしく、さやうに、そこはかとなき思のまゝなるくだしさを、聞え觸るべきにもあらず。三條の宮は、親と思ひ聞ゆべきにもあらず。御若々しさなれど、限あれば、たやすく馴れ聞えさせずかし。その外の女は、すべていと疎くつゝ、まじう恐ろしう覺えて、心から寄るべなく心細きなり。等閑のすさびにても、懸想だちたる事は、いと眩くありつかず。はしたなきこちしきにて、まいて心に染めたる方の事は、うち出づることも難くて、怨めしうもいふせくも、思ひ聞ゆる氣色をだに見え奉らぬこそ、我ながら限なく頭しき業なれ。宮の御事も、さりとも悪し様には聞えじと、任せてやは見給はぬなどいひひ給へり。老人はた、かばかり心細きに、あらまほしげなる御有様を、いと切にさもあらせ奉らばやと思へど、何方も恥かしげなる御有様どもなれば、思ひのまゝには聞えず。今宵は泊り給ひて、物語などのどやかに聞えまほしうて、やすらひ暮し給ひつ。

總角



佛のおはする……大君は佛間の中に  
 むて蕭の御席との間の戸を開けて。  
 外にも佛間の外即ち蕭のゐる處。  
 惱ましうて……氣分が悪くて失禮な  
 風をしてゐるのに餘り明るくて困  
 ります、など制止して片肘ついて  
 横になつていらつしやる。  
 廊めいたる方に……侍女達。  
 この御前大君と蕭と御對坐の處。  
 うち解くべらも……大君の態度は心  
 を許しさうでもないが。  
 かく程もなき……こんな何でもない  
 隔だけを邪魔物として思も遂げず  
 氣を揉んで暮す馬鹿律義さが。  
 つれなくて蕭は何氣なく装うて。  
 内には……大君の方では、侍女達に  
 側近く附添うてゐるやうにと命に  
 てお置きなされたけれど、そんな  
 に大君が蕭をお避けなさらねばよ  
 いと侍女達は思つてゐるらしいの  
 で、ひどく御警戒も申上げず。  
 物むつかしうて……大君は何だか氣  
 遣ひで弱に侍女をお呼になるが、  
 目の醒めぬ振をしてゐる。  
 ためらひて……ゆつくり休んでから。  
 山路分け……山阪越えて來た私は。  
 かう聞え承はるに……かうしてお話を  
 申上げた承つたりしますすので。  
 むくつけうて……大君は氣味悪くて。  
 なからばかり……大君は體の半分程

あざやかならず、物恨みがちな御氣色、やう／＼わりなく成りゆけ  
 ば、煩はしうて、うち解けて聞え給はむこともいよ／＼苦しけれど、  
 大方にては、あり難うあはれなる人の御心なれば、こよなくももてな  
 し難うて、對面し給ふ。佛のおはする中の戸を開けて、御燈明の火け  
 ざやかに掲げさせて、簾に屏風を添へてぞおはする。外にも大殿油參  
 らすれど、惱ましうて無禮なるを、あらはに「など諫めて、かたはら臥  
 し給へり。御菓子など、わざとはなくして參らせ給へり。御供の人々  
 にも、故々しき肴などして、出ださせ給へり。廊めいたる方に集まり  
 て、この御前は人げ遠くもてなして、のどやかにしめ／＼と物語聞え  
 給ふ。うち解くべらもあらぬものから、懐かしげに愛敬づきて、物宜  
 へる様などの、なのめならず心に入りて、思ひ苛らるゝもはかなし。  
 かく程もなき物の隔ばかりを障り所にて、覺束なく思ひつゝ、過す心  
 おぞさの、餘り鳴濤がましうもあるかなと思ひ續けらるれど、つれな  
 くて、大方の世の中の事ども、あはれにもをかしうも、様々聞きどこ

奥の間へお入りになつたのに。  
 ねたら悔しく。  
 隔無きとは……始終貴方が仰しやる  
 隔意がないといふことはこんな事  
 を仰しやるのでせうか。  
 あはめ／＼辱かしめ。  
 隔てぬ心を……隔意のない私の心持  
 を少しも御了解下さらぬので吞込  
 ませて上げようと思ふのですよ。  
 奇怪なと仰しやるは、貴女は私が  
 今どんな事をするとお察しなされ  
 たのでせうか。  
 うたて……まあ嫌な、何をするもの  
 ですか、こはがりなされますな。  
 人はかくしも……他人はよもや私が  
 この場に臨んでも手出しをせず  
 居るとは想像しないでせうけれど、  
 私は人並はづれの馬鹿正直で辛抱  
 致しますよ。  
 心にき程なる火影――ほんのりと風  
 情ある燈影。  
 人の御前はひ大君の御様子。  
 蕭りをか上げなり――ばつとして美し  
 いかい。  
 かく心細う……こんな心細く寂しい  
 御住處ゆゑ浮氣男なら何の邪魔も  
 ないと思つて勝手な事も出来さう  
 だのに、それに又自分以外に尋ね  
 て來る男でも出来たら、自分の方  
 はこれつきりに不成立に終るだら

ろ多く語らひ聞え給ふ。内には「人々近う」など宜ひおきつれど、さし  
 ももて離れ給はざらなむと思ふべかめれば、いとしも守り聞えず、  
 さし退きつゝ、皆寄り臥して、佛の御燈火も掲ぐる人もなし。物むつか  
 しうて、忍びて人召せど驚かず。「心地のかき亂り惱ましう侍るをた  
 めらひて、曉方にもまた聞えむ」とて、入り給ひなむとする氣色なり。  
 「山路分け侍りつる人は、ましていと苦しけれど、かう聞え承はるに、  
 慰めてこそ侍れ。うち捨て、入らせ給ひなば、いと心細からむ」とて、  
 屏風をややら押し開けて入り給ひぬ。いとむくつけうて、なからばか  
 り入り給へるに、引きとゞめられて、いみじうねたう心憂ければ、「隔  
 無きとは、かゝるをやいふらむ。珍かなる業かな」とあはめ給へる様  
 の、いよ／＼をかしかければ、「隔てぬ心を更に思し分かねば、聞え知ら  
 せむとぞかし。珍かなりとは、いかなる方に思し寄るにかはあらむ。  
 佛の御前にて誓言も立て侍らむ。うたて、な怖ぢさせ給ひそ。御心破  
 らじと思ひそめて侍れば、人はかくしも推し量り思ふまじかめれど、

總角



う、もしさうなつたらどんなに残念な事だらうと、薫は今までの優柔不斷すらひやりとお感じなさるけれど。  
 かくはあらで、大君がこんなでなく自然氣のゆるりと落着いた時もあるらうわと。  
 わりなき様なるも……大君が遺瀨な御様子なのお氣の毒で、體よく機嫌を取繕つてあげる。  
 かゝる御心の……こんなひどい貴方の御心とは思ひも附きませんで、ゆゑしき袖の色……喪服を着た姿などお見願しになる貴方の思遣りの無きにつけても、私自身がさうまで軽い者だといふ事が痛感されますので。  
 墨染の火影を、燈火に照らされた大君自身の喪服姿を。  
 いとかうしも……まあそれ程私をお嫌ひなさるのかと恥かしいので、袖の色を……喪服の事をいひ懸りになさるのは御尤ですが、多年お見知り下された管の私の志に免じては、それ位の事を憚らねばならぬ。今始まつた關係らしく思召すべきでせうか、生中斟酌過ぎを御分別ですよ。  
 か物の音……初めて姫君達の彈奏を聞いたあの月下の情景を始め。

世に違へる痴者にて過し侍るぞや」とて、心にきき程なる火影に、御髮のこぼれかゝりたるを、掻きやりつゝ見給へば、人の御けはひ、思ふやうに薫りをかきげなり。かく心細うあさましき御住處に、好いたらむ人は、障り所あるまじげなるを、我ならで尋ね來る人もあらましかば、さてや止みなまし、いかに口惜しき業ならましと、來し方の心のやすらひさへ、危く覚え給へど、いふかひなく憂しと思ひて、泣き給ふ御氣色のいとほしければ、かくはあらで、自ら心ゆるびし給ふ折もありなむと思ひ渡る。わりなき様なるも心苦しくて、様よく拵へ聞え給ふ。「かゝる御心の程を思ひよらで、怪しきまで聞え馴れにたるを、ゆゑしき袖の色など見願はし給ふ心淺さに、自らのいふかひなさも思ひ知らるゝに、様々慰む方なく」と怨みて、何心もなく襷れ給へる墨染の火影を、いとはしたなくわびしと、思ひ惑ひ給へり。「いとかうしも思さるゝやうこそはと恥かしきに、聞えさせむ方なしや。袖の色を引きかけさせ給ふはしも道理なれど、こゝら御覽じ馴れぬ

かゝる心ばへ……薫がこんな下心がありながら表面は何氣なく眞面目ぶつていらしたのだわいと。  
 人よりはけに……薫は人一倍佛をも尊ぶ氣質で、その名香や櫛の香に憚られ。  
 墨染の……大君がまだ喪服で居られる今、無理業をして時につて焦り過ぎたやうであるのも、思ひやりがなくこれまでの自分の氣持にも背く譯だから。  
 この御心にも……大君の氣持にも、何が何でも少しは折れる時もあると。薫は強ひてゆつくり落着かれました。  
 かゝらぬ處だに……こんな寂しい處でなくてすう。  
 いぎたなかりつる……今まで寢込んでゐた侍女達は、かうした陸しい語らひをしていらつしやるのだと様子を見て取つて、皆銘々の部屋に退いた。  
 宮の宣ひし……大君は八宮の御遺言などを。  
 げに永らへば……ほんに生きてゐると、思ひも懸けずこんなとんでもない目にも逢ふものだわいと。  
 流れ添ふ……涙が流れ添ふ。  
 聲づくり……供揃の合圖をし。  
 旅の宿の……旅先の宿の色々の情景

る志のしるしには、さばかりの思おくべく、今始めたる事めきてやは思さるべき。なかゝなる御辨へ心になむ」とて、かの物の音聞きし在明の月影より始めて、折々の思ふ心の忍び難くなりゆく様を、いと多く聞え給ふに、恥かしうもありけるかなと疎ましよう、かゝる心ばへながら、つれなくまめだち給ひけるかなと、聞き給ふこと多かり。御傍なる短き几帳を、佛の御方にさし隔て、かりそめに添ひ臥し給へり。名香のいとかうはしく匂ひて、櫛のいと華やかに薫れるけはひも、人よりはけに佛をも思ひ聞え給へる御心なれば、煩はしく、墨染の今更に、折節心苛られたらむやうならむも、あり……て思ひそめし様に違ふべければ、かゝる思なからむ程に、この御心にも、さりともし少し撓み給ひなむなど、せめてのどかに思ひなし給ふ。秋の夜のけはひは、かからぬ處だに、自らあはれ多かるを、まして峯の嵐も籬の蟲も、心細げにのみ聞きわたさる。常なき世の御物語に、時々さし答へ給へる様いと見所おほく目やすし。いぎたなかりつる人々は、かうなりけりと、



などを管て人が話すのを聞いた事があるが、薫は今それが思ひやられて。  
 光見えつる方―朝の光のさした方。やう／＼恐ろしさも……大君は今までどうなる事かと心配してゐたのも次第に安堵して。  
 かういとはしたなからで……こんなにあま不作法に面と向ふやうな事なく、物越しにお話致しましたら、夜ぶかき朝―晨朝。  
 今だに―まことに見苦しいのを、せめて今でも早くこの場をお立退き下さい。  
 事あり顔に……さも實際關係でもあつたやうに、朝露を踏分けて歸つてゆく譯にもいきますまい、又他人はどう推量しませう、とてもこんな綺麗な仲とは思ひますまい。  
 例の様に……表面は世間普通の夫婦の如く穩かに振舞つて、内實は一般の夫婦と違つた清い關係で、今後世に後めたき……決して私は貴女の氣遣ふやうな振舞をする料簡はないものとお信じ下さい。  
 あながちなる心の程―一途に眞剣な私の心持。  
 片はならむと思つて―此處にいつまでも居られては見苦しからうと。

氣色とりて皆入りぬ。宮の宣ひし様など思し出づるに、げに永らへば心の外に、かくあるまじき事も見るべき業にこそはと、物のみ悲しうて、水の音に流れ添ふ心地のみし給ふ。  
 はかなく明方になりにけり。御供の人々起きて、聲づくり、馬どもの嘶ゆるおとも、旅の宿のあるやうなど、人の語るを思しやられて、をかしう思さる。光見えつる方の障子を押しあげ給ひて、空のあはれなるを諸共に見給ふ。女も少しゐざり出で給へるに、程もなき軒の近さなれば、葱の露もやう／＼光り見えて行く。かたみにいと艶なる様容貌どもを、何とはなくて、只かやうに月をも花をも、同じ心にててもあそび、はかなき世の有様をも聞え合はせてなむ過さまほしきと、いと懐かしき様して語らひ聞え給へば、やう／＼恐ろしさも慰みて、  
 「かういとはしたなからで、物隔て、など聞えは、まことに心の隔は更にあるまじくなむ」と答へ給ふ。明うなりゆき、村鳥の立ちさまよふ羽風、ちかう聞え、夜ぶかき朝の鐘の音かすかに響く。今だにいと

さればこそ……貴方の仰しやる今上り後はそこで仰の通りに致します。貴方のなさり次第になりませう。今朝は私の申上げるのにお隨ひなされませ。  
 曉の別―まだ知らぬ曉起きの別には道さへ惑ふものにぞありける」  
 (細流)  
 山里の……山里の風情も感ぜられる色々の鳥の聲に、様々の事を取集めて思はせるこの明け方の有様よとの意。鳥に取りを懸けた。  
 鳥の音も……こゝは鳥の聲すら聞えぬ閑寂な處と思つてをりましたものを、矢張世の中の憂い事はこゝまで尋ねて来て、様々と私に物を思はせませうことよ。  
 送り奉り給ひて……大君を薫が。いとかく……譬てもこんなにまあ戀しく思つたらうか、今まで暢氣に清く過し得たらうか、とてもさうは出来なかつたらうか、つまり今までの戀しさはまだ眞剣ではなかつたのだなどと。  
 姫君は人の……大君は侍女達の思はくが憚られるので。  
 頼もしき人なくて―力にする人も持たずに。  
 ある人ども……侍女達も様々の男の手紙を取次ぐなど餘計な事を何や

見苦しきをと、いとわりなう恥かしげに思したり。「事あり顔に、朝露もえ分け侍るまじ。又人はいかゞ推し量り聞ゆべき。例の様にただらかにもてなさせ給ひて、只世に違ひたる事にて、今より後も、只かやうにしなさせ給ひてよ。世に後めたき心はあらじと思せ。かばかりあながちなる心の程も、あはれと思し知らぬこそかひなければ」とて、出で給はむの氣色もなし。淺ましう、片はならむと思つて、  
 「今より後は、さればこそ。もてなし給はむまゝにあらむ。今朝はまた、聞ゆるに隨ひ給へかし」とて、いとすべなしと思したれば、  
 「あな苦しや、曉の別。まだ知らぬ事にて、げに惑ひぬべきを」と歎き勝なり。鶏も何方にかあらむ、ほのかに音なふに、京思ひ出でらる。  
 「山里のあはれ知らる、聲々に  
 とり集めたる朝ぼらけかな」  
 女君、  
 「鳥の音も聞えぬ山とおもひしを



かやと次々にいひ出すので、思ひも寄らぬ男と關係が出来たりする事も無いともいへぬ世の中だわいと大君が思ひ廻らすにつけては、この人の一薫の。故宮も……亡き父宮も、薫の方で若し氣がおりなら大君を遣つてもよいと。自らは猶……私自身は矢張かうして獨身で過さう。あたらしげなる……埋れさせるには惜しい中の君を、世の人並に縁に付けて相當に暮させてこそ嬉しからう。人の上になしては一薫を妹の婿としてなら。自らのうへの……私自身の事ではそれらの世話を又誰がしてくれうぞ。この人の御様の……薫の御容姿が大したものでもなく人目にも立たぬ程ならば、かく馴染んだ年來の御志に對しても我を折つて隨ふ氣に或はならぬも知れぬけれど、極りが悪く面會もしにくい程に立派な薫の御容姿なのも却つてひどく氣が引けるので、自分の一生はかうして獨身で終らうと。例ならず……平素と違つて大君の方で人の話聲などのした様子も變だと、中の君は考へながら。

世のうき事は尋ねきにけり  
障子口まで送り奉り給ひて、夜べ入りし戸口より出でて、臥し給へれどまどろまれず。名殘戀しうて、いとかく思はましかば、月頃も今まで心のどかならましやなど、歸らむことも物憂く覺え給ふ。姫君は人の思ふらむ事のつゝ、まじきに、とみにもうち臥され給はず。頼もしき人なくて、世を過す身の心憂きを、ある人ども、よからぬ事何やかやと、つき／＼に隨ひつゝ、いひ出づめるに、心より外の事ありぬべき世なめりと思し廻らすには、この人の御けはひ有様の、疎ましくはあるまじく、故宮も、さやうなる御心ばへあらばと、折々宣ひ思すめりしかど、自らは、猶かくて過してむ、我よりは様容貌も盛に、あたらしげなる中の君を、人並々に見なしたらむこそ嬉しからめ、人の上になしては、心のいたらむ限、思ひ後見てむ、自らのうへのもてなしは、又誰かは見扱はむ、この人の御様の、なのめにうち紛れたる程ならば、かく見馴れぬる年頃のしるしに、うちゆるぶ心もありぬべきを、恥か

かくておはしたれば大君がかうして部屋に來られたので。御衣一夜の懸物。所狭き……甚しい移り香が、紛れやうもない薫のそれである。宿直人が……宿直の男が管て薫に戴いた衣裳の高い移り香に始末に困つてゐた事が思ひ合はされた。まことなるべしと一薫と大君との仲を侍女達がとかく尋してゐたのは、さては事實なのだらうと。客人一薫。御消息……大君への口上を眞面目らしく辨に申上げさせて置いて。總角を……「總角に長き契を云々」と薫の詠まれたに對して、「ぬきもあへず腕き涙の云々」など、總角をそんな戲言に取扱つたのも、私が本心から進んで一尋位までも接近して薫に逢つたらうと、中の君も思はうかと。尋ばかりは催馬樂の總角に、總角や、尋ばかりや、さかりて寝たれども、まろび合ひにけり、か寄り合ひにけり」を聯想したもの。日は残なく……御一周忌までにはもう餘日もなくなりました。又仕うまつる……大君の外には別に組一名香に懸ける組絲。

しげに見えにくき氣色も、なか／＼いみじうつゝまじきに、わが世はかくて過し果てゝむと思ひつゞけて、音泣き勝にて明し給へるに、名残いと惱ましければ、中の君の臥し給へる奥の方に添ひ臥し給ふ。例ならず人のさゝめき繁きも怪しと、この君は思しつゝ、寢給へるに、かくておはしたれば嬉しくて、御衣ひき著せ奉り給ふに、所狭き御移り香の、紛るべくもあらずくゆりかゝる心地すれば、宿直人がもて扱ひけむ思ひ合はせられて、まことなるべしといはしうて、寝ぬるやうにて物も宣はず。客人は、辨の御許呼び出で給ひて、こまかに語らひ置き、御消息すく／＼しう聞えおきて出で給ひぬ。總角をたはぶれ言に取りなし、も、心もて尋ばかりの隔にても對面しけるとや、この君も思すらむと、いみじう恥かしければ、心地あしとて惱み暮し給ひつ。人々、日は残なくなりはて侍りぬ。はか／＼しう、はかなき事をだに又仕うまつる人もなきに、折悪しき御惱かな」と聞ゆ。中の君、組などし果て給ひて、「心葉などは、えこそ思ひより侍らね」と、せめて聞え



心葉など……心葉の結び方などは私  
 はえう思ひ付きませんよ。だから  
 拵へて下さいの餘意がある。心葉  
 はこゝは絹糸でした飾り結び。  
 中納言殿……  
 さも見苦しう……後朝の文は自分で  
 返事するのが通例。  
 御服……  
 片時も……姫君達は父宮に後れて暫  
 くも生き残つてゐられようとは思  
 はなかつたに、死にもせず空しく  
 過ぎて来た月日の數を考へると。  
 黒う慣らはし給へる……黒い表服ばか  
 り着慣れていらした。  
 薄鈍にて……薄い鼠色に着換へて。  
 清まし繕はせて……洗つて手入れをさ  
 せて。  
 人知れず……自分が密に考へてゐる  
 通り……事運んで、中の君が薫に  
 縁付かれるやうな折には、まさか  
 その容色が近寄つて見劣りする心  
 配はあるまいと。  
 今はまた……今では他に中の君の世  
 話を託する人もなく、大君が親の  
 やうな氣になつて。  
 かの人……薫は嘗て大君がそれを  
 口實にして申入れを拒絶した喪服  
 も、既にお脱ぎ換へなされた筈の  
 九月を待ちつけ切れぬやうな慌し  
 さで又宇治にお出かけなされた。

給へば、暗うなりぬる紛まぎれに起き給ひて、もろ共に結びなどし給ふ。中納  
 言殿より御文あれど、今朝よりいと惱ましうてなむとて、人傳ひとつてにぞ聞  
 え給ふ。さも見苦しう若々しうおはすと、人々つぶやき聞ゆ。御服な  
 ど果て、脱ぎ捨て給へるにつけても、片時もおくれ奉らむものと思  
 はざりしを、はかなく過ぎにける月日の程を思すに、いみじう思の外  
 なる身の憂さと、泣き沈み給へる御様ども、いと心苦しげなり。月ご  
 ろ黒う慣らはし給へる御姿、薄鈍うすどんにていとなまめかしうて、中の君は  
 げにいと盛さかにて、美しげなる匂まさり給へり。御髪みかみなど清まし繕つくろはせ  
 て見奉り給ふに、世の物思忘るゝ心地してめでたければ、人知れず思  
 ふ様さまに叶ひて、人に見え給はむに、さりととも近寄りしては思はずやあ  
 らむと、頼もしう嬉しうて、今はまた見ゆづる人もなくて、親心おやこころにか  
 しづき立て、見聞え給ふ。  
 かの人、つゝ、み聞え給ひし藤ふじの衣ころもも、改め給ひつらむ九月も、靜心しづこころ  
 なくて又おはしたり。例のやうに聞えむと、また御消息おんせうしあるに、心あ

例のやうに……先度のやうな風にし  
 てお逢ひ申したいと、薫から大君  
 へ取次を以て申入れさせると。  
 心あやまりして……氣分が悪くて。  
 聞えずまひて……お断りして。  
 脱ぎ捨て侍りし……喪服を脱ぎまし  
 た當座の悲歎に却て深く沈みまし  
 てえうお話しも出来ません。  
 例の人召して……薫は辨を呼んで。  
 世に知らぬ……侍女達は類もない現  
 在の心細い生活の慰めとしては薫  
 お一人を力にしてゐる人々である  
 から、自分等の希望通りに運んで  
 大君が薫に縁付き、人並に都住ひ  
 などなされたら誠に結構な事だら  
 うなどと話し合つて。  
 入れ奉らむと……大君のお部屋に薫を  
 お入れ申さうと。  
 姫君その氣色をば……大君は侍女達の  
 さうした様子を。  
 から取り分きて……薫が辨を特に重  
 んじ手なづけて居られるから、辨  
 も薫の味方になつて油断ならぬ料  
 簡たんでも持つてゐるかも知れない。  
 古い小説などにも、女自身の心か  
 ら進んで、あゝだのかうだの色  
 めいた事があるか、皆侍女な  
 どのおせつかひに因る事である。  
 ほんに何程使ひ馴れた侍女でも安  
 心して信頼出来ないのである。

やまりして、煩はしう覺え給へば、とかう聞えずまひて對面し給はず。  
 「思の外おもひの外に心うき御心かな。人もいかに思ひ侍らむ」と、御文にて聞え  
 給へり。今はとて脱ぎ捨て侍りし程の心惑まどひに、なか／＼沈み侍りてな  
 む、え聞えぬ」とあり。恨み詫わびて、例の人召してよろづに宣ふ。世に知  
 らぬ心細さの慰めには、この君をのみ頼み聞えたる人々なれば、思に  
 かなひ給ひて、世の常の御住處みすゝめに移ろひなどし給はむを、いとめでた  
 かるべき事にいひ合はせて、只入れ奉らむと、皆語らひ合はせけり。姫  
 君、その氣色をば深く見知り給はねど、かう取り分きて人めかし懐なつけ  
 給ふめるにうち解けて、後うしろめたき心もやあらむ、昔物語にも、心もて  
 やは、とある事もかゝる事もあゝめる、うち解くまじきは人の心にこ  
 そあゝめれと、思ひ寄り給ひて、せめて恨深くば、この君をおし出でむ。  
 劣り様よろさまならむにてだに、さても見そめては、淺はかにはもてなすまじ  
 き心なゝめるを、ましてほのかにも見そめては慰みなむ、言に出でて  
 はいかでは、ふとさる事を待ち取る人のあらむ、本意ほんいになむあらぬ



わいと。せめて恨深くば……薫がどうでもか  
うでも怨むなら中の君を代りに差  
出さう、假令不器量な女でも一旦  
逢つた上は軽々しく取扱ふやうな  
事は無さうな御氣象だもの、  
まして中の君の容姿なら一寸でも  
薫がお逢ひになつた上は満足なさ  
るに違ひない。  
言に出でては……假令心では同意し  
てゐても口に出してはどうして待  
構へてゐたやうに中の君でもよい  
といふ人があらう、中の君では不  
本意だと薫が承諾する様子の無い  
のは、一面には、さては大君への  
情も實は深くはなかつたのかと世  
人が思ひさうなのを憚つて居られ  
るのだらう。  
氣色だに……薄々の様子でも中の君  
に知らせて置かなかつたら怨まれ  
ようと、大君は我が身に引比べて  
氣の毒だから。  
昔の御おもひけ……亡き父宮の御意向。  
なか／＼人笑へに……生中世間の物  
笑ひになる軽率な考を起してつま  
らぬ縁にお付きなさるな。  
おはせし世の……私達は父宮御存生  
中の手足護ひとなつて、佛道御修  
行の御邪魔をした罪さへ容易なら  
なかつたのに、父宮が今は臨終と

と、承けひく氣色のなかめるは、片へは人の思はむことを、あいなう  
浅き方になど、つゝみ給ふならむと思し構ふるを、氣色だに知らせ  
給はずば罪もや得むと、身を掴みていとほしければ、よろづにうち語  
らひて、昔の御おもひけも、「世の中をかく心細うて過し果つとも、な  
かなか人笑へに軽々しき心使ふなど言ひおきしかば、おはせし世  
の御絆にて、行の御心を亂りし罪だにいまじかりけむを、今はとて、  
さばかり宜ひし一言をだに違へじと思ひ侍れば、心細くなども殊に  
思はぬを、この人々の、怪しう心剛きものに憎むめるこそ、いとわりな  
けれ。げにさのみ様のものと過し給はむも、明け暮るゝ月日に添へて  
も、御事をのみこそ、あたらしう心苦しうかなしきものに思ひ聞ゆる  
を、君だに世の常にもてなし給ひて、かゝる身の有様をも面正しく、  
慰むばかり見奉りなさばや」と聞え給へば、いかに思すにかと心憂く  
て、一所をのみやは、さて世に果て給へとは聞え給ひけむ。はか／＼  
しくもあらぬ身の後めたさは、數添ひたるやうにこそ思されためり

思召し、あれ程に仰しやつた御遣  
言だけでもせめて背くまいと思つ  
てゐる故、現在の生活を別に心細  
いなどと思ひもしせんのを。  
この人々の……侍女達が私達を嫌に  
強情な女と憎がつてゐるやうのが。  
御事を……貴女の事ばかりを惜しく  
お氣の毒な可憐なものに存じます  
たれて、貴女だけでも人並に夫を持  
たれてこんな埋木の私も姉として  
面目を保ち得意になれる位に、貴  
女を立派にしたのです。  
いかに思すにか……姉君は一體どん  
な御料簡か知らと中の君は心外で、  
一所をのみやは……父宮は姉君お一  
人だけさう獨身で暮すやうに御遣  
言なされたのでせうか、しつかり  
した所もない娘達よといふ父宮の  
御心配は寧ろ私の方にこそ一層甚  
しいやうに思召したやうです。  
かう朝夕に……かうして朝夕姉上と  
御一緒に暮すより外にどんな楽しみ  
が御座いますせう。  
猶これかれ……それでも矢張侍女達  
が私をいやな旋毛曲りのやうに尊  
もし考へもするらしいにつけて、  
御消息ども……薫の口上を取次いで  
薫がお恨み遊ばすのも尤だといふ  
ことを。

しか。心ばそき御慰めには、かう朝夕に見奉るよりいかなる方にか  
とて、なま怨めしく思ひ給へれば、げにいとほしうて、猶これかれ、う  
たて僻々しき者にいひ思ふべかめるにつけて、思ひ亂れ侍るぞや」と  
といひさし給ひつ。  
暮れ行くに客人は歸り給はず。姫君いとむつかしと思す。辨參りて、  
御消息ども聞え傳へて、恨み給ふを道理なるよしを、つぶ／＼と聞ゆ  
れば、答もし給はずうち歎きて、いかにもてなすべき身にかは、一所  
おはせましかば、ともかくも、さるべき人に扱はれ奉りて、宿世とい  
ふなる方につけて、身を心ともせぬ世なれば、皆例の事にてこそは、  
人笑へなる咎をも隠すなれ、ある限の人は年積り、さかしげにおのが  
じしは思ひつゝ、心をやりて似つかはしげなる事を聞え知らすれど、  
こははか／＼しき事かは、人めかしからぬ心どもにて、只一方に思ひ  
いふにこそはと見給へば、引き動かしつばかり聞えあへるも、いと心  
憂く疎ましうて、動せられ給はず。おなじ心に何事も語らひ聞え給ふ



いかにもてなすべき……どう始末したらいが身なのか。一所……父宮御在世ならばとにかく然るべき人の妻とたてられて、一體宿縁といふものにより我身が我が心次第にもならぬ世の習であるから、それは皆よく世間にある例として、物笑ひになるやうな疵も隠されるのであるが。ある限の人は……處が今居る侍女達は皆年を取り。心をやりて……得意になつて、それ相應らしい縁談の事など申上げるけれど。人めかしからぬ……老人達の卑しい料簡から只一圓に思つていふのであらうと大君は御覽になるので、引き動かしつばかり……侍女達が手を引張りもしさうに熱心に申上げるのを。動ぜられ……心がお動きなさらぬ。かゝる筋には……こんな男女間の事には大君より一層うぶに大様で。例の色の……大君に普通の色のお召物をお着換へさせ申せ。さる心……蕪を尋き入れる用意。げに何の障り所……ほんに侍女達が蕪を入れようとの細工も何の困難があらうかい、狭くてこんな仕方もないお住ひでは。

中の君は、かゝる筋には今少し心も得ずおほどかにて、何とも聞き入れ給はねば、怪しうもありける身かなと、只奥さまに向きておはす。なほ例の色の御衣ども奉り換へよなど、そのかし聞えつゝ、皆さる心すべかゝめる氣色を、あさましく、げに何の障り所かはあらむ、程もなく、かゝる御住居のかひなき、山梨の花ぞのがれむ方なかりける。客人は、かく顯證に、これかれにも口入れさせず、忍びやかに、いつありそめけむ事ともなくもてなしてこそと、思ひそめ給ひける事なれば、御心ゆるし給はずば、いつもくかくて過さむと思し宜ふを、この老人の、おのがじし語らひて、顯證にさゝめきなどす。さはいへど、深からぬげにや、老い僻めるにや、いとほしくぞ見ゆる。姫君おぼし煩ひて、辨が參れるに宜ふ、年頃も、人に似ぬ御心寄せとのみ宜ひわたりしを聞きおき、今となりては、よろづに殘なく頼み聞えて、怪しきまでうち解けにたるを、思ひしに違ふ様なる御心ばへのまじりて、恨み給ふめるこそわりなけれ。世に人めきてもあらまほしき身

山梨の花ぞ……六帖、世の中を受しといひても何處にか身をば隠さむ山なしの花とあるやうに、大君は蕪に隠れるすべもなかつた。客人は……蕪は大君との間を、顯はにして侍女達誰彼に世話を焼かせず、こつそりや何時から出来た關係とも知れぬやうにしたいと、御心ゆるし給はずは……大君が御承知がないなら。この老人……辨やその他の老女達。さはいへど……好意からするといふもの、老女達は考が浅いせるか年寄のいこちなせるか。人に似ぬ……只の浮氣男と違つた深切だとばかり、蕪が仰しやつてゐたのを伺つてをり。思ひしに違ふ……案外な色めいた御氣持がまじつて。世に人めきて……世間並の生活をしたく思ふ我が身なら、蕪のお懸想も何の全く相手にせずには居らうぞ、然し以前からそんな事は全く断念した私の氣持であつて。この君……中の君。只この御ゆかり……只中の君お一人の爲に狭苦しく思ひますが、蕪が眞實亡き父宮との舊誼を捨てぬ御深切ならば、中の君を私と同じに見て娶つて戴きたいのです、中の

ならば、かゝる御事をも、何かはもて離れても思はまし。されど、昔より思ひ離れにたる心にて、いと苦しきを、この君の盛過ぎ給はむも口惜し。げにかゝる住居も、只この御ゆかり一つに所狭くのみ覺ゆるを、まことに昔を思ひ聞え給ふ御志ならば、おなじ事に思ひなし給へかし。身を分けたる心のうちは、皆譲りて見奉らむ心地なむすべき。猶かやうによろしげに聞えなされよと恥らひたるものから、あるべかしき様を宣ひ續くれば、いとあはれと見奉る。さのみこそは、さきさきも御氣色を見給ふれば、いとよく聞えさすれど、さにはえ思ひ改むまじ。兵部卿の宮の御恨、深さまさるめれば、又そなた様に、いとよく後見聞えむとなむ宜ふ。それも思ふやうなる御事どもなり。二所ながらおはしまして、殊更にいみじき御心を盡して、かしづき聞えさせ給はむに、えしもかく世にあり難き御事ども、さしつどひ給はざらまし。畏けれど、かくいとたづきなげなる御有様を見奉るに、いかになり果てさせ給はむと、後めたう悲しうのみ見奉るを、後の御心ざしは



君は私の分身と思つて居るゆゑ、何も皆中の君に譲つて。よろしげに……然るべく薫にお取成し下さい。さのみこそは……私も前からその御心持を拜見して居りますので、その通に薫君に申し上げますけれど、さへ思ひ改むまじりとでもさうは思ひ直せまい、そんな事をしたら句宮から一層恨まれる譯ゆゑ、中の君は又中の君として句宮に取持つて私もよくお世話申さう。二所ながら……御兩親共に御健在で十分に御配慮をなさるとして、も到底かくまで類稀な御縁談の揃ふ事は御座いますまい。後の御心ざし……末始終の薫のお心持、美しくめでたき……結構な貴女様の御運勢ではあると。さるべき人の……適當な婿君がなく身分不釣合なつまらぬ夫をお持になる事でもあらうかと思召して。この殿の……薫が大君を娶るお氣持が若しおありだつたら、一人だけは安心な婿が出来てどんなに嬉しからうと。程々につけて……どんな身分にせよ親に別れた人は。どきいふ人——非難する人。

知り難けれど、美しくめでたき御宿世どもにこそおはしましければ、なむかつく思ひ聞ゆる。故宮の御遺言たがへじと、思し召す方は道理なれど、それは、さるべき人のおはせず、品程ならぬ事やおはしまさむと思して、誠め聞えさせ給ふめりしにこそ、<sup>故宮</sup>この殿のさやうなる心ばへ物し給はましかば、一所うしろ安く見おき奉りて、いかに嬉しからまし」と、折々宣はせしものを、程々につけて、思ふ人におくれ給ひぬる人は、高きも下れるも、心の外にあるまじき様にさすらふ類こそ、多く侍るめれ。それ皆例の事なめれば、もどきいふ人も侍らず。まして、かくばかり、殊更にも作り出でまほしげなる人の御有様に、志深うあり難げに聞え給ふを、あながちにもて離れさせ給ひて、思しおきつるやうに、行の本意を遂げ給ふとも、さりとして雲霞をやはなど、すべて言多く申し續くれれば、いと憎く心づきなしと思して、ひれ臥し給へり。中の君も、あいなくいとほしき御氣色かなと見奉り給ひて、諸共に例のやうに大殿籠りぬ。後めたういかにもてなさむと覚え給へど、

殊更にも……わざくでも拵へて見、御熱心にあつたに無い程に先方が仰しやるものを。思しおきつるやうに……父宮の御意向通りに出家の望をお達げなされたにしても、それでも雲霞を食べても居られませうまい、矢張生活の苦勞はありませうものを。後めたういかに……辨などがどんな細工をするだらう、薫を引入ればせぬかと氣遣ひに思召すけれど、殊更めて……取立て、引籠つて人目をよけられる隠れの室もない。上——中の君の身體の上に。少ししまろび退きて——大君は少し離れて寝て、薫が来たら中の君に譲つて脱け出さうとの用意。いかなれば……どうして大君はこれ程までにあま浮世をお見限りなされたのだらう、法師めいた八宮のお側にゐてこの世を無常なものとして悟られたものか知らんと。わが心に通ひて……薫自身の心に似てゐる氣があるので、大君を利口ぶつて憎いなどいふ風にも思はれない。物越などにも……大君は几帳などを隔て、逢ふ事も今ではとんでもない事のやうに思込んでいらつしや

殊更めてきて、さし籠り隠ろへ給ふべき物の限だになき御住居なれば、なよ、かにをかきしき御衣、上にひき著せ奉り給ひて、ただけはひ暑き程なれば、少ししまろび退きて臥し給へり。辨は宣ひつる様を客人に聞ゆいかなれば、いとかうしも世を思ひ離れ給ふらむ。聖たち給へりしあたりにて、常なきものに思ひ知り給へるにやと思すに、いとわが心に通ひて覺ゆれば、賢しだち憎くも覺えず。さらば物越などにも、今はあるまじき事に思しなるにこそはあなれ。今宵ばかり大殿籠るらむあたりに、忍びてたばかれ」と宣へば、心して人疾く静めなど、心知れるどちは思ひ構ふ。宵すこし過ぐる程に、風の音少し荒らかにうち吹くに、はかなき様なる部などは、ひしくと紛る、程に、人の忍び給へる振舞は、え聞きつけ給はじと思ひて、やをら導き入る。おなじ所に大殿籠れるを、後めたしと思へど、常の事なれば、外々にともいか、聞えむ。御けはひをも、たどしからず見奉り知り給へつらむと思ひけるに、うちもま



るのかわい。大君のお寢間に。心して……氣をかかして女房達を早く寝せたりなど、事情を知つた老女達は色々取計らふ。ひし／＼と紛るゝぎち／＼と鳴つて物音の紛れる。人の忍び給へる……薫の忍んで入らつしやる様子は、大君が聞き附けはなさるまいと辨は思つて。おなじ所に……大君が中の君と同室におやすみ下さいとも何で申上げられよう、それに大君か中の君か、その御様子は暗中でも薫がはつきり見知つていらつしやるだらうと辨は思つてゐたが。ふと聞きつけ給ひて……薫の足音を。かねて思ひわたる……前々から思つてゐた、薫を中の君に譲らうといふ考も忘れて中の君を起して。さもえ立ち返られで……一旦隠れたものを今更ひき返す譯にもゆかず。桂姿——直衣を脱いだ有様。いみじういとほしく……大君は中の君がお可愛さうで、どんな心持が壁のつら——壁のきは。むつかしげなるに……ごみ／＼した處に大君は滑んで居られた。

どろみ給はねば、ふと聞きつけ給ひて、やをら起き出で給ひぬ。いと疾く這ひ隠れ給ひぬるに、何心もなく寝入り給へるを、いといとほしく、いかにする業ぞと胸つぶれて、かねて思ひわたる心も忘れて、驚かして諸共に隠れなばやと思へど、さもえ立ち返られで、わな／＼くわな／＼見給へば、火のほのかなるに、桂姿にて、いと馴れ顔に、几帳の帷子をひき上げて入りぬるを、いみじういとほしく、いかに覚え給はむと思ひながら、怪しき壁のつらに、屏風を立てたる後のむつかしげなるに居給ひぬ。あらまし言にてだに、つらしと思ひ給へるを、まいていかに珍かに思し疎まむと、いと心苦しきにも、すべてはか／＼しき後見なくて、落ちとまる身どもの悲しきを思ひつゞけ給ふに、今はとて山に登り給ひし夕べの御様など、只今の心地して、いみじく戀しく悲しく覚え給ふ。中納言は一人臥し給へるを、さる心しけるにやと嬉しくて、心ときめきし給ふに、やう／＼あらざりけりと見るに、同じ事ながら、美しくらうたげなる氣色は、勝りてやと覺ゆ。淺ましげ

あらまじごと……薫を中の君の好君としてお譲りしようと思つて話しただけですが、中の君はひどい仕打だと思つて居られたものを、まして實地にこんな事をしたらどんなにひどいと私を憎まれるやらと落ちとまる……生き残る。中納言は……薫は姫君が一人寝ていらつしやるのを見て、さては大君がその積りで自分を持つてゐたのか知らんと嬉しく思ひ。あらざりけり——人違ひだつたわい。勝りてやと覺ゆ——中の君の方が或は勝つてゐるかとも薫は思はれた。げに心も……成程中の君は事情を知らなかつたのかわいと見えるので薫は氣の毒でもあり、又思ひ直せば大君が隠れてしまはれた無情さが眞から辛く妬ましいので、中の君をも他人の物としてすましてゐたくはないけれど、矢張最初思込んだ事と齟齬するのが残念で。うちつけに……只今の君に思ひ換へてその結果、さては矢張一時の淺い心からだつたのだと大君に思はれるやうな事はすまい。この一節は……大君との一條は猶保留しておいて、結局宿縁が免れぬものなら中の君を娶るのも、何のあかの他人のやうではあるまいと

に呆れ惑ひ給へるを、げに心も知らざりけりと見ゆれば、いといとほしくもあり、又おし返して、隠れ給へらむつらさの、まめやかに心憂くねたければ、これをも餘所のものとは、え思ひはなつまじけれど、なほ本意の違はむ口惜しくて、うちつけに淺かりけりと覺え奉らじ、この一節はなほ過して、遂に宿世遁れずば、此方様にならむも、何かは、他人のやうにやはと思ひ醒まして、例のをかしく懐かしき様に語らひて、明し給ひつ。老人どもは、しそしつと思ひて、中の君は何處にかおはしますらむ。怪しき業かな」とたどりあへり。……さりとともあるやうあらむなどいふ。大方、例の見奉るに老の皺のふる心地して、めでたくあはれに見まほしき御容貌有様を、などていともて離れては聞え給ふらむ。何か、これは世の人のいふめる恐ろしき神ぞ憑き奉りたらむ」と、齒はうち透きて、愛敬なげにいひなす女もあり。又「あなまが／＼し。何ぞの物か憑かせ給はむ。只、人に遠くて生ひ出でさせ給ふれば、かゝる事に

總角



薫は思慮を静めて。しそしつしてやつた。爲殺しつもの怪しき業かな……中の君のはづして出てこぬのは不思議なことよと疑ひ合つてゐた。あるやうあらむ仔細があらう。例の見奉るに薫の御容姿は例の如くお見上げ申すと。などていと……どうして大君がひどく避けようとなさるのか知らん。恐ろしき神ぞ……大君に魔性の物が取憑いてゐるのであらう。あなまが……し……まあ不吉な、どんな憑物がしませうかい。人に遠くて一人馴れがしないのでつき……しげに……適當に始末して上げる人もおありにならないので工合悪く思召すのです。思ひ聞え給ひてむ大君も薫に好感を持たれるやうになりませう。疾くうち解けて……早く大君が薫に心置なく親しんで結構な御身になられますやうと。逢ふ人から……逢ふ相手次第で秋の夜も長くないといふが、これはも志した女でないから長く感ずる筈の夜だが。古今長しとも思ひぞ果てぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば……による。

も、つき……しげにもてなし聞え給ふ人もなくおはしますに、はしたなく思さるゝにこそ。今自ら見奉りなれ給ひなば、思ひ聞え給ひてむなど語らひて、疾くうち解けて、思ふやうにておはしますなむなどいふ……寝入りて、躰などかたはら痛くするもあり。逢ふ人からにしもあらぬ秋の夜なれど、程もなく明けぬる心地して、いづれと分くべくもあらず、なまめかしき御けはひを、人遣りならず飽かぬ心地して、あひ思せよ。いと心憂くつらき人の御様見習ひ給ふなよ……など、後瀬を契りて出で給ふ。我ながら怪しく夢のやうに覺ゆれど、猶つれなき人の御氣色、今ひと度見はてむの心に、思ひのどめつ、例の出でて臥し給へり。辨参りて、いと怪しく、中の君は何處にかおはしますらむ」といふを、いと恥かしく思ひかけぬ御心地に、いかなりけむ事にかと、思ひ臥し給へり。昨日宜ひしことを思し出でて、姫君をつらしと思ひきこえ給ふ。明けにける光につきてぞ、壁の中の蟋蟀は這ひいで給へる。思すらむことのいとほしければ、かたみに物もいはれ

いづれと……大君とどちらとも判別人遣りならず……薫はわが心からで實際に手もつけず夜を明かしたので、流石に物足らぬ氣がして。つらき人の無情な大君の。後瀬……後日の逢ふ瀬。瀬は機會。つれなき人の……無情な大君のお心持を今一度はつきりと見窮めたいといふ積りで薫は我慢しつ。思ひかけぬ御心地に……藪から棒のお氣がして、一體昨夜はどうした譯だつたのだらうと思ひながら打臥していらつしやる。昨日宜ひし……中の君は大君が昨日仰しやつた事を思出して、姉君をひどいと恨んでいらつしやる。壁の中の蟋蟀……隠れてゐた大君に譬へていふ。思すらむことの……大君は中の君の心中が誠にお可愛さうなので。ゆかしげなき……姉妹二人共に薫に見顯はされて、奥ゆかしさもないやうに心外な事になつたものではある。心弛びすべくも……油断のならぬ。あなたに薫の居られる處に。浅ましかりける……呆れる位甚しかつた大君のお心強さを薫から明細に聞いて。

給はず、ゆかしげなきやうに心憂くもあるかな、今より後も、心弛びすべくもあらぬ世にこそと、思ひ亂れ給へり。辨はあなたに参りて、浅ましかりける御心強さを聞き顯はして、いとあまり深く、人憎かりけること、いとほしく思ひ惚れて居たり。來し方のつらさは、猶殘ある心地して、よろづに思ひ慰めつるを、今宵なむまことに恥かしく、身も投げつべき心地する。捨て難く思し置き奉り給へりけむ心苦しさを、思ひ聞ゆる方こそ、又ひたぶるに、身をもえ思ひ捨つまじけれ。かけ……しき筋は、何方にも思ひ聞えじ。憂きもつらきも、方々に忘れ給ふまじくなむ。宮などの恥かしげなく聞え給ふめるを、おなじくは心高くと思ふ方ぞ、殊に物し給ふらむと、心得果てつれば、いと道理に恥かしくて、また参りて、人々に見え奉らむことも妬くなむ。よし、かく鳴漣がましき身の上、また人にだに洩らし給ふな」と怨じ置きて、例よりも急ぎ出で給ふ。誰が御爲にもいとほしくとさゝめきあへり。姫君も、いかにしつる事ぞ、もし疎なる心も物し給はざと、胸



人憎かりけること、憎らしい大君の仕打よと。  
 來し方の……從來の大君の無情な仕打は、まだ餘地がある氣がして。  
 捨て難く……八宮が姫君達を捨て難く思召して、私に一言頼まれた程のあの氣の毒な御心中をお察し申せばこそ、私も亦一途に身を捨て出家してしまふ譯にもゆくまいと思ふのです。  
 かけしき筋は……懸想の心はもうお二人のどちらにも起しませんまい、大君に疎まれた憂き辛さもこれ亦矢張私は忘れ得ないでせう。  
 宮などの……匂宮などが立派な御様子でおいひ寄りなさるやうだから同じ藤くなら理想高く匂宮の方へ大君の思召す點が殊に強くおありなのだらうと見極めがついたので、猶更それも尤と私は我が身が恥かしくて、この後又參上して皆にお目にかゝるのも辛い事です。  
 誰が御爲にも……姫君達もお可愛さう、薫君もお可愛さうと。  
 姫君も……大君も、あの仕打はどうした事ぞ、若し燕に薄情な心でも出たら捨てられよう。  
 すべてうち合はぬ……總てこちらの心持には頓着しない老女達の出過ぎた計らひを。

潰れて心苦しければ、すべてうち合はぬ人々のさかしらを憎しと思す。様々に思ひわび給ふに、御文あり。例よりは嬉しと覚え給ふも、かつは怪し。秋の氣色も知らず顔に、青き枝の、片枝はいと濃く紅葉したるを、

「おなじ枝をわきてそめける山姫に」

いづれかふかき色と問はゞや」

さばかり恨みつる氣色もなく、言少なに事をきて、おしつゝみ給へるを、そこはかたなくもてなして止みなむ、となめりと見給ふも、心騒ぎて、耳かしがましよう、「御返り」といへば、「聞え給へ」と譲らむもうたて覺えて、流石に書きにく、思ひ亂れ給ふ。

「大君 山姫の染むる心は分かねども」

うつろふ方や深きなるらむ」

事なしびに書き給へるが、をかしく見えければ、なほえ怨じ果つまじく覺ゆ。身を分けてなど、ゆづり給ふ氣色は度々見えしかど、うけひ

例よりは……いつもよりは薫の文を嬉しいと感ずるのも、大君は我ながら一面に妙な氣がする。これは後朝の文の體。  
 紅葉したるを、紅葉したのを折つて、それに文を附けての意。  
 おなじ枝を……おなじ樹の枝を青と紅とに分けて染めた山の女神に、どちらが本當のいゝ色かと問うてみたい。  
 おしつゝみ給へるを……昨夜の事は、愛にも出していらつしやらぬのを、さては何氣なく有耶無耶に紛してしまはうといふ薫のお考なのだ。大君は御覽になるにつけても、耳かしがましよう……老女達がうるさく御返事をといふと。  
 聞え給へと……貴女からお上げなさいと中の君に譲らうのも。  
 山姫の……染めた山姫の心はわからぬが、紅く變つた方が色が深いのでせうか。この贈答は只紅葉の歌で寓意はないと見るがよい。





事なしに無造作に。猶え怨み通せさうもない。君をわけてなど。大君が嘗て、中の君は私の分身で私同様です。中などとお譲りになる様子は度々見えてゐたが、私の方で承知せぬのに困つて、さては昨夜あんな計畧を執られたものだらう。(一六六九頁の大君の詞参照)以下蕭の心。そのかひ無く。折角の大君の計畫を無にしてこんな元々の態度で居たら、大君から厭らしく分らず屋のやうに疎外されて益大君に對する戀が成就し難くなるであらう。いひ傳へなどする老人。取次をする老女辨。心を染めけむだに。大君に戀想し初めた事すら口惜しく、世の中の萬事を斷念しようといふこれ程の決心でありながら、自分でどうする事も出来ぬ戀心だわいと、蕭は外聞わるく思はれた。おなじあたりに。靡かぬ女にいつまでも附纏うてゐるのも誠に外聞悪い事だらうなどと。萬葉。堀江。漕ぐ瀬無小舟こぎ返り同じ人にや戀ひわたりなむ。兵部卿の宮。句宮。近くては。雙方の距離が近くなつ

かぬに侘びて、思ひ構へ給へるなめり、そのかひ無く、かくつれなからむも、いとほしく情なき者に思ひ置かれて、いよゝ初めの思ひ叶ひ難くやあらむ、とかくいひ傳へなどする老人の、思はむところも輕々しく、とにかくに心を染めけむだに悔しく、かばかりの世の中を、思ひ捨てむの心に、自らも叶はざりけりと、人わろく思ひ知らるゝを、ましておしなべたる好者のまねに、おなじあたりに返すゝ漕ぎめぐらむ、いと人笑へなる棚なし小舟めきたるべしなど、夜もすがら思ひあかし給ひて、まだ在明の空もをかしき程に、兵部卿の宮の御方に參り給ふ。

三條の宮焼けにし後は、六條院にぞ移ろひ給へれば、近くては常に參り給ふを、宮も思すやうなる御心地し給ひけり。紛るゝことなく、あらまほしき御住居に、御前の前栽、外には似ず、おなじき花の姿も、本草の靡きさまも、殊に見なされて、遣水に澄める月の影さへ、繪に書きたるやうなるに、思ひつるも著く、起きておはしましけり。風に

て後は蕭は始終訪問なきるので、宮も好都合(宇治の姫君達との交渉に便宜ゆゑ)の氣がなされた。紛るゝことなく。ごたゝした所もなく結構な御住居に。思ひつるも著く。案の如く句宮は、それとうち驚かれて。蕭の御來訪と句宮は氣附かれて。かのわたりの事。宇治の姫君の事。よろづに恨み給ふも。様々と蕭の取持が不親切だと不平を仰しやるのも無理な話だ。自らの心に。蕭は自分の戀すら思ふやうにいかぬのにと。さもおはせなむと。句宮と中の君との仲が纏まれかしと思ふ仔細がある。この頃。兩者の仲が纏まれば自然大君も蕭に歸くだらうから。あるべき様。執るべき手段。あけぐれ。夜明け方の薄闇。山里。宇治をさす。この頃の程に。近日中にきつと私を置去りにせず宇治へお連れ下さいます。女郎花。女郎花の咲いてゐる野を立入らせまいと心狭く貴方は野に細張をするのでせう。裏面の意は姫君達のゐる處を貴方は我が物顔して人を寄せつけず、まあ狭い御料簡ですわね。

つきて吹き来る句の、いと著くうち蕭るに、ふとそれとうち驚かれて、御直衣奉り、亂れぬさまに引き繕ひて出で給ふ。階をのぼりも果てず、ついで居給へれば、なほ上に。なども宣はで、句宮により居給ひて、世の中の御物語きこえかはし給ふ。かのわたりの事をも、物のついでには思し出でて、よろづに恨み給ふもわりなしや。自らの心にだに叶ひ難きをと思ふゝ、さもおはせなむと思ひなるやうのあれば、例よりはまめやかに、あるべき様など申し給ふ。あけぐれの程、あやにくに霧りわたりて、空のけはひ冷やかなるに、月は霧に隔てられて、木の下の暗くなまめきたり。山里のあはれなる有様いと。思ひ出で給ふ。宮。この頃の程に、必ず後らかし給ふな」と語らひ給ふを、なほ煩はしがれば、

「女郎花さけるおほ野をふせぎつゝ、心せばやく標をゆふらむ」とたはぶれ給ふ。



霧ふかき……窓の内に恨み深く暮し  
ていらつしやる宇治の姫君達は、  
篤い志を寄せて通ふ人にして始め  
て逢ふ事が出来るのですとこの意  
表面の意は明白。  
なべてやは一通り一遍の誰にでも何  
の逢ひませうかい。  
あなかしがまし古今秋の野にな  
まめき立てる女郎花あなかしがま  
し花もひと時。  
年頃かく……匂宮が年來かく取持を  
頼みはなさるけれど、肝腎の中の  
君のお人柄を果してどんなものか  
と薫は不安に思つてゐたのに。  
近劣りする……近寄つて見たら失望  
するやうな事も或はあらうかと。  
何事も……昨夜實際に観察した處に  
よれば何事にも缺點は無さうだ  
と薫は思召すので。  
内々に……大君が勤に畫策してい  
つしやる事即ち中の君を代りにし  
ようとするお考に背くやうなもの  
同情の無い事のやうだが、さうか  
といつて自分は到底中の君に思ひ  
換へる事は出来さうもない故。  
譲り聞えて……中の君を匂宮へお譲り  
申して。  
何方の恨をも……中の君からも匂宮  
からも恨まれまいと、心中で企ん  
でゐる心をも匂宮は御存知なく。

霧ふかきあしたのはらの女郎花

なべてやは「などねたまし聞ゆれば、あなかしがまし」と、はては  
腹立ち給ひぬ。年頃かく宣ひ渡れど、人の御有様を、いかならむと後  
めたく思ひしに、容貌などは見劣りし給ふまじく推し量らるゝ、心ば  
せの近劣りするやうもやなどぞ、危く思ひ渡りしを、何事も口惜し  
くは物し給ふまじかめりと思へば、かのいとほしく、内々に思ひた  
ばかり給ふ有様も、違ふやうならむも情なきやうなるを、さりとて、  
さはた、え思ひ改むまじく覺ゆれば、まづ譲り聞えて、何方の恨をも  
負はじなど、下に思ひ構ふる心をも知り給はで、心せばくと、取りなし  
給ふもをかしけれど、例の輕らかなる御心様に、物思はせむこそ心苦  
しかるべけれ」など、親がたになりて聞え給ふ。「よし見給へ、かばかり  
心にとまる事なむ、まだ無かりつる」など、いとまめやかに宣へば、か  
の心どもには、さもやとうち靡きぬべき氣色は見えずなむ侍る。仕う

心せばく……薫を狭量のやうに仰し  
やるのが。  
例の輕らかなる……いつもの貴方の  
浮き……した御氣象で、中の君に  
心配をおさせなさりさうなのが、お  
可愛さうでせうよ。  
親方になりて……女の親の身になつて、  
かばかり心に……これ程心を牽かれ  
る事はまだこれまで無かつたので  
す。だから今までは浮氣も少しは  
しましたさの餘意を含む。  
かの心ども……姫君達の御料簡では、  
さうなつてもよいと靡きさうな御  
様子は見えません、これは中々む  
つかしいお仲立ですわい。  
おはしますべきやうなど……宇治へ行  
幸で奉る……薫は匂宮を宇治へお連れ  
申された。  
後の宮……明石中宮。匂宮の御母。  
切に思したる……匂宮が熱心に思込  
んで居られる事なので、何氣ない  
風にしてお連れ申さうと細工なさ  
るのも。  
所狭ければ……面倒だから。  
事々しき御宿……仰山な夕霧の別荘。  
御庄……薫の私領。  
おろし奉り……匂宮を車から下し申  
おろして薫は宇治の山莊にゆかれた。  
見咎め奉るべき……匂宮を直接お連

まつりにくき宮仕にこそ侍れや」とて、おはしますべきやうなど、こ  
まかに聞え知らせ給ふ。  
二十六日彼岸の果にて、よき日なりければ、人知れず心づかひして、  
いみじく忍びて奉る。後の宮など聞し召し出でては、かゝる御あ  
りきいみじく制し聞え給へば、いと煩はしきを、切に思したる事なれ  
ば、さりげなくともて扱ふもわりなくなむ。船渡りなども所狭ければ、  
事々しき御宿なども借り給はず。そのわたりのいと近き御庄の人の  
家にも、いと忍びて宮をばおろし奉り給ひておはしぬ。見咎め奉るべき  
人もなければ、宿直人僅に出でありくにも、氣色知らせじとなるべし。  
例の、中納言殿おはしますとて經營しあへり、君達なま煩はしく聞き  
給へど、移ろふ方異に匂はし置きてしかばと、姫君は思す。中の君は  
思ふ方異なめりしかば、さりとともと思ひながら、心憂かりし後は、あ  
りしやうに姉君をも思ひ聞え給はず、心おかれて物し給ふ。何やかや  
と御消息のみ聞え通ひて、いかなるべき事にかと、人々も心苦しがる。



れ申しても誰も見咎める人もない  
 寸歩くにも、あの山莊の宿直の男が一  
 ないと思召しての事だらう。  
 例の……例の如く山莊では薫の御來  
 訪だといつて様々奔走してゐる。  
 君達……姫君達は……  
 移る方……他の方即ち中の君の方  
 に思ひ換へて下さるやうに薫に仄  
 めかして置いたから、大丈夫と大  
 君は思召す。  
 思ふ方……薫のお相手は私でなく姉  
 君だから何が何でも私は安心と  
 心憂かりし後は……薫に忍込まれたあ  
 の夜以來は、それを姉君の計らひ  
 と思つてゐるゆゑ。  
 御消息のみ……お取次を通じてお話  
 なさるのみで、大君と中の君とが  
 御對面なさらぬので。  
 宮をば……薫は匂宮を。  
 おはしませ給うて……姫君達の山莊  
 へ來させ申して。  
 こゝもとに……私から只一言中の君  
 に申上げねばならぬ事があるの  
 すが、私を疎外なさる御様子に分  
 りましたのでお話申すも誠に恥か  
 しいけれど、引込んで黙つて済ま  
 す事もよう出来ませんので。ひた  
 屋籠りは内にのみ引込むこと。  
 ありし様には……先夜のやうな風に

宮をば御馬にて、暗き紛におはしまさせ給うて、辨召し出でて、こ  
 こともとに只一言聞えさすべき事なむ侍るを、思し放つさま見奉りて  
 しに、いと恥かしけれど、ひた屋籠にては、えやむまじきを、今暫し更  
 かしてを、ありし様には導き給ひてむやなど、うらもなく語らひ給  
 へば、何方にも同じ事にこそはと思ひて参りぬ。さなむと聞ゆれば、  
 さればよ、思ひ移りにけりと嬉しくて、心おちる給ひて、かの入り給  
 ふべき道にはあらぬ方の廂の障子を、いとよくさして、對面し給へり。  
 「一言聞えさすべきが、また人聞くばかりの、しらむはあやなきを、  
 いさ、か開けさせ給へ。いといふせし」と聞え給へど、かくてもいと  
 よく聞えぬべし」とて開け給はず。今はと移ろひなむを、たゞならじ  
 とていふにや、何かは、例ならぬ對面にもあらず、人にく、答へで、夜  
 も更かさじなど思ひて、かばかりも出で給へるに、障子の中より御  
 袖を捉へて、引き寄せていみじう怨むれば、いとうたてもある業かな、  
 何に聞き入れつらむと、悔しうむつかしけれど、拵へて出だしてむと

して案内しては下さるまいか。  
 うらもなく……隔意もなく。  
 何方にも……お二人のどちらを薫に  
 手引するも同じ事だと辨は思ひ。  
 さなむと……薫の詞をかう……大  
 君に申上げると、案の定薫が中の  
 君に思ひ換へられたわいと、大君  
 は嬉しくて。  
 かの入り給ふべき……中の君の方へ  
 の通路でない。  
 人聞くばかり……人に聞える程高い  
 聲で話すのも工合が悪いから。  
 いぶせし……締切では憐しい。  
 今はと……愈薫が中の君に思ひ換へ  
 るのを私に無断ではすまいと思召  
 して一往の挨拶をなさらうといふ  
 のか知らん、それなら何の懸想な  
 どの特別の對面でもなし、薫に恥  
 かせるやうな返事をせず、程よ  
 く逢つて夜も更けぬ中に切上げよ  
 う、など大君は思つて此處までで  
 も出て來られたのに。  
 何に聞き入れつらむ……何で逢ふ事を  
 承知したらう、断ればよかつた。  
 拵へて……薫を嫌してお歸し申さう  
 と思召し、中の君を自分と思つて  
 下さるやうにと仄めかしてお話な  
 ざる大君のお心持など誠にいと  
 しい事である。  
 宮は……匂宮は薫のお教へ申した通

思して、他人と思ひわき給ふまじき様に、かすめつ、語らひ給へる御  
 心ばへなど、いとあはれなり。宮は教へ聞えつるまゝに、一夜の戸口に  
 寄りて、扇を鳴らし給へば、辨参りて導き聞ゆ。さきくも馴れにけ  
 る迹と見ゆる道のしるべ、をかしと思しつ、入り給ひぬるをも、姫君  
 は知り給はで、こしらへ入れてむと思したり。をかしうもいとほしく  
 も覺えて、内々に心も知らざりける恨おかれむも、罪さり所なき心地  
 すべければ、宮の慕ひ給ひつれば、え聞えいなびで、此處におはしつる、  
 音もせでこそ紛れ給ひぬれ。この賢しだつめる人や、語らはれ奉りぬ  
 らむ。中空に人笑へにもなり侍りぬべきかなと宣ふに、今すこし思ひ  
 も寄らぬことの、目もあやに心づきなうなりて、かくよろづに珍かな  
 りける御心の程をも知らで、いふかひなき心をさなむも見え奉りに  
 ける意に、思しあなづるにこそはと、いはむ方なく思ひ惑ひ給へり。  
 「今はいふかひなし。道理は返すく、聞えさせても餘あらば、掴みも  
 ひねらせ給へ。やむごとなき方に思し寄るめるを、宿世などいふめる

總角



り前夜薫の入つた戸口に立寄つて、さきも馴れ...薫が従来通ひ馴れた先例と思はれる道案内、それを匂宮は面白と思ひながら遣入つて來られるのを。

姫君は...大君は匂宮と知らず矢張薫の積りで、工夫して中の君の方へ導き入れようと思つて居られる。内々に...匂宮を手引した事に就いて内々に何の事情も知らなかつたといふ不平を、あとで大君から持込まれようのも、薫は申譯の立たぬ氣がするだらうから。

宮の暮ひ給ひ...匂宮が私の跡を追はれたのでお断りも出來ず、それで此處に入らつしやいました、知らぬ間にこつそり中の君の處に紛れ込まれたやうです。

賢しだつめる人...おせつかいの辨。中空に...貴女には嫁はれるし中の君は匂宮に取られるし、どちら附かずで笑ひ物になりさうな私ですなえ。

今すこし...今までよりもつと意外な事で。

かくよるづに...こんなに様々と意外なひどいお氣持とも知らずに今まで何事も打明けて、話にもならぬ愚さをお見られ申した失策で、かうも貴方がお見限りなさるので

もの、更に心に叶はぬものに侍るめれば、かの御志は殊に侍りけるを、いとほしく思ひ給ふるに、叶はぬ身こそ置き所なく心憂ぐ侍りけれ。猶いかゞはせむに思し弱りね。この御障子の固めばかりいと強きも、まことに物清く推し量り聞ゆる人も侍らじ。しるべと誘ひ給へる人の御心にも、まさにかく胸ふたがりて、明すらむとは思しなむや」とて、障子をも引き破りつべき氣色なれば、いはむ方なく心づきなけれど、拵へむと思ひ静めて、この宜ふ宿世といふらむ方は、目にも見えぬ事にて、いかにも思ひたどられず。知らぬ涙のみ霧りふたがる心地してなむ。こはいかにもてなし給ふぞと、夢のやうにあさましきに、後の世の例にいひ出づる人もあらば、昔物語などに、殊更に鳴瀝めきて作り出でたる物の譬にこそはなりぬべかめれ。かく思し構ふる心の程をも、いかなりけるとかは推し量り給はむ。猶いとかくおどろおどろしう、心憂くな取り集めまどはし給ひそ。心より外に永らへば、少し思ひのどまりて聞えむ。心地も更にかき暮すやうにて、いと惱まし

道理は...事情は幾重にも申上げて、も猶御立腹が甚しければ。やむごとなき方に...貴女は御立派な匂宮の方にお傾きのやうですが、宿縁などいふものは全く思ふ儘にならぬものですから、匂宮のお望は中の君にありますのを私は貴女の爲お氣の毒と存じます。それにしても思の叶はぬこの私こそ、猶いかゞはせむに...矢張どうにも仕方がないと觀念して私にお辭さなさい。

まことに物清く...本當に潔白な仲だと推量する人はいいでせう。しるべと誘ひ...案内者として私を引張り出したされた匂宮の御心でも、まさか私が今夜こんなにふさぎ込んで不満に明かさうとは思召しませうかい。

知らぬ涙...後撰「行く先を知らぬ涙の悲しきはたゞ目の前に落つるなりけり」。

後の世の...私達の身の上を後世の敷奇な運命の實例として。かく思し情ふる...こんな風にお計らひになるお心持をも匂宮はどう御推量なされませう、恐らく善意にはお考へなされませう。

な取り集め...様々の事を持込んで

きを、こゝにうち休まむ、ゆるし給へ」といひみどく倦び給へば、さすがに道理をばいとよく宜ふが、心恥かしくらうたく覺えて、あが君、御心に従ひ聞ゆることの類なればこそ、かくまで頑しくなり侍れ。いひ知らず憎く疎ましきものに思しなすめれば、聞えむ方なし。いとど世に跡とむべくなむ覺えぬ」とて、さらば隔てながらも聞えさせむ。ひたふるになうち捨てさせ給ひそ」とて、ゆるし奉り給へれば、這ひ入りて、流石に入りも果て給はぬを、いとあはれと思ひて、かばかりの御けはひを慰めて明し侍らむ。ゆめ〜と聞えて、うちもまどろまず。いとゞしき水の音に目も醒めて、夜半の嵐に、山鳥の心地して明しかね給ふ。例の明け行くけはひに、鐘の聲など聞ゆ。いぎたなくて出で給ふべき氣色もなきよと、心やましく、聲づくり給ふも、げにあやしき業なり。

「しるべせし我やかへりて惑ふべき」

心もゆかぬあけぐれの道



私を困らせて下さいますな。心より外に……願はぬ事ながらこの後生きてみましたら、少し気が落着いてから又お話し致しませう。御心に……貴女の御心に違ふまいと思ふ事が無類に深いからこそ、これ程馬鹿正直に辛抱してゐるのです。いと世に……猶更出家してしまひたい氣も致します。隔てながらも……お詞のまゝに換越しにでもお話しませう。ゆるし奉り……提へた袖をお放し申したので大君はお入りになつて。かばかりの……僅にこれだけの御對面で満足して今夜は明しませう。決して……無理業は致しません。山鳥の心……山鳥は雌雄別々の時に寝るとの俗傳によつていふ。いざたなくて……匂宮が随分寝坊で起出ていらつしやる様子もないことよと、薰は氣が揉めて。しるべせし……案内された匂宮は思たされぬ心を抱いて、明け方の薄暗い道を惑ひながら歸つてゆく事でせうか。かた……自ら求めてさうした苦勞をなさるなら、それどころか我が身妹の身と様々につけて心を

かゝる例世にありけむや」と宣へば、  
 大君「かた……にくらす心を思ひやれ  
 人やりならぬ道にまどはざ」  
 とほのかに宣ふを、いと飽かぬ心地すれば、いかにこよなう隔たりて侍るめれば、いとわりなうこそなど、よろづに恨みつゝ、ほのくゝと明けゆく程に、夜べの方より出で給ふなり。いとやはらかに振舞ひなし給へる匂宮など、艶なる御心懸想には、いひ知らずしめ給へり。ねび人どもは、いと怪しく心得難く思ひ惑はれけれど、さりとも悪し様なる御心あらむやはと、慰めたり。  
 (二人ハ)  
 暗き程にといそぎ歸り給ふ。道のほども、歸るさはいと遙けく思されて、心安くもえ行き通はざらむことのかねていと苦しきを、夜をや隔てむと思ひ給ふなめり。まだ人騒がしからぬ朝の程におはし著きぬ。廊に御車寄せており給ふ。異様な女車のさまして、隠ろへ入り給ふに、みな笑ひ給ひて、「疎ならぬ宮仕の御志となむ思ひ給ふる」

暗くする程苦しんでゐる私の身を少しは御推量下さいまし。いかにこよなう……如何な事にもこんなな嚴重な換越ですから實にひどう御座います。夜べの方より……昨夜入つた方から匂宮が出ていらつしやる。しめ給へり……香を炷きしめていらつしやる。ねび人どもは……老女達は昨夜匂宮の忍び込まれた事情を知らなかつたので、非常に訝しく合點ゆかず思ひ惑はずにゐられなかつたが。さりとも……それにしても薰が悪意ある計らひをなさる筈はないと。心安くも……匂宮は手輕にこの後字治へ通ふ事も出来ないのが。かねて……今から豫想されて。夜をや隔てむ……萬葉……若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ憎からなくに。おはし著きぬ……六條院にお歸着なされた。みな笑ひ給ひて……薰も匂宮も相顧みて笑ひながら。疎ならぬ……並大抵ならぬ中の君への御心中立とお見受け申します。しるべの鳴澁がましき……薰は案内者の癖に自分が思を遂げる事も出来なかつた馬鹿々々しさを甚だ悔

と申し給ふ。しるべの鳴澁がましきさをば、いと妬くて、愁へも聞え給はず。宮は、いつしかと御文たてまつり給ふ。山里には誰も……現のこちし給はず、思ひ亂れ給へり。様々に思し構へけるを、色にも出だし給はざりけるよと、疎ましうつらく、姉君をば思ひきこえ給ひて、目も見合はせ奉り給はず。知らざりし様をも、さは……とはえ明らかめ給はで、たゞ道理に心苦しう思ひ聞え給ふ。人々もいかに侍りしことにかなど、御氣色見たてまつれど、思し惚れたるやうにて頼もし人のおはすれば、あやしき業かなと思ひ合へり。御文もひき解きて見せ奉り給へど、更に起きあがり給はねば、「いと久しくなりぬ」と御使侘びけり。  
 世のつねに思ひやすらむ露ふかき  
 道のさ、原わけてきつるも」  
 書き馴れ給へる墨つきなどの、殊更に艶なるも、大方につけて見給ひしは、をかしう覺えしを、後めたう物思はしくて、我さかし人にて聞



しいので匂宮に訴へもなさらず。宮はいつしかと……匂宮は何時は又逢へるかと思ひつゝ、中の君にお文をお送りになる。様々に……大君が色々に畫策していらつしやつたのを……大君は自分の知つた事でもなかつた趣をも、さつぱり辯明する事も出来ず、中の君の怨むのも尤で。人々も……侍女達も。思ひ惚れたる……思ひ餘つてぼんやりしたやうな様子で、介添の大君がいらつしやるから。御文……匂宮からのお手紙。いと久しくなりぬ……御返事が手間取れた。世のつねに……露深い山路の篠原を踏分けて貴女の許に通うた私の志をも、貴女は通り一遍の戀と思つていらつしやるでせう、誠に心外な事です。大方につけて……大君が今まで無關係で御覽なされた頃は。後めたらう……今となつては、大君は若しや中の君が捨てられでもせぬかと不安に氣遣はれて。我さかし人にて……自分が才覺らしあるべきやう……書くべき事柄を助

えむも、いとつゝ、まじければ、まめやかにあるべきやうを、いみじく責めて書かせ奉り給ふ。紫苑色の細長一襲に、三重襲の袴具して賜ふ。御使苦しげに思ひたれば、包ませて、供なる人になむ送らせ給ふ。ことごとしき御使にもあらず、例奉れ給ふ上童なり。殊更に人に氣色洩らさじと思しければ、夜べのさかしがりし老人の仕業なりけりと、物しくなむ聞し召しける。その夜もかのしるべ誘ひ給へど、冷泉院に必ず侍ふべきこと侍れば」とて、とまり給ひぬ。例の事に觸れて、すさまじげに世をもてなすと、憎くおぼす。いかゞはせむ、本意ならざりし事とて疎にやは、と思ひ弱り給ひて、御しつらひなどうち合はぬ住處の様なれど、さる方にをかしくしなして、待ち聞え給ひけり。遙なる御中道を急ぎおはしましたりけるも、嬉しき業なるぞ、かつはあやしき。正身は、我にもあらぬ様にて、繕はれたてまつり給ふまゝに、濃き御衣の袖のいたく濡るれば、さかし人もうち泣きつゝ、世の中に久しくもと覺え侍ら

言して熱心に勤めて中の君にお書かせなさる。紫苑色の細長一襲は表蘇枋、裏萌黄。細長は貴女の服。三重襲の袴一表裏の間に中倍を入れ賜ふ。使の者に祿として下された。御使苦しげに……使の者は表向の用でないのにこんな祿を戴く事を當惑さうにしてゐるので、その衣裳を包ませて。例奉れ給ふ……いつも宇治へお遣はしになる召使の少年である。上童……御殿の上で使ふ童子。夜べの……使に祿を與へたのは昨夜工面して案内してくれた辨の仕業に違ひないと。物しく……氣障りに。かのしるべ……例の案内役の蕭を匂宮はお誘ひなされたが。例の事に……又例の蕭のお株で、何かにつけて冷眼に世の中を見くだして人に反對なさるのだわいと。いかゞはせむ……大君は、中の君と匂宮とがかうなつた上は、もうどうしようぞ、假令望んでした事ではないにしても、今となつては疎略なお扱ひも出来まいと。うち合はぬ……萬事整はぬ。嬉しき業なるぞ……大君は嬉しい感

ねば、明暮のながめにも、たゞ御事をのみなむ心ぐるしう思ひ聞ゆるに、この人々もよかるべき様の事と、聞きにくきまでいひ知らずめれば、年経たる心どもには、さりととも世の道理をも知りたらず、はかばかしくもあらぬ心ひとつを立て、かうてのみやは見奉らむと、思ひなるやうもありしかど、只今思ひも敢へず、恥かしき事どもに亂れ思ふべくは、更に思ひかけ侍らざりしを、これやげに人のいふめる遁れがたき御契なりけむ。いとこそ苦しけれ。すこし思し慰みなむに、知らざりし様をも聞えむ。憎しとな思し入りそ。罪もぞ得給ふ」と、御髪を撫でつくりろひつゝ、聞え給へば、答もし給はねど、流石にかく思し宜ふが、げに後めたく、悪しかれとも思し掟てじを、人笑へに見苦しきこと添ひて、見あつかはれ奉らむがいみじきを、よろづに思ひ居給へり。さる心もなく、うち解けて、いとあさましと呆れ給へりしけはひだに、なべてならずをかしかりしを、まいて少し世の常になよび給へるは、御志もまさるに、たは易くえ通ひ給はざらむ山道の遙けさも、



がするの一面妙な心理である。正身中の君をさす。繕はれたてまつり……服装化粧など人々に世話焼かれつゝ。濃き濃き紅。さかし人しつかりした人。大君。世の中に……私はこの世に長く生きてみさうにも思はれませんで。御事……貴女の御身の上の事。この人々も……老女達も匂宮との御縁は結構な事と、耳に餘る位忠言するやうですから。年経たる心どもには……老人達の経験に富んだ分別では。はかしくもあらぬ……大した事でもない私の分別を押通して、いつまでも貴女をこんなに獨身で置くでもあるまいと。只今かく……今が今こんな不意に恥かしい事で御心配させようとは。少し思ひ慰みなむに……少し貴女の心が落着いた上で、匂宮を手引した事は全く私の知らなかつた次第をお話申しませう。罪もぞ得給ふ……無實の事で人を恨むと却て自分の罪を作ることになります。かく思ひ宜ふが……こんなに大君の心にかけて仰しやるのが、ほんに私の爲不安に感かれと思つてなき

胸痛きまで思して、心深げに語らひ頼め給へど、あはれともいかにとも思ひわき給はず。いひ知らずかしづく物の姫君も、すこし世の人げ近く、親兄人などいひつゝ、人のたゝすまひをも見馴れ給へるは、物の恥かしさもなごめにやあらむ。家にあがめ聞ゆる人こそなけれ、かく山深き御あたりなれば、人に遠く、物深くて慣らひ給へる心地に、思ひかけぬ有様のつゝ、ましく恥かしく、何事も世の人に似ず、あやしう田舎びたらむかしと、はかなき御答にても、いひ出でむ方なくつゝ、み給へり。さるはこの君しもぞ、らうしく、かどある方の匂はまさり給へる。「三日にあたる夜は餅なむ参る」と、人々の聞ゆれば、殊更にさるべき祝の事にこそはと思して、御前にてせさせ給ふもたどしう、かつはかう大人になりて掟て給ふも、人の見るらむこと憚られて、面うち赤めておはする様、いとをかしげなり。このかみ心なればにや、のどかに氣高きものから、人の爲あはれになさけしくぞおはしける。

るのでもあるまいに、この後物笑になるやうな見苦しい事即ち匂宮に捨てられるやうな事でも起つて又々大君に厄介をかけようのが辛いといふ事を。さる心もなく……中の君が何の豫期もなかつたので、固くなつてまあ大變と呆氣に取られてゐた先夜の御様子すら。まいて少し世の……まして少し尋常の風情にやさしく居られる今夜の中の君を見ては。いひ知らず……非常に親達が大切にす、寶物のやうな姫君でも。親兄人など……親とか兄とかいふやうな人々の、女に關係する様子を、も見慣れてゐるものは、男に對する恥かしさもひどくはなからう。家にあがめ……中の君は深窓にこめて大事にしてくれる人こそないが、物深くて……萬事引込み勝にし慣れていらつしやる心持から、思ひもよらず男に接した事が極り悪く。さるは……そんな譯からしてこの中の君の方が大君よりも一層、物事に功者で才ばしつた方の美點は勝れてゐられる。三日に當る夜……婚姻の三日目の夜は祝の餅を食するの當時の習。御前にて……大君自身で指圖してお

中納言殿より、「よべ参らむと思ひ給へしかど、宮仕の勞も驗なげなめる世に、思ひ給へ恨みてなむ。今宵は雜役もやと思ひ給ふれど、宿直所のはしたなげに侍りし亂り心地、いと安からで、やすらはれ侍る」と、陸奥紙に追ひ繼ぎ書き給ひて、まうけの物ども、こまやかに縫ひなどもせざりける。いろくおし巻きなどしつゝ、御衣櫃あまた懸子に入れて、老人の許に、人々の料にとて給へり。宮の御方に侍ひけるに隨ひて、いと多くもえ取り集め給はざりけるにやあらむ、たゞなる絹綾など、下には入れ隠しつゝ、御料とおぼしき二領、いと清らにしたるを、單衣の御衣の袖に、古代の事なれど、  
「さよ衣きて馴れきとはいはずとも  
かごとばかりは懸けずしもあらじ」  
とおどし聞え給へり。げに此方彼方ゆかしげなき御事を、恥かしういと見給ひて、御返りもいかゞ聞えむと思し煩ふほど、御使、かたへは逃げ隠れにけり。あやしき下人を控へてぞ、御返り給ふ。



作りなさるのもよく勝手が分らずに不調法らしく、一方では又大人になり切つてこんな處置をなさるのにも、人が見たらと氣が引ける。このかみ心……姉君は矢張姉君らしいお心持のせむか。御奉公の骨折も無効らしい現狀に、懇めしく存じましてやめました。雜役もやと中の君の三日のお祝で色々な御用もあらうかと。宿直所の……先夜私を置かれたお部屋が随分ひどい所でした爲に風邪の氣分が猶更すぐれず、ぐづぐづして居ります。追ひ繼ぎ一行など變へず通して書くこと。風情を求めぬさま。まうけの物……三日の夜に着る衣類。老人……辨。宮の御方に……丁度女三宮のお手許に有合せたのに任せて贈られた物らしく、さう澤山お取揃なされかねたのでもあらう。たゞなる……生地のままの。單衣……五衣の下に着る。古代のこと……古風な趣向。さよ衣……大君が私に逢ひ馴染んだといふ事は否定なさらうとも、私の方では、いひ隠りだけでも馴染を重ねたやうな風について見たく

「大君へだてなき心ばかりは通へども  
馴れし袖とは懸けじとぞ思ふ」  
心あわたしく思ひ亂れ給へる名残に、いとゞなほしきを、思しけるまゝと待ち見給ふ人は、只あはれにぞ思ひなされ給ふ。宮は、その日内裏に參り給ひて、えまかんで給ふまじげなるを、人知れず、御心も空にて思し歎きたるに、中宮、<sup>明石</sup>「なほかく一人おはしまして、世の中にすい給へる御名のやうく聞ゆる、なほいと惡しき事なり。何事も物好ましく立てたる御心な使ひ給ひそ。上も後めたげに宣ふと、里住がちにおはしますを諫め聞え給へば、いと苦しと思して、御宿直所に出で給ひて、御文書きて奉れ給へる、名残もいたくうち詠めておはしますに、中納言の君參り給へり。そなたの心寄せと思せば、例よりも嬉しうて、いかゞすべき、いとかく暗くなりぬめるを、心も亂れてなむ」と、歎かしげに思したり。よく御氣色を見奉らむと思して、日頃經てかく參り給へるを、今宵侍はせ給はで、急ぎまかで給ひな

ないでもありませんの意。馴れ、懸けは衣の縁語。此方彼方……自分も中の君も共に薫に見られてしまつた露骨さを。かたへは一部分は。へだてなき……私と貴方とは心だけは隔なく交つて居りますが、互に相逢うた仲とは冗談にもいはれたくありません。いとゞなほしきを……猶の事返歌が平凡なのを、これは思ひ寄りの儘を卒然と詠んだせみだと。待ち見給ふ人……返事を受つた薫。なほかく一人……まだそんなに獨身でいらしつて。物好ましく色好みらしく。上も……帝もそれを御氣遣ひに。里住がち……匂宮が禁中外の寢泊ばかりしていらつしやるのを。御宿直所……禁中のお控部屋。そなたの心寄せ……薫は中の君に好意を持つ人と匂宮が思召すので、いかいすべき今夜は三日目で宇治に行かねばならぬのに、どうしたものでせう。よく御氣色を……薫は匂宮が本心から中の君を思ふのか御様子を見ようと思召して。日頃經て……幾日ぶりかで貴方はか

む、いとゞよろしからぬ事にや思し聞えさせ給はむ。臺盤所の方にて承はりつれば、人知れず煩はしき宮仕のしるしに、あいなき勘當や侍らむと、顔の色違ひ侍りつる」と申し給へば、いと聞きにくくぞ思し宣ふや。多くは人の取りなす事なるべし。世に咎めあるばかりの心は、何事にかは使ふべからむ。すべて所狭き身の程こそ、なかくなる業なりけれ」とて、まことに厭はしくさへ思したり。いとほしう見奉り給ひて、おなじ御騒がれにこそおはすなれ。今宵の罪には代り聞えさせて、身をもいたづらになし侍りなむかし。木幡の山に馬はいかゞ侍るべき。いとゞ物の聞えや障り所なからむ」と聞え給へば、たゞ暮れに暮れて、更けにける夜なれば、思しわびて、御馬にて出で給ひぬ。御供にはなか／＼仕うまつらじ。御後見を」とて、この君は内裏に侍ひ給ふ。中宮の御方に參り給へれば、宮は出で給ひぬなり。あさましくいとほしき御様かな。いかに人見奉らむ、上聞し召しては、諫め聞えぬ



うして御参内なされたのに、今夜  
お宿直なさい。清涼殿内の女房の詰所。  
人知れず……私は貴方の爲に人知れ  
ず厄介なお世話即ち宇治への手引  
をしたお蔭で、明石中宮から迷惑  
な御叱責を受けようかと。  
いと聞きにくくぞ……随分人聞きの  
悪い事を邪推して仰しやるのです  
ねえ、然し大概は他人が好い加減  
な事を中宮に告口するのでせう。  
世に咎めある……世間から非難され  
る程の放逸な事は何で致しませう  
かい、すべて餘り高過ぎる私の身  
分が却つて困りものなのです。  
おなじ御騒がれ……今宵行けば中宮  
に騒がれ、行かねば宇治で騒がれ  
何れにしても同じ御苦情は免れな  
い事です、今宵の事で中宮から  
お咎めには、私が身代りになつて  
或は身を投出しも致しませうから  
宇治へ入らしやまし。  
木幡の山に……處相應馬でお出はど  
うですか。木幡は宇治への途中に  
ある。萬葉、山城の木幡の山を馬  
はあれどかちよりわが行く汝を思  
ひかねるによる。  
物の聞えや……馬なら目立たたぬか  
らうかと世間體もさし障りはなか  
らうか。

がいふかひなき」と思し宜ふこそわりなけれ」と宣はす。數多宮達の  
かく大人びと、のひ給へど、大宮は、いよ／＼若くをかしきけはひな  
むまさり給ひける。女一の宮もかくぞおはしますべかめる、いかな  
らむ折にか、かばかりにても物近く、御聲をだに聞き奉らむと、あは  
れに覺ゆ。好いたる人の、思ふまじき心使ふらむも、かうやうなる御  
中らひの、流石に氣遠からず、入り立ちて、心かなはぬ折の事なら  
むかし、我が心のやうに、ひが／＼しき類やは、また世にあべかめる、  
それだになほ動き初めぬるあたりは、えこそ堪へねなど、思ひ居給  
へり。侍ふ限りの女房の容貌心さま、何れとなくわろびたる無く、目安  
くとり／＼にをかしき中にも、あてに優れて目とまるあれど、更に更  
に亂れ初めじの心にて、いと生直にもてなし給へり。殊更に見えしら  
がふ人もあり。大方恥かしげにも、もて静め給へるあたりなれば、うは  
べこそ心ばかりもて静めたれ、心々なる世の中なりければ、色めかし  
げに進みたる下の心漏りて見ゆるもあるを、様々に、をかしくもあは

なかく仕らまつらじなまなか参  
りますまい。御後見を―あとに残つて然るべき取  
計らひを致しませう。  
中宮―明石中宮。  
宮は……匂宮はお出かけになつたや  
うですな。  
いかに人……他人も見てどう思ふで  
せう、褒めはしますまい。  
上聞し召しては……帝がお聞き遊ば  
しては、私の意見せぬのが悪いと  
仰しやるのが誠に迷惑です。  
宮達―明石中宮腹の皇子方をいふ。  
大宮―明石中宮。  
女一の宮―明石中宮腹の第一皇女。  
以下薫の心。  
かくぞ……御母中宮のやうにお美し  
かくいらつしるだらう。  
好いたる人の……世間の浮氣男が不  
都合な懸想など仕初めるのも、こ  
んな風の關係の、まるで没交渉で  
もなし、といつて又ずつと接近し  
て思の儘になるといふでもないや  
うな場合の事なのだらう。  
それだに……それですら猶懸想し初  
めた宇治の大君の事は諦めかねる。  
侍ふ限りの女房―明石中宮に召使は  
れてゐる女房は皆。  
更に……薫は決して戀心を起す  
まいとの決心で誠にブツキラ棒に。

れにもあるかなと、立ちても居ても、たゞ常なき有様を思ひありき  
給ふ。  
彼處には中納言殿の、事々しげにいひなし給へりつるを、夜更くるま  
でおはしまさで、御文のあるを、さればよと胸潰れておはするに、夜中  
近うなりて、荒ましき風のきはひに、いともなまめかしく清らにて、  
匂ひおはしたるも、いかゞ疎に覺え給はむ。正身も聊かうち靡きて、  
思ひ知り給ふことあるべし。いみじくをかしげに、盛と見えて、ひき  
繕ひ給へる様は、まして儻あらじはやと覺ゆ。さばかりよき人を多く  
見集め給ふ御目にだに、けしうはあらずと、容貌よりはじめて、多く  
近勝したりと思さるれば、山里の老人どもは、まして口つきにくげに  
うち笑みつ、かくあたらしき御有様を、なのめなる際の人に見奉り  
給はましかば、いかに口惜しからまし。思ふやうなる御宿世かな」と  
聞えつ、姫君の、御心をあやしく僻々しくもてなし給ふを、もどき  
口ひそめ聞ゆ。盛過ぎたる様どもに、あざやかなる花のいろ／＼、似



殊更に……處が故意に薰に見られた  
 い心でちらほらする者もある。  
 大方恥かしげに……一體がこちらが  
 氣の置ける位しとやかにして入ら  
 つしやる明石中宮の處であるから  
 女房達も表面こそしとやかに落着  
 いてゐるが、十人十色の世の習だ  
 から、色つぼく自分の方から手を  
 出した下心のちらちら見える者  
 もあるのを。  
 常なき有様を一世の無常な有様を。  
 彼處には宇治では。  
 中納言殿の……薰が、今夜は色々御  
 用もありませうなどと改つて手  
 紙で仰しやつたのに。  
 さればよと一案の定一時の慰み物に  
 されたのだと。  
 いかゞ疎に……大君はどうして大抵  
 のお喜びであらう、非常にお喜び  
 なされた。  
 正身も……中の君御本人も少しは心  
 が傾いて匂宮のお心持をお呑込み  
 になる所もあるらしい。  
 さばかり……匂宮の平素立派な人ば  
 かり澤山見慣れたお目でも、中  
 の君の様子もわくはなく、中  
 山里の老人ども山莊の老侍女達。  
 かくあたらしき……あつたら中の君  
 の御容姿だのに、何でもない男が  
 手に入れるやうにでもなつたら。

つかはしからぬを、さし縫ひ著つ、ありつかず取りつくろひたる姿  
 どもの、罪宥されたるもなきを見わたし給ひて、姫君、我もやうく  
 盛過ぎぬる身ぞかし、鏡を見れば、いと瘠せくになりもてゆくを、お  
 のがじしは、この人ども、我悪しとやは思へる、後手は知らず顔に、  
 額髪をひき懸けつ、色どりたる顔づくりをよくして、うち振舞ふめ  
 り、わが身にては、まだいとあれが程にはあらず、目も鼻もなほしと  
 覺ゆるは、心のなしにやあらむと、後めたく見出だして臥し給へり。  
 恥かしげならむ人に見えむことは、いよ／＼かたはら痛く、今一年  
 二年あらば、衰へまさりなむ、はかなげなる身の有様をと、御手つき  
 のほそやかに弱く、あはれなるをさし出でて、世の中を思ひつゞ  
 け給ふ。  
 宮は、あり難かりつる御暇の程を思しめぐらすに、猶心安かるまじき  
 事にこそはと、いと胸ふたがりて覺え給ひける。大宮の聞え給ひし様  
 など語り聞え給ひて、思ひながらと絶えあらむを、いかなるにかと思

思ふやうなる……匂宮に御縁が定ま  
 るとは申分のない御幸運よと。  
 姫君の御心を……それにつけても大  
 君が旋毛を曲げて薫に隨はぬ事を  
 唇を反して非難してゐる。  
 盛過ぎたる……侍女達は女盛過ぎた  
 姿に。  
 花のいろ／＼、櫻山吹などの衣色。  
 ありつかず、似合はしからず。  
 罪宥されたるも……これなら無難と  
 いふ程度の器量も無いのを。  
 姫君、大君。  
 おのがじしは……自分達銘々の心で  
 はこの老女達も自らを醜いと思つ  
 てゐるものは無いのだ。  
 後手は……後姿の醜さは。  
 額髪を……額を餘り顯はに見せまい  
 爲髪を額に覆ふやうにしつゝ。  
 わが身にては……大君自身はまだあ  
 の老女程ではなく、顔容も普通だ  
 と思はれるのは或は我が慧目のせ  
 ゐか知らんと。  
 恥かしげならむ人……薫のやうな  
 立派な人に逢ふ事は。  
 さし出でて……差出して自分で見入  
 りつゝも。  
 宮は……匂宮は容易に御母明石中宮  
 からお暇が戴けさうにもなかつた  
 事をつら／＼お考になると、尙今  
 後も宇治に通ふことは氣安く手輕

すな、夢にても疎ならむに、かくまでも參り來まじきを、心の程やい  
 かゞと疑ひて、思ひ亂れ給はむが心苦しさに、身を捨て、なむ。常に  
 かくはえ惑ひありかじ。さるべき様にて近く渡し奉らむ」と、いと深  
 く聞え給へど、絶間あるべく思さるらむは、音に聞きし御心の程著き  
 にやと心置かれて、わが御有様から、様々もの歎かしくてなむありけ  
 る。明け行くほどの空に、妻戸押しあけ給ひて、諸共にいざなひ出で  
 て見給へば、霧り渡れるさま、所がらのあはれ多く添ひて、例の柴積  
 む船のかすかに行きかふ跡の白浪、目馴れずもある住居のさまかな  
 と、色なる御心にはをかしく思しなざる。山の端の光やう／＼見ゆる  
 に、女君の御容貌のまほに美しげにて、限なくいつき据ゑたらむ姫君  
 も、かばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの、我が方さまのいと  
 いくくしきぞかし、こまやかなる匂など、うち解けて見まほしう、い  
 と奥ゆかしきに、心にまかせ給ふまじきを、いと心苦しう、なかな  
 かなる心地す。水の音なひ懐かしからず、宇治橋のいと物古りて見え



に出来さうもない事だらうと。語り聞え給ひて……句宮が中の君に思ひながら……存じながら御無沙汰する事もあるでせうが、どうした事かとお氣遣ひなされませぬ。夢にても……一寸でも貴女を疎略に思ふ位なら。心の程や……私の心がどんなものかと貴女が疑つて色々とお氣遣ひなされさうなのが御氣の毒さに、今夜は我が身を捨てての覺悟で参つたので、いつでもかうして忍んで出歩く事は出来さうにもありません。然るべき都合をして本邸の近くにお移し申ませう。絶間あるべく……句宮が無沙汰するかも知れぬと今から思つていらつしやるのは、さては評判に聞いて居つた浮氣のお心のひどいのか知らんと。わが御有様から……中の君は御自分の身の程から思ひ合はせて。跡の白浪……拾遺「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟のあと色なる御心には……情趣に憧るゝ句宮の御心では。女君——中の君。限なくいつき……この上もなく大事に育てゝゝる高貴の姫君でもこれ

渡さるゝなど、霧晴れ行けば、いとゞ荒ましき岸のわたりを、かゝる處にいかで年を経給ひけむ」など、うち涙ぐまれ給へるを、いと恥かしと聞き給ふ。男の御様の限なくなまめかしく清らにて、この世のみならず、深き契をたのめ聞え給へば、思ひ寄らざりしことゝは思ひながら、なかゝの目馴れたりし中納言の恥かしさよりはと覺え給ふ。彼は思ふ方異にて、いといたく澄みたる氣色の、見えにくゝ恥かしげなりしに、よそに思ひ聞えしは、ましてこよなく遙に、一くだり書き出で給ふ御返しだに、つゝましく覺えしを、久しうと絶え給はむは、心細からむと思ひならるゝも、我ながらうたてと思ひ知られ給ふ。人々いたく聲づくり催し聞ゆれば、京におはしまし著かむに、はしたなからぬ程にと、いと心あわたゞしげにて、心より外ならむ夜離を、返す返す宜ふ。

「中絶えむものならなくにはし姫の

片しく袖や夜半に濡らさむ」

位のものであらう。思ひなしの……氣のせむだけで我が同胞の女一の宮などが大變立派に見えるのである。なかゝなる心地すゝなまなか逢はぬがましな氣がする。懐かしからず——餘り烈しくて優しみがなく。この世のみならず……來世までも變らぬ夫婦と安心おさせ申すので。思ひ寄らざりし……中の君は最初は句宮の妻にならうなど思ひも寄らなかつた事とはいひながら、却てあの豫て知り合つた薫に見られる恥かしさよりは、今まで知らなかつた句宮の妻になる方が極り悪さの程度が少いと思召す。彼は思ふ方……薫は御性格が變つてゐて。以下中の君の心。見えにくゝ……逢ふのも極り悪く。よそに思ひ聞えしは……尊を聞いて餘處ながら句宮を想像してゐた所では、まして薫に對する以上遙に恥かしく、一寸手紙の御返事を上げるのですら氣が引けたのに。久しう……今となつては長く句宮が無沙汰なされたら嘸心細からうといふ氣に中の君がなられるのも。人々——句宮のお供の人も。催し聞ゆれば——お歸りを催促申せば。

出でがてに立ち返りつゝ、やすらひ給ふ。絶えせじのわがたのみにや宇治橋の  
「中絶えせじのわがたのみにや宇治橋の  
はるけき中を待ちわたるべき」  
言には出でねど、もの歎かしき御けはひ、限なくあはれに思されけり。若き人の御心にしみぬべく、類すくなげなる朝開の御姿を見おくりて、名残とまれる御移り香なども、人知れず物あはれなるは、されたる御心かな。今朝ぞすこし物のあやめも見ゆる程にて、人々のぞきて見奉る。中納言殿は、なつかしく恥かしげなる様ぞ添ひ給へりける。  
思ひなしの今ひと際、この御様はいと殊に「などめで聞ゆ道す  
がら、心苦しかりつる御氣色を思し出でつゝ、立ちも返りなまほしく、様あしきまで思せど、世の聞えをおぼして歸らせ給ふほどに、え容易くも紛れ給はず。御文は明るる日ごとに、數多がへり奉らせ給ふ。疎にはあらぬにやと思ひながら、おぼつかなき日數の積るを、いと心づくしに見じと思ひしものを、身にまさりて心苦しきもあるかな



京におはしまし着かむ……京に御到  
 着の時刻に、餘り明るくなつて見  
 つともなくないやうにと。  
 心より外ならむ……不本意ながら來  
 られぬ夜もあらうといふ事を。  
 中絶えむ……五の仲が切れるといふ  
 事はある筈もないもの、宇治の橋  
 姫見たやうに私を待ちつゝ片敷い  
 た袖を涙に濡らす夜も貴女はおあ  
 りでせうとの意。古今「狭帯に衣  
 かたしきこよひもや我をまつらむ  
 宇治のはし姫」による。  
 絶えせじの……仲の絶える事はある  
 まいといふ事を私は當にして、宇  
 治橋の長いが如く末長い貴方との  
 契を待ちませうとの意。渡るは橋  
 の縁語。  
 若き人の……若い女はぞつとしさう  
 な比類稀な匂宮の朝明け方のお姿  
 を中の君が見送つて。  
 されたる御心かな……中々やばでない  
 中の君のお心持だ。  
 今朝ぞ……今までは暗い中に歸られ  
 たのが、今朝初めて夜明けてお歸  
 りなので匂宮のお姿がはつきり見  
 える位で。  
 思ひなしの……御身分が一段優れて  
 いらつしやるといふ氣のせるか匂  
 宮の御様子は實に格別だと。  
 え容易くも……その後容易に脱け出

と、姫君は思し歎かるれど、いとこの君の思ひ沈み給はむにより、つ  
 れなくもてなして、自らだに猶かゝること思ひ加へじと、いよゝ  
 深くおぼす。中納言の君も、待遠にぞ思すらむかしと思ひやりて、わ  
 が過ちにいとほしければ、宮を聞え驚かしつゝ、絶えず御氣色を見  
 給ふに、いといたく思ほし入れたる様なれば、さりとともと後安かり  
 けり。  
 九月十日の程なれば、野山の景色も思ひやらるゝに、時雨めきて掻き  
 くらし、空の村雲恐ろしげなる夕暮、宮いと静心なく詠め給ひて、  
 いかにせむと、御心一つに出で立ちかね給ふ折、中納言推し量りて參  
 り給へり。「ふるの山里いかならむ」と驚かし聞え給ふ。いと嬉しと思  
 して、諸共に誘ひ給へば、例のひとつ御車にておはす。分け入り給ふ  
 まゝにぞ、まいて詠め給ふらむと、心の中いと推し量られ給ふ。道  
 のほども、只この事の心苦しきを語らひ給ふ。黄昏時のいみじく心細  
 げなるに、雨冷やかにうち洒ぎて、秋果つる氣色の凄きに、うちしめ

して宇治行もお出来なさらぬ。  
 疎には……中の君に對する匂宮の愛  
 さうだと大君は思ひながら、匂  
 宮が入らつしやらず氣の揉める日  
 が重なるのを、かうした心配の種  
 を初から蒔きたくないと思つたも  
 のを、今は我が身の事以上に心痛  
 の事ではあると。  
 いとこの君の……自分が心配した  
 ら中の君が猶更萎れておしまひな  
 されさうだから大君は何氣ない顔  
 して、せめて自分だけでもこんな  
 に夫を持つて苦勞するやうな事は  
 すまいと愈深く決心された。  
 中納言の君も……薫も宇治で待つて  
 いらつしやるだらうと思つて、そ  
 れに宇治の姫君達に様々の物思を  
 させるのも自分の罪のやうな氣が  
 してお氣の毒で。  
 いといたく……匂宮が大變中の君に  
 熱中して居られる御様子なので、  
 この調子ならと安心もなされた。  
 いかにせむと……宇治へ行かうか、ど  
 うしようかと。  
 ふるの山里……新千載集（寛和殿上  
 歌合）初時雨布留の山里いかなら  
 む住む人さへや袖の濡らむ。布  
 留は大和の地名、時雨の降るに懸  
 けた。

り濡れ給へる匂どもは、世人に似ず艶にてうち連れ給へるを、山賤ど  
 もは、いかゞ心惑もせざらむ女ばら、日頃うち眩きつる名残なく、笑  
 みさかえつゝ、御座ひき繕ひなです。京にさるべき所々に行き散りた  
 る女ども、姪だつ人二三人たづね寄せて參らせたり。年頃侮り聞えけ  
 る心淺き若人ども、珍かなる客人と思ひ驚きたり。姫君もをり嬉しく  
 思ひ聞え給ふに、さかしら人の添ひ給へるぞ、恥かしくもありぬべく、  
 なま煩はしう思へど、心ばへののどかに物深くものし給ふを、げに  
 人はかうはおはせざりけりと、見合はせ給ふに、あり難しと思ひ知ら  
 る。宮を、所につけては、いと殊にかしづき入れ奉りて、この君をばあ  
 るじ方に、心安くもてなし給ふものから、まだ客席の、假初なる方に  
 出だし放ち給へれば、いとからしと思ひ給へり。恨み給ふも流石にい  
 とほしくて、物ごしに對面し給ふ。戯れにくゝもあるかな。かくての  
 みやと、いみじく恨み聞え給ふ。やうゝ道理知り給ひにたれど、人  
 の御上にても、物をいみじく思ひ沈み給ひて、いよゝかゝる方を憂き



詠め給ふらむと心の中―物思ひ勝に  
 恨然として居られる中の君の心が。  
 この事―中の君の御心中。  
 匂どもは―匂宮と薫と御兩所の衣の  
 香は。  
 山賤―宇治の山莊の人々をさす。  
 日頃…豫て匂宮の御疎遠に不平を  
 洩してゐた名残もなく。  
 女ども姪だつ人―老侍女達の娘や姪  
 などに當る人を二三人、前から呼  
 寄せて中の君に附けてある。  
 年頃…今まで末の見込がないと馬  
 鹿にしてゐたこの思慮淺い娘や姪  
 達は匂宮や薫を見て、珍しいお客  
 様が來られるやうになつたものだ  
 と驚いてゐる。  
 姫君も…大君も丁度よい折に匂宮  
 の來られたのを感しく思はれたが。  
 さかしら人―世話焼き人。薫。  
 心ばへの…薫の心持が、のんびり  
 と思慮深いのを、成程匂宮はこん  
 なではおありにならないと、大君  
 が合點なさるにつけて。  
 所につけては―場所柄相應には。  
 この君を…薫を亭主方の人として  
 打解けて遇せられるものゝ、然し  
 まだ客座敷の取敢へず準備した方  
 に遠のけてお置き申して居るので。  
 かくてのみや―何時までもかうした  
 他人らしい御待遇ばかりでせうか。

ものに思ひ果て、猶ひたぶるには、いかでかくうち解けじ、あはれ  
 と思ふ人の御心も、必ずつらしと思ひぬべき業にこそあめれ、我も  
 人も見おとさず、心違はで止みにしがなと、思ふ心づかひ深くし給へ  
 り宮の御有様なども問ひ聞え給へば、かすめつ、さればよと思し  
 く宣へば、いとほしくて、思したる御様、氣色を見ありくやうなど語  
 り聞え給ふ。例よりは心うつくしう語らひて、なほかく物思ひ加ふる  
 ほど過して、心地も靜まりて聞えむと宣ふ。人にく、氣遠くはもて  
 離れぬものから、障子の固めもいと強し。強ひて破らむをば、つらくい  
 みじからむと思したれば、さ思さる、様こそはあらめ、輕々しく異様  
 に靡き給はむこと、はた世にあらじと、心のどかなる人は、さはいへど  
 いとよく思ひ靜め給ふ。只いと覺束なく、物隔てたるなむ、胸あかぬ  
 心地するを、ありしやうにて聞えむと責め給へど、常よりもわが面  
 影に恥づる頃なれば、疎ましと見給ひてむも、流石に心苦しきは、い  
 かなるにか」と、ほのかにうち笑ひ給へるけはひなど、怪しう懐かし

戯れにくも…逢はずにゐて見る  
 とたまりませんよ。古今、ありぬや  
 と心見がてら逢ひ見ねばたはぶれ  
 にくきまでぞ戀しき。  
 やうく…薫のお怨も尤と段々大  
 君もお分りになつたけれど、中の  
 君が匂宮とこんな關係になられた  
 についで。  
 かゝる方を―結婚などいふ事を。  
 いかでかく…どうか中の君の如く  
 打解けて夫を持つまい、夫婦とな  
 つた上はいとしく思ふ薫の御心で  
 も、必ずひどいと思ふいやな事も  
 起つて來るに違ないのだ、それよ  
 りか薫も自分も互に缺點を見つけ  
 て嫁になるやうな事なく共に尊敬  
 してゐる今の心持を持續して、清  
 い交りで終りたいものだ。  
 さればよと…案の定匂宮の無沙汰  
 を宇治では心配してゐるわいと薫  
 が情るやうに、大君が話される故。  
 思したる御様…薫は匂宮が中の君  
 を思込んで居られる事や、又匂宮  
 の態度を怠らず觀察してゐる事な  
 どをお話になる。  
 物思ひ加ふるほど過し―氣苦勞の増  
 す事が無くなつて後、即ち中の君  
 がもう安心といふ時になつて後、  
 強ひて破らむをば…無理に障子を  
 引明けたら大君が辛くお恨みなさ

う覺ゆ。かゝる御心にたゆめられ奉りて、遂にいかになるべき身にか  
 と歎きがちにて、例の遠山鳥にて明けぬ。  
 宮は、また旅寢なるらむとも思さで、中納言のあるじ方にて、心のど  
 かなる氣色こそ羨ましけれ」と宣へば、女君あやしと聞き給ふ。わり  
 なくておはしましては、程なく歸り給ふが、飽かず苦しきに、宮も物  
 をいみじく思したる御心のうちを知り給はねば、女方には、又いか  
 ならむ人笑へにやと思ひ歎き給へば、げに心盡しに、苦しげなる業  
 かなと見ゆ。京にも隠ろへて渡り給ふべき所も、さすがになし。六條院  
 には、左の大殿、片つ方に住み給ひて、さばかりいかにと思したる六  
 の君の御事を思し寄らぬに、なま怨めしと思ひ聞え給ふべかめり。  
 すきくしき御様と、ゆるしなく誇りきこえ給ひて、内裏わたりにも  
 愁へ聞え給ふべかめれば、いよゝゝ覺なくて出だしすゑ給はむも、  
 憚る事いと多かり。なべてに思す人の際は、宮仕の筋にて、なかゝ  
 心安げなり。さやうの竝々には思されず、若し世の中うつりて、帝后

總

角



らうと薫は思召したので。さ思さるゝ様……大君だつて相當お考があらう、まさか軽々しく他の男に靡く事は又決してあるまい。心のどかなる人……辛抱強い薫。物隔てたるなむ……物越に語るのが。ありしやうにて……先夜お逢ひした時のやうに近寄つて話しませう。常よりも……この頃は平素よりも憔悴して自分の面影が恥かしい位です。付と貴方は思召すでせう、それら流石に私としては辛いのは一體どうした心持なのでせう。矢張醜い姿を見られたくないのは貴方を憎く思はぬせむでせうとの意。たゆめられ……引摺られ。例の遠山鳥……山鳥は雌雄が共寝をせぬとの俗傳によつていふ。宮は……匂宮は薫がまだお客扱を受けて獨居して居らうとも思召さず。中納言の……薫の主人顔に悠然としてゐるのが。わりなく……匂宮が無理な都合して來られては早々お歸りになるのが中の君は物足らず辛いのに、匂宮の方でもこの後の逢瀬などについて色々心配して居られるが、そのお心持を姫君達は御存じないので。

の思し掟つるまゝにもおはしまさば、人より高き様にこそしなさめなど、只今はいと華やかに、御心にかゝり給へるまゝに、もてなさむ方なく苦しかりけり。中納言は、三條の宮造りはて、さるべき様に渡したてまつらむと思す。げにたゞ人は心安かりけり。かくいと心苦しき御氣色ながら、安からず忍び給ふからに、かたみに思ひ惱み給ふべかゝめるも心苦しくて、忍びてかく通ひ給ふよしを、中宮などにも漏らし聞し召させて、暫しの騒がれはいとほしくとも、女方の御爲は咎もあらず、いとかく夜をだに明しはて給はぬ苦しげさよ、いみじくもてなしてあらせ奉らばやなど思ひて、あながちにも隠るへず。更衣など、はかしく誰かは扱ふらむなど思ひて、御帳の帷子、壁代など、三條の宮つくり果て、渡り給はむ心まうけに、し置かせ給へるを、まづさるべき用なむなど、いと忍びてきこえ給ひて奉れ給ふ。さまざまなる女房の装束、御乳母などにも宣ひつゝ、らざともせさせ給ひけり。

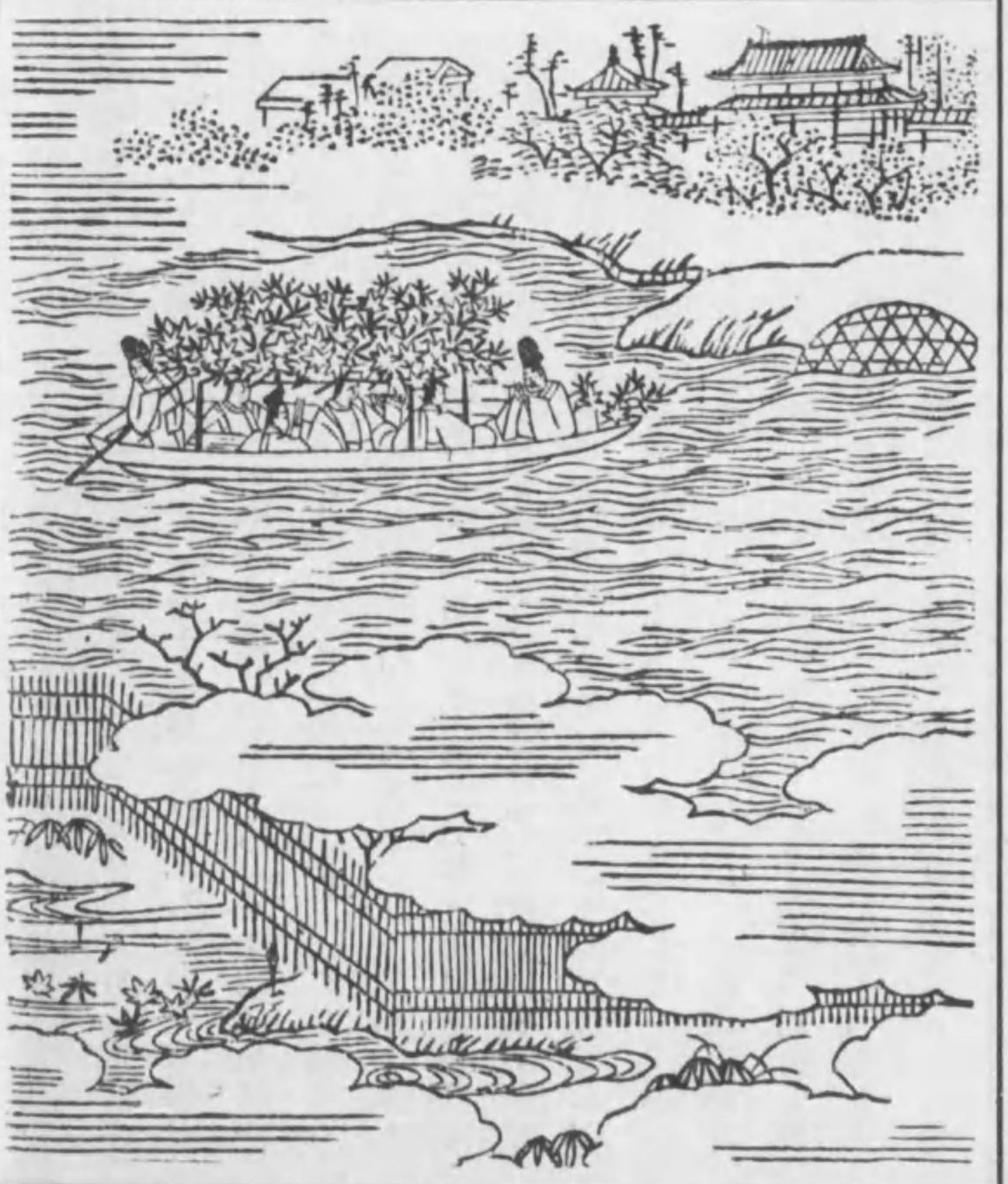
女方には……姫君達の方では匂宮と人の笑物にでもなりはせぬものか。京にも……京の中にも人目に立たぬやうに中の君を移り住ませる所も一寸無い。以下匂宮の心。左の大殿……夕霧。さばかりいかにと……あれ程夕霧がどうかして匂宮に縁付けたいと思召した六の姫を、宮が話にお乗りにならぬので。なま怨めしと……中の君を其處に置いたならば何となく面白くないと。ゆるしなく……匂宮の品行を用捨出來ぬやうに非難なされて、帝や明石中宮へも六の姫をやりたい旨を懇訴なさるやうだから。覺なくて……まだ人望もない中の君を連出して奥方になさうものも。なべて……通り一遍に思召す姿などの身分なら、奉公人といふ譯合で却て始末も樂だが、匂宮は中の君をそんな並々には思召さず。帝后の……帝や中宮のお考通り自分が春宮になる事でもあつたら中の君を高い女御の地位にも据ゑようなどと、將來はどうだか今の處では誠にはずんで中の君を思詰めて居られるので、處置に困つて苦んでいらつしやる。

十月一日ころ、網代もをかきし程ならむと、そのかし聞え給ひて、紅葉御覽すべく申し定め給ふ。親しき宮人ども、殿上人の睦まじく思すかぎり、いと忍びてと思せど、所せき御勢なれば、おのづから事ひろごりて、左の大殿の宰相の中將參り給ふ。さてはこの中納言殿ばかりぞ、上達部は仕うまつり給ふ。たゞ人は多かり。かしこには論なう中宿し給はむを、さるべき様に思せ。さきの春花見にたづね參り來しこれかれ、かゝる便に事寄せて、時雨のまぎれに見奉り顯はすやうもぞ侍るなど、こまやかに聞え給へり。御簾懸けかへ、此處彼處かき掃ひ、岩がくれに積れる紅葉の朽葉少しはるけ、遣水の水草拂はせなどぞし給ふ。よしある菓子肴など、さるべき人なども奉れ給へり。且はゆかしげなけれど、いかゞはせむ。これこそはと思ひ許して、心まうけし給へり。船にてのぼりくだり漕ぎめぐり、面白く遊び給ふも聞ゆ。ほのく、有様見ゆるを、そなたに立ち出でて、若き人見奉る。正身の御有様は、それと見え給はねども、紅葉を葺きたる船

總角



さるべき様にて……然るべき用意を  
 して大君を迎へ取らうと思召す。  
 げにたゞ人は……ほんに私のやうな  
 平人は氣樂だ、匂宮がまあこんな  
 貴い御身分にも拘はらず不安らし  
 く忍んでお通ひなさる爲に、宮も  
 中の君も互に一層煩悶なさるやう  
 なのお氣の毒で、以下薫の心。  
 中宮などにも……明石中宮などにも  
 密にお知らせ申して、その爲匂宮  
 が一時干渉をお受けになるのは氣  
 の毒であつても、中の君の方にと  
 つては悪い結果にはなるまい。  
 いとかく……こんなにあま匂宮が時  
 たま宇治へ行かれてもゆつくり一  
 夜を明してお歸といふ譯にもいか  
 ぬのがお苦しうな事だわい、何  
 とかうまく取計らつて晴れて御一  
 緒にして上げたいものだなどと。  
 あながちにも……無理にも引込みも  
 しない。  
 はかんしく……碌々誰がお世話し  
 て上げる者もあらうぞなど。  
 壁代間の界に垂れる帳。  
 渡り給はむ……大君の來て住まれる  
 準備に調へて置かれたのを。  
 まづさるべき用なむ……まづ差當つて  
 そちらに御用がありませう。  
 御乳母などにも……御自分の乳母な  
 どにも御相談なされて。



わざとも……態々にも拵へて宇治へ  
 お贈りになつた。  
 そのかし……薫が宇治行を匂宮に  
 お勧め申されて。  
 左の大殿の宰相の中將……夕霧の子息  
 で元の藏人少將。  
 たゞ人……は殿上人をいふ。  
 かしこには……宇治の山莊へは。  
 中宿……御一泊なさる管ゆゑそのお  
 積りでみて下さい。  
 これかれ……一行中の若者達。  
 見奉り顯はす……姫君達のお姿を顯  
 はに見るやうな事があるかも知れ  
 ません。  
 御簾懸けかへ……以下山莊でお客歡  
 待の準備の様をいふ。  
 少しはるけ……少し掃除し。  
 さるべき人なども……然るべき手傳  
 の人をも薫から送られた。  
 且は……こんなに萬事取賄つて貰ふ  
 のも餘り手元を見られるやうで嫌  
 な氣がするけれど。  
 遊び給ふも聞ゆ……音楽などなさるの  
 も山莊に聞える。  
 若き人々……山莊の侍女達。  
 正身……匂宮御當人。  
 いと殊に……優れて立派なのを姫君  
 達が御覽になるにつけても。  
 げに年に一夜の……ほんに棚機津女  
 のやうに年に一度の逢瀬でもよい





から、同じ夫を持つならこんな立派な方を持ちたいものだなどと。文詩をいふ。博士文章道の學者。かざして冠の飾に挿して。海仙樂—海青樂とも。黄鐘調の樂。あふみの海……後撰、いかなれば近江の海ぞかるゝてふ人を見ればの絶えて生ひねば。によつて、逢はれぬを擬へた。遠方人の……中の君の待兼ねておれ、てある心持はどの位だらうと。後撰「柳橋の天の戸渡る今宵さへ遠方人のつれなかるらむ」によるか。うそぶき誦じあへり詩を作り吟誦し合つてゐる。人のまよひ……人々の騒ぎが少し静まつてから姫君達の山莊へ行かうと薫も思召して、さういふ風に匂宮にも申上げて居られる中に。中宮—明石中宮。宰相の御兄の衛門の督—夕霧の子息。うるはしき様して—正装して。かうやうの御ありきは—かうした親王様の御出遊は。閉し召し驚きて—御母明石中宮がお殿上人を深山引連れて供奉に來たので、匂宮も薫も迷惑に思つて。

の飾の錦と見ゆるに、聲々吹き出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまで覺ゆ。世の人の靡きかしづき奉るさま、かく忍び給へる道にも、いと殊にいつくしきを見給ふにも、げに年に一夜の契なりとも、かゝる彥星の光をこそ待ち出でめと覺えたり。文作らせ給ふべき心まうけに、博士なども侍ひけり。黄昏時に、御船さし寄せて遊びつゝ、文つくり給ふ。紅葉を薄く濃くかさして、海仙樂といふものを吹きて、おの／＼心ゆきたる氣色なるに、宮はあふみの海の心地して、遠方人の怨いかにとのみ、御心そらなり。時につけたる題出だして、うそぶき誦じあへり。人のまよひ少し静めておはせむと、中納言も思して、さるべきやうに聞え給ふ程に、内裏より中宮の仰言にて、宰相の御兄の衛門の督、こと／＼しき隨身ひき連れて、うるはしき様して参り給へり。かうやうの御ありきは、忍び給ふとすれど、おのづから事ひろごりて、後の例にもなる業なるを、重々しき人數あまたもなくて、俄におはしましにけるを聞し召し驚きて、殿上人あまた具して参り

御心のうちをば……殿上人達は匂宮や薫のお心持にも頼着なく。今日は……今日はからうして遊び暮したいと匂宮は思召したのに、又中宮大夫やその他の殿上人を明石中宮からお迎の爲に遣はされた。彼處には—匂宮は中の君へは。をかしやかなる……その御手紙は格別面白く情趣もなく。人目しげう……中の君の方では匂宮御一行の人目が多く取込んでいらつしやるだらうと推量して。數ならぬ……自分のやうなつまらぬ身では立派な匂宮のお屋敷に立交るのには。よそにて隔たる……離れてゐる逢はぬ月日は待遠なのも當然で、それにしても今に來て下さらうなどと心をなぐさめて中の君は居られるが、近處まで來て大騒してゐながら知らぬ顔してお立寄もなさらぬのが。氷魚も……氷魚までも匂宮に御最風をして澤山捕れ、それを人々が色の紅葉の葉に盛つて玩ぶのを。氷魚には紅葉を敷くが故實の由。下人—お供の人々。人に従ひつゝ……匂宮も人々にお附合で愉快さうにしてゐる御遺透ではあるが、自分の御本心は。

たるに、はしたなくなりぬ。宮も中納言も苦しと思して、物の興もなくなりぬ。御心のうちをば知らず、酔ひ亂れて遊び明しつ。今日はかくてもと思すに、又御迎に宮の大夫、さらぬ殿上人など、あまた奉れ給へり。心あわた／＼しく、口惜しくて、歸り給はむ空なし。彼處には御文をぞ奉れ給ふ。をかしやかなる事もなく、いとまめだちて、思しける事どもを、こま／＼と書きつゞけ給へれど、人目しげう騒がしからむにとて、御返りなし。數ならぬ有様にては、めでたき御あたりに交らはむ、かひなき業かなと、いと／＼思し知り給ふ。よそにて隔たる月日は、覺束なさも道理に、さりとともなど慰め給ふを、近き程にのしりおはして、つれなく過ぎ給ふなむ、つらくも口惜しくも思ひみだれ給ふ。宮はまして、いぶせくわりなしと思すこと限なし。綱代の氷魚も心寄せ奉りて、いろ／＼の木葉に掻きませ翫ぶを、下人などはいとをかしき事に思へれば、人に従ひつゝ、心ゆく御ありきに、自らの御心地は、胸のみつとふたがりて、空をのみ詠め給ふに、この古宮の



この古宮―遠く見える姫君達の山莊。中納言の君も…薫もなまなか立寄るやうな豫告をして當におさせ申したものを、寄れぬのは慨かほしい次第だと思召す。去年の春―句宮初瀬詣の折をいふ。推が本の巻の冒頭参照。君達―若い貴公子達。花の色を…去年見た山莊の花の色を思出して。後れて―姫君達が父宮に死別れて。心知らぬも…事情知らぬ者も中には交つてゐて。人の御上は…一體他人の身の上の事といふものは、こんな山陰の事でも自然耳に入り易いもので、姫君達の事も人々が漏れ聞いてゐて、いとをかしげにこそ…姫君達は大變お美しいさうな。故宮―八宮。いつぞやも…嘗ても花盛の時一目見た宇治の山莊のあの美しかつた花の木々までも、秋となれば寂しいものかしら、この節の姫君の御様子も何ひたひものですとの意。木の本に子の許を懸けた。あるじ方と…薫を姫君方と思つてかう詠みかけると薫は。櫻こそ…咲き匂うた花も忽ち散つて葉は紅葉し、美しく紅葉したか

梢はいと殊におもしろく、常盤木に這ひまじれる蔦の色なども、物深げに見えて、遠目さへすごげなるを、中納言の君も、なかく頼め聞えけるを、愁はしき業かなと覺ゆ。去年の春御供なりし君達は、花の色を思ひ出でて、後れてこゝに詠め給ふらむ心ばそさをいふ。かう忍び忍びに通ひ給ふと、ほの聞きたるもあるべし。心知らぬもまじりて、大方にとやかくやと、人の御上は、かゝる山隠れなれど、おのづから聞ゆるものなれば、いとをかしげにこそ物し給ふなれ。箏の琴上手にて、故宮の且暮遊びならはし給ひければ」など、口々にいふ。宰相の中將、  
「いつぞやも花の盛にひとめ見し  
木のもとさへや秋はさびしき」  
あるじ方と思ひていへば、中納言、  
「櫻こそ思ひ知らすれ咲きにほふ  
花ももみちも常ならぬ世を」

と思ふと又やがて花咲く櫻の木その變極まり無さが、この世の無常な様をよく示して居ります。姫君達のお身の上の變轉も誠にお氣の毒ですとの意。いづこより…この宇治の山里の紅葉の蔭は風情が深く過ぎて去りにくい程なのに、どこから秋は立去つた事であらうか、もう名残少くなつてしまつた。見し人も…嘗て御覽になつた八宮も今は既に亡いこの山莊の周囲の岩に、何と思つて葛は氣長に這ひ纏うてゐるのか、それにしても葛より果敢ないのは人の命だなあ。中に―この中宮大夫は一行中で。親王の…八宮を元から知つてゐて。そのお若い時の事などを。秋はて…秋も終となつて益寂しくなつてゆくこの山莊を、峯の松風も心して吹いてくれ、姫君達に寂しい思をさせるなどの意。木のもとに子の許を懸けた。ほのかに知る人―句宮と中の君との仲を薄々知つてゐる人。げに深く…ほんに句宮は餘程中の君を思つていらつしやるのだなあ、折角の今日の好機を空しくお逃しなさるお氣の毒さと。仰山らしく大勢がお伴

衛門の督、  
「いづこより秋はゆきけむ山里の  
紅葉のかけは過ぎうきものを」  
「見し人もなき山里のいはがきに  
こゝろ長くもはへる葛かな」  
中に老いしらひてうち泣き給ふ。親王の若くおはしける世の事など、思ひ出づるなまめり。宮、  
「秋はて、寂しさまさる木の下を  
吹きなすぐしそ峰の松風」  
とて、いといたう涙ぐみ給へるを、ほのかに知る人は、げに深く思すなりけり、今日の便を過し給ふ心苦しさと見奉る人あれど、事々しく引き續きては、えおはしまし寄らず。作りける文どものおもしろき所々節々うち誦じ、倭歌もことにつけて多かれど、かうやうの醉のまぎ

總角



してその爲中の君の許にお立寄に  
なる譯にもいかず。  
はかしくしき事……大して佳作があ  
らうかい。  
彼處には……姫君達の方では匂宮が  
素通りなされた様子を。  
前驅の聲々先拂ひの聲。  
心まうけ匂宮御接待の準備。  
姫君大君。  
なほ音に聞く……矢張匂宮は尋に聞  
く通り移り氣な方なのだ。古今い  
で人は言のみぞよき月草のうつし  
心は色のみにして。  
この人数ならぬ……此處にゐる何で  
もない身分の侍女達が。  
さるなほしき……成程さうした  
下々の男女間にこそ都合な心の  
男も居らうが、何事も格別高い身  
分になると世間の外聞も憚られる  
ので勝手な事も出来ぬものと思つ  
てゐたが、然しさうでもなかつた  
なあ、矢張男は不實なものだ。  
かうやうに氣近き……こんなに婿に  
しようとはまでは。  
思の外に思ひがけなくも中の君の  
婿君として。  
かく見劣りする……愈近づいて見る  
とこんな風に見劣りする匂宮の御  
心持を。  
こゝにも殊に……この山莊にも格別

れに、ましてはかしくしき事あらむやは。片端書きとめてだに見苦  
しくなむ。  
彼處には過ぎ給ひぬるけはひを、遠うなるまで聞ゆる前驅の聲々、只  
ならず覚え給ふ。心まうけしつる人々も、いと口惜しと思へり。姫君は  
まして、なほ音に聞く月草の色なる御心なりけり、ほのかに人のいふ  
を聞けば、男といふものは虚言をこそいとよくすなれ、思はぬ人を思  
ひ顔に取りなす言の葉多かるものと、この人数ならぬ女ばらの、昔物  
語にいふを、さるなほしき中にこそは、怪しからぬ心あるも交る  
らめ、何事も筋異なる際になりぬれば、人の聞き思ふことつゝ、まじう、  
所狭かるべきものと思ひしは、さしもあるまじき業なりけり、あだめ  
き給へるやうに、故宮も聞き傳へ給ひて、かうやうに氣近きほどまで  
は、思し寄らざりしものを、怪しきまで心深げに宜ひ渡り、思の外に見  
奉るにつけてさへ、身の憂さを思ひ添ふるが、あぢきなくもあるかな、  
かく見劣りする御心を、且はかの中納言もいかに思ひ給ふらむ、こゝ

恥かしい思をせねばならぬ程の者  
はゐないけれど銘々の思はくが。  
正身は……中の君御當人は、時たま  
お逢ひになる時、匂宮が限なく深  
い愛情ある事を語り信頼させたく深  
らつしやるので、何が何でも匂宮  
が全く心變りはなさるまいと。  
おぼつかなきも……待遠なほど來ぬ  
のも餘儀ない差支がおりなので  
あらう。  
程經にけるが……久しく匂宮の入ら  
つしやらぬのが氣の揉めないでも  
ないのに、生中近くまで來て素通  
りなされたのを。  
人並々に……人並に中の君を大切に  
して世間並の富貴な住居ならば、  
匂宮がこんなに素通りもなさるま  
いになど。  
我も世に……自分も薫と夫婦になつ  
てゐたら。以下大君の心。  
中納言の……薫が何だかだと仰しや  
るのも私の氣を引いて見ようとい  
ふのだ、自分一人決心して聽入れ  
まいと思つてゐても、口實にも限  
があつてさうは續かぬ。  
在る人の……仕へてゐる辨や老女達  
が性懲りもなく、どうかして夫を  
持たせようといふやうな事はかり  
思つてゐるらしいから、思ひもよ  
らず私も遂に夫を持たされるかも

にも殊に恥かしげなる人はうち交らねど、おの／＼思ふらむが、人笑  
へに鳴瀝がましき事と、思ひ亂れ給ふに、心地も違ひて、いと惱ましう  
覚え給ふ。正身はたまさかに對面し給ふ時、限なく深きことを頼め契  
り給へれば、さりともこよなうは思し變らじと、おぼつかなきも、わ  
りなき障こそは物し給ふらめと、心の中は思ひ慰め給ふ方あり。程經  
にけるが思ひ苛られ給はぬにしもあらぬに、なか／＼にてうち過ぎ  
給ひぬるを、つらうも口惜しうも思ほゆるに、いと物あはれなり。  
忍び難き御氣色なるを、人並々にもてなして、例の人めきたる住居な  
らば、かうやうにもてなし給ふまじきをなど、姉君はいとしくあは  
れと見奉り給ふ。我も世に永らへば、かうやうなる事見つべきにこそ  
はあめれ、中納言の、と様かう様にいひありき給ふも、人の心を見む  
となりけり、心一つにもて離れて思ふとも、拵へやる限こそあれ、在る  
人の懲りずまに、かゝる筋の事をのみ、いかでと思ひためれば、心よ  
り外に遂にもてなされぬべかめり、これこそは返す／＼も、さる心



知れない。さる心して……その積りで十分用心して世を暮すがよいと、父宮がお教へなされたのは。さもこそは……元來かうしたまあ不運な我々の事で力と頼む兩親にも死別れるのであらうが、姉も妹も同じやうなものよと人の物笑にならざる事私までが附加へる情態で、亡き兩親にまで累を及ぼすのが辛い事ではある。

亡き御影……亡き兩親。猶我だに……せめて私だけでも夫を待つて苦勞するやうな事をせず。物も露ばかり……食事も少しも召上らず。

この君を……中の君を。我にさへ……中の君が私にまで死に後れて。大君の心。いかで人々しうも……何とかして人並の身にして上げたいものと。限なき人……假令相手が匂宮の如き貴い方でも、これ程人の笑ひ物になるやうな取扱をされた中の君が。

宮は立ち返り……匂宮は引返して。出で立ち給ひ……宇治に向つて御出立なされたところが。

かゝる御忍び事……こんな隠れた愛人がいらつしやる故。

して世を過せ」と宣ひおきしは、かゝる事もやあらむの御諫なりけれ、さもこそは憂き身どもにて、さるべき人々にも後れ奉るらめ、様のものと、人笑へなることを添ふる有様に、亡き御影をさへ惱まし奉らむがいみじさ、猶我だにさる物思に沈まず、罪などいと深からぬ先に、いかで亡くなりなむと思し沈むに、心地もまことに苦しければ、物も露ばかり参らず、只亡からむ後のあらまし事を、且暮思ひ續け給ふに、もの心細くて、この君を見奉り給ふもいと心苦しう、我にさへ後れ給ひて、いかにいみじう慰む方なからむ、あたらしくをかきし様を、且暮の見ものにて、いかで人々しうも見なし奉らむと思ひ扱ふをこそ、人知れぬ行先の頼にも思ひつれ、限なき人に物し給ふとも、かばかり人笑へなる目を見てむ人の、世の中に立ちまじり、例の人様にて經給はむは、類すくなく心憂からむ、など思し續くるに、いふかひもなく、この世にはいさゝか思ひ慰む方なくて、過ぎぬべき身どもなめりと、心細くおぼす。

御ありき……御出遊。ゆくりかに……一體氣儘に母方のお屋敷などに起居してゐるのがよくないのです。

内裏につと……匂宮を禁中につと引附けてお置きになる。

左の大臣殿の……夕霧の第六女を匂宮は不承知に思召した事であつたが、無理押付けに差上げるやうに一同で御相談が極つた。

中納言殿……蕭はそれを聞いて厄介な事と心配し歩いて居られる。わがあまり……私が姫君達を我が物にしてしまへばこんな心配もなく済んだのに、畢竟私の餘り變屈ゆゑかうなつたのだ。以下蕭の心。

親王の……八宮が姫君達の事を氣遣つて居られた御様子も蕭はお氣の毒で忘れ難く、この姫君達の美しい御器量も、格別の幸福にも遇はずに遇塞なされさうな事が惜しく思はれる餘りに、どうか人並の御生活にして上げたいと我ながら不思議な位世話焼かずにはなれなかつたのに。

宮も生憎に……匂宮も非常に熱心になつて中の君へ仲立の事をお責めになつたので、蕭自身は大君を思つてゐるのに大君からは中の君に

宮は立ち返り、例のやうに忍びてと、出で立ち給ひけるを、内裏に、かゝる御忍び事により、山里の御ありきも、ゆくりかに思し立つなりけり。輕々しき御有様と、世の人もしたに誇り申すなり」と、衛門督の漏らし給ひければ、中宮も聞し召し歎き、上もいとゆるさぬ御氣色にて、大方、心にまかせ給へる御里住の悪しきなり」と、嚴しき事ども出で来て、内裏につと侍はせ奉り給ふ。左の大臣殿の六の君をうけひかず思したることなれど、押したちて参らせ給ふべく、皆定めらる。中納言殿聞き給ひて、あいなく物を思ひありき給ふ。わがあまり異様なるぞや、さるべき契やありけむ、親王のうしろめたしと思したりし様も、あはれに忘れ難く、この君達の御有様はひも、異なる事なくて、世に衰へ給はむことの、惜しくも覺ゆるあまりに、人々しうもてなさはやと、怪しきまでもて扱はるゝに、宮も生憎に取りもちて責め給ひしかば、我が思ふ方は異なるに、譲らるゝ有様もあいなくて、かくもてなしてしを思へば、怪しくもありけるかな、いづれをも我が物にて見



思ひ換へよといはれるのも面白くないので、かく中の君を匂宮に取持つてしまつた事を思へば。いづれでも我が手に入れて大君でも中の君でも我が手に入れて。御心につきて……貴方がお氣に入つて思込まれた女があつたら此處に迎取つて當前に落着いて御待遇なさい、貴方を春宮にも立てようかと帝は思つていらつしやるのに。大宮―明石中宮。女一宮の宮―匂宮の妹宮。御前はひを―女一宮の御容姿を。又この御有様に……他に女一宮の御器量に並ぶ人があらうかい。御冷泉院の姫宮―玉鬘の長女のお産み申した姫宮。うち出でむ方もなく―匂宮は冷泉院の姫宮に戀心を打明けやうもなくかの山里人―中の君をさす。女繪―女の風俗姿態を描いた繪。心々に―繪師各自の意匠によつて。擬へらるゝ事……匂宮自身と中の君との間の事に比べられる事が多くすこし聞え給ひて……女一宮に御相談して少し譲り受け、中の君へ差上げようと思召す。在五が物語―伊勢物語。在五は在原氏の五男の意で業平をいふ。琴教へたる所……この事今の伊勢物

奉らむに、咎むべき人もなしかし、取り返すものならねど、鳴瀝がましう心一つに思ひ亂れ給ふ。宮は、まして御心にかゝらぬ折なく、戀しううしろめたしと思す。御心につきて思す人あらば、こゝに參らせて、例様にのどやかにもてなし給へ。筋異に思ひ聞え給へるに、輕びたるやうに人の聞ゆべかゝめるも、いとむ口惜しきと、大宮は且暮聞え給ふ。時雨いたくしてのどやかなる日、女一の宮の御方に參り給へれば、御前に人多くも侍はず、しめやかに御繪など御覽する程なりけり。御几帳ばかり隔て、御物語きこえ給ふ。限もなくあてに氣高きものから、なよびかにかしき御前はひを、年頃二つなきものに思ひ聞え給ひて、又この御有様になすらふ人、世にありなむや、冷泉院の姫宮ばかりこそ、御おぼえの程、内々の御前はひも心にく、聞ゆれと、うち出でむ方もなく思ひわたるに、かの山里人は、らうたげにあてなる方の劣り聞ゆまじきぞかしなど、まづ思ひ出づるに、いと戀しさまざる慰

語にはない。人のむすばむ―伊勢物語に、昔男妹のいとをかしげなるを見居りて、うら若み寝よげに見ゆる若草を人の結ばむ事をしぞ思ふ返し、初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ひけるかな。少し近く―女一宮の方へ少し近く。さるべき程は……親密にすべき同胞などの間柄では。思すに―女一宮が怪しまれると。片そばばかり―一部分だけを。少しも物隔てたる……本當の同胞でなくも少し關係の薄い人であつたら、この儘では置かまいにと。若草の……若草の如く美しい貴女であるが同胞ゆゑ戀をしようとは思ひませんけれど、餘りの美しさに私は煩悶しきうですとの意。根に寝を懸け、草の縁語で結ばるといつた。御前なりつる人々―女一宮の侍女達。この宮をば―匂宮を。事しもこそあれ……いふべき事もあらうに、とんでもない事を匂宮が仰しやると女一宮は思召すので。道理にて……匂宮は女一宮の態度も尤で、それに比べると、うらなく物を云々―と返歌した伊勢物語中の姫君も、餘りしやれ過ぎて嫌な

めに、御給どもの數多散りたるを見給へば、をかしげなる女繪どもの戀する男の住居など描きませ、山里のをかしき家居など、心々に世の有様書きたるを、擬へらるゝ事多くて、御目とまり給へば、すこし聞え給ひて、彼處へ奉らむと思す。在五が物語書きて、妹に琴教へたる所の、「人のむすばむ」といひたるを見て、いかゞ思すらむ、少し近くまゐり寄り給ひて、古への人も、さるべき程は、隔なくこそならばして侍りければ、いと疎々しうのみもてなさせ給ふこそ」と、忍びて聞え給へば、いかなる繪にかと思すに、おし巻き寄せて、御前にさし入れ給へるを、うつ伏して御覽するに、御髪のうち靡きて、こぼれ出でたる片そばばかり、ほのかに見奉り給ふが、飽かずめでたく、少しも物隔てたる人と思ひ聞えましかばと思すに、忍び難くて、「若草のねみむものとは思はねど、むすばほれたる心地こそすれ」御前なりつる人々は、この宮をば殊に恥ぢ聞えて、物の後に隠れたり。



氣がなされた。この二所をば……匂宮と女一宮とを  
 馴染ませお育てなされたので、  
 澤山の御兄弟中。  
 世になく……御母明石中宮が女一宮  
 を非常に大事になされて、お附の  
 侍女達にしても見つともなく、少  
 しても不足な點のあるのは具合が  
 わるさうだ。  
 いと多かり侍女の中に多かつた。  
 御心の……匂宮の移り氣な事には、  
 新しいこの侍女達に一時の出来心  
 で關係を結んだりなされて、  
 かのわたりを……中の君をお忘れに  
 なる折は無かつたもの。  
 待ち聞え給ふ所は……宇治では匂宮  
 の御來訪を待ちこがれて、矢張見  
 捨てられたのだらうと。  
 ことづけて病氣を口實にして。  
 猶かの……矢張大君の御病床近くに  
 案内して下さい。  
 氣憎くはあらで……餘りそつけない態  
 度ではなくて。  
 宮の御心もゆかで……先日は匂宮が  
 中の君の處に立寄る事も出来ず不  
 本意のまゝで素通りなされた様子  
 などを薰がお話申して。  
 のどかに思せ……ゆつくり落着いてい  
 こゝには……中の君の方では別に何

事しもこそあれ、うたて怪しと思せば、物も宣はず。道理にて、うらな  
 くものをといひたる姫君も、されて憎く思さる。紫の上の取り分きて、  
 この二所をばならはし聞え給ひしかば、數多の御中に、隔なく思ひか  
 はし聞え給へり。世になくかしづき聞え給ひて、侍ふ人々も、片ほに  
 少し飽かぬ所あるは、はしたなげなり。やむことなき人の御女なども  
 いと多かり。御心の移ろひ易きは、珍しき人々は、はかなく語らひつ  
 きなどし給ひつ、かのわたりを思し忘る、折なきものから、音づれ  
 給はで、日ごろ經ぬ。  
 待ち聞え給ふ所は、絶間とほき心地して、猶かうなめりと心細うなが  
 め給ふに、中納言おはしたり。惱ましげにし給ふと聞きて、御訪らひ  
 なりけり。いと心地惑ふばかりの御惱にもあらねど、ことづけて對面  
 し給はず。驚きながら遙けき程を參り來つるを、猶かの惱み給ふらむ  
 御あたり近くと、切におぼつかながりに聞え給へば、うち解けて住  
 ひ給へる方の御簾の前に、御座敷きて入れ奉る。いとかたはら痛き業

亡き人の御諫は……亡き父宮が夫を持  
 つ事を御諫止なされた譯は、  
 一つ様にて……すべて一概にはゆか  
 ぬものですのに。  
 いかなる事をも……世間の何事にも  
 御經驗のない貴女方のお心では、  
 後めたうは……匂宮のお心に不安な  
 事は決してあるまいと、私は存じ  
 ます。  
 人の御上をさへ……匂宮の事まで取  
 成して仰しやるのも。  
 疎き人の……薫のやうな他人が御病  
 床近くゐるのも。  
 なほ例のあなたに……矢張いつもの通  
 りあちらの部屋へお出下さい。  
 思ひのまゝに……氣に懸るまゝに參  
 りましたのを、追出しておしまひ  
 なさるので。  
 御扱ひ……御介抱。  
 いと見苦しう……大君はこんな病體  
 の見にくく、實に態とでも死にたい  
 程なこの身だのにと思ひつゝ、聞い  
 て居られるが、お断りしてはわか  
 らず屋のやうに仰しやるのも面白  
 くないから。  
 流石に……矢張命のあれかしと思つ  
 て居られる大君の心持も。  
 昨日ばかり……せめて昨日お話しし  
 たやうな風にしてでも又お話しし

と苦しがり給へど、氣憎くはあらで、御ぐしもたげて御答など聞え給  
 ふ。宮の、御心もゆかでおはし過ぎにし有様など語り聞え給ひて、の  
 どかに思せ。心苛られしてな恨み聞え給ひそなぞ教へ聞え給へば、  
 「こゝにはともかくも聞え給はざめり。亡き人の御諫はかゝる事に  
 こそ、と見侍るばかりなむいとほしかりける」とて、泣き給ふ氣色な  
 り。いと心苦しう、我さへ恥かしき心地して、世の中はとてまかくて  
 も、一つ様にて過すこと難くなむ侍るを、いかなる事をも御覽じ知ら  
 ぬ御心どもには、偏に怨めしなど思す事もあらむを、強ひて思しのど  
 めよ。後めたうは世にあらじとなむ思ひ侍る」など、人の御上をさへ  
 扱ふも、且は怪しく覺ゆ。夜々はましていと苦しげにし給ひけれど、  
 疎き人の御扱ひの近きも、中の君の苦しげに思したれば、「なほ例の  
 あなたに」と人々聞ゆれど、「ましてかく煩ひ給ふほどの覺束なきを、  
 思ひのまゝに參りきて、出だし放ち給へれば、いとわりなくなむ。か  
 かる折の御扱ひも、誰かはかゝしく仕うまつる」など、辨のお許に



いたいものです。いかに物し給ふべき……どうなりゆくに大君の御容態なのか、以前よりは私を懐かしがる御様子なのも、病が重つて衰弱した爲ではないかと、薫ははつとなされたので、ためらはず程に……病苦が薄らいだ時分にまあ又お目にかゝりませう。徒然と……薫はぼんやりとかうして山莊に逗留しても居られぬので、處去り給ふに……物怪などならば、場處を換へると離れる事もあるから、場處を換へるにかこつけて、この君……薫、こゝなる若き人を……この山莊の若い侍女に關係を結んだ者があつた。左の大内殿……夕霧。あはせ奉り……匂宮にお縁付け申す筈であるのを。女方は……女の親元夕霧の方では年來の御希望の事ゆゑ。ありぬべからずなり……御婚儀がある筈なのです。内裏わたりにも……禁中にいらしつても只浮氣らしい事ばかりに熱中なされて。我が殿……私の御主人。薫をさす。入に似給はず……人と違つて餘り生眞面目にして、人に煙たがられて

語らひ給ひて、御修法ども始むべき事など宜ふ。いと見苦しう、殊更にも厭はしき身をと聞き給へど、思ひ限なく宜はむもうたてあれば、流石に永らへよと、思ひ給へる心ばへも哀なり。又のあしたに、少しもよろしく思さるや。昨日ばかりにてだに聞えさせむ」とあれば、日頃ふればにや、今日はいと苦しうなむ。さらば此方に」といひ出だし給へり。いとあはれに、いかに物し給ふべきにかあらむ、ありしよりは懐かしき御氣色なるも、胸潰れて覺ゆれば、いと近う寄りて、よろづのことを聞え給ふ。苦しうてえ聞えず。少しためらはむ程にを」とて、いと幽にあはれなるけはひを、限なう心苦しうて歎き居給へり。流石に徒然とかくおはし難ければ、いと後めたけれど歸り給ふ。かかる御住居はなほ苦しかりけり。處去り給ふにこと寄せて、さるべき處に移ろはし奉らむ」など聞え置きて、阿闍梨にも、御祈心に入るべく宜ひ知らせて、出で給ひぬ。この君の御供なる人の、いつしかと、こゝなる若き人を語らひ寄りた

いらつしやる。こゝにかく……この宇治にかうして入らつしやるのだけが案外で、並大抵の御熱心ではないと人が申し居ります。さこそいひつれ……その若い侍女が「薫様の御家來がかく、申されましたよなど、女房達の中で話すのを大君が聞かれるにつけても、今は限にこそ……匂宮との縁も今は切れ目なのだ、一體夕霧の六の姫に縁が定まるまでの一時的の慰みで匂宮はこんな中の中君を愛されたのであらうが、流石に薫などの思はくを仰つて口先だけ愛情深さうに仰しやるのだと、大君がお考へになると。人の御つらさ……匂宮の無情。いと世に……猶更本復して命脈を保てさうな氣もなさらぬ。恥かしげなる……侍女達は皆氣の置ける程の人々ではないけれど、何と思はうかと矢張り氣になるので、姫君……中の君は。物思ふ時の……拾遺……たちちねの親の諫めし轉寢は物思ふ時の業にぞありける。物思に沈む時は親に誠められてゐる轉寢もつひするものと古歌にもあるが、その轉寢をしてゐる中の君の御様子の。

るありけり。おのがじしの物語に、かの宮の御忍びありき制せられ給ひて、内裏にのみ籠りおはしますこと。左の大内殿の姫君をなむ、あはせ奉り給ふべからざるを、女方は年頃の御本意なれば、思し滞ることなくて、年の内にありぬべからずなり。宮はしぶく……に思して、内裏わたりにも、たゞすぎがましき事に御心を入れて、帝后の御誠に静まり給ふべくもあらざらめり。我が殿こそ、なほ怪しう人に似給はず、餘りまめにおはしまして、人にはもて惱まれ給へ。こゝにかく渡り通ひ給ふのみなむ、目もあやに腫げならぬ事」と、人申すなど語りけるを、さこそいひつれなど、人々の中にて語るを聞き給ふにも、いと胸ふたがりて、今は限にこそあなれ、やむことなき方に定まり給はぬ程の、なほざりの御すさびに、かくまで思しけむを、流石に中納言などの思はむところを思して、言の葉のかぎり深きなりけりと思ひなし給ふに、ともかくも人の御つらさは思ひ知られず、いと身置き所なき心地して、しをれ臥し給へり。よわき御心地は、いと世に立ちとま

總角



親のいさめしこの語は上の引歌から取つたが、意は夫など持つたと父宮の御罰戒なされたとの意。罪深かなる……父宮は悪趣にはよもや落ちていらつしやるまい。おはすらむ方に……父宮のいらつしやる處にお迎取り下さいまし。うち捨て給ひて……父宮がお振捨てなされて、私の夢にすらすらお姿を見せて下さらぬ事よと。迷ふ筋なく……亂れた毛筋もなく引きはへられて。物見知らむ人……風情を解する人。晝寝の君……晝寝をしてゐた中の君。故宮の……亡き父宮が今私の夢にお現はれなさいましたが大變御心配さうな御様子で、こゝいらにちらりとお見えになりましたよ。二所……姉妹お二人。この頃……以下大君の心。ほのめきもや……亡き父宮の靈がこの邊に彷徨なさるのかも知れぬ、どうか父宮のいらつしやるお側へ尋ねて行きたいものである。罪深げなる……罪障深い我が身で善處往生が出来ようかと。人の國に……昔唐土にあつたといふ反魂香が欲しいと大君は思召す。漢の武帝が反魂香を姓いて李夫人の姿を現した故事による。

るべうも覺えず、恥かしげなる人々にはあらねど、思ふらむ所の苦しければ、聞かぬやうにて寝給へるを、姫君、物思ふ時のわざとか聞きし轉寢の御様の、いとらうたげにて、肘を枕にて寝給へるに、御髪のためりたる程など、あり難う美しげなるを見やりつゝ、親のいさめし言の葉も、返すく、思ひ出でられ給ひて悲しければ、罪深かなる底にはよも沈み給はじ、いづくにも、おはすらむ方に迎へ給ひてよ、かういみじく物思ふ身どもをうち捨て給ひて、夢にだに見え給はぬよと、思ひ續け給ふ。夕暮の空の氣色いとすこく時雨れて、木の下吹きはらふ風の音などに、たとへむ方なく、來し方行く先思ひ續けられて、添ひ臥し給へる様、いとあてに限なく見え給ふ。白き御衣に、髪はけづる事もし給はで程經ぬれど、迷ふ筋なくうちやられて、日頃にすこし青み給へるしも、今少しなまめかしき勝りて、ながめ出だし給へるまみ、額つきの程も、物見知らむ人に見せまほし。晝寝の君も、風のいと荒きに驚かさ

宮より……匂宮から。御方……中の君。おいらかなる様に……穠やかな風にかうてはかなうも……この儘私が死にでもしたら、匂宮よりも更に露骨に貴女を慰み物にしようとする男でも現れようかと。稀にも……假令稀にでも匂宮が思出して通つて来て下されたら、そんな都合な横戀慕などする男はあるまいと思ふので、匂宮の今の御仕打はひどいと思ひながら矢張り力には思はれます。後らさむと……姉上は私を残してあの世へ行かうと。限あれば……父宮御逝去當時暫くも生き残つて居られさうもなく思ひました。句を轉倒して見るがよい。誰が爲惜しき……誰ゆゑ惜しい命でせう。皆貴女の爲です。見給ふ……匂宮のお文を御覽になる。ながむるは……いつも貴女の住む方を戀しく思つて眺めるのは同じ空であるのに、どうして今日の時雨の空はかうも心細さを感じしめるのか遺瀨なく戀しく思はれます。かく袖ひづる……「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖ひづること

れて、起き上り給へり。山吹、薄色など華やかなる色合に、御顔は殊更に染め匂はしたらむやうに、いとをかしう花々として、いさゝか物思ふべき様もし給へらず。故宮の夢に見え給へる、いと物思したる氣色にて、このわたりにこそほのめき給へれ」と語り給へば、いとゞしく悲しさ添ひて、うせ給ひて後、いかで夢にだに見奉らむと思ふを、更にこそ見奉らね」とて、二所ながらいみじう泣き給ふ。この頃且暮思ひ出で奉れば、ほのめきもやおはすらむ、いかでおはすらむ處にたづね參らむ。罪深げなる身どもにてと、後の世をさへ思ひやり給ふ。人の國にありけむ香の燐ぞ、いと得まほしく思さるゝ。いと暗うなる程に、宮より御使あり。少し物思ひ慰みぬべし。御方はとみにも見給はず、なほ美しくおいらかなる様に聞え給へ。かうてはかなうもなり侍りなば、これより名残なき方に、もてなし聞ゆる人もや出で來むと、後めたきを、稀にもこの人の思ひ出で聞え給はむには、さやうなるあるまじき心使ふ人はえあらじと思へば、つらきながらなむ頼まれ侍



は無かりき。(花鳥)。耳馴れにたるを……匂宮の歌は平凡な紋切型であるので、矢張お座なりでこんな歌を下されたのだと、大君は御覽なさるにつけても、さばかり世に……あれ程世にも稀な匂宮の美しい御風采を、一層何とかして人に褒められようと。若き人——中の君をさす。さばかり所狭きまで……あれ程大げさに御約束なされたものを、何が何でもこの儘切れてしまふ事はあるまいと。御返り——この語は、これかれその、かし云々——にかゝる句法。今宵参りなむ——御返事を持つて今夜京に参りませう。これかれ——侍女達の誰彼が。あれふる……震ふるこの宇治の山里では朝夕の空も晴れる時なく曇つてのみ居ります、私の心も貴方の冷淡を思つて晴れる隙もありません。月も隔たり……宇治に無沙汰をしてもう一月の上にもなるわいと。今宵々々と——今夜こそ行かうと。障多み——拾遺——淡入りの葦分け小舟障りおほみわが思ふ人に逢はぬ頃かな。五節など……今年十一月の丑の日

「と聞え給へば、<sup>中君</sup>後らさむと思しけるこそいみじう侍れ」とて、いよいよ顔ひき入れ給ふ。<sup>大君</sup>限あれば、片時も後れ奉らじと思ひしかど、永らふる業なりけりと思ひ侍るぞや。明日知らぬ世の流石に歎かしきも、誰が爲惜しき命にかは」とて、<sup>おほい</sup>大殿油参らせて見給ふ。例のこまかに書き給ひて、  
「<sup>句</sup>ながむるはおなじ雲居をいかなれば  
おぼつかなさ添ふる時雨ぞ」  
「かく袖ひづる」などいふ古言もありけむ。耳馴れにたるを、猶あらし事と見るにつけても、怨めしき勝り給ふ。さばかり世にあり難き御有様容貌を、いとどいかにめでられむと、好ましく艶にもてなし給へれば、若き人の心寄せ奉り給はむも道理なり。<sup>(中君ハ)</sup>程經るにつけても戀しう、さばかり所狭きまで契り置き給ひしを、さりともしとかくては止まじと思ひ直す心ぞ、常に添ひける。御返り「今宵参りなむ」と聞ゆれば、これかれその、のかし聞ゆれば、たゞ一言なむ。

が早い爲五節の公事が早く来る年で、五節とは朝廷で毎年十一月の申の丑の日に行はれた女樂の公事。今めかしく……陽氣で混雑に取紛れ勝で。わざとはなけれど……故意ではないけれど無沙汰していらつしやる間に、宇治では待遠である。はかなう人を……匂宮の方でも出来心から一寸した戀をなさるやうな事はあるにつけても、さうはいふもの、中の君の事が念頭から去る事はない。  
左の大内殿——夕霧。  
大宮——明石中宮。  
猶さる……矢張夕霧の六の娘のやうな落着いた御本妻をお持になつて、それ以外の欲しく思召す女があつたらそれを呼迎へて。  
しばし……まあ暫く御猶下さいまし、思ふ仔細が御座います。誠につらき日は……中の君に心配は決してさせまいなど眞實思つていらつしやる匂宮の御心を、中の君は御存じないから。  
中納言も……薫も、今まで思つてゐたよりは輕薄な匂宮のお心ではある、何が何でも見捨てはなさるまいと信じてゐたのも、今となつては中の君の爲にお氣の毒な事と裏

「<sup>中君</sup>あられふる深山のさとは朝夕に  
ながむる空もかき暮しつゝ」  
かくいふは神無月のつごもりなりけり。月も隔たりぬるよと、宮は靜心なく思されて、今宵々々と思しつゝ、とかく障多みなる程に、五節など疾く出できたる年にて、内裏わたり今めかしく紛れ勝にて、わざとはなけれど、<sup>す</sup>過い給ふほどに、淺ましう待遠なり。はかなう人を見給ふにつけても、さるは御心地に離るゝ折なし。左の大内殿のわたりおほいの事、大宮も、猶さるのどやかなる御後見を設け給ひて、その外の尋ねまほしう思さるゝ人あらば参らせて、<sup>おも</sup>重々しくもてなし給へ」と聞え給へど、<sup>句</sup>しばし、さ思ふ給ふるやうなむなど聞えいなび給ひて、誠につらき目はいかで見せむ、など思す御心を知り給はねば、月日に添へて物をのみ思す。中納言も、見し程よりは輕びたる御心かな、さりともし思ひ聞えけるもいとほしく、心から思ほえつゝ、をささ参り給はず。山里にはいかにと、絶えず訪らひ聞え給ふ。

總角



心から思召して、殆ど匂宮の處へは參上もなさらぬ。山里には……宇治へは屢齋は御機嫌何の交通をなさる。この月と……十一月になつては大君の御病狀が稍良好になられたと。人も奉り給はぬに……齋は使もお遣りにならなかつたので、どうしたかわりなき事の……餘儀ない繁忙の用をおこたり果て給ふまでと……御快癒なさるまで續けよと。例の老人……食物を少しも召上りませぬ。あえかに……虚弱に。この宮の御事……匂宮と中の君との事。御覽じ入れざりし……見向きもなさらない事が積つたせらる。世に心憂く……私は實に我ながら心まづいかで……まづ大君より何とかして先に死にたいものと。え聞えざりつる覺束なさ……お見舞も出来なかつた氣遣はしさ。ありし方……これまで履通された室。御枕上近く……齋は大君のお枕元……近よつて。大方世に……その外一般世間で祈禱

この月となりては、少しよろしうおはすと聞き給ひけるに、公私も（おはすやわたくし）の騒がしき頃にて、五六日人も奉り給はぬに、いかならむとうち驚かれ給ひて、わりなき事の繁きをうち捨て、まうで給ふ（おはす）修法はおこたり果て給ふまでと宣ひ置きけるを、よろしくなりにけりとして、阿闍梨（あせり）をも返し給ひてければ、いと人少なにて、例の老人出で来て、御有様開ゆ（ひら）そこはかと痛き處もなく、おどろくしからぬ御惱に、物をなむ更に聞き召さぬ。もとより人に似給はず、あえかにおはしますうちに、この宮の御事出で來にし後、いと物思（おも）したる様にて、はかなき御菓子だに御覽じ入れざりし積りにや、淺ましう弱くなり給ひて、更に頼むべくも見え給はず。世に心憂く侍りける身の命長さにて、かゝる事を見奉りつれば、まづいかで先だち聞えなむと、思ひ給へ入りて侍り」といひもやらず泣くさま、いと道理なり（ことわり）心憂く、なかかくとも告げ給はざりける。院にも内裏にも淺ましう事繁き頃にて、日頃もえ聞えざりつる覺束なさ」とて、ありし方に入り給ふ。御枕上近くて

の臉があると思召される僧は皆。殿入……齋の家來。心ぼそさの名残なく……今までの人々の心細さはどこへやら。例のあなたにと……いつも御案内するお部屋へと齋に申上げて。この御中を……齋と大君との中を矢張既に離れられぬ關係があるのだと皆が思つて。初夜……今の午後十時から十二時までの勤行。こなたの……齋のいらつしやる方の。内は……大君の病室は。心地には……心の中ではお話しも致さうと思ひながら。覺束なく……もう御面會出来ず氣がかりの儘死にゆく事知ららと。さくりもよと……しやくり上げてよととお泣になる。少し熱くぞ……稍熱がおありになる。何の罪なる……どんな罪障があつてこんな御病氣にはおなりなされた事やら、他人の恨を受けた者がこんな事にもなるものですの。さしあて……齋が口を當て。空しう見なして……大君を空しく死なしてしまはれたら自分はどうな氣持がしようぞと。日ごろ見奉り……中の君への詞。豫て御看護で疲れた御氣分も嘸お苦

物聞え給へど、御聲もなきやうにて、え答へ給はず。かく重くなり給ふまで、誰もく告げ給はざりけるがつらう、思ふにかひなき事」と恨みて、例の阿闍梨、大方世にしるしありと聞ゆる人の限、あまた請じ給ふ。御修法、讀經など、明くる日より始めさせ給はむとて、殿入あまた參り集ひ、上下の人たち騒ぎたれば、心ぼそさの名残なく頼もしげなり。暮れぬれば、例の「あなたに」と聞えて、御湯漬（おんゆぢ）など參らせむとすれど、近くてだに見奉らむ」とて、南の廂は僧の座なれば、東面の今すこし氣（け）近き方に、屏風など立てさせて入り居給ふ。中の君苦しと思したれど、この御中（おんちゆう）を猶もて離れ給はぬなりけりと、皆思ひて、疎くももてなし隔て奉らず。初夜より始めて、法華經を不斷（ふただ）に讀ませ給ふ。聲たふとき限十二人して、いと尊し。火はこなたの南の間にもとして、内は暗きに、几帳（いぢやう）をひき揚げて、少しすべり入りて見奉り給へば、老人ども二三（ふたたりみたり）人ぞさぶらふ。中の君はふと這ひ隠れ給ひぬれば、いと人少なに、心細くて臥



しく御座いませう。宿直人にて……今夜は私がお伽を致しませう。ひた面には……薫は大君に面と向つては……かゝるべき契……かうした宿縁のあつた事だらう。こよなうのどやかに……この上もなく優長に氣の置けない薫のお心持を、あの一方の匂宮に比較して大君が御覽なさると。空しくなりなむ……自分の死後薫に思出して貰ふ感じからいつても、強情に思遣りの無いやうな風にはしたくないと大君は氣をお附けになつて、無遠慮に薫を病室から遠ざけるといふ事はお出来ならぬ。人をそゝのかし給ひて……薫が侍女達を指圖して。御湯……御藥湯。いかにしてかは……どうしたらまあお命を取留められようかと。不斷經……晝夜絶間なく僧に交代で讀誦させる經。居かはりたる……交代した。夜居……夜間邪魔を防ぐ爲に僧が貴人の寢所の次に詰めるをいふ。うち驚きて……目が覺めて。老い枯れにたれど……その聲は横枯れてゐるが効驗ありさうに。

し給へるを、<sup>薫</sup>「なごか御聲をだに聞かせ給はぬ」とて、御手を捉へて驚かし聞え給へば、<sup>大君</sup>「心地には覺えながら、物いふがいと苦しくてなむ。日頃音づれ給はざりつれば、覺束なくて過ぎ侍りぬべきにやと、口惜しうこそ侍りつれ」と、息のしたに宣ふ、かく待たれ奉りつる程まで、參り來ざりけること」とて、さくりもよよとなき給ふ。御頭など少し熱くぞおはしける。<sup>薫</sup>「何の罪なる御心地にか。人の歎負ふこそ、かくはあなれ」と、御耳にさしあて、物を多く聞え給へば、<sup>大君</sup>「うるさうも恥かしうも覺えて、顔をふたぎ給へり。いとゞなよくと、あえかにて臥し給へるを、空しう見なしていかなる心地せむと、胸もひしげて覺ゆ。<sup>薫</sup>「日ごろ見奉り惱み給へらむ御心地も、安からず思されつらむ。今宵だに心安くうち休ませ給へ。宿直人にて侍ふべし」と聞え給へば、<sup>中君</sup>「後めたけれど、さる様こそはと思して、少し退き給へり。ひた面にはあらねど、這ひ寄りつゝ見奉り給へば、いと苦しく恥かしけれど、かゝるべき契こそありけめと思して、こよなうのどやかに後やすき御心

故宮の御事……八宮の御事。いかなる所に……八宮様はあの世でどこにお生れなされたせう、矢張極樂淨土にお生れなされたらうと存じて居りましたに。極樂淨土は清涼界である故にいふ。聊からち思ひし……少し姫君達の身の上を心配した事に心が亂れて、それで只當分の間極樂へ行けないのを思へば誠に残念です、どうか極樂往生を勧むる追善をして下さいと。忽ちに……即刻どうして上げるべきか考へつきませんので私の身に叶つたまゝに。なにがしの念佛……彌陀の稱名念佛のこと。さては……それから又私自身の思ひ附いた事が御座いました。常不經……法華經常不輕菩薩品の我深敬……汝等……不取譏慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、當得作佛の二十四字の偈を唱へつゝ諸所を廻つて衆生を禮拜するをいふ。常不輕菩薩は一切衆生に佛性あるを思ひ、どんな人をも輕んぜずこの偈を唱へ違ふ人を拜したといふ。つかせ……頼づかせ。君も……薫も。かの世にさへ……父宮に現世で苦勞

を、かの片つ方の人に見くらべ奉り給へば、あはれとも思ひ知られにたり。空しくなりなむ後の思ひ出にも、心こはく思ひ限なからじとつみ給ひて、はしたなくもえ押し放ち給はず。夜もすがら人をそゝのかし給ひて、御湯など參らせ奉り給へど、露ばかり參る氣色もなし。いみじの業や、いかにしてかはかけとゞむべきと、いはむ方なく思ひ居給へり。不斷經の、曉方の居かはりたる聲のいと尊きに、阿闍梨も夜居に侍ひてねぶりたるが、うち驚きて陀羅尼よむ。老い枯れにたれど、いと功づきて頼もしく聞ゆ。<sup>阿闍梨</sup>「いかゞ今宵はおはしましつらむ」など聞ゆる所に、故宮の御事など聞え出でて、鼻しばしうちかみて、<sup>阿闍梨</sup>「いかなる所にかおはしますらむ。さりととも涼しき方にぞと思ひやり奉るを、先つ頃の夢になむ見えおはしまし」。俗の御かたちにて、世の中を深う厭ひ離れしかば、心とまる事もなかりしを、聊かうち思ひし事に亂れてなむ、只暫し願の處を隔たれるを思ふなむ、いと悔しき。すゝむる業



をかけたのみならずあの世の佛果までお妨する我が身の罪深きをいかでかの……どうぞ父宮がまだあの世で生をお享けになる場所の決定せぬうちに、自分もお側に行つて、同じ處にも生まれたいものと。この常不輕……常不輕を勤める僧が。中門……この山莊の中門。尊くつく……尊げに頼づいてゐる。回向の末つ方……回向の文句の終の方の文意が。客人も……薫も佛法に信仰の深い御心に。切に覺束なくて……ひどく大君の御容態が気がかりで。けざやかに……きちんと居ずまひを直して中の君に向つて。重々しき道には……常不輕は鄭重な祈禱の時は行はぬ事ですけれど。霜さゆる……意は明白。折しも開ゆる千鳥の聲を常不輕讀誦の聲に擬して詠んだもの。言葉のやうに……普通の對話の如く。つれなき人の……薫の御容姿が冷淡な匂宮の御様に似た所もあつて。あかつきの……裏におく曉の霜を打拂ひつゝ、鳴く千鳥はいかにも悲しげであるが、物思に沈むこの私の悲しさを知つてゐるであらうか。似つかはしからぬ……老人の辨では

せよ」と、いと定かに仰せられしを、忽ちに仕うまつるべき事の覺え侍らねば、堪へたるに隨ひて、行し侍る法師ばら五六人して、なにがしの念佛をなむ仕うまつらせ侍る。さては思ひ給へ得たる事侍りて、常不輕をなむつかせ侍る」など申すに、君もいみじう泣き給ふ。かの世にさへ妨げ開ゆらむ罪の程を、(大君)苦しき心地にも、いと消え入りぬばかり覺え給ふ。いかでかのまだ定まり給はざらむ先にまうでて、同じ所にもと、聞き臥し給へり。阿闍梨は言少なにて立ちぬ。この常不輕、そのわたりの里々、京までありきけるを、曉の嵐に飜びて、阿闍梨の侍ふあたりを尋ねて、中門のもとに居て、いと尊くつく。回向の末つ方の心ばへ、いとあはれなり。客人も此方に進みたる御心にて、あはれ忍ばれ給はず。中の君、切に覺束なくて、奥の方なる几帳の後に寄り給へるけはひを、(薫)聞き給ひて、けざやかに居直り給ひて、不輕の聲はいかゞ聞かせ給ひつらむ。重々しき道には行はぬ事なれど、尊くこそ侍りけれ」とて、

誠に不似合の代理ではあるが、風情ある有様にお取次申上げる。かやうのはかなし事……こんなやうな一寸した應酬も、大君は遠慮勝ではあるもの、懐かしく感服する程になされたものを。宮の……八宮が。かう心苦しき……これ程お可愛さうな姫君達の御様子をおはしまし、御寺……八宮のいらした阿闍梨の御寺。御暇のよし……薫がお暇をお貰ひになつて。物の罪めきたる……何かの祟などいふ種類は御病氣でもなかつた故。自らも平かに……大君御自身でも平癒したいと思つて佛様をも祈念なされたら或は驗もあらうけれど。この君の……薫がからして附切つてゐてすつかり隔もなくつてしまつたので、今は全快しても斷りやうがなく夫婦にならねばならず。さりとして……といつてこんな御親切に見える薫のお心が、夫婦になつた後却て薄らいでお互に不快な思をしたら、胸程かならず心外な事であらう。形をも變へてむ……尼法師にでもなつさてのみこそ……さうするだけが永

「霜さゆる汀の千鳥うちわびて  
なく音かなしき朝ばらけかな」  
と言葉のやうに聞え給ふ。つれなき人の御けはひにも通ひて、思ひ撥へらるれど、答へにくくて、辨してぞ聞え給ふ。  
「あかつきの霜うちはらひ鳴く千鳥  
もの思ふ人のこゝろをや知る」  
似つかはしからぬ御代りなれど、故なからず聞えなす。  
かやうのはかなし事も、つゝまじげなるものから、懐かしうかひある様に取りなし給ふものを、今はとて別れなば、いかなる心地せむと、(薫)思ひ惑ひ給ふ。宮の夢に見え給ひけむ様思し合はするに、かう心苦しき御有様どもを、天翔りてもいかに見給ふらむと推し量られて、おはしまし、御寺にも、御誦經させ給ふ。所々に御祈の使出だし立てさせ給ふ。公にも私にも、御暇のよし申し給ひて、祭祓よろづに至らぬ事なくし給へど、物の罪めきたる御病にもあらざりければ、何のしる



く變らぬ互の交を持續してゆく唯  
 一の手段だと大君は思込まれて  
 とあるにても……とにもかくにも何  
 卒この出家を斷行しようとお大君は  
 思召すが、さうまで利口ぶつた事  
 は蕪へは仰しやりかねて。  
 忌む事―尼となつて受戒する事。  
 いかん取へなき……どんなにまあ張  
 合ないやうに思召す事せう。  
 似げなき事に……出家なさる事を不  
 似合な事と考へて蕪に取次もせぬ  
 ので。  
 御訪らひに……御機嫌何に態々宇治  
 までいらつしやる人もある。  
 疎に思されぬ……大君の事を蕪が並  
 大抵には思召さぬのだと人々はお  
 見上げ申すので。  
 殿人親しき家司―蕪の被管の役人や  
 御愛顧を蒙つてゐる執事家従等。  
 豊明―毎年十一月の中の辰の日に  
 行はれる賜宴。五節の舞のある新嘗  
 會の頃。  
 人遣りならず―蕪はわが心がらで。  
 疎くてやみぬべき……大君とは結局  
 淡い關係で終るのか知らと思ふの  
 は苦しい宿縁だけれど、恨まうに  
 も恨まれぬやうな懐しく風情ある  
 大君の御態度なので。  
 例の様に――終日曇つたまふで。  
 光もなく――終日曇つたまふで。

しも見えぬ。自らも平かにあらむと、佛をも念じ給はゞこそあらめ、  
 猶かゝる序にいかで失せなむ、この君のかく添ひ居て、殘なくなりぬ  
 るを、今はもて離れむ方なく、さりとしてかう疎ならず見ゆめる心ばへ  
 の、見劣りして、我も人も見えむが、心安からず憂かるべきこと、もし  
 命強ひてとまらば、病にことつけて形をも變へてむ、さてのみこそ長  
 き心をも、かたみに見果つべき業なれと思ひし給ひて、とあるにて  
 も、かゝるにても、いかでこの思ふ事してむと思すを、さまで賢しき  
 事はえうち出で給はで、中の君に、心地のいよゝゝ頼もしげなく覺ゆ  
 るを、忌む事なむ、いとゆるしありて命のぶること、聞きしを、さやう  
 に阿闍梨に宣へ」と聞え給へば、皆泣き騒ぎて、いとあるまじき御事な  
 り、かくばかり思し感ふめる中納言殿も、いかに敢へなきやうに思ひ  
 聞え給はむと、似げなき事に思ひて、頼もし人にも申しつがねば、口  
 惜しう思す。かく籠り居給へれば、聞きつぎつゝ、御訪らひに振りは  
 へ物し給ふ人もあり。疎に思されぬこと、見奉れば、殿人、親しき家

かきくもり……愁雲に閉されて日の  
 光も見えぬこの山里で毎日心を暗  
 くして悲しんでゐる事よとの意。  
 豊明に用ゐる日蔭のかづらを聯想  
 して第二句に懸けてある。  
 近き方に―蕪が大君の病床近くに。  
 見苦しげなる……見苦しい老女達も  
 遠慮して奥へ引込んだ間に。  
 心に……私は特一杯に心配して御平  
 癒を祈つてゐる甲斐もなく。  
 後らかし給はゞ―私を残してお亡く  
 なりになつたら。  
 よろしき隙―小床の折。  
 かく心細げに……こんな心細く不  
 縁喜らしく歎いてゐるとは人に見  
 られたくないと忪へていらつしや  
 るが、聲に立て、泣かれる。  
 少し憂き様……大君が少し嫌な病人  
 らしい體でもお見せ下されたらわ  
 が戀心を醒す動機にもしよう、と、  
 蕪は深く注視するけれど。  
 こちたうもあらぬ程に―うるさい程  
 多過ぎるといふでもなく。  
 枕よりすべり落ちたる……枕から外  
 れて垂れたあたり。  
 いかになり給ひなむと……どうなら  
 れる御容態やらと考へるべきもの  
 でもなく、どうせ最早見込がない  
 のだと見えるのが。  
 心解けず……心を引緊めて恥かしげ

司などは、おのゝよろづの御祈をせさせ歎き聞ゆ。豊明は今日ぞか  
 しと、京思ひやり給ふ。風いたう吹きて、雪の降るさまあわたゞしう、荒  
 れ惑ふ。京にはいとかうしもあらじかしと、人遣りならず心細うて、  
 疎くて止みぬべきにやと思ふ契はつられけれど、恨むべうもあらず。懐  
 かしうらうたげなる御もてなしを、只暫しにても例の様に――思  
 ひつる事ども語らほゞやと、思ひつゞけて詠め給ふ。光もなく暮れ  
 果てぬ。  
 「かきくもり日影も見えぬ奥山に  
 心をくらす頃にもあるかな」  
 只かくておはするを、頼に皆思ひ聞えたり。  
 例の近き方に居給へるに、御几帳などを、風のあらはに吹きなせば、  
 中の君奥に入り給ふ。見苦しげなる人々も、かゞやき隠れぬる程に、  
 いと近う寄りて、いかゞ思さるゝ。心に思ひ残すことなく、念じ聞ゆ  
 るかひなく、御聲をだに聞かずなりにたれば、いとこそ侘しけれ。後ら

總

角



にひどく様子ぶりつゝ徘徊してゐる女達にも立勝つて。世に暫しも……私もこの世に暫くも生きて居られさうにもありません。深き山に……出家して深い山に籠りませう、只誠にお氣の毒な事と、跡にお残の中の君の事を存じて居ります。

答させ奉らむとて……大君に返答をおさせ申さうと思つて、中の君の事を引懸けて薫が仰しやると。かくはかなかりける……こんなに私は短命でしたものを貴方のお詞に背いて思遣りのない者のやうに見られたのも不本意ですから。

このとまり給はむ……跡に残る中の君を私同様にお召してお娶り下さるやうに一寸申上げましたのに、その通りにして下されたら死んで、も安心だらうにと、この事だけが怒めしい點で、思が残りさうで御座います。

異様に……貴女より外に心奪かれる女がありませんでしたのでお勤めに随はずにしました。

後めたくな思ひ……中の君の事は御心配なされますな。

拵へて……なだめて。

餘ある限して……祈禱の利益を現した旨を盡く呼んで。

かし給はゞいみじうつらからむ」と、泣く／＼聞え給ふ。物覚えすなりにたる様なれど、顔をばいとよく隠し給へり。よろしき隙あらば、聞えまほしき事も侍れど、只消え入るやうにのみなりゆくは、口惜しき業にこそ」と、いとあはれと思ひ給へる氣色なるに、いよ／＼せきとゞめ難くて、ゆゝしうかく心細げに思ふとは見えじ、とつゝみ給へど、聲も惜まれます。いかなる契にて、限なく思ひ聞えながら、つらき事多くて別れ奉るべきにか、少し憂き様をだに見せ給はゞなむ、思ひ醒ます節にもせむとまもれど、いよ／＼あはれげにあたらしく、をかしき御有様のみ見ゆ。肘などもいと細うなりて、影のやうに弱げなるものから、色あひ變らず、白う美しげになよ／＼として、白き御衣どものなよびかなるに、衾を押しやりて、中に身もなき雛を臥せたらむ心地して、御髪はいとちたうもあらぬ程にうち遣られたる、枕よりすべり落ちたる際の、艶々とめでたうをかしげなるも、いかになり給ひなむとするぞと、あるべき物にもあらざりめりと見るが、惜しきこと

我も……兼自身も。世の中を殊更に……現世を厭離せよとわざとお勤めになる佛様などの方便から、こんなにまあひどい心配は私におさせになるのであらう。消え果て給ひぬるは……大君の息がお絶えになつたのは、歎の切なる時の態度。

人の頑しと……人が愚癡な男と思はうがそれも頓着なさらぬ。あるにもあらず……生きても居られさうもなく。

女ばら……侍女達。

ゆゝしき事と……死者の側にゐるは忌むべき事と、脇へお連れ申した。さりとも……如何に大君が御重態でもこんなに急に死なれる事はあるまい。

かくながら……蟬といふ蟲は死んでも脱殻だけは残る、丁度その如くこの儘大君の亡骸を留め置いて見てゐられるものならばなあ。古今、空蟬は殻を見つゝも慰めつ深草の山懸だに立て。

今はの事……臨終の作法として受戒の形をする事。

只ありながらの……全く存生當時そのまゝの美しさに。

何事にて……どんな點でこの大君を、

類なし。こゝら久しく悩みて、ひきも繕はぬけはひの、心解けず恥かしげに、限なうもてなしさまよふ人にも多う勝りて、細かに見るまゝに、魂も静まらむ方なく悲し。遂にうち捨て給ひては、世に暫しともまるべきにもあらず。命もし限ありてとまるべうとも、深き山にさすらへなむとす。只いと心苦しうも、とまり給はむ御事をなむ思ひ聞ゆる」と、答へさせ奉らむとて、かの御事をかけ給へば、顔隠し給へる御袖を少し引き直して、かくはかなかりけるものを、思ひ限なきやうに思されたりつるもかひなければ、このとまり給はむ人を、同じ事と思ひ聞え給へと、ほのめかし聞えしに、違へ給はざらましかば、後安からましと、これのみなむ怨めしき節にて、とまりぬべく覺え侍る」と宣へば、かくいみじう物思ふべき身にやありけむ、いかにもいかに、異様にこの世を思ひか、づらふ方の侍らざりつれば、御おもむけに随ひ聞えすなりにし。今なむ悔しう心苦しうも覺え侍る。されども後めたくな思ひ聞え給ひそ」など拵へて、いと苦しげにし給へば、修



少しでも缺陷のあつた人と考へて戀心を醒す事が出来ようぞ。まことに世の中を……嘗て考へたやうに眞に佛様が私に世を捨てさせたる機縁として大君を見せ下されたのなら、悲しさも醒めてしまふやうな怖しく嫌な事を、この亡骸の上に發見させて下さいましと。ひたぶるに……一思ひに火葬にでもしてしまはうと。

例の作法——葬送の準備。空を歩むやうに……薰は野邊の送に足元も定まらぬ位踏躑として。限の有様——最後の葬式の様子。煙も……火葬の煙も盛に濛々と……たずと薄れてしまつたのも呆氣ない事だと。

數多くて——薰がいらつしやる爲に大勢詰めかけて。人の見思ふらむ……匂宮に捨てられた形ゆゑ、人の思はくも極りわるい我が身の心外さを。また亡き人に……中の君までが又亡宮よりも匂宮からも。思はずに……姉君が思の外に匂宮を無情だと思ひ申して居られた心持その儘解けず亡くなられた事を中の君が思召すと、匂宮に番づれて戴くのは誠に心外な筋合で

法の阿闍梨ども召し入れさせ、様々に驗ある限して加持參らせ給ふ。我も佛を念せさせ給ふこと限なし。世の中を殊更に厭ひ離れね、とすすめ給ふ佛などの、いとかくいみじき物は思はせ給ふにやあらむ、見るまゝに物の枯れ行くやうにて、消え果て給ひぬるは、いみじき業かな。(薰)引きとむべき方なく、足摺もしつべく、人の頑しと見むことも覺えず。限と見奉り給ひて、中の君の後れじと思ひ惑ひ給へる様も道理なり。(中君)あるにもあらず見え給ふを、例のさかしき女ばら、今はいとゆゝしき事と、引きさけ奉る。中納言の君は、さりとともいとかゝる事あらじ、夢かと思して、大殿油を近うかゝげて見奉り給ふに、隠し給ひつる顔も、たゞ寝給へるやうにて、變り給へる所もなく美しげにて、うち臥し給へるを、かくながら、蟲の骸のやうにても見る業ならましかばと、思ひ惑はる。今はの事どもするに、御髪を掻きやるに、さとうち匂ひたる、只ありしながらの匂に、懐かしう芳ばしきもあり難う、何事にてこの人を、少しもなのめなりしと思ひ醒さむ。まことに世の中を思ひ捨て果つるしるべならば、怖ろしげに憂きことの、悲しさも醒めぬべき節をだに見付けさせ給へと佛を念じ給へど、いとと思ひのどめむ方なくのみあれば、いふかひなくて、ひたぶるに煙にだになし果て、むと思して、とかく例の作法どもするを淺ましかりける。空を歩むやうに漂ひつゝ、限の有様さへはかなげにて、煙も多く結ばほれ給はずなりぬるも敢へなしと、あきれて歸り給ひぬ。御忌に籠れる人、數おほくて、心細さは少し紛れぬべけれど、中の君は、人の見思ふらむことも恥かしき身の心うさを、思ひ沈み給ひて、また亡き人に見え給ふ。宮よりも御訪らひいと繁く奉れ給ふ。思はずにつらしと思ひ聞え給へりし氣色も、思しなほらで止みぬるを思すに、いと憂き人の御ゆかりなり。

ある。本意遂げむ——出家の望を果さう。三條の宮——御母君女三宮。この君の御事の……中の君の御身の上が可愛さうなのに。かの宣ひし……大君のいはれた通り中の君を大君の形見としてども。下の心は……假令一心兩體でも、薰の本心では中の君に思ひ換へようとも思召さなかつたが。かう物思はせ……匂宮に預けて中の君にから心配をかけるよりは、自分の物として。只うち語らひて——只清い關係で親密に。疎ならず……並々ならずこの佛事を思つていらつしやる事と。おろかならず孝じ……薰は一方ならず追善供養をなさるけれど、眞の夫婦でないといふ制限があるので、喪服を着る譯にもいかぬのを。かの御方の……大君の御眷顧格別だつた侍女達の。黒う着換へ——黒い喪服に更め。くれなゐに……血涙を落して悲しんでも何となく物足らぬ感があるのは、喪服を着る譯にいかぬ事だ。その人の爲に着る喪服ゆゑ形見の色といつた。ゆるし色——薄い紅の色をいふ。

中を思ひ捨て果つるしるべならば、怖ろしげに憂きことの、悲しさも醒めぬべき節をだに見付けさせ給へと佛を念じ給へど、いとと思ひのどめむ方なくのみあれば、いふかひなくて、ひたぶるに煙にだになし果て、むと思して、とかく例の作法どもするを淺ましかりける。空を歩むやうに漂ひつゝ、限の有様さへはかなげにて、煙も多く結ばほれ給はずなりぬるも敢へなしと、あきれて歸り給ひぬ。御忌に籠れる人、數おほくて、心細さは少し紛れぬべけれど、中の君は、人の見思ふらむことも恥かしき身の心うさを、思ひ沈み給ひて、また亡き人に見え給ふ。宮よりも御訪らひいと繁く奉れ給ふ。思はずにつらしと思ひ聞え給へりし氣色も、思しなほらで止みぬるを思すに、いと憂き人の御ゆかりなり。



氷解けぬると……紅の衣を拂つた光澤が氷の解けたやうに美しく見え、いふかひなき御事……大君の御逝去はそれはそれとして、薫様が、折角我々がお馴染み申したものを、これ限りお出がなくなりさうなのを、思の外なる……不思議な薫様との御縁ではある、こんな深い御親切を、大君も中の君もお二人ともお聞入れなさらぬわい。

この御方には……中の君へ向つては、昔の御形見に……大君のお形見としてこの後は貴女を萬事お世話致さうと存じます。

この君は……中の君はきつぱりとした方で、大君よりも少し娘らしく、気が高きはおありなもの、ながめ暮して一薫はつくづく物思ひ勝にみつめて。

簾巻きあげて……以下白氏文集「遺愛寺鐘敬枕礎、香爐峯雪撥簾看し」を引用して書いてある。

今日も暮れぬ一拾遺……山寺の入相の鐘の聲ごとに今日も暮れぬときぞ悲しき。

おくれじと……永久に住み果てる事の出来るこの世でないから、自分も亡くなられた大君に後れまいと類に跡が慕はれる事だとの意。月

心は身を分け給へりとも、移ろふべくは覚え給はざりしを、(中君ニ)かう物思はせ奉るよりは、只うち語らひて、盡させぬ慰めにも見奉り、通はましものをなど思す、(薫ガ)かりそめに京にも出で給はず、かき絶え慰む方なく、籠りおはするを、世の人も疎ならず思ひ給へること、見聞きて、内裏よりはじめ奉りて、御訪らひ多かり、はかなくて日頃過ぎ行く。七日七日の事ども、いと尊くせさせ給ひつゝ、おろかならず孝じ給へど、限あれば御衣の色は變らぬを、かの御方の心寄せわきたりし人々の、いと黒う着換へたるをほの見給ひても、

「(薫)くれなるにおつる涙もかひなきは

かたみの色を染めぬなりけり」

ゆるし色の艶など、氷解けぬると見ゆるを、いと濡らし添へつゝ、詠め給ふ様、いとなまめかしう清げなり。人々覗きつゝ見奉りて、いふかひなき御事をばさるものにて、この殿のかく見慣らひ奉りて、今はとよそに思ひ聞えむこそ、あたらしう口惜しけれ、思の外なる御宿世

大を君に擬した。京の家……都の家々でこの上なく立派にしようとする磨いたのも、こんな美しくはないのに、と思はれる。

僅に「思ひ續くるぞ」に懸る句。生き出でて……大君が蘇生なされたら一緒に物語しようもの。戀ひわびて……亡き大君の戀しい苦しさに、跡を追うて自分も死にたい、その死ぬる薬が欲しいので雪山(中君ニ)にでも入つてしまはうかしらとの意。雪山は薬ある山ゆゑ死ぬる薬もあらうと想像しての歌と舊註の説。雪山はヒマラヤ山。半なる偶……半偈捨身の故事、即ち昔釋迦佛が雪山童子であつた時法を求め給うたに、夜叉が諸行無常、是生滅法の二句を教へ後半は飢ゑていへないといつたので、童子は我が身を與へようと約して更に生滅滅已、寂滅爲樂の後半を聴き得た、そこで約の如く童子は夜叉の口に身を投じたといふ。

ことつけて身を……求法にかこつけて鬼に身をやつてしまはうと。心ぎたなき……その實は戀ゆゑの願であるから潰れた求道心ではある。若きは一殊に若い侍女達は。老いたるは……老女達は、大君逝去の

にもおはしけるかな、かく深き御心ざしの程を、かたぐに背かせ給ひつるよ、と泣きあへり。この御方には、昔の御形見に、今は何事も聞え承はらむとなむ思ひ給ふる。疎々しく思し隔つな」と聞え給へど、(中君ハ)よろづの事うき身なりけりと、物のみつゝ、ましくて、又對面して物なども聞え給はず。この君はげさやかなる方に、今少し見めき氣高くおはするものから、懐かしう句ある心様ぞ劣り給へりけると、事に觸れて覺ゆ。

雪の掻きくらし降る日、終日にながめ暮して、世の人のすさまじきことといふなる十二月の月夜の、曇なくさし出でたるを、簾巻きあげて見給へば、向の寺の鐘の聲、枕を敬て、今日も暮れぬと、かすかなる響を聞きて、

「おくれじと空ゆく月をしたふかな

遂にすむべきこの世ならねば」

風のいと烈しければ、菰おろさせ給ふに、四方の山の鏡と見ゆる月影



爲にこんな立派な方を新君にしそ  
 こなつた残念さを猶更思ふ。  
 御心地の—大君の御病苦の。  
 只この宮の御事を—只句宮の御態度  
 を思の外に冷かだと御覽になつて。  
 流石に—それでも中の君へは大君  
 自身がそんな風に心配してゐると  
 はお知らせしたくないと、只御自  
 分の胸一つに疊んで。  
 物深げにも—分別深いやうな風も  
 なさらず。  
 故宮の—亡き父宮の夫を持つたと  
 いふ御遺言にまで背いた事よと。  
 人の御上を—中の君の御身の事を。  
 あぢきな事—大君に餘計な御  
 心配をおさせ申した事よと。  
 雪を分くべき—雪を踏分けて来るも  
 のがあらうかい。  
 うち敲き給ふ様—門の戸をお敲き  
 なさる様子で、さては句宮が入ら  
 したのだとお悟りになつて。  
 御忌は—四十九日の日数はまだ過  
 ぎないので遠慮すべきであるが、  
 句宮は氣がかりに堪へかねて。  
 思し歎きたる—中の君が句宮に見  
 捨てられた事を大君が歎かして居ら  
 れた御様子の中の君は恥かしかつ  
 たのに、そのまゝ大君は句宮のお  
 仕打を見直す機会もなくお亡くな  
 りなされたにつけても、假令今後

に、汀の水れるあたり、いと面白し。京の家の、限なくと磨くも、えか  
 うはあらぬはやと覺ゆ。僅に生き出でて物し給はましかば、諸共に聞  
 えなましと思ひ續くるぞ、胸よりあまる心地する。  
 「戀ひわびて死ぬる藥のゆかしきに  
 雪の山にやあとを消なまし」  
 半なる偶教へけむ鬼もがな、ことつけて身をも投げむと思すぞ、心  
 ぎたなき聖心なりける人々近う呼び出で給ひて、御物語などせさせ  
 給ふ。けはひなどのいとあらまほしう、のどやかに心深きを、見奉る  
 人々、若きは心にしめて、めでたしと思ひ奉る。老いたるは、只口惜し  
 ういみじき事をいとと思ふ。御心地の重くならせ給ひしことも、只こ  
 の宮の御事を思はずに見奉り給ひて、人笑へにいみじと思すめりし  
 を、流石にかの御方にはかく思ふと知られ奉らじと、只御心ひとつに  
 世を恨み給ふめりし程に、はかなき御菓子をも聞し召し觸れず、只弱  
 りになむ弱らせ給ふめりし。うはべには、何ばかり事々しく物深げに

句宮の御態度が改つたにしても何  
 の甲斐もないやうに、中の君は思  
 込んでいらつしやるので。  
 誰も—侍女達一同。  
 道理をきこえ—お會ひなさるがよ  
 いといふ筋合を申上げて。  
 日頃のおこたり—句宮が日頃の無  
 沙汰を一生懸命辯解なさるのを。  
 これもいと—中の君も誠に命も危  
 い位で、大君の跡をお追ひなさる  
 のではあるまいかと思はれる御様  
 子のお可愛さうなのを。  
 御身を捨て—句宮は後日の首尾な  
 どはまよと思召して。  
 物越ならで—直接中の君にお目に懸  
 りたいものです。  
 物覺ゆる程—頭がはつきりして分  
 別がつきましたらお目にかゝりま  
 せう。  
 さるべき人—心きいた侍女。  
 御有様に違ひて—中の君のお仕向  
 に背いて冷淡なやうなお仕打が過  
 去も今も甚だ心外だつた從來の句  
 宮の罪は、成程さうも中の君がお  
 怒みなされさうな事ですけれど、  
 程好い加減にこそお責めなさるが  
 よう御座いませう。  
 かやうなる事—句宮はそんな手厳  
 しい取扱はまだお受けになつた事  
 のないお心持から嘸お困りでせう。

ももてなさせ給はで、下の御心の限なく何事も思すめりしに、故宮の  
 御誠にさへ違ひぬることと、あいなう人の御上を思し惱みそめしな  
 り」と聞えて、折々に宣ひし事など語り出でつゝ、誰も—泣き惑ふ  
 こと盡きせず。我が心からあぢきな事と思はせ奉りけむこと、取り  
 返さまほしくなべての世もつらきに、念誦をいとあはれにし給うて、  
 まどろむ程なく明し給ふに、まだ夜深き程の雪のけはひいと寒げな  
 るに、人々聲あまたして、馬の音聞ゆ。何人かは、かゝるさ夜中に雪を  
 分くべきと、大徳達も驚き思へるに、宮、狩の御衣にいたうやつれて、  
 濡れ—入り給へり。うち敲き給ふ様、さななりと聞き給ひて、中納  
 言は隠ろへたる方に入り給ひて、忍びておはす。御忌は日數残りたり  
 けれど、心もとなく思しわびて、夜一夜、雪に惑はされてぞおはしまし  
 ける。  
 日頃のつらさも少し紛れぬべき程なれど、對面し給ふべき心地もせ  
 ず、思し歎きたる様の恥かしかりしを、やがて見直され給はずなりし

總角



さかしがり給へば一薫が才覺らしい口出しをなさるので。この君の一薫の。聞えし様をも一前々申上げた堅いお約束も。人遣りならず……我が心がらで匂宮が歎いていらつしやるのも、中の君は流石にお氣の毒で。千々の社……多くの神々を證人として誓ひつる事のおまたになりぬれば千々の社も耳馴れぬらむ(細流)行く先長きこと一末かけての事。いかでかく……どうしてこんなにお口先がうまいのかと、中の君は心外だけれど。よそにてつれなき……餘所々々しく音づれても下さらないのは疎ましいが、それよりは。たをやぎぬべき一和いでしまひさうな。一方にも……中の君は一概に嫌ひぬく事も出来ぬわいと。來し方を……今までの貴方のお仕打を思出しても當にはなりませんのに、遠い將來の事までかけて何を信頼させようかと思ひやうのでせうか。たのむは下二段の終止形。なか／＼いぶせう……匂宮は都で遮に思つてゐたよりも會つて却て氣

も、今より後の御心あらたまらむは、かひなかるべく思ひしみて物し給へれば、誰もく、いみじう道理をきこえ知らせつ、(中君ハ)物越にてぞ、日頃のおこたり盡させず宜ふを、つく／＼と聞き給へる。これもいとあるかなきかにて、後れ給ふまじきにやと聞ゆる御けはひの心苦しさを、後めたういみじと、宮も思したり。今日は御身を捨て、とまり給ひぬ、物越ならでと、いたく詫び給へど、(中君)今少し物覺ゆる程にて侍らば」とのみ聞え給ひてつれなきを、中納言も氣色聞き給ひて、さるべき人召し出でて、御有様に違ひて、心淺きやうなる御もてなしの、昔も今も心憂かりける月頃の罪は、さも思ひ聞え給ひぬべきことなれど、憎からぬ様にこそ勘へ奉り給はめ。かやうなる事まだ見知らぬ御心にて、苦しう思すらむ」など、忍びてさかしがり給へば、(中君ハ)この君の御心も恥かしうて、え聞え給はず「あさましう心憂くおほしけり。聞えし様をもむげに忘れ給ひけること」と、疎ならず歎き暮し給へり。夜の氣色いとゞはげしき風の音に、人遣りならず歎き臥し給へ

が揉めて不安である。行末を……行末短いこの人生と思召すならば、せめて目の前だけでも私の言葉を素直にお聞きなさい。見る程なき……はかなく短いこの世だのに、徒に罪障を重ねるやうな邪推などなされずな。人わろく一不體裁。恨みむも……中の君が恨むのも尤な譯ではあるが餘に憎らしいひどいお取扱だと。ましていかに……まして自分が久しく音づれなかつたのを、中の君がどれ程恨んだらうかと、匂宮は我が身に引比べて様々可愛さうに思ひ當られた。中納言の……薫が主人顔にこの山莊に住み慣れた。人も數多して……侍女達も大勢して食事を差上げたりしてゐるのを。ほれ／＼しきまで……氣拔けのしたやうな風に見える位。心苦し……匂宮はお氣の毒に御覽になつて、しみ／＼と悔みの挨拶をなさる。ありし様など……大君の生前の有様など、今は無益の事ながらこの匂宮にこそお話し申上げようと、薫は思召すけれど。餘に愚癡らしく匂

るも流石にて、例の物隔て、聞え給ふ。千々の社をひきかけて、行く先長きことを契り聞え給ふも、いかでかく口馴れ給ひけむと心憂けれど、よそにてつれなき程の疎ましさよりは、あはれに人の心もたをやぎぬべき御様を、一方にもえ疎み果つまじかりけりと、(中君ハ)只つく／＼と聞き給うて、  
「來し方を思ひいづるもはかなきを  
行末かけてなに頼むらむ」  
とほのかに宜ふ。なか／＼いぶせう心もとなし。  
「行末をみじかきものと思ひなば  
目のまへにだに背かざらなむ  
何事もいとかう見る程なき世を、罪深くな思しないそ」と、よろづに拵へ給へど、心地も惱ましくなむ」とて、入り給ひにけり。人の見るらむもいと人わろくて、歎きあかし給ふ。根みむも道理なる程なれど、あまりに人憎くもと、(匂宮ハ)つらきに涙の落つれば、ましていかに思ひ給ひ

總角



宮に見られようかと遠慮して。女ならば……私が女ならば必ず薫に戀慕するだらうと、句宮は自分のとんでもない浮氣癖から思ひつかれるにつけても、若しや中の君が薫の方に傾きはせぬかと何だか不安を感じたので。

いかで人の謗をも……どうか世間の非難や夕霧などの恨も受けないやうにして、中の君をうまく京に移り住ませたいと、句宮は思召す。かくつれなき……中の君はまだこの通り打解けず句宮は氣になるもの、帝などのお耳に入つたら非常に首尾が悪からうとお氣遣ひなされ。

疎ならず言の葉を……並々ならず句宮が深切に仰しやるけれど、中の君は相手の無情なのは苦しいものといふ一端でも句宮に思ひ知らせて上げたくて。

かゝらぬ處だに……こんな宇治のやうな片田舎でなくてすらも。

御業……大君の御法事。

宮より……句宮からも僧にやるお布施など、仰山な位に送つて御申問なされた。

かくてのみやは……こんな風にはかりして、新年になつてまでも歎き暮す譯にもいくまい、それに諸方

つらむと、様々あはれに思し知らる。中納言のあるじ方に住み馴れて、人々安らかに呼び使ひ、人も數多して物まゐらせなどし給ふを、あはれにもをかしようも御覽す。いといたう瘠せ青み、ほれくしきま

で物を思ひたれば、心苦しと見給ひて、まめやかに訪らひ給ふ。ありし様など、かひなき事なれど、この宮にこそは聞えめと思へど、うち出でむにつけてもいと心弱く、かたくなしく見え奉らむに憚りて、言少ななり。音をのみ泣きて日數經にければ、顔變りのしたるも、見苦しくはあらで、いよ／＼物清げになまめいたるを、女ならば必ず心移りなむと、おのが怪しからぬ御心慣らひに思し寄るも、なま後めたかりければ、いかで人の謗をも恨をもはぶきて、京に移ろはしてむと思す。かくつれなきものから、内裏わたりにも聞し召して、いと悪しかるべきに、思し侘びて今日は歸らせ給ひぬ。疎ならず言の葉をつくし給へど、つれなきは苦しきものと、一節を思し知らせまほしくて、心解けずなりぬ。

からも、薫が顔出しもせず宇治に閉籠つて居られる事に不足をいつて來られるので。

かくおはし慣らひて……こんなに薫が逗留し慣れて道俗とも出入多く賑かであつたが、歸京されたらその名残もなく、ひつそりになつてしまふだらうと侘しく思つてゐる侍女達は。

いみじかりし折……大君逝去の時。うち靜まりて……今は落着いてゐるだけに餘計悲しい氣がする。

をかしかなる……興趣ある機會毎に薫が大君と御物語や御文通があつたこの年頃よりも、かうしてゆつたりと此處に落着いて過していらつしやる近頃の薫の御様子がい

今は限に……もうこれきりお見上げ出來なくなる事かと涙に沈みあつてゐる。おぼほれは溺れと同語。

かの宮よりは……句宮からは中の君へ。近う渡い奉るべき……京の中で近い場所へ貴女をお移し申す方法を考へました。

後の宮……句宮がかう取計らはれた譯は、御母明石中宮が中の君の事をお聞になつて、薫も並大抵ならず大君に熱申してゐられた處から見れば、成程通り一通でなく句宮も熱心なのだらうとお可愛さうに

年の暮方には、かゝらぬ處だに、空の氣色例には似ぬを、荒れぬ日な

く降り積む雪に、うち詠めつゝ、明し暮し給ふ心地、盡させず夢のやうなり。御業も嚴めしうせさせ給ふ。宮よりも、御誦經など、こちたきま

で訪らひ聞え給ふ。かくてのみやは新しき年さへ歎き過さむ。此處彼處にも、覺束なくて閉ち籠り給へることを聞え給へば、今はとて歸し給はむ心地も、譬へむ方なし。かくおはし慣らひて、僧も俗も人繁かり

つる名残なくならむを思ひ侘ぶる人々、いみじかりし折の、さしあたりて悲しかりし騒よりも、うち靜まりていみじく覺ゆの時々をり節、をかしかなる程に聞えかはし給ひし年頃よりも、かくのどやかに

て過し給へる日頃の御有様はひの、懐かしくなさせ深う、はかなき事にもまめなる方にも、思ひやり多かる御心ばへを、今は限に見奉り

さしつること、とおぼほれ合へり。かの宮よりは、猶かう參りくる事もいと難きを思ひ侘びて、近う渡い奉るべき事をなむ、たばかり出でたる」と聞え給へり。後の宮聞し召しつけて、中納言もかく疎ならず



思召して、二條院の西の對に中の君を移して時々お通ひなさるがよいと、御方に……女一宮が二條院にお住ひだから、中の君を引取るといふ口實で、或はその侍女にでもしようといふ御母中宮の思召ではないか知らと、二條院に引取つたら、ともかく二條院に引取つた上は何の心配もなく、始終中の君に逢へるの嬉しくて、それでかうした手紙を送られたのであつた。さななりと……さういふ次第だと、三條の宮……自分こそ三條の宮を修築し終へて大君を移り住ませようと思つてゐたものを、大君が亡くなられたから、中の君を大君の身代りとして引取るべきであつたものをなど。

思ひほれてゐたなるは、げにおしなべて思ひ難うこそは、誰も思さるらめと、心苦しがり給ひて、二條院の西の對に渡り給ひて、時々も通ひ給ふべく、忍びて聞え給ひければ、女一の宮の御方にこと寄せて思ひなるにやと思しながら、覺束なかるまじきは嬉しくて、宜ふなりけり。さななりと中納言も聞き給ひて、三條の宮造り果て、渡り奉らむことを思ひしものを、かの御代りになすらへても見るべかりけるをなぞ、ひき返し心細し。宮の思し寄るめりし筋は、いと似げなき事に思ひ離れて、大方の御後見は、我ならではまた誰かは、と思すとや。

早蕨

この巻は蕨二十五歳の春の事。宇治の妹姫は朝夕涙にのみ打沈んでゐた。或時山の阿闍梨から蕨や土筆など贈つて來た。それらにつけても妹姫は父宮在世の時が偲ばれた。蕨の悲歎も妹姫に譲らない。蕨は時々匂宮を訪うて、唯一の話を相手として自ら慰めてゐた。夕霧は第六の姫君を匂宮に上げたいと思つてゐたが、匂宮は御母明石中宮のお許しで、宇治の妹姫を新夫人として二條院に迎へてしまつたので、大に失望した。それでは六の姫を蕨にと思つて、人傳に仄めかしてみたら、人のつらさ世の果敢なきをしみ／＼と見た蕨は、最早さうした話には氣が向かなかつた。

蕨し分かねば、春の光を見給ふにつけても、いかでかく永らへにける月日ならむと、夢のやうにのみ覺え給ふ。行きかふ時々、花鳥の色をも音をもおなじ心に起き臥し見つ、はかなき事をも、本末を取りていひ交し、心細き世の憂さもつらさも、うち語らひ合はせ聞え

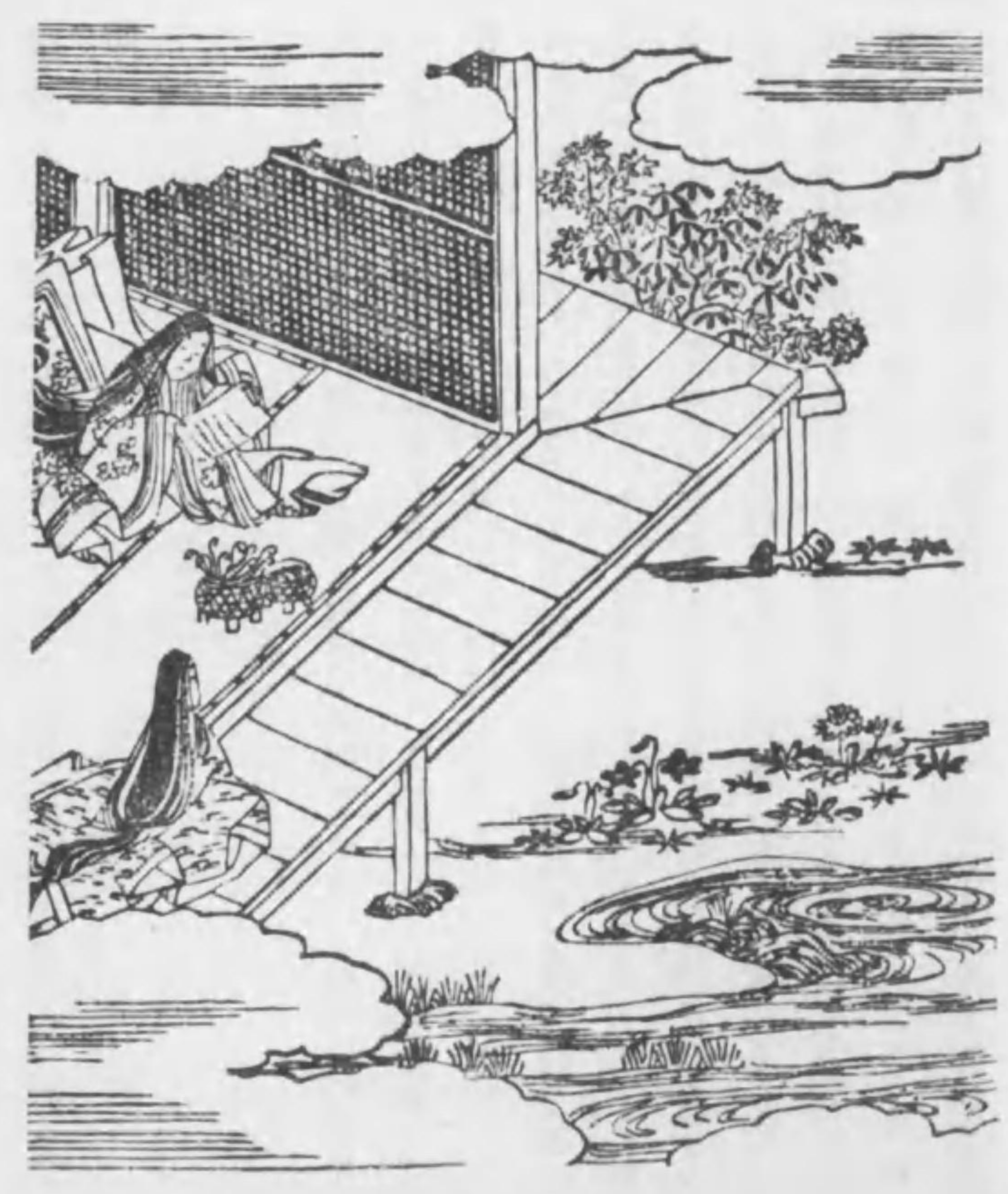
蕨し分かねば一日の光は蕨でもどこでも區別なく照すものゆゑ、侘しい宇治の山莊をも照して。古今「日の光敷しわかねばいそのかみ古りにし里も花は咲きけり」。いかでかく……中の君は歎き死にもせず、どうしてこの通り生き永らへた月日ではあらうと。行きかふ時々交代循環する季節。おなじ心に大君と共に同じ心持で。はかなき事をも……つまらぬ歌などを詠むにも、一人が本即ち上の句を詠めば一人が末即ち下の句を附けるといふ風にして。聞き知る人も……今では話をしんみり聞いてくれる人も無いにつけ。宮のおはしまさず……父君八宮の御逝去當時の悲しさよりも。



世にとまるべき……生きられるだけの壽命は極つてゐるもの故。  
 一所……中の君をさす。  
 念じ……氣にかゝつて佛様に祈り申して居ります。  
 供養じて侍る……持つて来てくれました物の初穂です。佛法僧に物を献ずるを供養といふ。  
 手は……筆蹟は。  
 ひき放ちてぞ……ぼつり／＼と一字づつ離して書いてある。  
 君にとて……八宮御存生當時から貴女方にといつて多年春ごとに摘んで上げた蕨ゆゑ、今年もこれは常例を忘れぬ初蕨で御座いますとの意。積みに摘みをかけた。  
 御前に……中の君の御前に御披露下さい。これは侍女達宛の手紙故。大事と……この歌は阿闍梨が一生懸命に推敲して詠み出したものだからと、中の君が思召すと。  
 歌の心ばへも……歌の趣も大層おもしろくて。  
 等閑に……私の身を矢張深切に思つて下さるのだと思はれるこの阿闍梨のお手紙を。  
 めでたく好ましげに……立派に體裁のよく並べ盡して書いてある句宮のお手紙よりは。  
 この春は……亡き父宮の居られた峯

しにこそ慰む方もありしか。をかき事あはれなる節をも、聞き知る人もなきまゝに、よろづ掻きくらし、心ひとつを碎きて、宮のおはしまさずなりにし悲しさよりも、やゝうち勝りて戀しく陪しきに、いかにせむと、明け暮るゝも知らず惑はれ給へど、世にとまるべき程は、限ある業なりければ、死なれぬも淺まし。阿闍梨の許より、「年改まりては、何事かおはしますらむ。御祈はたゆみなく仕うまつり侍り。今は一所の御事をのみなむ、念じ聞えさする」など聞えて、蕨土筆をかき籠に入れて、「これは童への供養じて侍る初穂なり」とて奉れり。手はいと悪しうて、歌はわざとがましく、引き放ちてぞ書きたる。  
 阿闍梨  
 「君にとてあまたの春をつみしかば  
 常をわすれぬはつ蕨なり  
 御前に讀み申さしめ給へ」とあり。大事と思ひまはして、詠み出だしつらむと思せば、歌の心ばへもいとあはれにて、等閑にさしも思されぬなめりと見ゆる言の葉を、めでたく好ましげに書き盡し給へる

の蕨を下されたのは父宮の形見とも思はれて嬉しう御座います。が、今年の春はこれを見て喜ぶ姉君も既に亡くて悲しい事で御座いますとの意。形見に篋を懸けた。  
 句多くおはする人の……優婉な御様子の中、中の君が。  
 昔人にも……亡き大君にも似ていらつしやる。  
 並び給へりし……一體御姉妹一緒の頃は別様の美しさで。  
 うち忘れては……中の君お一人となられてからは大君の亡くなられた事はつい忘れて、ふと大君ではないかと思はれる位似通つていらつしやるのを。  
 中納言殿の……蕨が。  
 おなじくは……同じ姉妹なら中の君でもよからうに、どうして蕨の妻におなりなさる御宿縁でなかつたのかなあ。  
 かの御あたりの人……蕨の家來達。  
 聞き交し給ひけり……蕨と中の君と互にお聞き知りなされた。  
 盡きせず……蕨は限なく大君を追慕してぼんやりなされて。  
 いや目……涙ぐんだ日つき。  
 げにうちつけの……ほんに蕨の大君を思つて居られた事は一時の浅い心ではなかつたのだと。





宮は……匂宮は宇治へお通ひなさる事が非常に事情が面倒で容易でないから、中の君を京へお移し申さうと思ひ立たれた。  
 内宴——禁中正月二十一日の公事で内内の節會、仁壽殿で群臣を賜はり詩を作つて奉るのを御前で披露し、終つて宴を賜はる。  
 心に餘ること——大君を失つて胸に餘る悲しみ。  
 兵部卿の宮——匂宮。  
 例の御心よせなる梅——あの譬で紫上から形見として戴いたお氣に入り紅梅。  
 下枝を……その紅梅の下枝を薫が折つて來られた香が。  
 折る人の……この花はまだ十分咲き出でないで香を内に籠めてゐるのは、丁度折つて來た貴方のお心に似た花で、すねえ、貴方は表面何食はぬ顔して内々は中の君を愛していらつしやるのでせう。  
 見る人に……只眺めてゐる私にそんないひ懸りをなさるなら、私もその積りで中の君を自分の物にするのでしたのにとの意を、花の枝によせて詠んだ。かごとは假托け言。煩はしく——厄介なお邪推です。御あはひ——お問柄。かの山里——宇治。

人の御文よりは、こよなく目とまりて、涙もこぼるれば、返事かゝせ給ふ。

「中君この春は誰にか見せむなき人の

かたみにつめる峰のさわらび」

使に祿取らせさせ給ふ。いと盛に匂多くおはする人の、様々に御物思に、少しうち面瘦せ給へるしも、いとあてになまめかしき氣色勝りて、昔人にも覚え給へり。並び給へりし折はとりくにて、更に似給へりとも見えざりしを、うち忘れては、ふとそれかと覺ゆるまで通ひ給へるを、(侍女達)中納言殿の、骸をだにとどめて見奉るものならましかばと、朝夕に戀ひ聞え給ふめるに、おなじくは見え奉り給ふ御宿世ならざりけむよ」と、見奉る人々は口惜しがる。かの御あたりの人の通ひくる便に、御有様は絶えず聞き交し給ひけり。盡きせず思ひほれ給ひて、新しき年ともいはず、いや目になむなり給へると聞き給ひても、げにうちつけの心淺さには物し給はざりけりと、いと今ぞあはれも

宮は聞え給ふ——匂宮は薫に仰しやら過ぎにし方の……亡くなつた大君の事が限なく悲しいといふことや、大君逝去當時から今日まで薫自身あはれにもをかしうも——の下脱文があるらしい。假に「ありし事ども」を補ふ。  
 さばかり色めかしう……それ程情趣に惚れる深腕い匂宮の御性格では、自分の事は勿論、人の身の上の事にまで。  
 かひなくしくぞ……薫の方で話し甲斐がある程合鍵をお打ちになる。間はあやなき——古今、春の夜の間はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠る。  
 かたみに聞きさし……互に話を聞きかけて中止なさるべきでもなく。え晴るけやり給はで——思ふ存分語り盡す事がお出来にならず。  
 世に例……世間に類例の少い不即不離な薫と大君との間の關係を。いとさのみは……さう清らかな關係ばかりではなかつたでせう。残ありげに……匂宮は薫が隠し立てをしてゐるやうに疑つてお問ひなさるのが、わが心から付度するけしからぬ性癖なのだ。

深く思ひ知らるゝ宮はおはしますことの、いと所狭くあり難ければ、京に渡し聞えむと思し立ちにたり。

内宴など物騒がしき頃過して、中納言の君、心に餘ることをも、また誰にかは語らはむと思し侘びて、兵部卿の宮の御方に參り給へり。しめやかなる夕暮なれば、宮うち詠め給ひて、端近くぞおはしましたける。箏の御琴掻き鳴らしつゝ、例の御心寄せなる梅の香をめでおはする。下枝を押し折りて參り給へる、匂のいと艶にめでたきを、折をかしう思して、

「匂折る人のこゝろにかよふ花なれや

色には出でずしたに匂へる」

と宣へば、

「薫見る人にかごと寄せける花の枝を

心してこそ折るべかりけれ

煩はしく」と、戯れ交し給へる、いとよき御あはひなり。こまやかなる



物に心得給ひて一宮は萬事に抜目なく察しがよくて、薫の悲しい胸が暗れる程。  
 さし増し一深めて。  
 すかされ奉りて一薫は釣込まれて。宮もかの人近く……一宮も中の君を近日中に京に迎取らうとなさるに就いての準備の事などを。  
 あいなく自らの……中の君を貴方にお世話したのは工合わるい事でお世話を存じて居ります。  
 飽かぬ昔の……いくら思つても思ひ足らぬ大君の形見を中の君より外には求めやうもありませんので、只普通の関係としては何事につけても中の君をお世話して上げるべき筋合の人と存じて居りますのを、若しや貴方は私に妙な野心でもあるやうに思召すのでせうか。  
 かの異人と……大君が嘗て自分と同一人と思つて中の君に思ひ換へてくれるやうにいはれた御意向の事をも。  
 岩瀬の森の……間違へて中の君の寢所に入つたあの夜の事は一宮に話さなかつたとの意か。引歌萬葉に「神なびの岩瀬の森の呼子鳥いたくな鳴きそ我こひまさる」とあるが此處には叶はぬから、恐らく他にあらうと思はれるが未詳。

御物語どもになりては、かの山里の御事をぞ、まづはいかにと宮は聞え給ふ。中納言も、過ぎにし方の飽かず悲しきこと、そのかみより今日まで思の絶えぬよし、折々につけてあはれにもをかしようも、泣きみ笑ひみとかいふらむやうに聞え出で給ふに、まして、さばかり色めかしう涙もろなる御癖は、人の御上にてさへ袖も絞るばかりになりて、かひなくしくぞあひしらひ聞え給ふめる。空の氣色はた、げにぞあはれ知り顔に霞み渡れる。夜になりて、烈しう吹き出づる風の氣色、また冬めきていと寒げに、大殿油も消えつ、闇はあやなきたどくしきなれど、かたみに聞きさし給ふべくもあらず、盡きせぬ御物語をえ暗るけやり給はで、夜もいたう更けぬ。世に例あり難かりける中の御睦を、「いでさりとも、いとさのみはあらざりけむ」と、残ありげに問ひなし給ふぞ、わりなき御心慣らひなめるかし。さりながらも、物に心得給ひて、歎かしき心のうちも明らむばかり、かつは慰め、又あはれをもさし増し、様々に語らひ給ふ御様の、をかしきにすかされ奉りて、げに

心の中には……薫の心の中では、大君を失つた慰めとしては不足だとして、その形見として、ほんにこんな匂宮のやうにしてこそ中の君を自分が世話すべきであつたのにと。  
 常にかうのみ……始終こんな風にはかり中の君の事を思つてあたらとんでもない戀心が萌して來るかとも知れぬ、さすれば四方八方皆の爲に面白からず馬鹿な男よといはれるだらうと、すつかり中の君を思切られた。  
 さても……それにしても中の君が匂宮の方へ移られるにしても本當に親身になつてお世話するものは私より外に誰があらうぞと薫は思召すので、お引移りの支度など用意してお上げになる。  
 彼處にも一宇治でも。  
 若人一若い女房。  
 人々は……侍女達は満足げに、早く行きたく思つてゐるけれど、今はとて……中の君は愈といつて住み馴れたこの山莊を見捨てようのも、古今一いざこゝに我が世は経なむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し……によつて伏見といつた。せめて心ごはく……強ひて強情張つて此處に辛抱してゐたところ、

心に餘るまで思ひ結ばるゝことども、少しづつ語り聞え給ふにぞ、こよなく胸の隙あく心地し給ふ。宮も、かの人近く渡し聞えてむとする程の事ども、語らひ聞え給ふを、いと嬉しきことにも侍るかな。あいなく自らの過ちとなむ思ひ給へらるゝ。飽かぬ昔の名残を、また尋ねべき方も侍らねば、大方には何事につけても、心寄せ聞ゆべき人となむ思ひ給ふるを、もし便なくや思し召さるべきこととて、かの異人とな思ひ分きそと、譲り給ひし心掟をも、少しは語り聞え給へど、岩瀬の森の呼子鳥めいたりし夜の事は残したりけり。心の中には、かく慰め難き形見にも、げにさてこそかやうにても扱ひ聞ゆべかりけれと、悔しきことやうく勝り行けど、今はかひなきもの故、常にかうのみ思はゞ、ゆるまじき心もこそ出でくれ、誰が爲にもあぢきなく鳴瀝がましからむと思ひ離る。さてもおはしまさむにつけても、まことに思ひ後見きこえむ方はまた誰かはと思せば、御渡りの事ども、心まうけさせ給ふ。



えらい事もあるまいし。浅からぬ……深い貴女との縁も通ふに不便な爲餘儀なく切れてしまはねばならぬ程なこなお住居だのに、どう御分別がつかまりましたか。二月の……御引移りは二月一日頃と定められたので。峯の霞の……古今、春霞立つを見捨て、ゆく雁は花なき里に住みやならへる。おのが常世……京に行つても旅の宿のやうなもので、どうせ自分の永久の住家でもないのにとの意。雁は常世の國の鳥といはれるので上の引歌から聯想して書いた。御服も……喪服も期日に限のある事だから。禊除服の時河原に出て汚を祓ひ去る式。禊も浅き……禊をするのも故人に對して薄情のやうな氣がする。浅きは禊の縁語。親一所は……母君だけはお顔も覺えないので。この度の……姉君の爲の喪服を重くしよう。大君は姉とはいへ親のやうに世話してくれた故。さるべき故も……さうした規定もない事ゆゑ中の君は強ひてする譯にもいはず。

彼處にも、よき若人童などもとめて、人々は心ゆき顔にいそぎ思ひたれど、今はとてこの伏見を荒し果てむも、いみじう心細ければ、歎かれ給ふこと盡させぬを、さりとて又、せめて心ごはく堪へ籠りても猛かるまじく、「浅からぬなかの契も絶え果てぬべき御住居を、いかに思し得給ふぞ」とのみ恨み聞え給ふも、すこしは道理なれば、いかに思からむと思ひ亂れ給へり。二月の朔日ごろとあれば、程近くなるまゝに、花の木どもの氣色ばむも残ゆかしく、峰の霞の立つを見捨てむことも、おのが常世にてだにあらぬ旅寝にて、いかにしたなく人笑はれなることもこそなど、よろづにつましく、心一つに思ひ明し暮し給ふ。御服も限あることなれば、脱ぎすて給ふに、禊も浅き心地ぞする。親一所は、見奉らざりしかば戀しきことも覺えず、その御代りにも、この度の衣を深く染めむと思し宜へど、流石にさるべき故もなき業なれば、飽かず悲しきこと限なし。中納言殿より、御車、御前の人々、博士など奉れ給へり。

御前の人々……お先供の人々。博士……祓をする爲の陰陽博士。はかなしや……貴女が喪服を着て居られた間に霞引く初春も立つて今は花やかな衣にお着換なされる時にもなりました。かうして悲は依然として日月のみ過ぎてゆくのが誠にはかない感じがしますとの意。御渡りの……御引移りの際に召使達に下さるべき品々を。しなな……階級に應じて。忘れぬ様なる……舊情を忘れぬ蕪の御深切が類稀で、兄弟などでもまあかうまでは出来ぬ譯のものですなどと、侍女達は中の君にお諭し申上げる。あざやかならぬ……はででない老女達の心では、かうした實用向の蕪のお世話を中心から有難がつて。時々も……今まで時々もお見上げ申してゐて、愈蕪を離れて匂宮の方へ行かれるのに、中の君はどんなに物足らず蕪を戀しく思召す事だらうと噂し合つてゐる。自らは……蕪自身は中の君のお引移りが愈明日と決した日のまだ早朝に宇治へお出になつた。今はやう……大君が存命ならば今頃は次第に馴染んで、自分こそ匂宮などよりも先にこんな風に大

「はかなしやかすみの衣たちしに」  
花のひも解くをりも來にけり」  
げに色々いと清らにて奉れ給へり。御渡りの程の被物どもなど、事々しからぬものから、しなな……にこまやかに思しやりつゝ、いと多かり。折につけては、忘れぬ様なる御心寄せのあり難く、兄弟なども、えいとかうまではおはせぬ業ぞなど、人々は聞え知らず。あざやかならぬ舊人どもの心には、かゝる方を心にしめて聞ゆ。若き人々は、時々も見奉り慣らひて、今はと異様になり給はむを、さうなしく、いかに戀しく覺えさせ給はむ」と聞え合へり。自らは、渡り給はむこと明日とてのまだつとめて、おはしたり。例の客亭の方におはするにつけても、今はやう……物馴れて、我こそは人より先に、かうやうにも思ひそめしかなど、ありし様、宜ひし心ばへを思ひ出でつゝ、流石にかけ離れ、殊の外にははしたなめ給はざりしを、我が心もて怪しうも隔たりしかなど、胸痛く思ひ續けられ給ふ。かいま見せし障子の穴も思



君を引取りたいと思つてゐたのに  
 など思ひ。以下蕭の心。  
 ありし様……大君生前の御様子や仰  
 しやつた心持などを蕭は思出しつ  
 つ、大君が膝かぬながらも流石に  
 寄り付かれぬせぬやうにひどく取  
 扱つて私に恥かせるやうな事は  
 なさなかつたものを、私自身の  
 煮え切らぬ心から妙な風に隔つて  
 しまつた事だつたわいと。  
 かいま見せし……推が本の「一六四四  
 頁参照」  
 この中をば……中の君の居られる内  
 部を締切つてあるので。  
 明日の渡りも……明日の御引移りの  
 事もお考へにならず。渡りは涙の  
 川から縁をひいた。  
 月頃の……永く御無沙汰した事も何  
 といふ事なしに気がかりに存ぜら  
 れますので、その心持の一端だけ  
 でも打明けてお話し申上げて。  
 なさし放たせ給ひそ。他人行儀に疎  
 外なさらぬいで下さい。  
 いとあらぬ世の……尙々知らぬ世  
 に来たやうな気がします。大君が  
 居ぬので。  
 はしたなしと……ひどい取扱だと蕭  
 に思はれようとも思はぬが。  
 いさや……どうした譯かまあ。  
 いとどはかん／＼しからぬ……只さへ

ひ出でらるれば、寄りて見給へど、この中をばおろし籠めたれば、い  
 とかひなし。内にも人々思ひ出で聞えつ、うち響みあへり。中の君  
 は、まして催さるゝ御涙の川に、明日の渡りも覚え給はず、ほれ／＼し  
 げにて詠め臥し給へるに、月頃のつもりも、そこはかとなけれどいふ  
 せく思ひ給へらるゝを、片端もあきらめ聞えさせて慰め侍らばや。例  
 のはしたなく、なさし放たせ給ひそ。いとあらぬ世の心地し侍り」と  
 聞え給へれば、はしたなしと思はれ奉らむとしも思はねど、いさや、心  
 地の例のやうにも覺えずかき亂りつ、いとどはかん／＼しからぬ僻  
 事もやと、つゝ、ましうてなむと、苦しげにおぼいたれど、いとほし  
 どこれかれ聞えて、中の障子の口にて對面し給へり。いと心恥かしげ  
 になまめきて、又この度はねび勝り給ひにけりと、目も驚くまで匂多  
 く、人にも似ぬ用意など、あなめでたの人やとのみ見え給へるを、姫  
 君は、面影さらぬ人の御事をさへ思ひ出で聞え給ふに、いとあはれと  
 見奉り給ふ。盡きせぬ御物語なども、今日は言思すべくや」などいひ

心配なのに尙々つまらぬ御應答で  
 も申上げようかと、氣懸りなので  
 會ふのはどうかと。  
 いとほしなど……蕭へお氣の毒です  
 から、などと侍女達が中の君に申  
 上げて。  
 いと心恥かしげに……蕭は見る人が  
 きまりの悪いほど優麗で、又立派に  
 にあつた今度は前よりも又立派に  
 と、のつてお出でになるわと。  
 姫君は……中の君は蕭に面會するに  
 つけ、片時も忘れぬ大君の事まで  
 お思出しなされるので。  
 盡きせぬ御物語……話しても話しき  
 れぬ悲しいお話などは、今日はめ  
 でたい折ゆゑ御遠慮しませうか。  
 渡らせ給ふべき……貴女のお引移り  
 遊ばす御近所へ今暫くして私も移  
 る筈ですから。中の君は二條院、  
 蕭は三條の宮へ移轉の筈。  
 夜中曉と……親しい間柄では夜中  
 も曉でも往來すると、然るべき人  
 が申します。當時の謎。  
 世に侍らむ限は、私が生きて居りま  
 す間は。  
 あいなくやなど……こんな事を押し  
 て申すのも作法か知らんなど考  
 へて、一人呑込みでは非さうした  
 いと考へる勇氣もありません。  
 宿をば……この山莊を見捨てたくも

さしつ、渡らせ給ふべき所近く、この頃過して移ろひ侍るべければ、  
 「夜中曉」と、つき／＼しき人のいひ侍るめる。何事の折にも疎からず  
 思し宜はせば、世に侍らむ限は、聞えさせ承はりて過さまほしうなむ  
 侍るを、いかゞは思し召すらむ。人の心様々に侍る世なれば、あいな  
 くやなど、一方にもえこそ思ひ侍らね」と聞え給へば、宿をば離れじと  
 思ふ心深く侍るを「近く」など宣はするにつけても、よろづに思ひ亂  
 れ侍りて、聞えさせやるべき方もなくなむ」と所々いひ消ちて、いみ  
 じく物あはれと思ひ給へるけはひなど、いとう覺え給へるを、心か  
 ら餘所のものに見なしつると、いと悔しく思ひ給へれど、かひなけれ  
 ば、その夜の事かけてもいはず、忘れにけるにやと見ゆるまで、けざ  
 やかにもてなし給へり。御前近き紅梅の色も香も懐かしきに、鶯だに  
 見過し難げにうち鳴きて渡るめれば、まして「春や昔の」と、心を惑は  
 し給ふどちの御物語に、折あはれなりかし。風のさと吹き入るゝに、花  
 の香も客人の御匂も、橘ならねど昔思ひ出でらるゝつまなり。徒然の



ないと思ふ心が深いのに、互に住居が近くなるなど仰しやるにつけても。  
 いとよう覚え……大變よく大君に似ていらつしやるのを。  
 心から……薫はわが心がらで中の君を他人の物にしてしまつた事よと。その夜の事——中の君に測らず出會つた當夜の事。  
 けざやかに……さつぱりと色戀の心持を離れて。  
 春や昔の——伊勢物語——月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身に於て。  
 心を惹はし給ふどち——どちらも大君を追慕して分別も亂れていらつしやる薫と中の君。  
 橋ならねど……古今——さ月待つ花橋の香をかば昔の人の袖の香ぞする——による。  
 昔思ひ出でらる……昔の事が偲ばれる切つ懸けである。  
 心とめて……姉君がこの紅梅がお氣に入りでお飯びなされたものをなど、胸一杯になられたので。  
 見る人も……今は見る人もなく、嵐に吹迷はされるにも拘はらず、この山里に昔を思出させるやうに紅梅は相變らず薫つてゐる事よとの意。嵐に有らじを懸けた。

紛はしにも、世のうき慰めにも、心とめて遊び給ひしものをなど、心にあまり給へば、

「見る人もあらしにまよふ山里に」

むかしおぼゆる花の香ぞする」

いふともなく仄かにて、絶えなく聞えたるを、懐かしげにうち誦しなして、

「袖ふれし梅はかはらぬにほひにて」

根ごめうつろふ宿やことなる」

堪へぬ涙を様よく拭ひ隠して、言多くもあらず。「又も猶かやうにてなむ、何事も聞えさせ寄るべき」など、聞え置きて立ち給ひぬ。  
 御渡りにあるべき事ども、人々に宣ひおく。この宿守に、かの髭がちの宿直人などは侍ふべければ、このわたりの近き御庄などに、その事ども宣ひ預けなど、まめやかなる事どもをさへ定め捉て給ふ。辨ぞ「かやうの御供にも、思ひかけず長き命いとつらく覺え侍るを、人も

袖ふれし……一旦私が一寸會つた貴君の、昔の通りの美しきでそつくり引移られるその京の宿が私の處でないのかなあとの意。古今——色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」によつた。根ごめは根も一緒に。  
 又も猶……又々この後失張こんな風にして萬事お心添致させう。御渡りに……お引移りに就いて色々必要なる事などを。  
 宿守に——山莊の番人として。御庄など……薫の領する莊園の支配人などに宇治の山莊の世話などお命じなされたり、かうした實際的の事までも御處置なされた。  
 かやうの御供……こんなお供で今更京へ行くのも、我ながら思ひも寄らぬ長命が誠に怨めしく感ぜられませんが、他人も嫌らしい餘計な長命だと思ひさうですから。  
 形も……尼になつたのを。こゝには——この宇治へは。いとたづきなく……誰もみなくては誠に取附く鳥もなく心細からうに貴女が留守して居られようのは。厭ふにはえて……長生きを嫌へば嫌ふ程それに張合つて長くなる命が心外で、又どうせよといふお積りで大君は私を残してお亡くなり遊

ゆ、しく見思ふべければ、今は世にあるものとも、人に知られ侍らじ」とて、形も換へてけるを、強ひて召し出でて、いとあはれと見給ふ。例の昔物語などせさせ給ひて、こゝには猶時々は参り來べきを、いとたづきなく心細かるべきを、かくて物し給はむは、いとあはれに嬉しかるべき事になむ」など、えもいひ遣らず泣き給ふ。厭ふにはえて延び侍る命のつらく、又いかにせよとてうち捨てさせ給ひけむと、怨めしく、なべての世をば思ふ給へ沈むに、罪もいかに深く侍らむと、思ひける事どもを愁へかけ聞ゆるも、頑しけれど、いとよくいひ慰め給ふ。いたくねびにたれど、昔清げなりける名残を削ぎ捨てたれば、額のほど様變れるに、少し若くなりて、さる方にみやびかなり。思ひ侘びては、などかゝるやうにもなし奉らざりけむ、それに延ぶるやうもやあらまし、さてもいかに心深く語らひ聞えてあらまじなど、一方ならず覺え給ふに、この人さへ羨まじければ、隠ろへたる几帳を少し引き遣りて、こまやかにぞ語らひ給ふむげに思ひほけたる様ながら、物う



ばしたのかと。なべての世をば……この浮世をば厭な世と思込むに。悉へかけし蕭に懇訴しかけ。削ぎ捨てし髪を剪り捨て。思ひ侘びては蕭は大君の事を思ひあぐんだ揚句には。などかゝるやうに……何で辨のやうに尼におなし申さなかつたらう。出家の功德で命を取留めたかも知れないのに、そして尼になられたらまあ、どんなにかしみくんと佛の道など深いお話も出来たららうに。この人辨。

さきに立つ……老人の常として何事にも涙が先に立つが、その涙の川に身を投げたら大君に後れずに死ぬ事が出来よう、それなら餘計な悲をせずに済んだでせうものを。それも身を投げる事も。かの岸に……望んだあの世の浄土に行くとなく、却て身を殺した罪業によつて奈落の底に沈んで永劫過さうのも生憎な事です、凡そ一切空と観すべき現世でせう。身を投げむ……身を投げる事の出来やうな深い涙の川に沈んで私もさ、折々毎には大君の事が戀しく忘れはしますまい。

ちいひたる氣色、用意口惜しからず、故ありける人の名残と見えたり。  
「さきに立つ涙の川に身を投げば  
人におくれぬ命ならまし」  
とうち響み聞ゆ。それもいと罪深かとなる事にこそ。かの岸に到るこ  
と、さしもあるまじうて、深き底に沈み過さむもあいなし。すべてなべ  
て空しく思ひ取るべき世になむ」など宣ふ。  
「身を投げむ涙の川にしづみても  
こひしき瀬々は忘れしもせじ  
いかならむ世に、少しも思ひ慰むることありなむ」と、果もなき心地  
し給ふ。歸らむ方もなく詠められて、日も暮れにけれど、すゞろに旅  
寝せむも、人の咎むることやとあひなければ、歸り給ひぬ。  
思ほし宣ひつる様を語りて、辨はいと慰め難くくれ感ひたり。皆人  
は心ゆきたる氣色にて、物縫ひいとなみつ、老いゆがめる容貌も知  
らず繕ひさまよふに、いよ／＼簀して、

いかならむ世に……こんな場合に一寸でも氣を晴らすことがあらう、果もなき悲さの際限もない。すゞろに旅寝せむも……うか／＼と泊り込まうのも匂宮などに邪推される事でもあらうかと厄介ゆゑ。思ほし宣ひつる……蕭の御意向や仰しやつた趣を中の君に話して。皆人は……女房達は皆お引移りをさも愉快な様子で。人はみな……人は皆新しい衣の袖を裁ち縫ひしてお引移りのお供に急ぎ立つてみますのに、私は涙に袖をしめつけぼくして打沈んで居りますよとの意。袖の浦は出羽の名所で、藻鹽、髪は浦の縁語、裁つ、裏は袖の縁語、髪には尼を懸けた。しほたる……涙に袖を濡してゐる貴女とは又別様な悲が私にはあります、匂宮の許に行つても將來どうなるやら浪に漂ふやうな身で矢張袖は濡れる事でせうとの意。やは歎辭。

「人はみな急ぎたつめる袖のうらに  
ひとり藻鹽をたるゝあまかな」  
と愁へ聞ゆれば、  
「しほたるゝあまの衣にことなれや  
浮きたる浪にぬるゝわが袖  
世に住みつかむことも、いとあり難かるべき業と覺ゆれば、様に隨ひて、此處をばあれ果てじとなむ思ふを、さらば對面もありぬべけれど、暫しの程も、心細くてさて立ちどまり給ふを見おくに、いとゞ心もゆかずなむ。かゝる形なる人も、必ずひたぶるにしも堪へ籠らぬ業なめるを、なほ世の常に思ひなして、時々も見え給へ」など、いと懐かしう語らひ給ふ。昔の人のもて使ひ給ひし、さるべき御調度どもなどは、皆この人にとゞめ置き給ひて、かく人より深く思ひ沈み給へるを見れば、前の世も取り分きたる御契もや物し給ひけむと思ふさへ、睦ましくあはれになむ」と宣ふに、いよ／＼童べの戀ひて泣くやうに、



けれど。貴女が心細い思をして、留守居なさるのを残して置くと、猶更京へ行くにも気が進みません。かゝる形なる……尼法師だとして必ず一途に引籠つてのみあるものでもないものを、矢張世間並の氣持になつて時々でも私の家へ逢ひに来て下さい。

昔の人——大君をさす。かく人より……こんなに他の人々よりも深く貴女が姉上の事を歎かれるのを見ると。前の世も取り分きたる……貴女は姉上と前世でも特別深い縁があつたのか知らんと。おぼほれ——涙に沈み。おぼほれ……家の内を掃除し萬事整理して。

御前の人々——お迎の前驅の人々。御自らも……匂宮御自身も大變来た思召すけれど、事が大袈裟になつて却て工合がわるからうから。心もとなく……匂宮は密に氣を揉んでいらつしやる。大方の事をこそ……表向一通りの支度こそ匂宮からは整へて上げられたやうだが、こまかな内證のお世話話は全く薫から、行届かぬ點もなく面倒を見られた。

心をさめむ方なくおぼほれ居たり。皆かき掃ひ、よろづ取りしたゝめて、御車ども寄せて、御前の人々、四位五位いと多かり。御自らも、いみじうおはしまさまほしけれど、事々しくなりて、なか／＼悪しかるべければ、只忍びたる様にもてなして、心もとなく思さる。中納言殿よりも、御前の人々、數おほく奉れ給へり。大方の事をこそ、宮よりは思し掟つめれ、こまやかなる内々の御扱は、只この殿より、思ひ寄らぬ事なく訪らひ聞え給ふ「日暮れぬべし」と、内にも外にも催し聞ゆるに、心あわたゞしう、いづちならむと思ふにも、いとはかなく悲しとのみ覺え給ふに、御車に乗る大輔の君といふ人の聞ゆ。

「あり經れば嬉しきせにも逢ひけるを」

身を宇治川に投げてましかば

うち笑みたるを、辨の尼君の心ばへに、こよなうもあるかなと、心づきなう見給ふ。今ひと、

「過ぎにしが戀しきことも忘れねど」

催し——催促し。いづちならむと——自分の行く先は一體どこなのだらうと。御車に乗る——中の君の車に陪乗する。大輔の君——侍女の名。あり經れば……生きて居ればこそかうした嬉しい折にも遭遇しましたのに、身を憂く思つてあの宇治川に入つて死んで、も居たら、さぞ口惜しい事で御座いましたらう。こよなうもあるかな——雲泥の違ひがあるわいと氣に食はず。過ぎにしが……お亡くなりの大君の戀しさも忘れはせぬけれど、中の君の今日のめでたいお引移りには又何よりも嬉しさを感じます。年經たる——永年御奉公してゐる。かの御方をば……大君を大切に餘計な思ひ申してゐたのに、今はこんな風を思ひ直して、大君に就いての話を避けようとするのも。つらきにのみ……今まで冷淡だとばかり考へられた匂宮の御出を、こんなひどい道では成程無理もない御疎遠だつたわいと、中の君も少しは御合點が行つた。

遠きに慣らはず——遠道に不馴れで。出で空行く月も終には空にとどまらかねて又山に歸るのだ、私もか

今日のはたまづもゆくこゝろかな

いづれも年經たる人々にて、皆かの御方をば心寄せ聞えた、めりしを、今はかく思ひあらためて言忌するも、心憂の世やと覺え給へば、物もいはれ給はず。道のほど遙けく、はげしき山路の有様を見給ふにぞ、つらきにのみ思ひなされし人の御中の通ひを、道理の絶間なりけりと、少し思し知られる。七日の月のさやかにさし出でたる影を、かしく霞みたるを見給ひつ、いと遠きに慣らはず苦しければ、うち詠められて、

「ながむれば山よりいでて行く月も」

世にすみわびて山にこそ入れ」

様かはりて、遂にいかならむとのみ危く、行末後めたきに、年ごろ何事をか思ひけむとぞ、取り返さまほしきや。宵うち過ぎてぞおはし着きたる。見も知らぬ様に目も輝く心地する殿造の、三つば四つばなる中にひき入れて、宮いつしかと待ちおはしましければ、御車のもとに



うして宇治を出て来たが結局は又  
 舊宅に歸るべき身かも知れないと  
 の意。  
 様かはりて一境遇が變つて匂宮に迎  
 へられて、その末始終はどうなら  
 うかと。  
 年ごろ……年來の物思が何であつた  
 か、あれは物の數でもなかつたと、  
 寧ろあの當時に立返りたい氣がな  
 された。  
 おはし着きたる……二條院へ。  
 三つば四つば一催馬樂、この殿、こ  
 の殿は、うへも富みけり、さき草  
 のアハレ、さき草のハレ、さき草の  
 三つば四つばの中に、殿作りせり  
 ヤ、殿作りせりヤ。  
 三つば四つばなる中に一棟數多く建  
 連ねた中に。  
 ひき入れて一車を挽き入れて。  
 宮いつしかと一匂宮は中の君がいつ  
 到着なさるか。  
 いとあらまほしげなり一實に理想的  
 に完備してゐる。  
 いかばかりの……どれ位の待遇をお  
 受になる事かと他から見られた中  
 の君が、急にかく本妻の地位にお  
 極りなされたので。  
 おぼろげならず……鼓大抵でなく匂  
 宮が愛していらつしやるのだと。  
 日々におはしつ……毎日三條宮へ

自ら寄らせ給ひて、おろし奉り給ふ。御しつらひなど、あるべき限  
 て、女房の局々まで、御心とゞめさせ給ひける程しるく見えて、いと  
 あらまほしげなり。いかばかりの事にかと見え給へる御有様の、俄に  
 かく定まり給へば、おぼろげならず思さるゝことなめりと、世の人  
 も心にく、思ひ驚きけり。  
 中納言は、三條の宮に、この二十餘日のほどに渡り給はむとて、この  
 頃は日々におはしつゝ見給ふに、この院近き程なれば、けはひも聞か  
 むとて、夜更くるまでおはしけるに、奉り給へる御前の人々かへり參  
 りて、有様など語り聞ゆ。いみじう御心に入れて、もてなし給ふなる  
 を聞き給ふにも、かつは嬉しきものから、流石にわが心ながら、鳴澁が  
 ましく胸うち潰れて、物にもがなやと、返すく、獨言たれて、  
 「しなてるや、鳩のみづらみに漕ぐ船の  
 まほならねどもあひ見しものを」  
 とぞいひくたさまほしき。左の大殿は、六の君を宮に奉り給はむこと、

来て工事を御覽なさるが、二條院  
 は近い處だから中の君のお引移り  
 の御様子も聞かうと思召してその  
 日は夜遅くまで三條宮に居られた  
 處が、お供廻として中の君の方へ  
 差上げた家來達が歸つて来て。  
 鳴澁がましく馬鹿らしいけれど  
 はつとして。  
 物にもがなや一「取返す物にもがな  
 や世の中をありしながらの我が身  
 と思はむ(河海)。取返せるものな  
 ら互に昔の身の上に戻つて、中の  
 君を我が物にしたいものとの意。  
 しなてるや……實際の契こそ無いけ  
 れど、匂宮の愛する中の君は私が  
 最初に共寝をしたのだものをとの  
 意。上句はまほに眞帆を懸けた序  
 詞。しなてるやは枕詞であらう。  
 左の大殿夕霧。  
 かく思の外の……匂宮がこんなと思  
 ひもよらぬ中の君を、六の君の來  
 め前にと思召すらしく急に呼迎へ  
 て大事がり、六の君へは寄りつき  
 もなさらぬので。  
 いと物しげに……誠に不快に夕霧が  
 思つていらつしやるといふ事を匂  
 宮がお聞きなさるにつけても。  
 御裳著のこと……六の君の裳を着る  
 儀式。これは女の成人を表する。  
 急ぎ給へるを一匂宮を姪に取る前に

この月にと申し定めたりけるに、かく思の外の人を、この程より先に  
 と申し顔にかしづきする給ひて、離れおはすれば、いと物しげに思し  
 たりと聞き給ふも、いとほしければ、御文は時々奉り給ふ。御裳著の  
 こと、世に響きて急ぎ給へるを、延べ給はむも人笑へなるべければ、  
 廿餘日に著せ奉り給ふ。同じゆかりに珍しげなくとも、この中納言を  
 よそ人に譲らむが口惜しきに、さもやなしてまし、年ごろ人知れぬも  
 のに思ひけむ人をも亡くなして、物心ぼそく詠め居給ふなるを、など  
 思し寄りて、さるべき人して氣色取らせ給ひけれど、世のはかなさを  
 目に近く見しに、いと心憂く身もゆゝしく覺ゆれば、いかにも、さ  
 やうの有様は物憂くなむと、すさまじげなるよし聞き給ひて、いか  
 でかこの君さへ、おふな、言出づることを物憂くはもてなすべき  
 ぞ」と恨み給ひけれど、親しき御中らひながらも、人様のいと心恥か  
 しげに物し給へば、え強ひても聞え動かし給はざりけり。  
 花盛のほど、二條院の櫻を見やり給ふに、まなき宿の先づ思ひやられ



と準備なされたものを。延べ給はむも一旬宮が中の君を迎へたからとて、六の君の裳着を延ばさうことも。同じゆかりに……同じ一門で平凡な縁組だけれども、この薫を他家の婚に取られてしまふのが残念なので、六の君の婚にしたものか。年ごろ……薫は年来密に思込んでゐた大君を失つて今心細く暮して居られる時だから好い機会だらう。氣色取らせ……薫の意向を伺はせ。さやうの有様は……結婚などいふやうな事は氣が進みません。すさまじげなる……そつけない挨拶だつたと夕霧はお聞きになつて、いかでかこの君……何で薫までが、私の分相應に禮を盡していひ出す事を迷惑視すべきことかい。人様の……薫の人柄が此方で恥かしい位立派でいらつしやる故。主なき宿一宇治の山莊。心安くや一拾遺一淺茅原主なき宿の梅の花心やすくや風に散ららむ。宮の御許一旬宮の邸即ち二條院。此處がちに……旬宮は今では大概この二條院に尻が落着いて。目やすの業やと……旬宮の中の君とお見上げするのは見よい事だと薫はお見上げするものゝ、例の變な紙

給へば「心安くや」など獨言ちあまりて、宮の御許に參り給へり。此處がちにおはしまし著きて、いとよう住み馴れ給ひにたれば、目やすの業やと見奉るものから、例のいかにぞや覺ゆる心の添ひたるぞ怪しきや。されど實の御心ばへは、いとあはれに後やすくぞ思ひ聞え給ひける。何くれと御物語聞え交し給ひて、夕つ方宮は内裏へ參り給はむとて、御車の裝束して、人々多く參り集まりなどすれば、立ち出で給ひて、對の御方へ參り給へり。山里のけはひ引き換へて、御簾のうち心にく、住みなして、をかしげなる童の透影ほの見ゆるして、御消息聞え給へれば、御褥さし出でて、昔の心知れる人なるべし、出で来て御返り聞ゆ。「朝夕の隔もあるまじう思ふ給へらるゝ程ながら、その事なくて聞えさせむも、なか／＼馴れ／＼しき咎めもや、とつゝみ侍る程に、世の中變りにたる心地のみぞし侍るや。御前の梢も霞隔て、見え侍るに、あはれなる事多くも侍るかな」と聞えて、うち詠めて物し給ふけしき、心苦しげなるを、げにおはせましかば、覺束なからず行き

妬見たやうな心持の加はるのが我ながら不思議である、然し實際の薫の御本心では、中の君が旬宮に深く可愛がられるのを安心な事にお思ひ申された。人々一旬宮のお供の人々。立ち出で給ひて……薫は旬宮の御前を立つて中の君のお部屋へ。ほの見ゆるして……ちら／＼見えるその童を以て薫が中の君へ口上をお申入れなさんと。昔の心知れる……宇治以來の事情を知つてゐる侍女らしく。朝夕の……朝夕お何も出来さうな近所ながら、これといふ用もなくて參上するのめ狎れ／＼し過ぎて却て旬宮のお咎めもあらうかと。御前の梢も……お屋敷の樹々の梢も私の家から霞隠れに見えますにつけて。げにおはせましかば……ほんに大君が御存命なら薫に縁付かれて、従つて自分も始終往復して。ひたぶるに……ひたすら辛抱して引籠つてばかりゐた宇治の山莊の寂しさよりも。世の常に……通り一遍に薫様を疎略にお扱ひなされますな、限もない御芳志を豫て辱なく思つていらつしやるといふ事を、今こそ薫様に

歸り、かたみに花の色、鳥の聲をも、折につけつゝ、少し心ゆきて過しつべかりける世をなど、思し出づるにつけては、ひたぶるに堪へ籠り給へりし住居の心細さよりも、飽かず悲しう口惜しきことぞいと勝りける。人々も、世の常に、疎々しくなもてなし聞え給ひそ。限なき御心ざしの程をば、今しもこそ、見奉り知らせ給ふ様をも見え奉らせ給ふべけれ」など聞ゆれど、人傳ならず、ふとさし出で聞えむ事の猶つゝ、ましきを、やすらひ給ふ程に、宮出で給はむとて、御まかり申しに渡り給へり。いと清らにひき繕ひ化粧じ給ひて、見るかひある御様なり。中納言は此方になりけりと見給ひて、「なか、むげにさし放ちては出だしする給へる。御あたりには、あまり怪しと思ふまで、後やすかりし心寄せを、我が爲は鳴瀝がましき事もやと覺ゆれど、流石にむげに隔多からむは、罪もこそ得れ。近やかにて昔物語もうち語らひ給へかし」など聞え給ふものから、「さはありとも、餘り心ゆるびせむも、又いかにぞや、疑はしき下の心にぞあるや」と、うち返し宣へ



お見せ遊ばす時で御座いませう。人傳ならず……中の君は直接に漫然と出て行つて、蕭に應答する事が矢張憚られるので、躊躇していらしやる處に。

御まかり申しに……中の君にお暇乞に。中納言は……蕭はこゝに來て居られたいわいと匂宮が御覽になつて。などかむげに……何故そんなにひどく蕭を遠くにお置申されるのですか、貴女に對しては餘に變だと思ふ位行届いた蕭のお心添だつたので、私自身は爲には或は馬鹿馬鹿しい結果になりはせぬかとも考へますが、(中の君が蕭に隣きはせぬかとの危懼)流石にひどく疎外しては罰が當りませう。

餘り心ゆるび……餘り打解け過ぎても又どんなものでせうか。あはれ深く……身にしみて深く感じてある蕭の御厚意を、今になつて疎外すべきではないから。かの人も……蕭もさう思召して仰しやるやうに、蕭を大君の代りと思つて親しみたく、それ程まで私に思召すでもあれど、ばよいとお見せする機会もあつた。中見方の君は思召すけれど、ばよいとお見せする機会もあつた。中見方の君は思召すけれど、ばよいとお見せする機会もあつた。中見方の君は思召すけれど、ばよいとお見せする機会もあつた。

ば、(中君)一方ならず煩はしけれど、わが御心にも、あはれ深く思ひ知られし人の御心を、今しも疎なるべきならねば、かの人も思ひ宜ふめるやうに、古への御代りとなすらへ聞えて、かう思ひ知りけりと、見え奉る節もあらばやとは思せど、流石にとやかやくと、方々に安からず聞えなし給へば、苦しう思されけり。

宿木 (寄生木。一名、かほ鳥)

この巻は蕭二十四歳の夏から二十六歳の夏までの事。當時藤壺と申した方は故左大臣の姫君で、最初に入内してやがて亡くなられ、その形見の姫宮がもう十四五歳である。帝は蕭にやりたく思召すが、蕭は例の煮え切らない。夕霧は六の姫に蕭の意がないと諦めて遂に匂宮に上げた。多情な宮は勿論六の姫を嫌つてゐた譯ではないので、かうなると自然二條院の夫人への愛は薄らぐ。妊娠中の夫人は身の行末を思ひ、獨身で通した姉大君の明に感心した。そして宇治へ歸らうかと蕭に謀る。蕭の同情は漸く戀に變つてゆく。匂宮も薄々感づいて夫人を詰るが、夫人は泣いて潔白を誓ふのみである。或時夫人は異腹の妹浮舟が近頃名のり出て、それが亡き大君によく似てゐるといふことを蕭に話した。夫人は翌年二月男子を産んだ。蕭は勸説を呑みかねて姫宮と婚した。その後蕭は宇治に行き、偶然慕参に來合はせた浮舟を見たが、成程亡き大君にそっくりなのに驚き、懐かしく戀しいものに思ひ初めた。

卷の名は蕭の歌「宿りきと思ひ出でずば木もとの旅寝もいかに寂しからまし」  
「かほ鳥の聲も聞きしにかよふやと繁みをわけてけふぞ尋ぬる」などに由る。

その頃藤壺と聞ゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける。まだ春宮と聞えさせし時、人より先に参り給ひにしかば、睦まじうあはれな

その頃「椎本の巻の冒頭と略同じ頃をさす。故左大臣殿の女御——故左大臣の息女で今上の女御。嘗て源氏の肝煎で今上の春宮の時参られ屋敷殿と稱した事が、梅が枝の巻に見える。あはれなる方の……帝が可愛く思召すことは。そのしるしと見ゆる……それを表向

宿木







うな婿も何の無い事があらうか。朱雀院の……朱雀院が女三宮を源氏にお託し遊ばされた時の。暫しは……最初の間は、さあどうも嫌らぬ縁談だなあ、この縁談でなくともよい相手がありさうなもの、帝は女二宮にお話になる事もあつたけれど。

源中納言の……薫が人より格別優れ、たお生れ付で、かく萬事女三宮にお事へなさるからこそ女三宮が昔の御座望が衰へず立派な御様子で、今日まで暮して居られるのだ。さらば……もし薫がいらつしやらなかつたら女三宮の御身の上にも思も寄らぬ失態なども生じて、ともかくも……どちらにしても帝は御治世中に女二宮の御身の振方をつけよう。

やがてその序……即ち順序に従つて、この薫を婿にするより外には相應の人は又と無かつた。

宮達の……薫は内親王の婿君にして、も何事も不都合はあるまいものを、元々大君といふ愛人があるまいにしても、本妻を冷遇するやうな閉苦しい所爲などをちよいと見せるやうな事は又あるまいに。(この頃まだ大君存命のこと。)

遂には……又結局は薫も本妻を娶る

りぬべきこそいとほしけれなど、御心一つなるやうに思し扱ふも、安からざりけり。

御前の菊移ろひ果て、盛なる頃、空の氣色のあはれにうち時雨る、にも、まづこの御方に渡らせ給ひて、昔の事など聞えさせ給ふに、御答などもおほどかなるものから、いはけなからずうち聞えさせ給ふをうつくしく思ひ聞えさせ給ふ。かやうなる御様を見知りぬべからむ人のもてはやし聞えむも、などかはあらざらむ。朱雀院の姫宮を、六條院に譲り聞え給ひし折の定めどもなど、思し召し出づるに、暫しは、「いでや飽かずもあるかな、さらでもおはしなまし」と聞ゆる事どもありしかど、源中納言の人より殊なる有様にて、かくよろづを後見奉るにこそ、そのかみの御おぼえ衰へず、やむごとなき様にては永らへ給ふめれ、さらすは御心より外なる事ども、出で来て、自ら人に輕められ給ふこともやあらましなど思し續けて、ともかくも御覽する世にや思ひ定めましと思し寄るには、やがてその序のまゝに、この中納言

やうな事がないでもあるまい、本妻が定まらぬ内に女二宮の事をそれとなく話して見ようかなどと。御基など……帝が女二宮と聞基などなされて。

中務の親王——明石中宮お腹の皇子。上野の親王——系圖不明。中納言源の朝臣——薫。遊など……藤壺の喪中ゆゑ音楽の遊徒に日を送る……暇つぶしの遊技としてはこの基がよからう。氣近く……帝が薫をお側近く召してお相手になされつけていらつしやるので、薫は矢張そんな事なのだ。らうと思つて居られると。賭物——勝つた賞品。女二宮をいふ。何をか——その他に何をお望みにになりますか。

いかゞ見ゆらむ——薫にはどういふ風に考へられるのか。

この花一枝……朗詠集、聞得園中花養、請君許し折一枝春。この花は暗に女二宮に擬し給うた。世のつねの……普通の人家の垣根の菊なら勝手に手折つて賞美しませぬものを、御前の花では儘になりませぬ。暗に女二宮に擬した。霜にあへず……霜に堪へかねて枯れた菊ではあるが残の色はまだ全く

より外に、よろしかるべき人また無かりけり。宮達の御傍にさし並べたらむに、何事も目ざましくはあらじを、元より思ふ人持たりとて、聞きにくき事などうち混すまじうはたあめめるを、遂にはさやうの事なくてしもえあらじ、さらぬ先に、さもやほのめかしてましなど、折々思し召しけり。御基など打たせ給ひ、暮れ行くまゝに時雨時々をかしき程にて、花の色も夕映したるを御覽じて、人召して、「たゞ今殿上には誰々か」と問はせ給ふに、中務の親王、上野の親王、中納言源の朝臣など侍ふ」と奏す。中納言の朝臣「あなたに」と仰言ありて、參り給へり。げにかく取り分きて召し出づるもかひありて、遠く薫れる匂よりはじめ、人に異なる様し給へり。今日の時雨、常より殊にのどかなるを、遊などすさまじき方にていと徒然なるを、徒に日を送る戯れにても、これなむ善かるべき」とて、碁盤召し出でて、御碁の敵に召し寄す。いづもかやうに、氣近く慣らし纏はし給ふに慣らひにたれば、さにこそはと思ふに、よき賭物はありぬべけれど、輕々しくはえ渡すまじきを、



穂せず見るに足りませうとの意。  
 枯れし菊を蔭壺に、残の色を女二  
 宮に比した。  
 ほのめかさせ……女二宮をやらうと  
 遠廻しに仰しやる帝のお心持を。  
 急がしくしも……大急ぎで應じよう  
 とも思召さぬ。  
 いでや本意にも……さあ女二宮の所  
 になるのは私の本意でもないのだ、  
 大君や夕霧が無理にも與へたく様  
 様と仰しやつたあの憎からぬ中の  
 君や六の君の事すら、耳にもかけ  
 ず今日まで永年過して来たのに、  
 今更妻を娶るのは隠遁した僧が還  
 俗するやうな心持がするだらうと  
 思ふのも、以下蕭の心。  
 殊更に……女二宮には態々思を焦が  
 す人すらあるのだ、それを帝から  
 下さらうと仰しやるのは容易な事  
 でないと蕭は思ひながらも、女二  
 宮が明石姫のお腹だつたらなあ、  
 といふ氣がするお心の中は餘り借  
 上ずぎるといふものだ。  
 左大臣殿……夕霧。  
 さりとも……どうでも蕭にやりたい、  
 蕭の方で溢々でも此方から眞劍に  
 いひ寄つたら、この君にこそはの  
 下「會はせぬ」を略いた。  
 思の外なる……これは又意外な女二  
 宮の所君になつてしまひさうだと。

何をかは」など宣はする御氣色いかゞ見ゆらむ。いと心づかひして  
 侍ひ給ふ。さて打たせ給ふに、三番に數一つ負けさせ給ひぬ。ねたき  
 業かな」とて、まづ今日はこの花一枝ゆるす」と宣はすれば、御答聞え  
 させで、下りて面白き枝を折りて參り給へり。  
 世のつねの垣根にほふ花ならば  
 こゝろのまゝに折りて見ましを」  
 と奏し給へる用意、淺からず見ゆ。  
 霜にあへず枯れにし園の菊なれど  
 のこりの色はあせずもある哉」  
 と宣はす。かやうに折々ほのめかさせ給ふ御氣色を、人づてならず承  
 はりながら、例の心の癖なれば、急がしくしも覺えず。いでや本意に  
 もあらず、様々にいとほしき人々の御事どもをも、よく聞き過しつゝ、  
 年經ぬるを、今更に聖やうの者の、世に還り出でむ心地すべきこと、  
 思ふも、かつはあやしや、殊更に心を盡す人だにこそあなれとは思

兵部卿の宮……匂宮だつて又特に六  
 の君に熱心といふ程ではないけれ  
 ど、時毎に風情ある手紙などを下  
 さる事が絶えなかつたから。  
 さばれ……儘よ、假令匂宮の方では  
 一時の慰みにもせよ、然るべき宿  
 縁があつて結局は本氣になるとい  
 ふやうな事も無いとは限るまい、  
 水も漏らさぬやうに愛してくれ、  
 男を婿にきめようとしても、低い  
 身分の者に膝を屈して與へる事は  
 外聞悪く不満足な氣がしようなど、  
 夕霧は思召した。





女子……娘の子を持てば心配な滝季の世で。帝に……天子様でさへ姫宮があれは、新探しに御心配なさる世に。ましてたい人の……まして平人の娘で嫁盛りを過ぎうのも面白くない。誘はしげに……帝を不平らしく夕霧は仰しやつて、明石中宮に向つても、六の君を匂宮に上げたい旨を眞剣になつて御せがみなさる事が度々になつたので。いとほしく……以下匂宮へのお詞。かくおふな……夕霧がこんなに相應に折れて六の君を貴方にやりたく思つて永年居られるのに。親王達は……皇子方といふものは外戚次第でよくも悪くもなるものなのです。帝も段々御老年になるので御位のお考がおあり故、貴方が春宮に定まるかも知れません。たい人こそ……平人こそ本妻が定れば最早他の女に愛情を分つ事もむづかしい譯ですが、然しそれで居らあ夕霧が眞面目な顔をして居られながら、雲居雁と落葉宮とを並べてその二人の間には羨む事もない様にうまく舵を取つてゐるではありませんか、まして貴方は私の思つてゐる通り春宮にでもおなりの思つてゐれば、澤山の女がお側に

ひながら、后腹におはせばしも、と覺ゆる心のうちぞ、餘りおほけなかりける。かゝる事を左大臣殿ほの聞き給ひて、六の君はさりともこの君にこそは、溢々なりともまめやかに恨み寄らば、遂にはえ否び果てじと思しつるを、思の外なる事出で來ぬべかめりと、妬く思されければ、兵部卿の宮はた、わざとはあらねど、折々につけつゝ、をかしき様に聞え給ふことなむ絶えざりければ、さばれ等閑の御好色事にはありとも、さるべきにて、御心とまるやうもなかなからむ、水漏るまじく思ひ定めむとても、なほ……しき際に下らむはた、いと人わろく飽かぬ心地すべし、など思しなりにたり。女子後めたげなる世の末にて、帝だに婿求め給ふめる世に、ましてたい人の盛過ぎむもあいなしなど、誘はしげに宣ひて、中宮にもまめやかに恨み申し給ふこと度重なりければ、開し召し煩ひて、いとほしく、かくおふな……思ひ心ざして年經給ひぬるを、あやにくに遁れ聞え給はむも情なきやうならむ。親王

たと何の不都合がありませう。あるべかしう尤らしく。わが御心にも……匂宮御自身も元々全く嫌だとも思召さぬ事やうで強ひて何のともない事やうにお断りなさうか、只餘り事むづかしくきちんとした夕霧の邸に、度になつたやうな恰好で、今まで氣樂に暮しつけて來られた生活が俄に窮屈になりさうな事を、何だか迷惑に思召すので。この大臣に……夕霧に餘り怒まれても工合わるからう。按察の大納言——柏木の弟、紅梅右大臣。こゝは元の稱呼によつた。紅梅の御方——眞木柱腹の姫君。宣ひ渡りつゝ、文をおやりになりな

達は御後見がらこそ、ともかくもあなれ。上の御世も末になり行くとのみ思し宜ふめるを、たい人こそ、一方に定まりぬれば、また心を分けむ事も難げなめれ。それだに、かの大納言のいとまめだちながら、此方彼方羨みなくもてなして物し給はずやはある。ましてこれは、思ひ掟て聞ゆることも叶はゞ、數多も侍はむになどかあらむなど、例ならず言續けて、あるべかしう聞えさせ給ふに、わが御心にも、もとよりも離れてはた思さぬ事なれば、あながちには、などてかはあるまじき様にも聞えさせ給はむ。只いと事うるはしげなるあたりに取り籠められて、心安く慣らひ給へる有様の所狭からむことを、なま苦しき思すに、物愛げなれど、げにこの大臣に、あまり怨せられ果てむもあいなからむなど、やう……思し弱りにたるなるべし。あたなる御心なれば、かの按察の大納言の紅梅の御方を、なほ思し絶えず、花紅葉につけても宣ひ渡りつゝ、何れをもゆかしうは思されけり。されどその年はかはりぬ。女二の宮も御服果てぬれば、いと何事にかは憚り給はむ。



との婚姻を帝が御決意なされた人傳にも聞き、薰自身でもさうした帝の御様子を見てゐるけれど、飽かて過ぎ給ひにし人―大君。かく契深く……これ程宿縁深かつた大君がどうして本當の夫婦關係は無くて済んでしまつた事か知らず。口惜しき品……假令卑しい身分の女でも、大君の御容姿に少しも似た人なら私の心をも引付けよう。昔ありけむ香の烟―漢の武帝の匂いやむごとなき方様に……女二宮の方の問題は、いつがその日かなどと急ぐお心もない。

左の大殿には……夕霧は匂宮と六の君との婚姻をお急ぎになつて。二條院の對の御方―中の君。さればよ……案の定だ、どうしてこんな事が起らずに済まう、私はどうせつまらぬ身の上だから。以下中の君の心。

あだなる御心と……匂宮は浮氣なお心だと豫て聞いてゐたので。目に近くては―夫婦となつて一緒に暮してゐると。

俄に變り給はむ……六の君が出来た爲に自分に對する匂宮の愛が急に今までと變るだらうその時は。たゞ人の……低い身分の者どもの夫

「さも聞え出でばと思し召したる御氣色になむ」と、告げ聞ゆる人々もあるを、餘り知らず顔ならむも、僻々しうなめげなりと思し起して、氣色ばみ聞え給ふ折々もあるに、はしたなきやうは、などてかはあらむ。その程に思し定めたなりと傳にも聞き、みづから御氣色をも見れど、心のうちには、猶飽かて過ぎ給ひにし人の悲しさのみ、忘らるべき世なく覺ゆれば、うたてかく契深く物し給ひける人の、などてかは流石に疎くては過ぎにけむと、心得難く思ひ出でらる。口惜しき品なりとも、かの御有様に少しも覺えたらむ人は、心もとまりなむかし、昔ありけむ香の烟につけてだに、今一度見奉るものにもがなとのみ思して、やむごとなき方様に、いつしかなどは急ぐ心もなし。

左の大殿には急ぎ立ちて、八月ばかりにと聞え給ひてけり。二條院の對の御方は聞き給ふに、さればよ、いかでかは、數ならぬ有様なめれば、必ず人笑へに憂き事出で來むものぞ、とは思ふく過しつる世ぞかし、あだなる御心と聞き渡りしを頼もしげなく思ひながら、目に近

婦のやうに、まるでさつぱり切れてしまふなどいふやうな事は無いにしても。

山住―宇治の山莊。やがて跡絶えなまし……あの儘宇治で朽ち果て、しまつたのよりは、然じ京へ出て來て、今更捨てられながら歸るといふのは、宇治の人の思はくも不體裁である。

故宮の……父君八宮の御遺言に背いて山莊を見捨てた輕卒さを、草のもとは荒れた住居を譬へた。

故姫君の……大君が甚しく優柔で、以下中の君の心。

つしやかなる―どつしり落着いた。中納言の君の……薰が今以て大君の事を忘れられさうもなく歎いてのみにらつしやるけれど、もし大君が御存命なら又匂宮見たやうに他の女を思付く事があらうも知れぬ。その點を大君は深く考へて、どうかそんな日に遇ひたくないものと思込み、様々と薰から逃れる工夫をして、今御存命なら必ず尼になつていらつしやるに違ない。

亡き御影―父君や姉君の靈。

淡つけさ―輕卒さ。

何かはかひなき……どうせ無駄な事ゆゑ、何の自分のかうした心持を

くては、殊につらげなる事も見えす、あはれに深き契をのみし給へるを、俄に變り給はむ程、いかゞは安き心地はすべからむ、たゞ人の中らひなどのやうに、いとしも名残なくなどはあらずとも、いかに安げなき事多からむ、猶いと憂き身なめれば、遂には山住に歸るべきなめりなど思すにも、やがて跡絶えなましよりは、山賤の待ち思はむも、人笑へなりかすと、返すくも故宮の宣ひ置きしことに違ひて、草のもとを離れにける心輕さを、恥かしうもつらくも思ひ知られ給ふ。故姫君のいとしどけなく、物はかなき様にのみ何事をも思し宣ひしかど、心の底のつしやかなる所は、こよなくもおはしけるかな、中納言の君の、今に忘らるべき世なく歎き渡り給ふめれど、若し世におはせましかば、又かやうに思ふことはありもやせまし、それをいと深う、いかでさはあらしと思ひ入り給ひて、と様かう様にもて離れむことを思して、形をも變へてむとし給ひしぞかし、必ずさる様にてぞおはせまし、今思ふに、いかに重りかなる御心掟ならまし、亡き御影ども、我を



句宮に知らせようかといと、中の君は思出して候へつゝ、聞きも入れぬ様にて、六の君の一件は聞いた事もない振をして、長きことをあの世まで變らぬ夫婦だといふ事を。例ならぬ様、中の君の懐妊をいふ。物参ること、食物を召上ることが。まださやうなる人の……句宮はまだ女の妊娠した様子などはよく御存じないので。さる人こそ……妊娠した女がそんな風に悩むものですかねえ。さし過ぎ……差出口をして句宮にお話申上げる女房達もないので。その日など……句宮と六の君との御婚儀がいつ幾日と、中の君は他の人から傳聞なされた。句宮は……句宮は中の君に隠し立しようといふのではないけれど。さも宜はぬを、六の君を娶るともお話なさらぬのを。忍びたる……句宮と六の君との婚姻はどうせ秘密の事ではなし。その程などだに……婚禮の日取など、すら句宮が話して下さらぬのかと、かく渡り給ひにし……中の君が来られて以来は特別の事でも無い限は、此處彼處の……處々を泊り歩いて中の君の許に来ぬといふやうな事は

ばいかにこよなき淡つけさと見給ふらむと、恥かしう悲しと思せど、何かは、かひなきものからかゝる氣色をも見え奉らむと、忍び返しつ、聞きも入れぬ様にて過し給ふ。宮は常よりも、あはれに懐かしう起き臥し語らひ契りつ、この世ならず、長きことをのみぞ頼め聞え給ふ。さるはこの五月ばかりより、例ならぬ様に惱ましうし給ふ事もありけり。こちたうも苦しがりなどはし給はねど、常よりも物参ることいとゞなく、臥してのみおはするを、まださやうなる人の有様など、よくも見知り給はねば、只暑き頃なれば、かくおはするなめりとぞ思しける。流石に怪しと思し咎むる事もありて、もしいかなるぞ。さる人こそさやうには悩むなれなど宜ふ折もあれど、いと恥かしうし給ひて、さりげなくのみもてなし給へるを、さし過ぎ聞え出づる人もなければ、たしかにもえ知り給はず。八月になりぬれば、その日など外よりぞ傳へ聞き給ふ。宮は隔てむとはあらねど、いひ出でむ程心苦しういとほしく思されて、さも宜はぬを、女君はそれさへぞ心憂く覺

一夜もなかつたのに、六の君が出来た爲急に外出するやうになつたら中の君がどう思はうかと、句宮は氣の毒さを粉らす爲に、参りなど……参内などなされて、前以て外出しつて中の君に馴れさせようとなさるのを、中の君は只句宮が無情だといふ風にばかり取つて隔意なさるやうである。中納言殿も……薫も六の君の事を中の君の爲に誠にお氣の毒な事だとお聞きなされたが。花心に……一體が移り氣な句宮の事だから中の君を可愛くは思召しても、新しい六の君の方にきつと御愛情が移るに違ない。以下薫の心。女方も……六の君の方でも、元來が誠に尊大であられる夕霧の家風で、何の遠慮もなく句宮を引附けてお置になつたら、中の君はこれまでさうした獨寢にお馴れなさらないで、空しく句宮を待ち明す夜が多くなりさうなのが。あいなしや……我ながら感心しないよ、私の料簡は何で中の君を句宮にお譲りした事か。以下薫の心。昔の人に……大君に思込んで以來、世の俗塵を脱して思ひ澄ましてゐた積りの心も濁り出したので。かの御事、大君の事。

え給ふ。忍びたることもあらず、世の中なべて知りたることを、その程などだに宣はぬこと、いかに怨めしからざらむ。かく渡り給ひにし後は、異なる事なければ、内裏に参り給ひても、夜泊ることは殊にし給はず、此處彼處の御夜離などもなかりつるを、俄にいに思ひ給はむと、心苦しき紛らはしに、この頃は時々御宿直とて、参りなどし給ひつ、かねてより慣はし聞え給ふをも、只つらき方にのみぞ思ひ置かれ給ふべき。中納言殿も、いといとほしき業かなと聞き給ふに、花心におはする宮なれば、あはれとは思すとも、今めかしき方に必ず御心移ろひなむかし、女方も、いとしたり、かに物し給ふわたりにて、ゆるびなく聞え纏はし給は、月頃もさも慣らひ給はで、待つ夜多く過し給はむこそあはれなるべけれなど、思ひ寄るにつけても、あいなしや、我が心よ、何しに譲り聞えけむ、昔の人に心をしめてし後、大方の世をも思ひ離れて澄み果てたりし方の心も、濁りそめしかば、只かの御事をのみ、と様



流石に……然し大君の同意なきならぬのに無理業する事は、最初から愛した本意が立たぬ事だらう。行く先の……將來の豫定計畫ばかり考へてゐたのに大君は私をつれなく遇して、然し又一概に私をはねつけてしまひもすまい心安めに、妹も自分も同じ事だといつて、此方で望みもせぬ中の君に私を振向けようとなされたのが、まづその心掟を……先づ大君の計畫を覆へしてやらうと思つて、私は急に申の君を匂宮に取持つた譯であつた。

率てありき……匂宮を宇治に案内して申の君に逢はせようと奔走して上げた頃の事を薫は思出すにつけても、誠にとんでもない馬鹿な事だつたと。

宮も……又匂宮も何が何でもあの時分の事を思出されたら、私の耳だけでも少しは遠慮して勝手な振舞をお憤みなされさうなものだと。猶あだなる……矢張り浮いた方に傾き移り氣な匂宮のやうな人は、我がまことに……薫は自分から餘り一人の女に執着する性癖からして、他の男は非常に非難すべきもので、やうに見えるのであらう。

かの人を……大君を渡つて後、薫の

かう様には思ひながら、流石に人の心ゆるるされであらむことは、初より思ひし本意なかるべしと憚りつゝ、只いかにして少しもあはれと思はれて、うち解け給へらむ氣色をも見むと、行く先のあらまし事のみ思ひ續けしに、人はおなじ心にもあらずもてなして、流石に一方にしも、えさし放つまじう思ひ給へる慰めに、同じ身ぞといひなして、本意ならぬ方におもむけ給ひしが、妬く怨めしかりしかば、まづその心掟を違へむとて、急ぎせし業ぞかしなど、あながちに女々しう物狂ほしく、率てありき、たばかり聞えし程思ひ出づるも、いと怪しからざりける心かなと、返すたゞぞ悔しき。宮も、さりとともその程の有様思ひ出で給はば、我が聞かむ所をも、少しは憚り給はじやと思ふに、いでや、今はその折の事など、かけても宣ひ出でざるかし、猶あだなる方に進み、移りやすなる人は、女の爲のみにあらず、頼もしげなく、輕しき事もありぬべきな、めりかしなど、憎く思ひ聞え給ふ。我がまことに、餘り一方に染みたる心ならひに、人はいとこよなくもどかしく

思ふには、この君を……只大君の妹だと思ふので。

兄弟と……同じ姉妹といふ間柄でも大君と申の君とは特に、とまらむ人を……生き残る中の君を私と同じに思つて下さい。

よろづは……萬事薫の中の方には不服な事もない、只あの中の方を薫に上げたいと計畫してゐたのを打壊して匂宮に謀なされた事だけが、残りぬべき……執念が残ります。天翔りても……大君の靈はあの世から、かうした六の君の事が起つたに就いてはなほ私の取計らひをお怒みなさるだらう。

人やりならぬ獨寝——自業自得、即ち自分の心がらでの獨寝。申の君を得そこなつた事をいふ。

無げのすきびに……薫が一寸の慰みに情をもかけ。

まことに……衷心からお氣に入る女も無いのはあつさりした者だ。かの君達の……あの大君や申の君の身分に劣らぬ家柄の女達でも、あらせ給ふ……女房として屋敷に置いたり。

今はと世を……いざ出家でもしようとする時、この女こそと特別に後

見ゆるなるべし。かの人を空しう見奉りなしてし後思ふには、帝の御女を賜はむと思し掟つるも、嬉しくもあらず、この君を得ましかばと覺ゆる心の、月日に添へて勝るも、只かの御由縁と思ふに、思ひ離れ難きぞかし、兄弟といふ中にも、限なく思ひ交し給へりしものを、今となり給ひにし果にも、とまらむ人をおなじ事と思へ」とて、よろづは思はずなる事もなし。只かの思ひ掟てし様を違へ給へるのみなむ、口惜しう怨めしき節にて、この世には残りぬべきと宣ひしものを、天翔りても、かやうなるにつけては、いとつらしとや見給ふらむなど、つくづく、と、人やりならぬ獨寝し給ふ夜なくは、はかなき風の音にも目のみ覺めつゝ、來し方行く先の人の上さへ、あぢきな世を思ひ廻らし給ふ。無げのすきびに物をもいひ觸れ、氣近くつかひ馴らし給ふ人々の中には、自ら憎からず思さるゝもありぬべけれど、まことに、は心とまるも無きこそさわやかなれ、さるは、かの君達の程に劣るまじき際の人々も、時世に隨ひつゝ、衰へて、心細げなる住居するなどを、



髪牽かれるやうな深い關係は作らずに過したいと薫は深く用心してゐたものを、大君ゆゑには初一念を破つてほんにまあ不覺な、我ながら意地の曲つた心だわいななどと、明くる間咲きて、「朝顔は常なき花の色なれや明くる間咲きてうつろひにけり」。(細流)

北の院―二條院。三條宮の北に當る。御車は―匂宮様は。御車率て―内裏から空車だけを供人が扱かせて歸りました。

かの對の御方―中の君。日開けぬ先にと―日の開けぬ先に中の君を見舞うて来よう。

おりて―階から下りて。いみじう氣色だつ―ひどく氣取つてゐる浮氣男達に比較にもならず。けさのまの―置く露の消えぬ間のみに懸る朝顔の花の生命と知りつつも、今朝の間の色の美しさには心を牽かれる事よといふに、それと同じく短い人生と知りつゝ、矢張り一時の色香をめでようとする愚な自分よ、の意をよせた。

女どちは―二條院では匂宮が御不在ゆゑ女方はまだしだらなく朝寝をして居られるだらう。薫の心聲作らむこそ―聲づくりをして知らせるのも初心らしい、まあ餘り

尋ね取りつゝ、あらせ給ふなどいと多かれど、今はと世をそむき離れむ時、この人こそと取り立て、心とまる絆はだしになるばかりの事は無く、て過してむと、思ふ心づかひ深かりしを、いでさもわろく、わが心ながらねちけてもあるかななど、常よりもやがてまどろまず明し給へる且またに、霧の簾まがらひより、花のいろく面白く見え渡る中に、朝顔のはかなげにて交りたるを、猶殊に目とまる心地し給ふ、「明くる間咲きて」とか、常なき世にもなすらふるが、心苦しきなめりかし。格子もあげながら、いと假初かりそめにうち臥しつゝ、明し給へば、この花の開くる程をも、只一人のみぞ見給ひける。人召して、「北の院に參らむに、事々しからぬ車さし出ださせよ」と宣へば、「宮は昨日より内裏になむおはしますなる。夜へ御車率てかへり侍りにき」と申す。「さばれ、かの對の御方の惱み給ふなる、訪らひ聞えむ。今日は内裏に參るべき日なれば、日開けぬ先に」と宣ひて、御装束し給ふ。出で給ふまゝに、おりて花の中にまじり給へる御様も、殊更に艶えんだち、色めきてももてなし給はねど、怪しう、

早朝にやつて来たわいと。人召して―家來を近く呼んで。参りて侍るべし―上げてあるやうで御座います。

見るに―女房達が思つてゐると。いと様異に―普通の人と非常に違つて匂うて来るので。

猶いと―薫様は矢張實に目の覺めるやうな御容姿でいらつしやる、只餘り眞面目くさつていらつしやるのが憎らしい。

あひなく若き人々は―たしなみも無く若く女房は。驚き顔にもあらざ―薫の突然の御來訪に女房達は慌てた様子もなく。これに侍へと―此處に居よとお許し下さる點は我ながら面目をお許ますが、それでも猶こんな御簾の外に他人行儀にお置下さる心外さに度々御訪問も出来ません。

北面―裏の方の奥まつたお部屋です。私のやうな老人の居るのに似合つた休息所は、然しそれとても貴女のお計ひ次第ゆゑ私から懇訴申上げる筋合でもありません。

例の人々―中の君の侍女達。猶あしこ許に―矢張薫様のあすこ近くへいらつしつてお話し遊ばせは、やりかに―性急に。

只うち見るになまめかしう恥かしげにて、いみじう氣色だつ色好みどもに準なまめふべくもあらず、自らをかしうぞ見え給ひける。朝顔を引き寄せ給ふに、露いたうこぼる。

「けさのまの色にやめでむおく露の消えぬにかゝる花と見るく」

はかななど獨ごちて、折りて持給へり。女郎花をば見過ぎてぞ出で給ひぬる。

明け離るゝまゝに、霧たち満ちたる空をかしきに、女どちはしどけなく朝寝し給へらむかし、格子妻戸などうち叩き、聲作らむこそ初々しかるべけれ、朝まだきまだき來にけりと思ひながら、人召して中門の開きたるより見せ給へば、御格子ども皆参りて侍るべし。女房のけはひなどし侍りつゝと申せば、おりて、霧の紛れに様よく歩み入り給へるを、宮の忍びたる所より歸り給へるにやと見るに、露にうち濕り給へる薫、例のいと様異に匂ひくれば、猶いと目ざましうはおはすかし、



今は自ら……今では中の君自身、薫と話をするにも段々従来の妙に遠慮された心持も少しづつ薄らぎ、惱ましう思はるらむ……薫は中の君しめり給へる氣色、打沈んで居られる中の君の御様子。こまやか丁寧に。兄弟やうの……兄弟か何ぞの間柄にありさうなやうに。わざと似給へりとも……特に大君に似ていらつしやるとも、以前思はれなかつたけれど。只それとのみ……今では全く大君そつくりと薫は思召すので。物思はぬ人は、苦勞のない人は。人々しく……私は人並に榮達出来る身ではなくとも、胸に心配があり歎息がちに我が身をもて餘すなどいふ風にはなくて、氣樂にこの世を過す事が出来ると自ら信じて居りましたに、大君を戀した我が心がらで、悲しい事も人のろく見られて口惜しい物思も、襟々に氣を揉んで心配するのが誠につまらぬ事です。官位など……官位昇進の遅速などいって重大な事とする當然の心配事につけて氣を揉む人々よりも、私の心配はちつと罪の深さが甚しい

心を餘りをさめ給へるこそ憎けれなど、あいなく若き人々は聞え合へり。驚き顔にもあらず、よき程にうちそよめきて、御梅さし出でなどする様も、いと目やすし、これに侍へと許させ給ふ程は、人々しき心地すれど、猶かゝる御簾の前にさし放たせ給へる憂はしきになむ、屢もえ侍はぬと宣へば、さらばいかゞは侍るべからむと聞ゆ、北面などやうの隠れぞかし、かゝる舊人などの侍はむに、道理なる休み所は、それもまた只御心なれば、愁へ聞ゆべきにも侍らずとて、長押におしかかりておはすれば、例の人々、猶あしこ許になどそゝのかし聞ゆもとより、けはひはやりかに雄々しくなどは物し給はぬ人柄なるを、いよいよしめやかにもてなし治め給へれば、今は自ら聞え給ふ事も、やうやうたてつゝ、ましかりし方少しづつ薄らぎて、面馴れ給ひにたり。惱ましう思はるらむ様も、いかなればなど問ひ聞え給へど、はかばかしくも御答聞え給はず。常よりもしめり給へる氣色の、心苦しきもあはれに覺え給ひて、こまやかに世の中の有るべきやうなどを、兄

赤みもてゆくも、萎れて色濃くなつてゆくのも。花を簾の中へ。さし入れて……白露は朝顔と契離れよそへて……白露は朝顔と契離れぬ花ゆゑこの朝顔を露と同様に賞託すべきでした、即ち大君が私に托して置かれた貴女の御身の上故、大君同様と思つてよい譯でしたとの意。殊更びてしも、態々骨折つてした譯でもないのに。置きながら露の置いた儘で。消えぬまに……露の消えぬ中に早くも枯れてしまつた朝顔の果敢なさよりも、残つた露は實はもつと果敢ないものです、即ち脆く亡くなられた大君より、生き残つた私は更に果敢ない物思に沈んで居りますとの意。何にかゝれる……露は花に纏つてゐるが私は何を力にしてゐる命でせう。いひ消ち給へる……打消して仰しやる。今少し……他の季節よりも一層。庭も籬も……御舊邸の庭も垣根も。古今……里は荒れて人は舊りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる。故院の……源氏薨去後は、夜前二三年程隠棲して居られた嵯峨院にも御本邸だつた六條院にも、立寄る

弟やうの者のあらしやうに、教へ慰め聞え給ふ。聲などもわごと似給へりとも覺えざりしかど、怪しきまで只それとのみ覺ゆるに、人目見苦しかるまじうは、簾もひき上げて、さし向ひ聞えまほしく、うち惱み給へらむ容貌ゆかしう覺え給ふも、猶世の中に物思はぬ人は、えあるまじき業にやあらむとぞ、思ひ知られ給ふ、人々しくきら／＼しき方には侍らずとも、心に思ふ事あり、歎かしく身をもて悩む様になどはなくて過しつべきこの世と、自ら思ひ給へしを、心から悲しき事も、鳴濤がましく悔しき物思をも、方々に安からず思ひ侍るこそいとあいなけれ。官位などいひて、大事にすめる道理の愁へにつけて、歎き思ふ人よりも、これや今少し罪の深さは勝るらむなどいひつゝ、折り給へる花を扇にうち置きて見居給へるが、やう／＼赤みもてゆくも、なかなか色のあはひをかしく見ゆれば、やをらさし入れて、  
よそへてぞ見るべかりける白露の  
ちぎりかおきし朝がほの花

宿木



人の悲みの抑へやうもなかつたものでした。かの御あたりの人源氏にお仕立てした人々。集ひ物せられける人々妻妾方。所々にあがれ散り……あちこちに別れ散つて銘々世を捨てた出家の生活なさいますやうでしたが。はかなき程の……何でもない低い身分の女房達でも亦。物覚えぬ心に……理性を失つてしまつた心のまゝに片山里に隠退し。さてなか／＼皆……元の儘では餘りに悲しい追憶が多いので却て六條院を荒れさせ、源氏在世當時の名残をすつかり無くなし昔を忘れさせるやうにして後に、忘草は忘れぬ種の意。

この左の大殿夕霧。宮達一明石中宮のお腹の皇子方。昔に返りたる……源氏時代に立返つたやうに再び榮える事になつたのです。

さる世に憐なき……あんな源氏薨去のやうな、世に又とない悲しさだと思つた事でも。思ひ醒ます……感じが薄らいでくる時節が到来するのであると。限ある業なりけりと悲みも際限のあるものだわいと。

殊更びてしももてなさぬに、露を落さで持給へりけるよと、をかしく見ゆるに、置きながら枯るゝ氣色なれば、

「消えぬまに枯れぬる花のはかなさに  
おくるゝ露はなほぞまされる

何にかゝれる」と、いと忍びて言も續けず、つゝましげにいひ消ち給へる程、猶いとよく似給へるかなと思ふにも、先づぞ悲しき。秋の空は今少し詠めのみ勝り侍る、徒然の紛らはしにもと思ひて、さいつ頃宇治に物して侍りき。庭も籬もまことにいとゞ荒れ果て、侍りしに、堪へ難き事多くなむ。故院の失せ給ひて後、二三年ばかりの末に、世をそむき給ひし嵯峨の院にも、六條院にも、さし覗く人の、心をさめむ方なくなむ侍りける。本草の色につけても、水の流に添へても、涙にくれてのみなむ歸り侍りける。かの御あたりの人は、上下心淺き人なくこそ侍りけれ。かた／＼集ひ物せられける人々も、皆所々にあがれ散りつゝ、おの／＼思ひ離るゝ、住居をし給ふめりしに、はかなき程の女房

古への悲しさ……源氏薨去の折の悲しきは私がまだ幼い時分でさう痛切に身に沁まなかつたのでせう。この近き夢……大君の逝去をいふ。罪深き方は……後生の爲の罪障となる事は今度の悲みの方が甚しいだらうか知らんと。

昔の人を……大君をそんなに深く思はぬ人ですら、薫のお歎きなさる御様子を見たら、何がなしに平氣でも居られさうもないに。

まいて我も……まして中の君自身も。面影に戀しく……大君の姿が。催されて……薫のお話で中の君は悲みを誘はれて。

ためらひかね給へる……涙を抑へかねて入らつしやる。

世の憂きよりは……古今、山里は物の寂しき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり。

さやうに思ひ比ぶる……山里は寂しさと世の憂い事とを比較して考へて見るといふ事も特にせずして。いかで静なる……どうか宇治の山里のやうな處に静な生活で。

この二十日あまり……今日二十日過は父君八宮の三回忌になるので宇治へ行つてあの山莊近い阿闍梨の寺で法要をも誓みたいと存じます。が、勅に宇治へ連れて行つて下さ

などはた、まして心をさめむ方なく覺え侍りけるまゝに、物覚えぬ心に任せつゝ、山林に行きまじり、すゞろなる田舎人になりなど、あはれに感ひ散ること多く侍りけれ。さてなか／＼皆荒し果て、忘草生ふして後なむ、この左の大君も渡り住み、宮達などもかた／＼物し給へば、昔に返りたるやうに侍るめる。さる世に憐なき悲しさと見給へし程の事も、年月経れば思ひ醒ます折の出で来るにこそはと見侍るに、げに限ある業なりけりとなむ見え侍りし。かくは聞えさせながらも、かの古への悲しさは、まだいはけなく侍りける程にて、いとさしも染まぬにや侍りけむ。尙この近き夢こそ、醒ますべき方なく思う給へらるるは、同じごと世の常なき悲びなれど、罪深き方は勝りて侍るにやと、それさへなむ心憂く侍るとて、泣き給へる程いと心深げなり。昔の人をいとしも思ひ聞えざらむ人だに、この人の思ひ給へる御氣色を見むには、すゞろに徒にもあるまじきを、まいて我も物を心細く思ひ亂れ給ふにつけては、いとゞ常よりも、面影に戀しく悲しく思ひ聞え給



いままいかと、實は貴方にお願  
 しようかと存じて居りました。  
 荒さじと……宇治の山莊に折々入ら  
 しても、どうしてそれは出来ませう  
 かい、氣輕にすぐ出かけられる男  
 の身ですら。  
 あらましき山道―荒涼たる山道。  
 故宮の……八宮様の三回忌の御法事  
 を營む事については。  
 彼處は猶……あの山莊は矢張佛様に  
 お請してお寺になさいませ。  
 時々見給ふるに……あの山莊が舊態  
 を存してゐるのを時々見るにつけ  
 て私は悲しさが絶えぬのも生憎な  
 ので、罪滅しが出来るやうに寺に  
 したらと存じます却又どんな御考  
 がおありでせうか、どうとも思召  
 に随つて取計らひたいと存じます。  
 この上も―八宮御道福の爲には薫の  
 なされた上に更に中の君も。  
 かやうなる序に……法事を機會にし  
 て、そつと宇治に引込んでしまは  
 うと考へ込んでいらしやる中の君  
 の御様子だから。  
 事あり額……中の君との間に變な關  
 係ありさうに疑はれさうだから。  
 何處にても……何處でも私は薫の  
 外になど置かれた事はありません  
 ので、今こんな他人扱にされる

ふ心なれば、今少し催されて、物もえ聞え給はず、ためらひかね給へる  
 けはひを、かたみにいとあはれと思ひかはし給ふ、世の憂きよりはな  
 ど、人はいひしをも、さやうに思ひ比ぶる心も殊になくて、年頃は過し  
 侍りしを、今なむ猶いかで靜なる様にても過さまほしく思ひ給ふる  
 を、流石に心にも叶はざれば、辨の尼こそ羨ましく侍れ。この二十  
 日あまりの程は、かの近き寺の鐘の聲も聞き渡さまほしく覺え侍る  
 を、忍びて渡させ給ひてむやうと聞えさせばやとなむ思ひ侍りつると  
 宣へば、荒さじと思はずとも、いかでかは、心やすき男だに、いと往來  
 の程あらましき山道に侍れば、思ひつゝなむ月日隔たり侍る。故宮の  
 御忌日は、かの阿闍梨に、さるべき事ども皆いひ置きて侍りにき。彼  
 處は猶たふとき方に思し譲りてよ。時々見給ふるにつけては、心惑  
 の絶えせぬもあいなきに、罪失ふ様になしてはやとなむ思ひ侍るを、  
 又いかゞ思し掟つらむ。ともかくも定めさせ給はむに隨ひてこそは  
 とてなむ、あるべからむやうに宣はせよかし。何事も疎からず承はら

と極り悪い心持がします、それで  
 お暇致しますが、然し近日又こん  
 な簾の外までも参りませう。  
 宮のなか……匂宮が役に私の來た  
 事を聞かれて、何で不在中には來  
 たのだらうと變に思召しさうな御  
 氣質なのも薫は面倒。  
 侍の別當―匂宮の侍所の長。  
 夜べまからせ……匂宮様は昨夜  
 禁中から御退出と聞いて今参上し  
 たのにまだ御歸邸でないのが残念  
 です、これから禁中に参りませう  
 かしら。  
 夕つ方も―夕方にでも又々お何致し  
 ませう。  
 猶この御けはひ……薫は矢張中の君  
 にお逢ひする度毎に、何で大君の  
 御意向を無視して思ひやりもなく  
 中の君を娶らなかつた事かと。  
 なぞや人遣りならぬ……中の君を我  
 が物にすれば出來たものを、何と  
 まあ自業自得の心なのだらうと。  
 そのまゝに―薫は大君の逝去から引  
 續いて。  
 母宮―女三宮。  
 物しどけなき……餘り行届きもなき  
 らぬお心でも、かうした薫の御様  
 子を大變不安に思召して。  
 幾世しも……私の餘命も最早幾らも  
 ありますまいに、貴方と一緒にいか

むのみこそ、本意の叶ふにては侍らぬなど、まめだちたる事どもを聞  
 え給ふ、經佛など、この上も供養し給ふべきなめり。かやうなる序  
 にことづけて、やをら籠り居なばやなと、おもむけ給へる氣色なれば、  
 「いとあるまじき事なり。なほ何事も心のどかに思しなせ」など教へ  
 聞え給ふ。日さしあがりて、人々参り集まりなどすれば、あまり長居  
 も事あり顔ならむにより、出で給ひなむとて、何處にても御簾の外に  
 は慣らひ侍らねば、はしたなき心地し侍りてなむ。今又かやうにも侍  
 はむとて立ち給ひぬ、宮の、などかなき折には來つらむと、思ひ給ひぬ  
 べき御心なるも煩はしくて、侍の別當なる右京の大夫召して、夜べま  
 かでさせ給ひぬと承はりてなむ参り來つるを、まだしかりければ口  
 惜しきを、内裏にや参るべきと宣へば、今日(右京)はまかでさせ給ひなむ  
 と申せば、さらば夕つ方も」とて出で給ひぬ。猶この御けはひ有様を  
 聞き給ふ度毎に、などて昔の人の御心掟をも違へて、思ひ限なかりけ  
 むと悔ゆる心のみ増さりて、心にかゝりたるもむつかしく、なぞや人



うしてゐる間は立派な御生活を見  
せて下さい、貴方が世を捨て、出  
家なさうのも、元々私自身がこ  
んな尼法師の身では邪魔だてすべ  
きでもありませんが、現世が一人  
子の貴方に出家されてはつまらな  
くなりさうな心惑の爲に、猶更罪  
障を作る事になりませう。  
辱なく、薫は勿體なくお氣の毒で、  
様々の物思を抑制して。  
左の大殿夕霧。  
待ち聞え給ふに、六の君の婿君とし  
て匂宮をお待申して居られるが、  
心もとなければ、匂君がまだ入らつ  
しやらず待遠なので。  
いとしも、元來この縁談は非常に  
匂宮が氣乗がしてゐるといふでも  
ない事で。  
案内し給へば、匂宮へ使をおやり  
なると。  
思す人、中の君といふ愛妻が二條  
院にはいらつしやるのだから無理  
もないと夕霧は氣が揉めるけれど、  
折角準備した今晚を空しく過すの  
も世間の物笑にならうから。  
大ぞらの、大空の月すら澄み渡つ  
て私の宿を照してくられるに、待  
つ宵も過ぎてお出下さらぬ貴方は  
怨めしう御座います。  
宮は、匂宮は生中今六の君の處へ

遣りならぬ心ならむと、思ひ返し給ふ。そのまゝに、いまだ精進にて、い  
とゞ行をのみし給ひつゝ、明し暮し給ふ。母宮は猶いと若くおほどき  
て、物しどけなき御心にも、かゝる御氣色をいと危くゆゝしと思して、  
「幾世しもあらじを、見奉らむ程は、なほかひある様にて見え給へ。世の  
中を思ひ捨て給はむをも、かゝる身にては、妨げ聞ゆべきにもあらぬ  
を、この世のいふかひなき心地すべき心惑に、いとゞ罪や得らむと  
覺ゆる」と宣ふが、辱なくいとほしくて、よろづを思ひ消ちつゝ、御前  
にては物思なき様をつくり給ふ。  
左の大殿には、六條院の東の大殿を磨きしつらひて、限なくよろづを  
調へて待ち聞え給ふに、十六夜の月やうくさし上るまで心もとな  
ければ、いとしも御心に入らぬ事にて、いかならむと安からず思して、  
案内し給へば、この夕つ方内裏より出で給ひて、二條院になむおはし  
ますなると、人申す。思す人持給へればと心やましけれど、今宵過ぎむ  
も人笑へなるべければ、御子の頭中將して聞え給へり。

出かけるのだといふ風に中の君に  
見せたくなは、お氣の毒だと思  
召し、内裏から直接夕霧邸へ行く  
管で内裏に居られたが、上げたお  
手紙に中の君から御返事が来たの  
がどんなに情をこめて書いてあつ  
たものか、匂宮は矢張非常に可愛  
く思召したので密に又中の君の處  
へ行つて居られたのであつた。  
諸共に月を、頭中將の來た時は、  
女君、中の君。  
つれなくて、何氣ない風で過して  
ゐる事なので。  
殊に聞きも咎めぬ、夕霧から匂宮  
へ來た使を中の君は格別氣にも留  
めぬやうな風に。  
流石に、匂宮は流石に六の君の事  
もお氣の毒なので。  
今いと疾く、一寸大急ぎで行つて  
直に歸つて参りませう。  
なまかたはら痛ければ、匂宮は何だ  
か中の君に工合わるいので、  
ともかくも、どうといふ分別もな  
いけれど、中の君は涙で枕も浮き  
さうな心持がするの。  
幼き程より、以下中の君の心。  
世の中を、現世に何の希望を繋い  
でいらつしやるとも見えなかつた  
父君お一人を力にして。  
いつとなく一年が年中。





いとかく心に……あの時分は只今ほどひどく痛切にこの世を愛いものだとも感じなかつたのに、父宮から姉君と引續いて亡くなられたひどい悲みを味つた時は、とまりて生き永らへて。人の思ひたりし……他人が豫想してゐたよりは句宮に引取られた爲に人並になつたやうな生活なのを、どうせ長く保てさうな縁とも思はないけれど互に逢つてゐる時だけは憎らしい處もない句宮の御氣象とお仕打なので段々心配も薄らいで暮して来たのに、今度の六の君の事に就いての我が身の辛さは又いひやうもなく。限と覺ゆる……これ縁切だと思はれる。ひたすら世に……まるつきり亡くなられた父宮や姉君に比べると、如何に冷淡にせよ句宮は時たまでも何のお顔を見せて下さらぬ筈があらうかとも思つてよささうだが。思ひやる方……自然生きてゐたら自ら永らへば……又句宮の愛情の甦る事もあらうなごと。眞捨山の……慰め難い氣持のみ強くなつて来ての意。古今「我が心慰めかねつ更級や娘捨山に照る月を

夕暮  
「大ぞらの月だにやどるわが宿に  
まつ宵すぎて見えぬ君かな」  
宮は、なか／＼今なむとも見えじ、心苦しと思して、内裏におはしけるを、御文聞え給へりける、御返りいかゞありけむ、猶いとあはれに思されければ、忍びて渡り給へりけるなり。らうたげなる有様を見捨て、  
出づべき心地もせず、いとほしければよろづに契り慰めて、諸共に月を詠めておはする程なりけり。女君は日頃もよろづに思ふこと多かれど、いかで氣色に出ださじと念じ返しつゝ、つれなくて過し給ふことなれば、殊に聞きも咎めぬ様に、おほどかにもてなしておはする氣色いとあはれなり。中將の参り給へるを聞き給ひて、流石に彼もいといとほしければ、出で給はむとて、今いと疾く参りこむ。一人月な見給ひそよ。心空なればいと苦しと聞え置き給ひて、なまかたはら痛ければ、隠れの方より寢殿へ渡り給ふ。御うしろでを見送るに、ともかくも覺えねど、たゞ枕の浮きぬべき心地のすれば、心憂きものは人

見て。山おろし……宇治の山莊の風をいふ。椎の葉の音……宇治の舊邸なる椎の葉の風に騒ぐ音。山里の……宇治の山莊も寂しく悲しかつたが、これ程身に沁みて悲しい事は無かつたとの意。松のかけ、秋の風は擬へた語。來し方は……こんな歌を詠まれたのは過去の生活はお忘れになつたものであらう。記者の評。月見るは……月の面を凝視するは不吉として忌んだのは當時の風習。淺ましう……獨立句。御覽じ入れねば……見向きもなさらないので。ゆゑしう……不吉な聯想が浮んで來ますものを。大君が食慾絶えて程なく逝去された事をいふ。いでやこの御事よ……ほんにまあ句宮様とした事が、何が何でもこの儘中の君を見捨て、しまひはなされずまい、他に増花が出来たといつても最初深く思込んだ仲はさつぱりと切れてしまふものではあるまい。いかにも……假令どうあらうとも口に出して噂してほしくないものだ、黙つて句宮のなさる儘にして眺めてみようと思召すのは。

の心なりけりと、我ながら思ひ知らる。幼き程より心細くあはれなる身どもにて、世の中を思ひとゞめたる様にもおはせざりし一所を頼み聞えさせて、さる山里に年經しかど、只いつとなく徒然にすごうはありながら、いとかく心にしみて、世を憂きものとも思ひ知らざりしに、うち續き淺ましき御事どもを思ひし程は、世に又とまりて片時經べくも覺えず、戀しう悲しき事の類あらじと思ひしを、命長くて今までも永らふれば、人の思ひたりし程よりは、人数にもなるやうなる有様を、長かるべき事とは思はねど、見る限は、憎げなき御心ばへもてなしなるに、やう／＼思ふこと薄らぎてあり經つるを、この折節の身の憂さはたいはむ方なく、限と覺ゆる業なりけり。ひたすら世に亡くなり給ひにし人々よりは、さりととも、これは時々もなかはとも思ふべきを、今宵かく見捨て、出で給ふつらさに、來し方行く先皆かき亂り、心細くいみじきが、我が心ながら思ひやる方なく、心憂くもあるかな。自ら永らへばなど、慰めむことを思ふに、娘捨山の月のみ澄みのぼり



人にはいせじし流石に中の君は句  
宮の事を人には彼はいはせたくは  
ない。  
中納言殿の……薫様があれ程深い御  
親切だつたものを、中の君がお膝  
きなさらぬのが残念な事よ。  
そのかみの人々大君が中の君を薫  
に上げようとなされた當時の事を  
知つてゐる老女達。  
人の御宿世中の君の御運勢。  
宮は句宮は。  
いかでめでたき……どうか六の君に  
立派な婿君よと歓迎されたいもの  
だと氣取つて。  
待ちつけ聞え給へる所夕霧の邸。  
人の御程六の君の御容姿。  
なりあひたる一發育しきつた。  
いかならむ六の君の人柄はどんな  
ものか知らん。以下句宮の心。  
あざやぎて一態度が蓮葉で。  
御心ざし……句宮は六の君を疎略に  
扱ふ氣にもおなりなさらぬ。  
對へは中の君の處へは。  
御文六の君への後朝の文。  
御氣色怪しうは……句宮様は六の君  
がどうやらお嫌でもなささうな。  
對の御方……中の君がお氣の毒な、  
句宮様がどんなに博愛なお心でも  
自然中の君が六の君に壓倒される  
事もあるだらう。

て夜更くるまゝによろづ思ひ亂れ給ふ。松風の吹きくる音も、荒まし  
かりし山おろしに思ひ比ぶれば、いとどかに懐かしう目やすき御  
住居なれど、今宵はさも覺えず、椎の葉の音には劣りて覺ゆ。

中君 山里の松のかげにもかくばかり

身にしむ秋の風はなかりき

來し方は忘れにけるにやあらむ。老人どもなど、今は入らせ給ひね、  
月見るは思み侍るものを。淺ましう、はかなき御菓物をだに御覽じ入  
れねば、いかにならせ給はむ。あな見苦しや。ゆゝしう思ひ出でらる  
る事も侍るを、いとこそわりなければなどいふ。若き人々は心憂の世や  
とうち歎きて、いでやこの御事よ。さりともかくては疎にはよもなり  
果てさせ給はじ。さいへど、もとの志深う思ひそめつる中は、名残な  
らぬものぞなどいひ合へるも、様々に聞えにく、今はいかにもく  
かけていはざらなむ、只にこそ見めと思さるゝは、人にはいはせじ、我  
一人恨み聞えむとにやあらむ。いでや中納言殿の、さばかりあはれな

只にしもあらず……この侍女達は一  
通りのでなく皆句宮の手かけのや  
うにして馴染んだ者どもなので。  
御返りも……六の君からの御返事も  
御自分の室で見たいと句宮は思召  
すけれど、昨晚一夜だけ中の君に  
無沙汰なされた氣遣はしきも事情  
が事情ゆゑ平素の無沙汰よりは一  
層お氣の毒なので、急いで中の君  
の許へお出になつた。  
あいなく涙ぐまれて……句宮は自分  
の仕打が我ながら面白くなく、涙  
ぐまずにみられず。  
愛さしなど一愛の恰好など。  
宮もなまはしたなきに句宮も何だ  
か蹴がわるいので。  
面隠しにや照れ隠しなのか。  
暑きほどの事……身體の惱ましきも  
暑い間だけの事と仰しやつたので。  
様々にせさする事も色々と手を盡  
す御祈禱も。  
修法は……修法の日数は。  
夜居……主人の急災を祈る爲の僧の當  
直。  
かゝる方にも……かうした眞面目な  
事柄に對しても句宮のお口先のう  
まいのは、中の君は嫌な氣がなさ  
るけれど。  
昔も怪しう……以前にも何だか人と  
違つた體質でこんなに苦しむ事は

る御心深さをなど、そのかみの人々はいひ合はせて、人の御宿世の  
あやしかりける事よといひ合へり。

宮はいと心苦しう思しながら、色めかしき御心は、いかでめでたき様  
に待ち思はれむと、心懸想して、えならず炷きしめ給へる御けはひ、い  
はむ方なし。待ちつけ聞え給へる所の有様も、いとをかしかりけり。人  
の御程さゝやかに、あえかになどはあらで、よき程になりあひたる心  
地し給へるを、いかならむ、物々しくあざやぎて、心ばへもたをやかな  
る方はなく、物誇りかになどやあらむ、さあらばこそうたてあるべけ  
れなど思せど、さやうなる御けはひにはあらぬにや、御心ざし疎なる  
べうも思はれざりけり。秋の夜なれど更けにしかばにや、程もなく明  
けぬ。歸り給ひても、對へはふともえ渡り給はず、暫し大殿籠り起き  
てぞ、御文書き給ふ。御氣色怪しうはあらぬなめり」と、御前なる人々  
突きじろふ。對の御方こそ心苦しけれ。天の下にあまねき御心なりと  
も、自らけ壓さるゝ事もありなむかしなど、只にしもあらず、皆馴れ



御座いました、自然にうまく癒りますものを。  
いとよくこそ……まあ實に綺麗な事を仰しやるのですね。中の君が嫉妬を隠してゐるをいふ。  
これに並ぶ人……中の君に匹敵する人。なほ又疾く……矢張一方では又早く六の君に逢ひたいといふ焦慮も動いていらつしやるのは、六の君に對する御愛情が一通りでもないのであらう、然し匂宮は中の君に逢つてゐる中は少しも前と愛情が變る事も無いものか。  
げにこの世は……ほんにこの世では、短い命の終る間にすら匂宮の無情なお心持が露はれさうだから、せめてあの世へ行つての契は或は間違なく守られる事もあらうかと思ふので、それで矢張性意もなく又もや匂宮を當にする氣にもなる。念ずべかめれど……中の君が怪へてゐるやうだけれど辛抱出来ないのか。  
いかでかく思ひけりと……中の君はどうか、始終こんなに煩悶してゐると匂宮に悟られたくないと。  
こぼれそめては……涙がこぼれ出したらもう急にとめる事も出来にやらないのを。  
背き給へば……中の君が顔をお背けな

仕うまつりたる人々なれば、安からずうちいふ事どもありて、すべて猶妬げなる業にぞありける。御返りも此方にてこそはと思せど、夜のほどの覺束なさも、常の隔よりはいかゞと心苦しければ、急ぎわたり給ふ(匂宮)寝くたれの御容貌(匂宮)、いとめでたく見所ありて入り給へるに、臥したるもうたてあれば、少し起き上りておはするに、うち赤み給へる顔の匂など、今朝しも常より殊にをかしげさ勝りて見え給へば、あいなく涙ぐまれて、暫しうちまもり聞え給ふを、恥かしく思してうちうつ伏し給へる髪のかゝり髪ざしなど、猶いとあり難げなり。宮もなまはしたなきに、こまやかなる事などは、ふともえいひ出で給はぬ面隠しにや、(匂宮)などかくのみ惱ましげなる御氣色ならむ。暑きほどの事とか宜ひしかば、いつしかと涼しき程待ち出でたるも、晴れくしからぬは、見苦しきわざかな。様々にせさする事も、怪しう驗なき心地のみこそすれ。さはありとも、修法は又延べてこそはよからめ。驗あらむ僧もがな。某僧都をぞ夜居には侍はすべかりける」などやうなる、ま

さるもので。  
開ゆるまゝに……貴女は私のいふ通りになつて誠に穩かな御性質と思つて居りましたに。  
さらずば……でなければ僅か一夜の夜に心變りがなされたのですか。夜の中の心變り……貴方こそ一夜の言葉によつて推察出来ます。今のおされどまことに……實際は私の心に疾しい處が無いから。  
いみじう言擇して……假令うまく口前を繕つて私が申上げて、偽ならすぐ分る譯ですからねえ。  
世の道理を……男は必しも一人の妻のみを守つてゐられぬ場合があると、いふ世の習を。  
よし我が御身……では貴女御自身の事として考へて御覽なさい、我身が我心の儘にならぬ世の中ですよ。もし思ふやうなる世も、萬一豫想してゐるやうな時期も、匂宮が兄東宮のあとを襲ひ東宮となり天子となることをいふ。  
人に勝りける……他の人より以上に貴女を愛してゐる心だけを、皇目にかけて得る一件が、皇命のみにしようの命だけを當にして居りませう、生きてさへ居たら

め事を宣へば、かゝる方にも言よきは心づきなく覺え給へど、むげに答へ聞えざらむもうたてあれは、昔も怪しう人に似ぬ有様にて、かやうなる折は侍りしかど、自らいとよくおこたるものをと宣へば、いとよくこそ爽かなれ」とうち笑ひて、懐かしう愛敬づきたる方は、これに並ぶ人はあらじかしと思ひながら、なほ又疾くゆかしき方の心焦られも立ち添ひ給へるは、御志の疎にもあらぬなめりかし。されど見給ふほどは變るけぢめもなきにや、後の世までと誓ひ頼め給ふことどもの盡きせぬを、聞くにつけても、げにこの世はいと短かめる命待つ間も、つらき御心ぞ見えぬべければ、後の契や違はぬこともあらむと思ふにこそ、猶懲りすまに又も頼まれぬべけれとて、いみじう念ずべかめれど、え忍びあへぬにや、今日は泣き給ひぬ。日頃も、いかでかく思ひけりと見え奉らじと、よろづに紛らはしつるを、様々に思ひ集むる事し多ければ、さのみもえもて隠されぬにや、こぼれ初めてはとみにもえためらはぬを、いと恥かしく侘しと思ひて、いたく背き給へ

宿木



必ずお目にかける折があります。彼處に六の君の許に。大びらに中けざやかにこの南面に。海人の刈る。使が祿として美しい。袋を頂戴して来たのを身置も隠れる位肩から懸けてゐるのを。袋に藻をいひかけ、その縁語で海人の刈るといつた。さなめりと。六の君へ行つた使だ。なあと侍女達も見てゐる。いつの程に。今朝早く匂宮は此方へ入らしたのに、まあいつの間にお文を書いて六の君へお上げなされたのかと中の君は思召すも。さしぐみは。無遠慮に見せつもの。矢張お氣の毒だのに、使の男が少しは斟酌すればよにと。同じくは隔なき。成らう事なら中の君に隔なき風を取繕つてしまはうと思召して、中の君の前で手紙を開封なさると。繼母の宮。落葉宮をいふ。今少し心安くて。この場合六の君の自筆よりは少しはつとして。宣旨書にても。代筆にして。中の君の前で讀むのは矢張氣の引ける事だ。宣旨書は勅宣を承けて書く文書。こゝは代筆の意。さかしうは。差出がましく代筆な

ば、強ひて引き向け給ひつゝ、聞ゆるまゝに、あはれなる御有様と見つるを、猶隔てたる御心こそ物し給ひけれな。さらずば夜の程に思し變りにたるか」とて、我が御袖して涙を拭ひ給へば、夜の中の心變りこそ、宣ふにつけて推し量られ侍りぬれ」とて、少しほ、笑み給ひぬげにあが君や、をさなの御物いひや。されどまことには心に限のなけれはいと心安し。いみじう言擇して聞ゆとも、いと著かるべき業ぞ。むげに世の道理を知り給はぬこそ、らうたきものからわりなけれ。よし我が御身になしても思ひ廻らし給へ。身を心ともせぬ有様なりかし。もし思ふやうなる世もあらば、人に勝りける志の程も知らせ奉るべき一節なむある。たはやすく言出づべき事にもあらねば、命のみこそなど宣ふほどに、彼處に奉り給へる御使、いといたう酔ひ過ぎにければ、少し憚るべき事も忘れて、げざやかにこの南面に參れり。海人の刈る珍しき玉藻に、かづき埋もれたるを、さなめりと人々見る。いつの程に急ぎ書き給ひつらむと見るも、安からずはありけむかし。宮もあ

どするのは工合わるさに、六の君に執筆を勧めました。女郎花。貴方の御態度がどうあつた事やら、六の君は益々萎れきつて居りますとの意。女郎花を六の君、露を匂宮に譬へた。卿言がましげ。不平がましい口吻。なのも厄介だ。實は中の君一人を守り氣樂にして當分は暮した。いと思つてゐるのに。又二つとなくて。本妻一人を無二のものとして。それが當然と思ひ慣れた平人の夫婦間でこそ、夫が他に女が出来た場合の怨めしさなど他人が見ても妻に同情するものだが、思へば貴人などの御身分ではさうは行かぬ、結局かうなるのが當然だ。幾人も。幾人でも妻妾をお持ちになるのに非難もあるまいから、誰でも中の君をお氣の毒だなどとも思つてゐないのだらう。かばかり。これ程匂宮が中の君を仰山らしく大事にお取扱ひなされ、可愛い人として一通りならず思つていらつしやるのを見て、世間では中の君を幸福な方だと尊んでゐる位である。中の君自身の心でも、匂宮が幸福に慣れさせて下さつて、急にこんなひどい仕打をな

ながちに隠すべきにはあらねど、さしぐみは猶いとほしきを、少しの用意はあれかしと、なまかたはら痛けれど、今はかひなければ、女房して御文取り入れさせ給ふ。同じくは隔なき様にもてなし果て、むと思して、引き開け給へるに、繼母の宮の御手なめりと見ゆれば、今少し心安くてうち置き給へり。宣旨書にてもうしろめたの業や。さらしらはかたはら痛さに、そゝのかし侍れど、いと惱ましげにてなむ。落葉「女郎花しをれぞまさるあさ露の」いかに置きける名残なるらむ。あてやかにをかしう書き給へり。卿言がましげなるも煩はしや。まこととは心安くて暫しはあらむと思ふ世を、思の外にもあるかななどは宣へど、又二つとなくて、さるべきものに思ひ慣らひたるたゞ人の中こそ、かやうなる事の怨めしさなども、見る人苦しくはあれ、思へばこれはいと難し、遂にはかゝるべき御事なり。宮達と聞ゆる中にも筋異に世の人思ひ聞えたれば、幾人も。得給はむこと、もどきあるまじ



さるのが一層悲しいのらしい。かゝる道を……男女間の關係といふものはこんな心勞多いものなのに、何故なら深く人々が魂を打込むのだらうかと。

げに疎なるまじき……ほんにこの道は一通りの浅いものではなかつた。物參らざるこそ……食物を召上らないのが誠によくありません。いと遙にのみ……中の君は食事などに思つていらつしやるので。今めかしきに……物珍しい情趣を慕ふ宮のお心持だから、一層あたる情景が趣深く見えるのに。

物思はしき人……愁ひ勝な中の君。山の蔭……宇治の山莊。

おほ方に……宇治に住んでゐたら朝の聲も只一通りの寂しさ位に感じて聞いてゐたらうに、生中宮宮に從つて都に來た爲にこの秋の夕暮は朝の聲も一層怨めしい心持で聞く事よ。

出で給ふなり……匂宮が六の君の許へ。御前の聲……御先拂の聲。

海人も釣するばかり……涙が溢れて海の如くなつたとの形容。

初より……中の君は最初から匂宮が自分に様々氣をお揉ませなされた事などを思出すにつけても。

ければ、人もこの御方いとほしなども思ひたらぬなるべし。かばかり物々しくかしづき据ゑ給ひて、心苦しき方疎ならず思したるをぞ、幸におはしけるとは聞ゆめる。自らの心にも餘りに慣はし給ひて、俄にはしたなかるべきが歎かしきなめり。かゝる道をいかなれば、淺からず人の思ふらむと、昔物語などを見るにも人の上にて、怪しう聞き思ひしは、げに疎なるまじき業なりけりと、我が身になりてぞ、何事も思ひ知られ給ひける。宮は常よりも、あはれにうち解けたる様にもてなし給ひて、むげに物參らざるこそいと悪しけれなど宣ひて、由ある御菓子召し寄せ、又さるべき人召して、殊更に御あはせ調せさせ給ひなどしつ、唆し聞え給へど、いと遙にのみ思したれば、見苦しき業かなと歎き聞え給ふに、暮れぬれば、夕つ方寢殿へ渡り給ひぬ。風涼しく大方の空をかしき頃なるに、今めかしきに進み給へる御心なれば、いとしく艶なるに、物思はしき人の御心の中は、よろづに忍び難きことのみぞ多かりける。鯛の鳴く聲にも、山の蔭のみ戀しくて、

「おほ方に聞かましものをひぐらしの」

「聲うらめしき秋のくれかな」

この惱ましき……この好飯の事も経過が果して順調にゆくだらうか。思ふには……考へた所では命は惜しくもないけれど。

罪深くも……懷妊のまゝ死ねば罪障が深くも。

その日……匂宮と六の君との婚禮の三日目をいふ。

後の宮……明石中宮。

殊なる事も……大した御容態でもいらつしやらないと。

大區……夕霧。

中納言の君……薫をお誘ひになつて。今宵の儀式……今夜の六の君の三日目のお祝にはどれ位の善美を盡したものであらうかと夕霧は思召すだらうけれど、際限なく立派にする譯にもゆくまい。

この君も……薫を今夜招待する事も、實は以前薫が六の君を嫌つた事があるので夕霧は氣恥かしいが。

我が方様に……自分の一門には薫の外に然るべき人物もいらつしやらず、且又薫は一座の光彩とするに格別な人だから旁々夕霧がお招き申されたものであらう。

例ならず……薫はいつもに似ず急いで禁中を退出なされて。

人の御上に……六の君を他人の物にしてしまつた事を残念とも思つて

今宵はまだ更けぬに出で給ふなり。御前の聲の遠くなるまゝに、海人も釣するばかりになるも、我ながら憎き心かなと、思ふ／＼聞き臥し給へり。初より物を思はせ給ひし有様などを思ひ出づるも、疎ましきまで覺ゆ。この惱ましき事もいかならむとすらむ。いみじう命短き族なれば、かやうならむ序にもや、はかなくなりなむとすらむなど思ふには、惜しからねども悲しくもあり、又いと罪深くもあなるものなど、まどろまれ給はぬまゝに思ひ明し給ふ。

その日は、後の宮惱ましげにおはしますとて、誰も／＼參りつどひ給へれど、聊かなる御風邪におはしましたければ、殊なる事もおはしませとて、大臣は晝まかで給ひにけり。中納言の君さそひ聞え給ひて、一つ御車にてぞまかで給ひにける。今宵の儀式いかならむ、清らを盡さむと思すべかめれど、限あらむかし、この君も心恥かしけれど、



居らず、何やかやと夕霧と心を合はせて世話なさるのを、夕霧は何だか痛だといふ感がなされた。おはしましたり……匂宮が夕霧邸に。御臺一臺盤。机の如き食卓をいふ。例の御皿一おきまりの銀器の皿。うるはしげに――整然と。花足の皿一足附の銀皿。餅一所謂三つ目の餅。當時新婿三日目に必ず食する習慣だつた。珍しからぬ……草紙地で記者の謙辭。大臣一夕霧。そのかし聞え給へど……宴席に着かれるやう匂宮を御せき立てなさるけれど、匂宮は六の君の部屋に大變いちやついて。北の方一雲居雁。あるじ一亭主役。頭中將一夕霧の長男。雲居雁の腹。中納言の……薫が大變匂宮に盃をお勧めなさると。煩はしきわたりを……夕霧の邸は格式ばつて面倒だからと、六の君の婿になるのを不似合らしく匂宮が思つて警て薫に話した事を、今匂宮御自身思出されるのである。されど見知らぬ……然し薫は匂宮のさうした御様子にも、知らぬ振で眞面目な顔していらつしやる。もてはやし給ふ――お取持なさる。

親しき方の覺は、我が方様に又さるべき人もおはせず、物の榮にせむに、心殊にはたおはする人なればなめりかし。例ならず急がしくまかで給ひて、人の御上に見なしたるを、口惜しとも思ひたらず、何やかやと諸心に扱ひ給へるを、大臣は人知れずなま妬しと思しけり。宵すこし過ぐる程におはしましたり。寢殿の南の廂、東に寄りて御座まわれり。御臺八つ、例の御皿など、うるはしげに清らにて、又ちひさき臺二つに、花足の皿ども、今めかしうせさせ給ひて、餅參らせ給へり。珍しからぬこと書き置くこそにくけれ。大臣わたり給ひて、夜いたう更けぬるをと、女房してその、かし聞え給へど、いとあざれて、とみにも出で給はず。北の方の御兄弟の左衛門の督、藤宰相などばかり物し給ふ。からうじて出で給へる御様、いと見るかひある心地す。あるじの頭中將、御盃捧げて御臺まるる。つきくの御土器、二たび三たび参り給ふ。中納言のいたく勧め奉るに、宮少しほ、笑み給へり。煩はしきわたりをと、ふさはしからず思ひていひしを思し出づるなめり。されど

覺ある――世の信望ある。三重装の唐衣一三重襲は中倍あるをいふか。(花鳥) 裳の腰も……裳の腰紐の裝飾に皆多少の差別があらう。數に限ある……人々に下さる數は制限があり一同に與へる譯にいかぬのを夕霧は物足らず思召したので、召繼一上皇親王家などに召遣はる、御既舍人の稱。蓋りがはしきまで……先例を亂す位十分に下された。中納言殿の……薫の御前驅の者の中に主人の覺の餘りよくない男が取残されて聞紛れの隅の方に悄然と立つてゐたものであらう。わが殿の……御主人薫様が何故大人しく夕霧の婿君におなり遊ばさないか知らんと。夜の更けて睡たきに――この供人がこんな事を呟いたのは夜更けまで引張られて睡たきに。かのもてかしづかれたる……あの下にも置かぬ待遇を受けた匂宮の御家來達は、定めていゝ氣持に酔拂つてそこらに凭つて居睡つてもゐるだらうと思つて。君は入りて――薫は歸つて御自分の部屋に入つて。はしたなげなる業かな――變な調子だ

見知らぬやうにて、いとまめなり。東の對に出で給ひて、御供の人々もてはやし給ふ。覺ある殿上人どもいと多かり。四位六人は女の裝束に細長添へて、五位十人は三重襲の唐衣、裳の腰も皆けじめあるべし。六位四人は綾の細長、袴など、數は限あることを飽かず思しければ、物の色仕様などをぞ、清らを盡し給へりける。召繼舍人などの中には、濫りがはしきまでいかめしうなむありける。げにかく賑はしう花やかなる事は、見るかひあれば、物語などにも先づいひ立てたるにやあらむ。されど委しうはえぞ數へ立てざりけるとや。中納言殿の御前の中に、なま覺あざやかならぬや、暗き紛れに立ちまじりたりけむ、歸りてうち歎きて、「わが殿の、などかおいらかに、この殿の御婿にうちならせ給ふまじき、あちきなき御獨住なりや」と、中門のもとにて呟きけるを、聞きつけ給ひて、をかしとなむ思しける。夜の更けて睡たきに、かのもてかしづかれける人々は、心地よげに酔ひ亂れて寄り臥しぬらむかしと、羨ましきなめりかし。君は入りて臥し給ひて、はしたな



なあ。今夜の三つ目の宴についての  
 事の感想。夕霧は左大臣なる  
 事々しくなる。夕霧は左大臣なる  
 離れぬ中らひなれど。夕霧と匂宮と  
 は元々親しい親戚の間だけだ。火  
 あかう挑げて。こんな折は餘り露  
 骨に見えぬやうに燈をほのかにす  
 るが普通だのに明るくして。  
 いと目安く。匂宮が大變手際よく  
 受けて居られた事だ。  
 げに我にても。ほんに私にしても。  
 宮に奉らむと。匂宮に差上げよう  
 と思つてゐる娘は。矢張差上げよう  
 と方がましたと銘々口癖にしてゐ  
 るのは。私の信望が萬更でもない  
 のだ。それにしても私は誠に色懸  
 に淡泊で年寄めいた心だのになど  
 と。薫は心中得意を禁じ得ない。  
 内裏の御氣色。帝が女二宮を下さ  
 るといふ御意向が眞實さう思召す  
 のなら。こんなに私が色懸沙汰に  
 氣が進まぬ有様ではどうしたもの  
 だらう。  
 故君に。女二宮が大君に似て居ら  
 れたら。流石に。何といつても女二宮に全  
 く氣が無いのでもなささうな薫の  
 お心持である。  
 按察の君。女三宮の侍女。

げなる業かな、事々しげなる様したる親の出でゐて、離れぬ中らひな  
 れど、これかれ火あかう挑げて(夕霧)勸め聞ゆる盃などを、いと目安くもて  
 なし給ふめりつるかなと、宮の御有様を目安く思ひ出で奉り給ふ。げ  
 に我にても、よしと思ふ女子持たしましかば、この宮をおき奉りて、内  
 裏にだにえ參らせざらま(薫)しと思ふに、誰もく宮に奉らむと心ざし  
 給へる女は、なほ源中納言にこそと、取りぐにいひならふなるこそ、  
 我が覺の口惜しくはあらぬなめれ、さるはいと餘り世づかす、古め  
 いたるものをなど心(薫)驕せらる。内裏の御氣色あること、まことに思  
 したらむに、かくのみ物憂く覺えばいかすべからむ、面正しき事に  
 はありともいかゞはあらむ、いかにぞ、故君にいとよく似給へらむ時  
 に嬉しからむかしと思ひ寄らる、は、流石にもて離るまじき心なめ  
 りかし(薫)。例の寢覺め勝なる徒然なれば、按察の君とて、人よりは少し思  
 ひまし給へるが局におはして、その夜は明し給ひつ。明け過ぎたらむ  
 を、人の咎むべきにもあらぬに、苦しげに急ぎ起き給ふを、たぐならず

人よりは少し。薫が他の女よりは  
 多少深く愛していらつしやるその  
 部屋に入らして。  
 たいならず。按察は氣にしてゐる  
 やうである。  
 うちわたし。押しなべて人が首肯  
 してくれさうもないものを人目の  
 關を忍んで貴方に馴れそめたが、  
 捨てられたら私の顔の立たないの  
 が情けないことですとの意。水調  
 れに見馴れを懸けた。  
 深からず。餘り深くないやうに上  
 べは見えるけれども、人目の關を  
 忍んで貴女に通はす私の愛情は何  
 の絶える事がありませうぞ。すべ  
 て川の縁語で仕立てた。  
 深しと宣はむ。愛情が深いと仰し  
 やつてすら當にもならないのに、  
 深くないやうに上べは見えるなど  
 と仰しやる、こんな浅い御心では  
 猶更按察は氣が揉めよう。  
 まことは。私がこんなに早く起きた  
 のは實は。  
 艶なる人眞似。逢うた夜は早歸を  
 よいとす意氣な人眞似とは違つ  
 て、近頃尙々世の果敢なさを痛感  
 して毎夜苦しい寢覺勝の折には、  
 殊にかしき言の。薫は取立て、  
 風情ある言葉を女にかけるといふ  
 でもないけれど、御容姿の優雅さ



宿 木



故に情らしく見えるのか。かりそめの……薫が一時の慰みで關係した女でも、せめてお側近くに思ふものか、遮二無二御出家の女三宮の御許に縁故を辿つて御奉公に集つて来るのも、いちらしい事がそれ、<sup>く</sup>につけて多いやうだ。宮は女君の御有様、<sup>く</sup>宮は六の君の御容姿を。

さがりば、下つた先の具合。片なりに……まだ發育しきらずに儂らぬといふやうな點がなく。げに親にては……成程親の身として、は有頂天にもなりさうな事だつた。只やはらかに……只物柔かて愛敬があり可憐だといふ點では、中の君の方が匂宮の念頭にお浮びになる。物宜ふ答なども、<sup>く</sup>匂宮が物仰しやるのに對する六の君の應答ぶりも。かど、<sup>く</sup>しげなり、才氣らしい。若人、侍女。片ほなるなく、醜いのは居らず。例のうるはしき……例のきちんと極りきつた着附は匂宮が見馴れて珍しくも思召すまいから。ひき違へ……がらり變つて小首を傾ける位思切つた好みをしてのけられた。そしは殺しの意。三條殿腹の大君、雲居雁腹の夕霧の

思ふべか、めり。  
 一うちわたし世にゆるしなき關川を  
 みなれそめけむ名こそ惜しけれ  
 いとほしければ、  
 「深からずうへは見ゆれど關川の  
 したの通ひは絶ゆるものかは」

「深し」と宣はむにてだに頼もしげなきを、この上の淺さは、いとゞ心やましく覺ゆらむかし。妻戸を押しあけて、まことは、この空見給へ。いかでかこれを見知らず顔にては明さむとよ。艶なる人眞似にはあらで、いとゞ明し難くなりゆく夜な、の寢覺には、この世後の世までなむ思ひ遣られてあはれなるなど、いと紛らはしてぞ出で給ふ。殊にをかしき言の數を盡さねど、様のなまめかしき見なしにやあらむ、情なくなどは、人に思はれ給はず。かりそめの戲言をもいひそめ給へる人の、氣近くて見奉らばやとのみ思ひ聞ゆるにや、あながちに世を

長女。この御事をば、六の君の婚禮を。宮の御覺……匂宮の御聲望なり御委なり。立派なの由るのだらう。かくて後……匂宮は六の君と婚姻の後、中の君の方へは氣輕にお出も出来ない。思すまゝに……又氣儘に晝間六の君の許へお出かけも出来ない。おなじ南の町に……夕霧の邸内の南寄りの處に。年頃ありしやうに、幼時多年紫上に育てられて此處にゐた頃のやうに、元引きよきて……以前のやうに六の君へ行く途中から轉じて、中の君の處に行く譯にもいかなかつたりして。かゝらむとする……かういふ事にならうとは中の君も思つてゐたが、いきなり實にまあかうまで思切りよく現金になさるべき事かい。數ならぬ身を……つまらぬ身の程をも考へないで高貴な方々の中に交るべきものではなかつたわいと。山路分け出でけむ程……宇治を出た時分の事が夢のやうに思はれ、猶いかに忍びて……矢張どうかして密に宇治へ行きたいものだ。むげに背く様……まるで匂宮から離れ去るといふのではなくても。

そむき給へる宮の御方に、縁を尋ねつゝ、參り集まりて侍ふも、あはれなること、程々につけつゝ、多かるべし。宮は女君の御有様、晝見きこえ給ふに、いとゞ御志まさりにけり。大ききよき程なる人の、様體いと清げにて、髪のがりば頭付などぞ、物より殊に、あなめでたと見え給ひける。色合餘りなるまで匂ひて、物々しく氣高き顔の、まみいと恥かしげにらう、じく、すべて何事も足らひて、容貌よき人といはむに、飽かぬ所なし。二十に一つ二つぞ餘り給へりける。いはけなき程ならねば、片なりに飽かぬ所なくあざやかに、盛の花と見え給へり。限なくもてかしづき給へるに、片ほならず、げに親にては心も惑はし給ひつべかりけり。只やはらかに愛敬づき、らうたき事ぞ、かの對の御方は先づ思し出でられける。物宜ふ答なども、恥らひたれど又あまり覺束なくはあらず、すべていと見所おほく、かどかどしげなり。よき若人ども三十人ばかり、童六人、片ほなるなく、装束なども、例のうるはしき事は目馴れて思さるべか、めれば、ひき違へ



憎げに……癪にさはるやうな態度を  
 匂宮にしたら成程悪からうが、さ  
 うでなければ宇治へ行つても差支  
 あるまいなどと、中の君は自分一  
 人だけでは思案に餘つて。  
 中納言殿に「薫に相談する爲に。  
 一日の御事は「父君八宮の御法事を  
 貴方が替んで下された事は、  
 かゝる御心の……舊誼の名残でかう  
 した貴方の御親切が無かつたら、  
 父宮の爲にもどんなにお氣の毒な  
 事だらうと存ぜられますにつけて  
 も、一通りならず感謝致します。  
 さりぬべくは……出来る事なら私自  
 身お目にかゝつてお禮も申上げた  
 く存じます。  
 例の事ども「薫が御法事を。  
 おどろくしくは……徳とらしく仰  
 山にはお禮を書いてないけれど、  
 成程裏心から中の君が感謝してい  
 らつしやるのらしい。  
 これより奉る……薫の方から上げる  
 手紙に對しての御返事すら。  
 自らとさへ……「さりぬべくは自ら」  
 とある上記のお手紙をさす。  
 宮の今めかしく……匂宮が近來新し  
 しい六の君にすつかり傾いていらつ  
 して居られるのも。  
 をかじやかなる……格別何の情趣も

心得ぬまでぞ好みそし給へる。三條殿腹の大君を、春宮に參らせ給へ  
 るよりも、この御事をばいと殊に思ひおきて聞え給へるも、宮の御覺  
 有様がらなめり。かくて後、二條院にえ心安くわたり給はず。輕らか  
 なる御身ならねば、思すまゝに晝の程などもえ出で給はねば、やがて  
 おなじ南の町に、年頃ありしやうにおはしまして、暮るれば又え引き  
 よきても渡り給はずなどして、待遠なる折々あるを、かゝらむとする  
 事とは思ひしかど、さし當りては、いとかくやは名残なかるべきげに  
 心あらむ人は、數ならぬ身を知らで、交らふべき世にもあらざりけり  
 と、返すくも山路分け出でけむ程、現とも覺えず、悔しく悲しければ、  
 猶いかで忍びて渡りなむ、むげに背く様にはあらずとも、暫し心をも  
 慰めばや、憎げにもてなしなどもせばこそ、うたてもあらめなど、心一  
 つに思ひ餘りて、恥かしけれど、中納言殿に御文奉れたまふ。一日の御  
 事は阿闍梨の傳へたりしに、委しう聞き侍りにき。かゝる御心の名残  
 なからましかば、いかにいとほしくと思ひ給へらるゝにも、疎ならず

ない中の君のお手紙を。  
 一日は……先日八宮様の御法事の折  
 は、法備めいた様子をして、意と  
 宇治へ出かけた様子したのも、さう  
 考へる譯のある折柄でしたからね  
 え。知らせたら中の君が同行した  
 いと仰しやりさうだからとの意。  
 名残と……私がお世話申すのを、舊  
 誼の名残でと仰しやつたのが、少  
 し私の眞情が浅くなつたやうに聞  
 えて怨めしい氣が致します。  
 今侍ひてなむ。今に參上してお話申  
 上げませう。  
 渡り給へる「薫が中の君の許に。  
 人知れず……薫は初に中の君に戀心  
 が動いてゐるので、いやに身なり  
 に氣が配られて。  
 餘りおどろくしく……體香のある  
 うへに盛に炊きしめた故。  
 丁子染「丁子茶染。  
 女君も……中の君も薫が宇治で大君  
 と間違へて自分の傍に添臥なされ  
 たあの夜の事などを。  
 さてあらましを……薫を夫としても  
 よかつたものをと、ぐらゐは思つ  
 てもいらつしやらう。  
 怨めしき人の……無情な匂宮の御様  
 子を薫と比較してお考になると、  
 何事も一層薫の方が勝つてゐると  
 お分りなされるものか。

のみなむ。さりぬべくは自らも」と聞え給へり。陸奥紙に、ひき繕はず  
 まめだち書き給へるしも、いとをかしげなり。故宮の御忌日に、例の事  
 どもいと尊くせさせ給へりけるを喜び聞え給へる様のおどろおど  
 ろしくはあらねど、實に思ひ知り給へるなめりかし。例はこれより奉  
 る御返りをだに、うち解けすつ、ましげに思ほして、はかしくも  
 續け給はぬを、「自ら」とさへ宣へるが、珍しく嬉しきに、心ときめきも  
 しぬべし。宮の今めかしく好みたち給へる程にて思し怠りけるも、げ  
 に心苦しく推し量らるれば、いとあはれにて、をかしやかなる事もな  
 き御文を、うちも置かず、ひき返しひき返し見居給へり。御返りは、承  
 はりぬ。一日は聖だちたる様にて、殊更に忍び侍りしも、さ思ひ給ふる  
 やう侍る頃ほひにてなむ。名残」と宣はせたるこそ、少し淺くなり  
 たるやうにと、怨めしう思ひ給へらるれ。よろづは今侍ひてなむ。あ  
 なかしこと、すくよかに、白き色紙のこはくしきにてあり。  
 さて、又の日の夕つ方を渡り給へる。人知れず思ふ心し添ひたれば、あ



常には……いつもは薫を他人扱にばかりしてゐる事もお氣の毒で、さぞ物の分らぬやうに薫が思つていらつしやるだらうなど、中の君は思召して。

わざと召とは……特にお召といふ譯でも御座いませんでしたけれど、珍しく参上する事をお許し下された嬉しさに即座にも参りたく存じましたが、昨日は匂宮がいらつしやると承りましたので折が悪いかしらと思ひまして。

さるは年頃の……さては年來の私の誠意の證據が段々認められて來ましたものか。

一日嬉しく……過日御法事を替んで下された御厚意を嬉しく存じて居ります私の心の中を例の如く只黙つて過しましたのでは、感謝の心持の一端をも、どうして貴方にお示し出來ようかと残念なので、お招き申しました。

いたく退きて……中の君が奥の方に大變引込んでゐて。

いと遠くも……随分遠く離れていらつしやいますねえ。

宮の御心ばへ……匂宮のお心持が案外に薄情だつたわいと思つて、一面には宮の非難もし、又中の君を慰めもし。

いなく心遣ひいたくせられて、なよ、かなる御衣どもを、いと、匂はし添へ給へるは、餘りおどろしきまであるに、丁子染の扇のもて馴らし給へる移り香などさへ、譬へむ方なくめでたし。女君も、怪しかりし夜の事など、思ひ出で給ふ折々なきにしもあらねば、まめやかにあはれなる御心ばへの、人に似ず物し給ふを見るにつけても、さてあらましを、とばかりは思ひやし給ふらむ。いはけなき程にしおはせねば、怨めしき人の御有様を思ひ比ぶるには、何事もいと、こよなく思ひ知られ給ふにや、常には隔多かるもいとほしく、物思ひ知らぬ様に思ひ給ふらむなど思ひ給ひて、今日は御簾の内に入れ奉り給ひて、母家の簾に几帳添へて、我は少しひき入りて對面し給へり。わざと召とは侍らざりしかど、例ならず許させ給へりしよろこびに、即ちも参らまほしく侍りしを、宮渡らせ給ふと承はりしかば、折悪しくやはとて、今日になし侍りにける。さるは、年頃の心の験も、やうくあらはれ侍るにや、隔少しうすらぎ侍りにける御簾の内よ。珍しく侍る業かなと

女君は……中の君は匂宮の無情に對する怨などは。

世やは憂き……世やは憂き人やはつらき海士の刈る藻に住む蟲のわれからぞ憂き(細流)。みんな私自身の拙い運命からですの意。

山里に……宇治へ一寸でもよいから連れて行つて下さいと思つてゐられるらしく。

それはしも……貴女を宇治へお連れ申す事はさあ、私の一料簡では出來さうもない事です。

なほ宮に只……矢張匂宮に只機嫌よく頼みになつて匂宮の御意向次第になされたがよう御座いませうでなければ少しの事の行違ひの爲に貴女が輕卒の振舞をなされたなど匂宮が思召すやうな事でもあつたら甚だよくありますまい。

さだにあるまじくは……その心配さへなかつたら。

おり立ちて……私が引受けて。

後やすく……人と違つた私の潔白さで何の懸念も無い事は匂宮も御承知です。

過ぎにし方の……中の君を匂宮に譲つてしまつた事の残念さを。

物にもがなや……取返す物にもがなや世の中をありしながらの我が身と思はむ(河海)。

宣ふに猶いと恥かしく、いひ出でむ言の葉もなき心地すれど、一日嬉しく聞き侍りし心の中を、例の只結ばはれながら過し侍りなば、思ひ知る片端をだに、いかでかはと口惜しさに、いとつ、ましてに宣ふが、いたく退きて、絶えなくほのかに聞ゆれば、心もとなくて、いと遠くも侍るかな。まめやかに聞えさせ承はらまほしき世の御物語も侍るものをと宣へば、げにと思ひて、少し身じろき寄り給ふはひを聞き給ふにも、ふと胸うち潰るれど、さりげなく、いと静めたる様にして、宮の御心ばへ思はずに淺うおはしけりと思ひて、且はいひも疎め、又慰めも、方々にしづくと聞え給ひつゝおはす。女君は、人の御怨めしさなどは、うち出で語らひ聞え給ふべき事にもあらねば、只世やは憂きなどやうに思はせて、言少なに紛らはしつゝ、山里にあからさまに渡し給へと思しく、いと懇に思ひて宣ふ、それはしも心一つに任せでは、え仕うまつるまじき事に侍るなり。なほ宮に只心うつくしう聞えさせ給ひて、かの御氣色に隨ひてなむよく侍るべき。さらすは、少し

宿

木



又よろしく……氣分の少しすぐれた  
 時分に又何事もお話致しませう。  
 思し立つべきにか——宇治行をお思立  
 なされませうか。  
 心とりに——御機嫌取りに。  
 朝日の程——九月の朔日をさす。  
 何か世の……何の、匂宮の御許可な  
 ど改つてお願する事もありませうま  
 い。夫の許可なければ世間も非難  
 する故、匂宮の許可を間接に「世の  
 許」といつた。  
 えつ、みあへで——薰は怪へきれず。  
 やをら及びて——そつと體を伸して。  
 さりや……案の定だ、まあ嫌なと思  
 ふので、何と口が利けようかい。  
 あらずや……おや違ひますかね、こ  
 つそりならば私が添臥してもよき  
 さうに貴女は思召すらしい口吻も  
 あつたのが嬉しさに、それは然し  
 私の開き違へだつたか知らんと、と  
 にかく確めようと思つて、かうし  
 て簾の内へ入つて來たのですよ。  
 薰がてれ隠しの詭辯。  
 思はずに憎く……不意に薰が憎らし  
 くなつたのを中の君は強ひて心を  
 落着けて。  
 人の思ふらむことよ——侍女達が何と  
 か思ひませうよ。  
 あはめて——辱しめて。  
 これは答ある……これ位の事は人に

も違ひ目ありて、心軽くもなど思し物せむに、いと悪しく侍りなむ。さ  
 だにあるまじくは、道のほどの御送迎も、おり立ちて仕うまつらむ  
 に、何の憚かは侍らむ後やすく人に似ぬ心のほどは、宮も皆知らせ給  
 へり」などはいひながら、折々は過ぎにし方の悔しきを忘るゝ折なく、  
 物にもがなやと、取り返さまほしき様などほのめかしつゝ、やうく  
 暗くなりゆくまでおはするに、いとうるさく覺えて、さらば心地も惱  
 ましくのみ侍るを、又よろしく思ひ給へられむ程に、何事も」とて、入  
 り給ひぬる氣色なるが、いと口惜しければ、「さても何時ばかり思し立  
 つべきにか。いと繁う侍りし道の草も、少しうち掃はせ侍らむかし  
 と、心とりに聞え給へば暫し入りさして、この月は過ぎぬれば、朔  
 日の程にもとこそは思ひ侍れ。只いと忍びてこそよからめ。何か、世の  
 ゆるしなど事々しく」と宣ふ聲の、いみじうらうたげなるかなと、常よ  
 りも昔思ひ出でらるゝに、えつ、みあへで、凭り居給へる柱のものと  
 簾の下より、やをら及びて、御袖を捉へつ。女、さりや、あな心憂と思ふ

非難される程の事でせうかい。  
 古へをも……宇治當時の事をも思出  
 して下さい。  
 過ぎにし人——大君をさす。  
 いとこよなく……私に接近するのを  
 とんでもない事のやうに貴女が思  
 召すのが却て面白くありません。  
 目ざましき心——心外なと思はれるや  
 うな嫌な心。  
 月頃くやしと……薰は中の君を匂宮  
 の物にしてしまつた事を残念に思  
 續けてゐる豫ての心持が、苦しい  
 位強くなつてゆく有様を。  
 宥すべき……薰が放しさうな様子で  
 もないので、中の君は途方にくれ  
 て、困つたところの話ではない。  
 なか／＼むげに……全く氣心知らぬ  
 人にこんな事をされるよりも却て  
 恥かしく嫌な氣がして。  
 いひ知らず……中の君の姿が何とも  
 いへず優婉にお可愛さうではある  
 ものの。  
 見し程よりも——嘗て宇治で添臥をし  
 た頃よりも。  
 心から餘所人に……我が心柄ゆゑ中  
 の君を他人にしてしまつて。  
 すゝろなる男——親しくもない男。  
 こはいかなる事ぞ……これは一體ど  
 うした事ぞと驅寄つて、中の君を  
 お護りもしようが。

に、何事かはいはれむ。物もいはでいと、引き入り給へば、それにつき  
 ていと馴れ顔に、半は内に入りて、添ひ臥し給へり。あらずや。忍びて  
 はよかるべう思す事もありけるが嬉しきは、僻耳かと聞えさせむと  
 ぞ。疎々しく思すべきにもあらぬを、心憂の御氣色や」と怨み給へば答  
 すべき心地もせず、思はずに憎く思ひなりぬるを、せめて思ひ静めて、  
 「思の外なりける御心の程かな。人の思ふらむことよ。淺まし」とあはめ  
 て、泣きぬべき氣色なる、少しは道理なればいとほしけれど、これは  
 答あるばかりの事かは。かばかりの對面は、古へをも思し出でよかし。  
 過ぎにし人の御許もありしものを、いとこよなく思しけるこそ、なか  
 なかうたてあれ。好き／＼しく目ざましき心はあらじと、心安く思せ  
 とて、いとのだやかにもてなし給へれど、月頃くやしと思ひ渡る心の  
 うちの、苦しきまでなりゆく様を、つぶ／＼といひ續け給ひて、宥す  
 べき氣色にもあらぬに、せむ方なく、いみじとも世の常なり。なか／＼  
 むげに心知らざらむ人よりも、恥かしう心づきなくて、泣き給ひぬる



さるやうこそは……然るべき仔細があるのだらうと思ふので。男君は……薫は誓て中の君を匂宮に譲つた事を後悔する心持の恠へ難きなども。昔だに……宇治で添臥した時すら無理業しなかつた程珍しい薫の御用意だから、矢張今夜も氣儘の振舞はなさらなかつた。細かにも……委しくは書き續ける事も出来ない。かひなきものから……薫はこれで終るの折角こゝまで来て效も無いものゝ、人目の不體裁を顧慮なさるので。女の御爲の……中の君の名に拘はりさうなのがお氣の毒なのである。惱ましげに……中の君の氣分が勝れないと聞いて居たのも尤だ、妊娠中なのである、大變恥かしさうにして居られた妊娠の事ゆゑに、主として私は氣の毒さを感じて手を出さなかつたのだ。情なからむ事は……思遣りなく無理業をするのは矢張どうも氣持よくはあまい。又怒ちの……又發作的の情の興奮に任せて無理な事をした後に澄ましてはとて居られまいもの故、ひどく人目を忍んで逃ひに歩くのも

を、こはなぞ。あな若々し」とはいひながら、いひ知らずらうたげに心苦しきものから、用意深く恥かしげなるけはひなどの、見し程よりもこよなくねび勝り給ひにけるなどを見るに、心から餘所人にしなして、かく安からず物思ふこと、悔しきにも、又げに音は泣かれけり。近く侍ふ女房二人ばかりあれど、すゞろなる男の入り來たるならばこそは、こはいかなる事ぞ」とも参り寄らめ、かく疎からず聞え交し給ふ御中らひなめれば、さるやうこそはあらめと思ふに、かたはら痛ければ、知らず顔にて、やをら退きぬるぞいとほしきや、男君は、古へを悔ゆる心の忍び難きなども、いと静め難かりぬべかめれど、昔だにあり難かりし御心の用意なれば、猶いと思ひのまゝにももてなし聞え給はざりけり。かやうの筋は、細かにもえなむまねび續けざりける。かひなきものから、人目のあいなきを思へば、よろづに思ひ返して出で給ひぬ。まだ宵と思ひつれど、曉近うなりにけるを、見咎むる人もやあらむと煩はしきも、女の御爲のいとほしきぞかし。惱ましげに聞

氣苦勞な次第で、中の君の方でも亦様々に煩悶なされる事だらうよ、で手出しはしなかつたなどと薫は分別らしく思ふが、その分別に情熱は堰き留めきれず。立ち離れたりと……薫は離れてゐても離れてゐるやうな氣もせず。さもや渡し聞え……御希望通り連れて行つて上げたものだらうか。忍びてはた……密にお連れ申すのもこれ亦甚だ都合だらう、どんな風にしたら世間體も見苦しからぬやうにして目的を達せられるか知らんと。御文―薫から中の君へのお手紙。けざやかなる―大びらな。立文―巻き疊んだまゝの書簡。いたづらに……折角貴方の側まで行つて障が多い爲に何の甲斐もなく引返したのは、あの宇治の添臥の折も思出されて残念ですの意を擬へた。御氣色の……貴女の御態度の心外さは何もかも前後の分別もつかぬ位つらく思はれます。人の例ならず……平素と違つた事だと女房達が却て怪みさうなので、え聞えさせず―よう御返事申上げられませぬ。少し世の中をも……中の君は少しは

きわたる御心地は道理なりけり、いと恥かしと思したりつる腰のしるしに、多くは心苦しう覺えてもやみぬるかな、例の鳴漣がましの心やと思へど、情なからむ事は、猶いと本意なかるべし、又怒ちの我が心の亂にまかせて、あながちなる心を使ひて後、心安くしもえあらざらむものから、わりなく忍び歩かむ程も心盡しに、女のかたゝ、思し亂れむことよなど、さかしく思ふに堰かれず、今のまも戀しきぞわりなかりける。更に見ではえあるまじく覺え給ふも、返すゝあや憎なる心なりや。昔よりは少し細やぎて、あてにらうたげなりつるけはひなどは、立ち離れたりと覺えず、身に添ひたる心地して、更に異事も覺えずなりにたり。宇治にいと渡らまほしげに思い給ふめるを、さもや渡し聞えてましなど思へど、まさに宮は許し給ひてむや、さりとして、忍びてはたいと便なからむ、いか様にしてかは、人目見苦しからで、思ふ心のゆくべきと、心もあくがれて詠め臥し給へり。まだいと深きあしたに御文あり。例のうはべは、いとけざやかなる立文にて。



男女間の事をも御存じになつたせむか、薫の仕打をそれ程ひどく無體なとは思つていらつしやるもの、又全く厄介がる一方ではなく、いひ拵へなどして……うまく口先で取繕つたりして薫を送り出された時の中、君のお心持などを。古へには、中の君が宇治に居られた時に比べては。何かはこの宮の……何のまよ、句宮が捨て、おしまひなされたら中の君はどうせ私を力になさるに違ないのだ、然しさうなつたにして、大びらにお互に安心して逢ふといふ事は出来まいが、忍んで通ひつゝも最早他に思ひ増す女は無などといふ私の最後の愛人であらうなどと。以上薫の心。

さばかり心深げに……薫ぐらゐ思慮深く賢人がつても男といふ者の嫌な事よ、故大君に對する悲歎はもう仕方の無い事にはせよ、まあこんなな苦痛なまでには深くなかつたのだ、處が今の中の君に對する苦惱は様々に至らぬ限もない。宮渡らせ給ひぬ、句宮が中の君の許へ入らした。

後見の心は、薫は中の君のお世話役だといふ心持は。句宮は中の君に無沙

「いたづらに分けつる道の露しげみ  
むかしおぼゆる秋の空かな」

御氣色の心憂さは、道理知らぬつらさのみなむ。聞えさせむ方なくとあり。御返りなからむも、人の例ならずと見咎むべきを、いと苦しければ、中君ノ文承はりぬ。いと惱ましうて、え聞えさせずとばかり書きつけ給へるを、薫ハあまり言少ななるかなと、さうくしくて、をかしかりつる御けはひのみ戀しう思ひ出でらる。少し世の中をも知り給へるけにや、さばかり淺ましうわりなしとは思ひ給へりつるものから、ひたぶるにいふせくなどはあらで、いとらうくじく恥かしげなる氣色も添ひて、流石に懐かしういひ拵へなどして、出だし給へる程の御心ばへなどを思ひ出づるも、薫ハねたうも悲しうも様々に心にかゝりて、恠しく覺ゆ。何事も、古へにはいと多く勝りて思ひ出でらる。何かは、この宮離れば、給ひなば、我を頼もし人にし給ふべきにこそはあめれ、さてもかたじけなく顯れて心安き様にはえあらじを、忍びつゝ、又思ひます人なき、心

泣して幾日にもなつたのは。何かは心隔てたる……何のまよ、隔を置いてあるやうな風をも句宮にお見せ申すまい、宇治へ歸りたいと思立つにつけても、力と頼む薫だつて嫁なお心を持つていらつしやるのだ。中の君の心。

只消えせぬ程は……只生きてゐる間は何事も場合に從つて穩便に振舞はうと、中の君は決心して。日頃のおこたり、平素の御無沙汰。しるしの帯、妊娠の着帯。まだかゝる人を……句宮はまだ妊娠の人を接近して御覽になつた事がないので。

うち解けぬ所に……句宮は暫く窮屈な六の君の所に居馴れた後、中の君の所へ来て見ると萬事氣樂で、かくのみ言よき……男といふものは皆こんな風に口前ばかりうまいのか知らんと。

あながちなりつる……無體な程熱心だつた薫の御様子も思出されて、永年しみじみした御親切とは思ひ續けてゐるけれど、かうした戀といふ方にかけてはその親切も迷惑なことと思ふので、將來について句宮の御約束は、さあどんなものかなあと、中の君は不安心には思ひながら。

のとまりにてこそはあらめなど、薫ハ只この事のみ、つと覺ゆるぞけしからぬ心なるや。さばかり心深げにさかしがり給へど男といふもの、心憂かりける事よ、亡き人の御悲しさは、いふかひなき事にて、いとかう苦しきまではなかりけり、これは、よろづにぞ思ひ廻らされ給ひける。今日は「宮渡らせ給ひぬ」など、人のいふを聞くにも、後見の心は失せて、胸うち潰れていと羨ましう覺ゆ。

宮は、日頃になりには、我が御心さへ怨めしう思されて、俄に渡り給へるなりけり。何かは、心隔てたる様にも見え奉らじ、山里にと思ひ立つにも、頼もし人に思ふ人も、疎ましき心添ひ給へりけりと見給ふに、中君ハ世の中いと所狭う思ひなられて、猶いと憂き身なりけりと、只消えせぬ程は、あるに任せておいらかならむと思ひ果て、いとらうたげに、心美しき様にもてなして居給へれば、いとあはれに嬉しく思されて、日頃のおこたりなど、限なく宜ふ御腹も少しふくらかになりたるに、かの恥ぢ給ふしるしの帯の引き結はれたる程など、いとあ







こなたに参らす—中の君のお部屋に  
 支度をおさせになる。  
 さばかり輝くばかり……六の君方の  
 あんなに光り輝く程舶来の錦織を  
 飾つたのを見慣れて来た目では、  
 中の君の處は尋常な氣がして、侍  
 女達の姿も稍着古した衣類を着た  
 者もあつたり。  
 君は—中の君は。  
 薄色—こゝは薄紫。  
 眞麥の—薄萌黄。(河海)。  
 何事もいとうるはしく……萬事整然  
 として仰山らしい位立派な六の君  
 の御服装萬端に比べても。  
 志の……要するに匂宮の愛が並々で  
 ないゆゑ、中の君が缺點なく見え  
 るのであらう。  
 まろに—丸々と。以下中の君の姿。  
 かゝる御移り香……匂宮は中の君の  
 衣にこんな薫の移香など際立つて  
 氣付かなかつた時分ですら。  
 これを兄弟など……この美しい中の  
 君を兄弟などでもない男が側近く  
 寄つて話したり、何彼につけて自  
 然その聲を聞き姿を見たら、どう  
 して無關心で居られようぞ必ず戀  
 心を動しさうな事だがと、匂宮は  
 自分の抜目ない浮氣心から推量さ  
 れるので。  
 著き様なる……懸想の證據歴然たる

「<sup>中君</sup>見なれぬる中の衣とたのみしを

かばかりにてやかかけ離れなむ」

とてうち泣き給へる氣色の、限なくあはれなるを見るにも、かゝれば  
 ぞかしといと心やましくて、我もほろ／＼とこぼし給ふぞ、色めかし  
 き御心なるや。<sup>(中君)</sup>まことにいみじき過ちありとも、ひたぶるにはえ疎み  
 果つまじく、らうたげに心苦しき様のし給へれば、<sup>(匂宮)</sup>えも怨み果て給は  
 ず、宜ひさしつゝ、かつはこしらへ聞え給ふ。  
 又の日も、<sup>(匂宮)</sup>心のどかに大殿籠り起きて、御手水、御粥なども、こなたに  
 参らす。御しつらひなども、さばかり輝くばかり、高麗唐土の錦綾をた  
 ち重ねたる目移しには、よの常にうち馴れたる心地して、人々の姿も、  
 姿えはみたるうち交りなどして、いと靜に見まはさる。君はなよ、か  
 なる薄色どもに、<sup>(中君)</sup>瞿麥の細長かさねてうち亂れ給へる御様の、何事も  
 いとうるはしく、事々しきまで盛なる人の御装、何くれに思ひ比ぶれ  
<sup>(中君)</sup>ど、氣劣りても覺えず、懐かしうをかしきは、志の疎ならぬに恥なきな

薫の手紙でもありはせぬかと。  
 すくよかに—眞直に隠し立なく。  
 なほ／＼しきなどぞ……平凡な手紙  
 などが、特に大切に保存してある  
 といふ譯でもないけれど、何かにま  
 じつたりして有るのを。  
 怪し猶……これは胡散な、どうした  
 つてこんな平凡な手紙ばかりでは  
 なくまだ秘密なのあらうと。  
 いと今日……薫の移香が甚しい  
 ので見れば、猶更今日匂宮が胸  
 確かならぬ氣がなされるのは尤だ。  
 かの人の氣色も—薫の風采にしても、  
 などてかは……どうして女の方で薫  
 を撥ねつけるものか。  
 いとよきあはひ……殊に中の君と薫  
 とは誠に恰好な間柄であるから。  
 その日も……匂宮はその日も外出な  
 さらず中の君のお側に居られる。  
 六條院へは—六の君の許へは。  
 いつの程に積る……六の君と一體幾  
 日のお別ならそんなにお言葉が積  
 るのか知らん。  
 中納言の君は—薫は。  
 わりなしや……仕様のない事だなあ、  
 これといふのも私の心の愚しく不  
 料簡なからだ、よく世話をやいて  
 安心させて上げようと最初思つて  
 ゐた中の君を、こんなに懸想など  
 してよいものか。

めりかし。まろに美しく肥え給へりし人の、少し細やきたるに、色は  
 いよ／＼白うなりて、あてにをかしげなり。かゝる御移り香などの、い  
 ち著<sup>じ</sup>からぬ折だに、<sup>(中君)</sup>愛敬づきらうたき所などの、猶人には多く勝りて  
 思さるゝまゝには、これを兄弟などにはあらぬ人の、氣近<sup>ひ</sup>くいひ通ひ  
 て、事に觸れつゝ、自ら聲<sup>こゑ</sup>けはひをも聞き見馴れむは、いかでか徒に  
 も思はむ、必ずしか思ひ寄りぬべき事なるをと、我がいと限なき御心  
 ならひに思し知らるれば、常に心をかけて、著き様なる文などやある  
 と、近<sup>み</sup>き御厨子、小唐櫃<sup>こたがび</sup>などやうの物をも、さりげなくて探し給へど、  
 さる物もなし。只いとすくよかに言<sup>こと</sup>少なにて、なほ／＼しきなどぞ、わ  
 ざともなけれど、物に取りませなどしてもあるを、怪し、猶いとかうの  
 みはあらじかしと疑はるゝに、いと今日安からず思さるゝ、道理<sup>ことわり</sup>  
 なりかし。かの人の氣色も、心あらむ女のははれと思ひぬべきを、など  
 てかは殊の外にはさし放たむ、いとよきあはひなれば、かたみにぞ思  
 ひ交<sup>か</sup>すらむかしと思ひやるぞ、<sup>(匂宮)</sup>侘しく腹立たしく妬<sup>ねた</sup>かりける。猶いと



さはいへど……六の君を愛するとは  
 いへ、匂宮が中の君を捨てる事は  
 出来さうもないなあと。  
 人々のけはひ侍女達の有様。  
 妻えばみたしめりしを―衣裳が着馴  
 れてしなやかになつてゐたのを。  
 母宮―女三宮。  
 よろしき設の物……相應な用意の衣  
 類が御座いませうか、入用が出来  
 ました。  
 立たむ月―来るべき月、即ち九月で  
 正五九月は佛事を誓むによい月。  
 白きもの―白衣。  
 わざともし置かぬを―特に用意して  
 置きもしませんので。  
 侍はむに隨ひて―有合せに任せて何  
 でも構ひません。  
 御匣殿―もと宮中貞觀殿内にある御  
 衣調達の係であるが、攝關大臣家  
 などでも同様と呼ぶ。  
 たいなる絹綾―染めてない生地の儘  
 の絹や綾。  
 自らの御料―中の君の御召料。  
 我が御料に……兼自身のお召料とし  
 て用意してあつた。  
 擗目―紅の帛の光澤を出す爲に碓で  
 擗つた痕。これは打衣の料。  
 袴の具は……元來男物なので女の袴  
 や附屬品は無かつたが。  
 腰―引腰をいふ、裳のうしろに引く

安からざりければ、その日もえ出で給はず、六條院には、御文をぞ二た  
 び三たび奉れ給ふを、いつの程に積る御言の葉ならむと、つぶやく老  
 人どももあり。中納言の君は、宮のかく籠りおはするを聞くにも、心や  
 ましく覺ゆれど、わりなしや、これは我が心の鳴瀝がましく悪しきぞ  
 かし、後安くと思ひそめてしあたりの事を、かくは思ふべしやと、強ひ  
 てぞ思ひ返して、さはいへど、え思し捨てざりめりかしと、嬉しくもあ  
 り。人々のけはひなどの、懐かしき程に妻えばみたしめりしをと思ひや  
 り給ひて、母宮の御方に參り給ひて、  
 一「よろしき設の物どもや侍ふ使  
 ふべき事なむ」と申し給へば、例の立たむ月の法事の料に、白き物ども  
 などやあらむ。染めたるなどは今はわざともし置かぬを、急ぎてこそ  
 せさせめ」と宣へば、  
 一「なにか、事々しき用にも侍らず。侍はむに隨ひて」  
 とて、御匣殿などに問はせ給ひて、女の装束ども數多くだりに、清げな  
 る細長どもも、只あるに隨ひて、たいなる絹綾など取り具し給ふ。自ら  
 の御料と思しきには、我が御料にありける、紅の擗目なべてならぬに

結びける……私と縁が結ばれる事と  
 思つてゐたのに他の人(匂宮)と縁  
 が結ばれてしまつた貴女を、今と  
 なつては只一途に私も何の怨みま  
 せうか、もう仕方がありませんと  
 の意。結び、筋は紐の縁語。  
 大輔の君―宇治から附いて來た中の  
 君の侍女。  
 取りあへぬ様の……取敢へず有合せ  
 を差上げるので不體裁ですが、貴  
 女がよい工合に取繕つて披露して  
 下さい。  
 御覽せさせねど……一々中の君のお  
 目には懸けなかつたけれど、従前  
 とでもかうした薫の御配慮は不慮  
 の事で。  
 氣色ばみ返しなど……開直つて御返  
 し申したりなど摺つた揉んだやる  
 べきでもないの、大輔の君はど  
 うしたらよからうなどと思案する  
 までもなく、人々に分配してやり  
 などした故。  
 若き人々の……一體若い侍女達で中  
 の君のお側近く仕へる者共を特別  
 着飾らせて置くがよいのである。  
 白き拾……薫から下されたのは白い  
 拾などで、際立たないのが却て見  
 よかつた。  
 誰かは何事……薫以外に誰がこんな

白き綾どもなど、數多かさね給へるに、袴の具は無かりけるに、いかに  
 したるにか、腰の一つありけるを引き結び加へて、  
 一「結びける契ことなる下紐を」  
 たいひと筋に恨みやはする」  
 大輔の君とて、おとなしくしき人の、睦まじげなるに遣はず、取りあへ  
 ぬ様の見苦しきを、つきたくしくもて隠して、など宣ひて、御料のは  
 忍びやかなれど、箱にて包も異なり。御覽せさせねど、先々もかやうな  
 る御心しらは常の事にて、目馴れにたれば、氣色ばみ返しなど、ひこ  
 じろふべきにもあらねば、いかゞとも思ひ煩はで、人々に取り散らし  
 などしたれば、おのゝさし縫ひなどす。若き人々の御前近く仕うま  
 つるなどをぞ、取り分きては繕ひたつべき。下仕どもの、いたく妻えば  
 みたりつる姿どもなどに、白き拾などにて掲焉ならぬぞ、なかゝ目  
 安かりける。誰かは何事をも後見聞ゆる人のあらむ、宮は、疎ならぬ御  
 志の程にて、よろづをいかでと思し掟てたれど、細かなるうちゝの

宿

木



に中の君の世話をする人があらう、  
 句宮は一通りならぬ御愛情で萬事  
 どうか手落の無いやうに世話しよ  
 うと御配慮はなされたけれど。  
 世の中の……人生の不如意で味気な  
 いのがどんなものだと御存じな  
 いのは尤である。  
 艶にそゞろ寒く……身にしむ程花の  
 露を散んで風流に世は暮すものと  
 思召す割合には、愛する人の爲だ  
 から自然何彼の折々につけて實用  
 向の事まで世話を焼きなざる事  
 もあるこそ、稀な珍しい現象とし  
 て有難いでせう。それを丸切り構  
 むのは酷い餘意がある。艶には  
 「世は過す」にかゝる。  
 いでや……ほんにまあ、も少し氣をつ  
 けて下されさうなものだ。  
 なり鮮かならぬ……身なりの立派でな  
 いのが。  
 女君……中の君。  
 なか……なる住居……生中住居の立  
 派なのが不釣合で迷惑ななどと。  
 世に響きたる……音に聞えた六の君  
 の御生活の花やかさに比べると、  
 一面句宮の従者達の手前も見すば  
 らしい事と。  
 中納言の君……  
 疎からむあたりには……親しくもな  
 い處へなら見苦しくごた……して

事までは、いかゞは思し寄らむ、  
 限もなく人にのみかしづかれて慣ら  
 はせ給へれば、世の中のうちあはず寂しきことは、いかなるものとも  
 知り給はぬ、道理なり、艶にそゞろ寒く、花の露を翫びて、世は過すべ  
 きものと思したる程よりは、思はず人の爲なれば、自ら折節につけつ  
 つ、まめやかなる事までもて扱ひ知らせ給ふこそ、あり難く珍かなる  
 事なめれ。いでや……など謗らはしげに聞ゆる御乳母などもありけり。  
 董べなどのなり鮮かならぬ、折々うち交りなどしたるをも、女君はい  
 と恥かしく、なか……なる住居にもあるかななど、人知れず思す事な  
 きにしもあらぬに、ましてこの頃は、世に響きたる御有様の花やかさ  
 に、かつは宮の内の人の見思はむことも、人氣なきこと、思し亂る、  
 事も添ひて歎かしきを、中納言の君はいとよく推し量り聞え給へば、  
 疎からむあたりには、見苦しくくだ……しかりぬべき心しらひの様  
 も、悔るとはなけれど、何かは、事々しくしたて顔ならむも、なか……  
 覺なく見咎むる人やあらむと思すなりけり。今ぞ又、例の目やすき様

遣られさうもない贈物も、別に中  
 の君を見送る譯ではないが、何の  
 仰山らしく特に仕立てたりしても  
 却て意外な事と不審がる人がある  
 かも知れぬと薫は思案して、そこ  
 で有合せの品を上げた次第だ。  
 今ぞ又……そこで薫は今度又改めて  
 立派な衣類など中の君にお贈りな  
 されて。  
 綾の料……綾の衣類のきれ地。  
 この君しもぞ……この薫こそ句宮に  
 も劣らず格別大事に育てられて極  
 端なほど氣位高く。  
 寂しき所の……過奢して暮してゐる  
 人の氣の毒さは又格別だわいと。  
 なべての世をも……一般世間の實相  
 をもお察しになり、深い同情をも  
 寄せ馴れていらつしやる。  
 いとほしの……薫にはとんだ氣の毒  
 な八宮の御感化だと思はれた。  
 いかで後安く……どうか中の君の爲  
 に安心で忠實なお世話役として終  
 らうと、薫は思ふがさうは行かず。  
 ありしよりは……以前よりはもつと  
 懇で。  
 忍び餘りたる……帳へかねた。  
 偏に知らぬ人……相手が全く知らぬ  
 人なら。以下中の君の心。  
 はしたなめ……恥をか……せて振離す  
 にも容易であらうが、薫は以前か

なる物どもなどせさせ給ひて、御小柱織らせ、綾の料賜はせなどし給  
 ひける。この君しもぞ、宮にも劣り聞え給はず、様殊にかしづき立てら  
 れて、片はなるまで心傲りもし、世を思ひ澄まして、あてなる心様はこ  
 よなけれど、故宮の御山住を見ぞめ給ひしよりぞ、寂しき所のあはれ  
 さは様殊なりけりと、心苦しく思されて、なべての世をも思ひ廻らし、  
 深き情をもならひ給ひにける。いとほしの人ならばしやとぞ。  
 かくて猶いかで後安く、大人しき人にてやみなむと思ふにも随はず、  
 心にかゝりて苦しければ、御文などを、ありしよりはこまやかにて、と  
 もすれば忍び餘りたる氣色見せつ、聞え給ふを、女君いとわびしき  
 事添ひにたる身と思し歎かる。偏に知らぬ人ならば、あな物狂ほしと  
 はしたなめ、さし放たむにも安かるべきを、昔より様異なる頼もし人  
 に慣らひ来て、今更に中悪しくならむも、なか……人め怪しかるべし、  
 流石に淺はかにもあらぬ御心ばへ有様の、あはれを知らぬにはあら  
 ず、さりとて心かはし顔にあしらはむも、いとつ、ましく、いかゞはす



ら格別の保護者として親しみ馴れて来たのに。……中の君とても輕薄でもない薫のお心持や態度に思遣りが無い譯ではないが、さうかといつて心持を解し合つたやうな風に應對しようのものも。侍ふ人々も……侍女達にしても多少話相手になりさうな若いのは皆新參で馴染薄い氣がして。故姫君——大君。おはせましかば……大君が御存命なら薫も私にこんな懸想も何のなさうかと、中の君は大變悲しく。この事——薫に懸想される事が。男君も——薫も。え聞えさせぬ——御面會も出来ません。僧なども近く……これは祈禱の爲。醫師などの……私も醫者などと同じ取扱にしてでも薫の内へ入る事は出来ずまいか。一夜物のけしき……先夜薫が中の君に接近した様子を見た侍女達は、げにいと見苦しく……ほんに薫をこんな處にお置き申すのは不體裁で御座いませう。夜居の僧の座……廂の間に設ける。人のかういふに……侍女達がさういふのに、いやに際立て、反對するものもどんなものかと憚られる故。

べからむと、よろづに思ひ亂れ給ふ。侍ふ人々も、少し物のいふかひありぬべく若やかなるは皆あたらし、見給ひ馴れたる人としては、かの山里の古女ばらなり、思ふ事をも、おなじ心に懐かしくいひ合はずべき人の無きまゝには、故姫君を思ひ出で聞え給はぬ折なし。おはせましかば、この人もかゝる心を添へ給はましやと、いと悲しく、宮のつらくなり給はむ歎よりも、この事いと苦しく覺ゆ。男君も強ひて思ひ詫びて、例のしめやかなる夕つ方おはしたり。やがて端に御褥さし出ださせ給ひて、いと惱ましき程にてなむ、え聞えさせぬと、人して聞え出だし給へるを聞くに、いみじうつらくて涙の落ちぬべきを、人目につつめば、強ひて紛らはして、惱ませ給ふ折は、知らぬ僧なども近く參り寄るを、醫師等の列にても、御簾の内には侍ふまじくやは。かく人傳なる御消息なむかひなき心地する」と聞え給ひて、いと物しげなる御氣色なるを、一夜物の氣色見し人々、げにや、いと見苦しく侍るめり」とて、母屋の御簾うちおろして、夜居の僧の座に入れ奉るを、女君、まこと

昔の人——大君をいふ。少將の君——侍女の名。胸はおさへたる……胸の思は抑へたのが苦しいものを。中の君のいふ胸は胸のさし込、薫のいふ胸は心の思。げにぞ下安からぬ——中の君と二人きりであつたのに、侍女が来て邪魔になるので薫はほんに内心やきもきして居られる。人に問ひ侍りしかば——妊娠中の容態を人に聞いて見ました處が。餘り若々しく……貴女は餘り初心らしく心配なさるやうですよ。昔の人も——大君も。永かるまじき……胸の痛みは短命な人の煩ふものとやら。げに誰も……ほんに誰でも松のやうに長壽は出来ぬ人生だのに、憂くも世の思ふ心に叶はぬか誰も千歳の松ならなくに（細流）。この召し寄せたる……少將の君が聞いてゐる手前も憚られず。かたはら痛き筋の……人前で話すに工合わるいやうな事こそ抜かして置いたが。かの御耳ひとつ……中の君だけにはお分りになつても、人が聞いては又別段變に思ひさうもない風に、げにあり難き御心ばへ——ほんに類少

に心、地もいと苦しけれど、人のかくいふに、うたて掲焉ならむも、又いかゞとつゝまじければ、物憂ながら少しゐざり出でて、對面し給へり。いと仄かに、時々もの宜ふ御けはひの、昔の人の惱みそめ給へりし頃まづ思ひ出でらるゝも、ゆゝしく悲しくて、掻きくらす心地し給へば、とみに物もいはれず、ためらひつゝぞ聞え給ふ。こよなく奥まり給へるもいとつらくて、簾の下より几帳を少しおし入れて、例の馴れしげに近づき寄り給ふがいと苦しければ、わりなしと思して、少將の君といふ人を近く召し寄せて、胸なむ痛き暫しおさへて」と宣ふを聞き給ひて、胸はおさへたる、いと苦しう侍るものを」と、うち歎きて居直り給ふ程も、げにぞ下安からぬ。いかなれば、かくはしも常は惱ましうは思さるらむ。人に問ひ侍りしかば、暫しこそ心地も悪しかなれ、さて又よろしき折ありなどこそ教へ侍りしか。餘り若々しくもてなさせ給ふなめりかし」と宣ふに、いと恥かしくて、胸はいつともなくかくこそは侍れ。昔の人もさこそは物し給ひしか。永かるまじき

宿 木



い藤の御用心深きではあると、申の君は聞いていらつしやる。故君の御事―大君の事。世の中を…世俗的事から一切離れて生涯終りたいといふ工夫ばかり仕舞われて居りましたに、さうなる宿縁でもありましたらうか。本意の聖心―初からの出家の望。慰めばかりに…大君を喪つて慰めの爲のみに諸方の女にも關係して、そんな人々でも見てゐる中には大君に對する悲みの紛れる事もあらうかなどと。

心の牽く方…大君が私に貴女を許された折も私はそれを受けなかつた位、貴女に心を牽かれる事が強くなかつた譯ゆゑ、今更こんな事申しては浮氣らしいやうに思召さうと極りが悪いのですけれど、あるまじき心の…けしからぬ心が一寸でもあつたら成程いやらしくもありませうが、只現在の程度の親密さで。

世の人に似ぬ…世間の男と違つた私の實直さは、世人に非難されなれどもと思つて居りますから。後めたく思ひ聞えば―貴方に對して不安に思ふ程なら。開え侍るべくや―何の御對談も致しませうか。

人のする業とか、人もいひ侍るめるとぞ宣ふ。げに誰も千年の松ならぬ世をと思ふには、いと心苦しうあはれなれば、この召し寄せたる人の聞かむもつゝまれず、かたはら痛き筋の事をこそ擇りとゞむれ、昔より思ひ聞ゆる様などを、かの御耳ひとつには心得させながら、人は又片はにも聞くまじきさまに、様よく目安くぞいひなし給ふを、げにあり難き御心ばへにもと聞き居たり。げに何事につけても、故君の御事をぞ盡させず思ひ給へる。いはけなかりし程より、世の中を思ひ離れて止みぬべき心づかひをのみならひ侍りしを、さるべきにや侍りけむ。うときものから疎ならず思ひそめ奉りし一節に、かの本意の聖心は、流石に違ひやしにけむ。慰めばかりに、此處にも此處にも行きかゝづらひて、人の有様を見むにつけて、紛るゝ事もやあらむなど、思ひよる折々侍れど、更に外様には靡くべくも侍らざりけり。よろづに思ひ給へ侘びては、心の牽く方の強からぬ業なりければ、すぎがましきやうに思さるらむと恥かしけれど、あるまじき心の、かけても侍ら

年ごろ此方彼方に…年来何彼の場合につけて貴方の御親切を認めて居りますればこそ、格別の力とお頼み申して、今では私の方からお手紙を上げる位で御座います。さやうなる折も…そんなやうな事があつたとも思ひませんのに、大變恩に着せて仰しやいますよ、それは宇治行の支度について、やつとの事私をお召使ひなさるのでせう、あのお手紙の事ですか。それもげに御覽じ知る…然しそれとても成程私の眞情をお認め下さる點があればこそと思へば、何の疎略に考へませう。

聞く人―侍女少將の君をさす。内には―簾の中の君は。限だにある―六帖―戀しさの限だにある世なりせばつらきを強ひて歎かざらまし。

音なしの里も…聲立てゝ泣いても聞えぬ音無の里へでも行きたいものと思ふがとの意、拾遺―戀ひわびぬ音をだに泣かむ聲たてゝいづこなるらむ音なしの里。

かの山里の…あの宇治の邊に特に寺などといふのでなくとも、大君の面影の偲ばれる像を造り。御手洗川ちかき…貴方は今私に戀していらつしやる故その大君の像

ばこそ目ざましからめ、只かばかりの程にて、時々思ふことをも聞えさせ承はりなどして、隔なく宜ひ通はむを、誰かは咎め出づべき。世の人に似ぬ心の程は、皆人にもどかるまじく侍るを、なほ後やすく思しなれなど、怨みみ泣きみ聞え給ふ。後めたく思ひ聞えば、かく怪し人も見思ひぬべきまでは聞え侍るべくや。年ごろ此方彼方につけてつ、見知る事どもの侍りしかばこそ、様異なる頼もし人にて、今はこれよりなどさへ驚かし聞ゆれ」と宣へば、さやうなる折も覺え侍らぬものを、いとかしこき事に思し掟てぞ宣はするや。この御山里いで立ち急ぎに、辛うじて召し使はせ給ふべき。それもげに御覽じ知る方ありてこそはと、疎にやは思ひ侍るなど宣ひて、猶いと物怨めしげなれど、聞く人あれば、思ふまゝにもいかでかは續け給はむ。

外の方を眺め出だしたれば、やうく暗うなりにたるに、蟲の聲ばかり紛れなくて、山の方をぐらく、何のあやめも見えぬに、いとしめやかなる様にして、凭りの給へるも、煩はしとのみ内には思さる。限だにある

宿 木



も御手洗川に流す人形の様に打捨  
てられませうから、思ひやるも大  
君の爲にお可愛さうですとの意  
御手洗川は神社の脇を流れる清め  
に用ゐる川。祓をする時は罪穢を  
人形に移して川に流す習慣。  
黄金もとむる……又委を繪にかゝせ  
たら然るの繪師が醜く描いて貴  
方に愛想つかさせるかも知れぬと  
これ大君の爲に不安な氣が致し  
ます。漢の武帝が毛延壽に宮女達  
の姿を描かせた時、他の宮女は黄  
金を賂うて美しく描いて貰ふに、  
美人王昭君は賄らなかつた爲醜く  
描かれ遂に胡地に遣られた故事に  
よつていふ。  
いかで心には……どうして私の氣に  
入るやうにうまく作れませうか。  
近き世に……この事未詳。佛像を造  
つて絶妙であつた爲蓮花が降つた  
といふ非凡な名工の話があつたも  
のと思はれる。  
變化の人……奇特を現すほどの人を神  
佛の權化と信じてかく稱する。  
いか様に……どうにかしてかう  
した薰の心を思切らせて平穩な氣  
持で交りたいと思ふので、近くに  
ゐる少將の君の思はくが嫌で、  
世にあらむとも思つてゐなかつた人。  
世にあらむとも思つてゐなかつた人。

など、忍びやかにうち誦じて、<sup>（中）</sup>思う給へわびにて侍り。音なしの里も  
もとめまほしきを、かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔  
覺ゆる人形<sup>（ひとがた）</sup>をも作り、繪にも書きとりて、行<sup>（おこな）</sup>ひ侍らむとなむ思う給へ  
なりにたる」と宣へば、<sup>（中）</sup>あはれなる御願に、又うたて御手洗川<sup>（みたらしがは）</sup>ちかき  
心地する人形こそ、思ひやりいとほしう侍れ。黄金もとむる繪師もこ  
そなど、後めたうぞ侍るや」と宣へば、<sup>（中）</sup>そよ、その工匠も繪師も、いかで  
か心には叶ふべき業ならむ。近き世には花零<sup>（はなこ）</sup>らせたる工匠も侍りけ  
るを、さやうならむ變化<sup>（へんご）</sup>の人もがな<sup>（中）</sup>など、と様かう様<sup>（さま）</sup>に忘れむ方なき  
よしを、歎き給ふ氣色のいと心深げなるも、いとほしうて、今少しすべ  
り寄りて、<sup>（中）</sup>人形の序に、いと怪しく思ひ寄るまじき事をこそ思ひ出で  
侍れ」と宣ふけはひの少し懐かしきも、いと嬉しくあはれにて、<sup>（中）</sup>何事  
にかといふまゝに、几帳の下より手を捉ふれば、<sup>（中）</sup>いとうるさく思ひな  
らるれど、いか様にしてかゝる心をやめて、なだらかにあらむと思へ  
ば、この近き人の思はむこともあいなくて、さりげなくもてなし給へ

中の君の異母妹、浮舟の君。  
遠き處……陸奥をさす。  
又うちつけに……又いきなり、さう  
何の親密にすべきものだらうかと  
思つて居りましたのに。  
昔の人の……大君の御様子に似て居  
りましたので。  
形見など……私を大君の形見などと  
仰しやつても、却てすべての點が  
驚くほど大君と違ふと、皆侍女達  
も申しますのに。  
いとさしも……腹違ひ故實際そんな  
に似る筈も無さうな浮舟が、ど  
うしてそんなに大君に似て居りま  
すことか。  
さるべき故……音づれ親しんで來る  
譯があればこそ。  
などか今まで……どうして今日まで  
私にかういふと、その事を仄めか  
しても下さいませんのでしたか。  
その故も……その譯といつて果して  
どんな事情になつてゐたのかも私  
は存じません。  
物はかなき……父宮は私共姉妹がつ  
まらぬ有様で生き残り落魄するだ  
らうとそれのみ心配さうに思召し  
たので私一身に集めて、大君は亡く  
なつたので私一人に集めて、成程  
と痛感されますのに今又つまらぬ  
異母妹まで出て來て、人も彼是

り、<sup>（中）</sup>年頃は世にあらむとも知らざりし人の、この夏ごろ遠き處より物  
して、尋ね出でたりしを、疎くは思ふまじけれど、又うちつけにさしも  
何かは睦<sup>（なご）</sup>び思はむと思ひ侍りしを、さいつ頃來たりしこそ、怪しきま  
で昔の人の御けはひに通ひたりしかば、あはれに覺えなり侍りしが、  
形見など、かう思はし宣ふめるは、なか／＼何事も淺ましうもて離れ  
たりとなむ、皆人々もいひ侍りしを、いとさしもあるまじき人の、いか  
でかはさはありけむ」と宣ふを、<sup>（中）</sup>夢語りかともまで聞く。さるべき故あ  
ればこそは、さやうにも睦<sup>（なご）</sup>び聞えらるらめ。などか今まで、かくともか  
すめさせ給はざりつらむ」と宣へば、<sup>（中）</sup>いさや、その故もいかなりけむ  
事とも思ひ分かれ侍らず。物はかなき有様どもにて、世に落ちとまり  
さすらへむとすらむ事とのみ、後めたげに思したりし事どもを、只一  
人かき集めて思ひ知られ侍るに、又あいなき事をさへうち添へて、人  
も聞き傳へむこそいとほしかるべけれ」と宣ふ氣色を見るに、宮の忍  
びて物など宣ひけむ人の、忍ぶ草摘み置きたりけるなるべしと見知



をしさうなのが。宮の忍びて……その浮舟といふは八宮が密に情をかけられた女が、生れた子を何處かで育てゝゝるたものだらうと薫はお察しなされた。忍ぶ草摘み置きは惚ぶべき種を残す意で、形見の子の産れたをいふ。かばかりにては……これ程親しい仲ですもの、どうせ話すならすつかそのわたりとは……何處に住んでゐるといふ位は申上げもせませうが委しい事はさあ存じませぬわ。世を海中にも……大君の死後は世を憂く思つて、その魂の所在を尋ねる爲なら丁度唐の玄宗が方士をして楊貴妃の魂を海中の仙島に覓めさせた如く、私も海の中までも一生懸命進んで行きませうが。いとさまで……浮舟の事はそれ程まで深く思ふ筈もありませぬが。人形の願……大君の形見の像を造つて宇治の寺の本尊にしたいと申しました。その像の代りに見る位の値打は浮舟もありませう。古への御許も……父君八宮が我が子として取扱つてもゐられなかつた浮舟の事を。變化のたくみ……大君の像を作る爲に非凡の工人がほしいと仰しやる

りぬ。(大君二) 似たりと宣ふゆかりに耳とまりて、(薫) かばかりにては、同じくはいひ果てさせ給ひてよ」といふかしがり給へど、(中君八) 流石にかたはら痛くて、(中君) 細かにも聞え給はず「尋ねむと思す心あらば、そのわたりとは聞えつべけれど、委しくはしもえ知らずや、又餘りいはば、御心劣もしぬべき事になむ」と宣へば、(薫) 世を海中にも、魂のありか尋ねには、心のかぎり進みぬべきを、いとさまで思ふべきにはあらざなれど、いとかく慰めむ方なきよりはと思ひより侍る。人形の願ばかりには、などかは山里の本尊にも思ひ侍らざらむ。猶たしかに宣はせよ」と、うちつけに責め聞え給ふ。(中君) いさや、古への御許もなかりし事を、かうまでも漏らし聞ゆるも、かつはいと口輕けれど、變化のたくみ覓め給ふいとほしさにこそ、かくもとて、(中君) いと遠き處に年ごろ經にけるを、母なる人のいと愁はしきことに思ひて、あながちに尋ね寄りしを、はしたなくもえ答へで侍りしに、物したりしなり。灰かなりしかばにや、何事も思ひし程よりは、見苦しからずなむ見えし。これをいか様にもてなきむ

のがお氣の毒さに、こんな大君に酷似した浮舟の話も致しました。いと遠き處に……浮舟は都から遠い片田舎で永年育つたのを。母なる人……浮舟の母、中將の君。あながちに尋ね寄り……無理やり私の處に音信して來ましたのを、すげない挨拶も出來ずにゐました處に愈上京したので御座います。灰かなりしかばにや……ちらと見たせゐでせうか浮舟の容姿は。これをいか様に……この子をどう始末したものか知らん、とその母が歎息してゐるやうでしたが。佛にならむは……大君の像の代りとして宇治の御本尊に置かれたらこの上ない幸福でせうが、然しそれ程までにはどうして大それた望めさせう。さりげなく……薫は中の君が何食はぬ類して、實は自分がうるさく附纏ふのを何とかして振離す方法もありさうなものと思ひ、それで浮舟の話を持出したのだと見たのは心外であるが、流石に浮舟をも見たい氣がなざる。あるまじき事とは……薫の懸念を中の君がとんでもない事とは思つて居られるもの、露骨に恥をかゝせるやうな仕打はなさらぬのも、薫

と歎くめりしに、佛にならむはいとこよなき事にこそはあらめ。さまざまはいかでかはなど聞え給ふ。さりげなくて、かううるさき心を、いかでいひ放つ業もがなと、思ひ給へると見るはつらけれど、流石にあはれなり。あるまじき事とは深く思ひ給へるものから、顯證にはしたなき様には、えもてなし給はぬも、見知り給へるにこそはと思ふ心ときめきに、夜もいたく更けゆくを、内には人目いとかたはら痛く覺え給ひて、うちたゆめて入り給ひぬれば、男君、道理とは返すく思へど、猶いと怨めしう口惜しきに、思ひ静めむ方もなき心地して、涙のこぼるるも人わろければ、よろづに思ひ亂るれど、ひたぶるに淺はかならむもてなしはた、いとうたて我が爲もあいなるべければ、念じ返して、常よりも歎き勝ちにて出で給ひぬ。かくのみ思ひてはいかゞすべからむ、苦しうもあべいかな、如何にしてかは、大方の世にはもどきあるまじき様にて、流石に思ふ心のかなふ業をすべからむなど、おり立ちて練じたる心ならねばにや、我が爲、人の爲心安かるまじき事を、わ



は矢張中の君が私の眞情を認めて  
いらつしやるのだと胸が躍つて。  
うちたゆめて……薫に油断させて置  
いて奥へお入りになつたので。  
人わろければ不體裁だから。  
ひたぶるに淺はか……一途に無分  
別な振舞をするのも矢張面白から  
ず、且自分の爲にも工合わるさう  
な事だからと薫は辛抱し直してさう  
かくのみ思ひては……かう煩悶ばか  
りしてゐては一體どうすればよい  
のか。以下薫の心。  
如何にしてかは……どんな風にして  
まあ、世間の非難の無いやうな手  
段で然も自分の満足する道を講じ  
たものだらうかなど。  
おり立ちて……戀の道に薫は實地の  
熟練がない氣のせむか、無理な事  
をしたら自分の爲相手の爲、共に  
心配な事が起らうといふ事を、無  
暗に考へ續けていらつしやる。  
似たりと宣ひつる……中の君が大君  
に似てゐるといはれた浮舟をも、  
どうしたらその眞偽を見定められ  
よう、一目見たいものだ。  
さばかりの際……大した身分の女で  
ないから手に入れるに困難はない  
としても、その浮舟が此方の理想  
に合ひでもしなかつたら面倒だら

りなく思ほし明す。似たりと宣ひつる人をも、いかでかは實かとは見  
るべき、さばかりの際なれば、思ひ寄らむに難くはあらずとも、人  
の本意にもあらずはうるさくこそあるべけれなど、猶そなた様には  
心もたゝず。  
宇治の宮を久しく見給はぬ時は、いと昔遠くなる心地して、すゞろ  
に心細ければ、九月二十餘日の程におはしたり。いとゞしく風のみ吹  
き拂ひて、心すごう荒ましげなる水の音のみ宿守にて、人影も殊に見  
えず。見るにまづ搔きくらし、悲しきことぞ限なき。辨の尼召し出でた  
れば、障子口に青鈍の几帳さし出でて參れり。いと畏けれど、まして  
いと恐ろしげに侍れば、つゝましくてなむ」と、まほには出でこず。い  
かに詠め給ふらむと思ひやるに、同じ心なる人もなき物語も聞えむ  
とてなむ。はかなくも積る年月かな」とて、涙をひと目浮けておはする  
に、老人はいとゞ更に堰きあへず一人の上にて、あいなく物を思ほすめ  
りし頃の空ぞかしと、思ひ給へ出づるに、いつと侍らぬ中にも、秋の

うなど薫は考へて、矢張浮舟の方  
へは氣も進まない。  
宇治の宮を……薫は宇治の舊邸を。  
水の音のみ宿守にて……川水の音ばか  
りがお邸の留守番で。  
几帳さし出でて……几帳を持出して、  
いと畏けれど……几帳を隔て、對面  
する故にいふ。  
ましていと恐ろしげに……今は以前  
にも増して年を取り無氣味な位に  
醜くなりましたので氣が引け。  
まほには……まともには。  
いかに詠め給ふ……どんなに貴女が  
しよんぼりと暮して居られるか知  
らと想像するので、他に同情して  
聞いてくれる人も無い大君につい  
ての思出話をも、せめて貴女と一  
緒にしたいと思つて來たのです。  
ひと目一杯。  
人の上にて……大君が中の君のお身  
の上の事で匂宮の御無沙汰を、お  
可愛さうにも心配なされたのは丁  
度今頃の季節であつたと思出しま  
すと、悲しさはいつと限つた事は  
無い中でも。  
げにかの歎かせ給ふ……ほんに大君  
が心配していらつした通り果して  
匂宮と中の君との御夫婦仲の面白  
くない御様子をちらりと承るにつ

風は身にしみてつらく覺え侍りて、げにかの歎かせ給ふめりしも著  
き世の中の御有様を、ほのかに承はるも様々になむ」と聞ゆれば、とあ  
る事も、かゝる事も、永らふれば直るやうもあるを、あぢきなく思し  
しみけむこそ、我が過ちのやうに猶悲しけれ。この頃の御有様は、何  
か、それこそ世の常なれ。されど後めたげには見え聞え給はざめり。  
いひてもいひても、むなしき空に上りぬる煙のみこそ、誰も遁れぬ事  
ながら、後れ先だつ程は、猶いといふかひなかりけれ」とても、また泣き  
給ひぬ。阿闍梨召して、例のかの御忌日の經佛のことなど宣ふ。さて  
此處にかく時々物するにつけても、かひなき事の安からず覺ゆるが  
いと益なきを、この寢殿毀ちて、かの山寺の傍に、堂建てむとなむ思ふ  
を、同じくは疾く始めてむ」と宣ひて、堂いくつ、廊ども、僧房など、あ  
るべき事も書き出で、宣ひなどせさせ給ふを、いと尊きことと聞え  
知らず。昔の人の、故ある御住居に占め造り給ひけむ處を、ひき毀た  
むも情なきやうなれど、その御志も功德の方には進みぬべく思しけ



けても、様々に気が揉めます。永らふれば……生きてさへ居たらよくなる事もあるのに、大君が中の君と匂宮との間をひどく心配して亡くなられたのが、その原因は仲立をした私の過失のやうで。この頃の……近來六の君を娶られた匂宮の御様子は何の、あんな事は世間普通の事です、六の君が出来ても中の君の爲に氣遣ひな風にはお見えにならないやうです。むなしき空に……あの六の君の煙となつたのこそ、誰も通れない無常であるが、生き死にの際には矢張り、かの御忌日——大君の一週忌。時々物するにつけても……時々私に來るにつけても、昔を忍ぶ詮ない悲で落着かぬ氣がするのが甚だ詰らぬから。寢殿を移して佛堂に建てよう。

昔の人の……八宮が風情ある住居として地を占めてお造りになつた處を取壊さうのも。その御志も……八宮の御眞意も佛事供養の方には進んでなさるやうなお心持だつたらしいのに、跡に残る姫君達の事を思つて、お屋敷を寺にはなさらなかつたものかと思はれます。

むを、とまり給はむ人々を思し遣りて、えさは掟て給はざりけるにや。今は兵部卿の宮の北の方こそは知り給ふべければ、かの宮の御料ともいひつべくなりにたり。されば、こゝながら寺になさむことは便なかるべし。心に任せてさもえせじ。處の様もあまりに川づら近くて、顯證にもあれば、なほ寢殿をうしなひて、異様にも造り替へむの心になむ」と宣へば、と様かう様に、いとも畏くたふとき御心なり。むかし別を悲みて、屍を包みて數多の年頸にかけて侍りける人も、佛の御方便にてなむ、かの屍の囊を捨て、遂に聖の道にも入り侍りにける。この寢殿を御覽するにつけて、御心うごめきおはしますらむ、偏にたいだいしき御事なり。又後の世の御勸ともなるべき事に侍りけり、急ぎ仕うまつらすべし。曆の博士のはからひ申して侍らむ日を承はりて、物のゆゑ知りたらむ工匠二三人を賜はりて、こまかなる事どもは、佛の御教のまゝに仕うまつらせ侍らむと申す。とかく宣ひ定めて、御庄の人ども召して、この程の事ども、阿闍梨のいはむまゝにすべき由な

兵部卿の宮の北の方……匂宮の奥方中の君が支配なさるべき筋合ひを匂宮の御所有といつても然るべき事になりませう。

こゝながら……比處に建つた儘で寺にするのは不都合でせう。心に任せて……こゝで寺にするのは又私一料簡でも出来ませう。顯證にもあれば、餘りあらはに見え過ぎもしますから。うしなひて——取壊して。異様にも造り替へむ——山寺の傍に移し佛堂に造り換へよう。

むかし別を……觀音勢至の二菩薩がまだ人の子であつた時繼母に殺され、その父屍を頸に懸けて歎いたが途に佛の教化によつて佛道に入つた故事に據ると舊註の説。貴方も大君の住まれたこの寢殿を見るにつけ煩悩がお動きなさるでせう。それは全く不覺の事ゆゑ早く佛堂になさいませの餘意がある。

後の世の御勸……貴方の未來世の善業ともなる事です。

佛の御教……宗門の規定に隨つて。とかく宣ひ定めて——あれこれと薰は指圖しておきめなされて。御庄の人——宇治附近にある薰の莊園を守る人々。

この程の事ども——この寺普請につい

ど仰せ給ふに、はかなく暮れぬれば、その夜はとまり給ひぬ。この度ばかりこそは見めと思して、立ちめぐりつゝ見給へば、佛も皆かの寺に移してければ、尼君の行の具のみあり。いとほかなげに住ひたるを、あはれに、いかにして過すらむと見給ふ。この寢殿は變へて造るべきやうあり。造り出でむ程は、かの廊に物し給へ。京の宮に取り渡さるべき物などあらば、庄の人召して、あるべからむやうに物し給へ。など、まめやかなる事どもを語らひ給ふ。外にてはかばかりにさだ過ぎたらむ人を、何かと見入れ給ふべきにもあらねど、夜も近く臥せで、昔物語などせさせ給ふ。故權大納言の君の御有様も、聞く人なきに心安くて、いとこまやかに開ゆ。今はとなり給ひし程に、珍しくおはしますらむ御有様を、いふかしきものに思ひ聞えさせ給ふめりし御氣色などの、思ひ給へ出でらるゝに、かく思ひかけ侍らぬ世の末に、かくて見奉るなむ、かの御世に睦まじう仕うまつり置きししるしの、自ら侍りけると、嬉しくも悲しくも思ひ給へ知られ侍る。心うき命の程



ての一切萬事。この度ばかり……今度限りでこの寢殿の見納めだらうと。尼君―辨の尼。變へて造るべき……建て換へねばならぬ仔細がありませう、出来上るまでの間は寢にお住みなさい。京の宮に……中の君の邸に送るべき物などがありませう。庄の人―蕭の莊園の人。あるべからむやうに……適宜に申付けて處理して下さい。かばかりにさだ過ぎ……こんな老人を何やかやと蕭が面倒見ておやりになる筈もないのだけれど、大君の緣故があるので夜も近くに辨を寢せて。故權大納言の君―柏木、蕭の實父。いとこまやかに聞ゆ―辨が委しく蕭にお話し申上げる。今はとなり給ひし……柏木縁が臨終の時に、御出生當時の珍しい貴方をゆかしく見たいものと思つていらしたらしい御様子などが今も私は思ひ出されますにつけ、こんなに思ひもかけぬ老後にかうして貴方をお見上げ申しますのは、柏木縁の時代に親しく御奉公申して置いた効が自然にあつたものと。心外千萬な入らざ

にて、かく様々の事を見給へ過し、思ひ給へ知り侍るなむ、いと恥かしう心うく侍る。宮よりも、時々は参りて見奉れ、覺束なく絶え籠りはてぬるは、こよなく思ひ隔てけるなめりなど宣はする折々侍れど、ゆしき身にてなむ、阿彌陀佛より外には、見奉らまほしき人もなくなりにて侍るなど聞ゆ。故姫君の御事どもはた盡きせず、年頃の御有様など語りて、何の折なにと宣ひし、花紅葉の色を見ても、はかなく詠み給ひける歌語りなどをつきながら、うちわなきたれど語るも、兒めかしく言少ななるものから、をかしかりける人の御心ばへかなとのみ、いと聞き添へ給ふ。宮の御方は今少し今めかしきものから、心許さざらむ人の爲には、はしたなくもてなし給ひつべくこそ物し給ふめるを、我にはいと心深くなさけしとは見えて、いかで過してむとこそ思ひ給ひつれなど、心の中に思ひくらべ給ふ。さて物の序に、かの形代の事をいひ出で給へり。京にこの頃侍らむとはえ知り侍らず。人傳に承はりし事の筋ななり。故宮のまだかゝる山里住もし給

る長命で、こんなに大君の御進去や中の君の御身の上の彼此や、縁様の事件を見たり感じたりして過したのが。宮よりも―中の君からも。時々は参りて……時々は京に来て私にも逢つて下さい。ゆしき身にてなむ―私は縁起でもない尼法師の身ゆゑ。つきなからず……不似合な様子でなく、聲は老人じみて顔へてゐるけれど、辨が話し出すにつけても。兒めかしく……あどけなく、口數少なかつたもの、可憐だつた大君の御氣立だつたわいと。宮の御方は……匂宮の奥方中の君は今少し陽氣ではあるもの、氣心知れぬ人に對してはすげない取扱もなされさうであるのに、私に對しては深い心持で情ある様子を見せつゝどうか終始したいものだと思つて居られるのだと、蕭は心の中に大君と比較して御覽になる。形代の事―浮舟の事。大君の像の代りにはならうと前にいつたので、戯れてかくいふ。京にこの頃……浮舟が目下京に住んでゐるといふ事は存じませぬ。人傳に……浮舟の事は私は間接に人

はず、故北の方の失せ給へりける程近かりける頃、中將の君とて侍ひける上臈の、心ばせなども怪しうはあらざりけるを、いと忍びて、はかなき程に物宣はせけるを、知る人も侍らざりけるに、女子をなむ産みて侍りけるを、さもやあらむと思す事のありけるからに、あいなく煩はしう物しきやうに思しなりて、又とも御覽に入るゝこともあらざりけり。あいなくその事に思し懲りて、やがて大方聖にならせ給ひけるを、はしたなく思ひて、え侍はずなりにけるが、陸奥の守の妻になりて下りけるを、一年のぼりて、その君平かに物し給ふよし、このわたりにも仄めかし申したりけるを、聞し召しつけて、更にかゝる消息あるべき事にもあらずと宣はせ放ちたりければ、かひなくてなむ歎き侍りける。さて又常陸になりて下り侍りにけるが、この年頃音にも聞え給はざりつるが、この春のぼりて、かの宮には尋ね参りたりけるとなむ、ほの聞き侍りし。かの君の年は、二十ばかりになり給ひぬらむかし。いと美しく生ひ出で給ふが、かなしきことなどこそ、中頃は文



故宮一八宮。いと忍びて……八宮様が人目を忍んでたまさかに情をお懸けなされたのを。  
 女子―これが即ち浮舟。さもやあらむと……わが子であらうと思召す理由があつたので、生憎に面倒な係累を作るのが嫌だといふ氣になられて。  
 大方聖に……殆ど法師同様の御生活にお入り遊ばしたのを、中將の君は工合悪く思つてお暇を願つて退出しました。  
 その君平かに……浮舟が無事成長してゐる趣を八宮様の方へもそれとなくお知らせ申しましたのを。かひなくてなむ―中將の君は張合の無い事と思つて。  
 さて又常陸に……それから中將は夫が又常陸介になつて共に下向しました。  
 かの宮には―中の君の許へは。かの君の年―浮舟の年齢。中頃……一しきりは中將の君が手紙にまで長々と書いて來たもので。さらば實にても……では浮舟が大君に似てゐるといはれた中の君の話も本當かも知れぬ。昔の御付けはひに……大君の御様子に

にさへ書き續けて侍るめりしか」と聞ゆ。委しう聞きあきらめ給ひて、さらば實にてもあらむかし、見ばやと思ふ心出で來ぬ。昔の御付けはひに、かけても觸れたらむ人は、知らぬ國までも尋ね知らまほしき心あるを、數まへ給はざりけれど、思ふに氣近き人にこそあなれ。わざとはなくとも、このわたりに音なふ折あらむ序に、かくなむいひしと傳へ給へ―などばかり宣ひ置く。母君は、故北の方の御姪なり。辨も離れぬ中らひに侍るべきを、そのかみは外々に侍りて、委しうも見給へ馴れざりき。さいつ頃京より、大輔が許より申したりしは、かの君なむいかでかの御墓にだに參らむと宣ふなる。さる心せよなど侍りしかど、また此處にさしはへては音なはず侍るめり。今さらば、さやうの序に、かゝる仰言など傳へ侍らむ」と聞ゆ。明けぬれば歸り給はむとて、夜べおくれてもて參れる絹綿などやうのもの、阿闍梨に送らせ給ふ。尼君にも賜ふ。法師ばら、尼君の下衆どもの料にとて、布などいふ物をさへ召して賜ふ。心ぼそき住居なれど、かゝる御訪らひたゆまざりけ

一寸でも似た人があつたら。數まへ給はざりけれど……八宮は我子とも思召さなかつたが骨肉には相違ないので。わざとはなくとも……態々でなくともよいが、浮舟から貴女へ音信でもあつたらその序に、私がかうかう話してゐたと傳へて下さい。母君―浮舟の母、中將の君。故北の方―八宮の奥方。離れぬ中らひ―切つても切れぬ親戚關係。即ち従姉妹に當る。そのかみは……中將の君が八宮に御奉公當時は私に居りました。大輔―宇治時代からの中の君の侍女。かの君―浮舟。かの御墓―八宮の御墓。さしはへては……態々訪ねてはまだ入らつしやいません。今さらば……今にそれでは、浮舟が來られた序に。尼君の下衆―辨の召使。かゝる御訪らひ―薫の御見舞をいふ身の程には……今の身分としては萬事見苦しからず、しんみり落着いて佛前の勤に専心してゐる。踏み分けける……踏分けて人の出入した形迹もないのを薫は見渡して。急にお出かけにもなれない。古今―秋は來ぬ紅葉は宿にふりしきぬ



宿 木



道ふみわけて訪ふ人はなし。深山木に宿りたる古木に寄生してゐる。こだにこれでもせめて土産に持歸らう。こだには葛の一種又は山柵子といふ説もある。宮へと思しくて中の君に上げるお積りと思えて。昔こもに宿つた事があるといふ思出がなかつたら、今日の旅寝もどんなに寂しいだらうに、懐かしい昔の思出があるので幾分慰めもされる。宿りに宿木を懸けた。荒れはつる……この荒れ果てた老尼の住家を、昔お宿り遊ばした名残と思召してお出下されたにつけても、大君のいらつしやらぬのが悲しい事で御座います。古めきたれど古風な歌であるが。宮に紅葉……蕪は京に歸つて中の君に蕪の紅葉をお上げなさると。男宮一匂宮。南の宮一蕪の邸は三條で、二條院から南に當る故いふ。何心もなく取次の者が何の考もなくお二人の前を持つて来たのを。女君例の……中の君は又蕪から例の嫌らしい懸想めいた文でも来たのではないか知らんと。

れば、身の程にはいと目やすく、しめやかにてなむ行ひける。木枯の堪へ難きまで吹き通したるに、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を、踏み分けける跡も見えぬを見渡して、とみにもえ出で給はず。いと氣色ある深山木に、宿りたる蕪の色ぞまだ残りたる。こだになど少し引き取らせ給ひて、宮へと思しくて持たせ給ふ。  
 「やどりきと思ひ出ですはこのもとの  
 旅寝もいかに寂しからまし」  
 と獨ごち給ふを聞きて、尼君、  
 「荒れはつる朽木のもとをやどりきと  
 思ひおきけるほどの悲しさ」  
 飽くまで古めきたれど、故なくはあらぬをぞ、いさゝかの慰めには思されける。  
 宮に紅葉奉れ給へれば、男宮おはしましける程なりけり。南の宮よりとて、何心もなくもて参りたるを、女君例のむつかしき事もこそと、苦

たゞならず宜ひて何だか意味ありさうに仰しやつて。山里に……宇治に参りまして。峰の朝霧——古今一雁の來る峰の朝霧晴れずのみ思ひ盡きせぬ世の中の憂さ。みづからなむ——私自身參上してお話申上げませう。御ゆるし侍りてこそは……貴女の御許可がありました上で建物を他に移すことを決行致しませう。さるべき仰言——適宜の御指圖。よくもつれなく……よくも空とぼけてお書きになつた手紙ですね、私が在邸と聞いて用心してこんな眞面目な事ばかり書かれたのでせう。少しはげに……多少は成程その氣味もあつたらう。女君は事なきを……中の君は蕪のお文が何でもないのを嬉しく思ふのに、匂宮が無理にこんな邪推を仰しやるのを、ひどいと思召して。見じや——私は見ないでみませうよ。あまえて書かざらむも——調子に乗つて返事を書かないのも。さやうにてこそ……寺であつてこそ結構と存じて居りましたに。殊更に又巖の中……私が將來出家で探し求めより好都合で、あ

しく思せど、取り隠さむやは、宮はをかしき蕪かなと、たゞならず宜ひて、召し寄せて見給ふ。御文には、日ごろ何事かおはしますらむ。山里に物し侍りて、いとゞ峯の朝霧に惑ひ侍りつる御物語も、みづからなむ。彼處の寢殿、堂になすべきこと、阿闍梨にいひつけ侍りにき。御ゆるし侍りてこそは、外に移すことも物し侍らめ。辨の尼に、さるべき仰言は仰せつかはせなどぞある。よくもつれなく書き給へる文かな。まろ在りとぞ聞きつらむ」と宜ふも、少しは、げにさやありつらむ。女君は事なきを嬉しと思ひ給ふに、あながちにかく宜ふを、わりなしと思して、うち怨じて居給へる御様、よろづの罪も赦しつべくをかし。返事書い給へ。見じや」とて、外様に向き給へり。あまえて書かざらむも怪しければ、山里の御ありきの羨ましくも侍るかな。彼處はげに、さやうにてこそよくと思ひ給へしを、殊更に又巖の中もとめむよりは、荒し果つまじく思ひ侍るを、いかにもさるべき様になさせ給はゞ、疎ならずなむ」と聞え給ふ。かく憎き氣色もなき御睦びなめりと見給